

桃 山 学 院 大 学

人 間 科 学

第 40 号

《論文》

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

——関係史料の分析・検討および切腹原因に関する諸説の批判的検討——

..... 福 井 幸 男 (1)

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について
～第5回東アジア競技大会(2009/香港)～

..... 松 本 直 也 (43)

Flexible Command:

A Solution to the Symmetry Problem of Adjunction, Scrambling,
and Dislocation

..... Koji ARIKAWA (65)

「学制」前文(明治五年)の再検討

..... 竹 中 暉 雄 (322)

《研究ノート》

Reflecting on English Language Teaching in Japan

..... IWANE-SALOVAARA, Michael (201)

《資料》

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

..... 軽 部 恵 子 (211)

2 0 1 1 年 3 月

桃山学院大学 総合研究所

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

— 関係史料の分析・検討および切腹原因に関する諸説の批判的検討 —

福井 幸男

キーワード：千利休，茶の湯，豊臣秀吉，切腹，獄門

I はじめに

茶人千利休は、主君豊臣秀吉がその元主君織田信長創案による「御茶湯御政道」の政治的・経済的効用に加え、その文化的効用をも十二分に駆使しながら、天下人に登りつめるのを、茶湯の指南・後見役として側面から支える。そして天正13年（1585）の秀吉の禁中茶会では、その後見のため利休居士号を下賜され、立派に後見役を果たし、天下一茶湯名人と称されることになる。その結果、豊臣政権下の諸大名は競って千利休の門弟たらんと欲するようになり、彼は居ながらにして諸大名の情報通として、秀吉の「御茶湯御政道」推進の後見役のみならず、秀吉およびその弟大和と大納言秀長の側近参謀的存在となる。

このようにして、豊臣政権における位置も最盛期にあった千利休であるが、天正19年（1591）の新しい年とともに、その運命も暗転するのである。それは正月22日に、利休の最大の理解者でありまた庇護者でもあった秀長が病没することに端を発することになる。関白秀吉は、彼にとっての最後の国内政治マターであった、奥州の若き風雲児伊達政宗が、膝を屈し正月晦日に上洛の途についたとの報に接するや、生涯最大の大事業である朝鮮出兵の想を練るべく、閏正月11日尾張清洲へと鷹野下向する。

ところがその秀吉不在中の京都では、閏正月20日頃、突如として、大徳寺

三門楼上の利休の木像が問題として浮上するのである。そして、翌2月4日の伊達政宗の上洛臣従をもって、秀吉が名実ともに天下人となった直後の2月13日に、利休は堺へ追放・閉門となり、同26日京都に召還、28日には秀吉の命により切腹して果てるのである。

この利休の秀吉による賜死の真因については、古来多くの研究者が仮説をたてているが、未だにその定まるところを見ないのが現状である。そこで本稿では、新たな視点・角度から、その真相解明を試みるものであり、その具体的取り組みは、次のとおりである。

まず第一に、千利休切腹に関する切腹当時から江戸時代に至る関係史料の記述から、切腹の状況を分析・検討し、切腹状況における特異性を抽出することである。第二に、切腹の原因に関する同時期の史料の記録について、分析・検討を加えることである。そして第三に、切腹の原因に関する諸説について確認し、その批判的検討をすることである。

Ⅱ 史料の記述にみる千利休切腹の状況とその分析・検討およびその特異性抽出

第1節 千利休切腹の状況に関する史料の記述

千利休切腹の原因究明のためには、切腹の状況並びに切腹の原因に関して記述した、切腹当時から江戸時代に至る記録を、可能な限り多数収集分析する必要がある。そこで本章では、まず切腹状況に関するその間の関係史料をみることにする。

1. 切腹の状況に関する記述史料およびその成立時代と著述者による区分

切腹の状況に関して記述した、安土桃山時代当時から江戸時代に至る、史料には次のものがあるが、これらの史料の記述内容の分析には、その成立時代と著述者による区分が必要であり、そのため下記により区分して示すこととする。なお史料番号は編年順とした。

1) 安土桃山時代（切腹直前・直後）の記録

切腹当時つまり切腹の直前および直後の状況について、実際に見たりあるいは噂を耳にした、公家・僧・神官・武士の日記類や書状としては、次の史

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

料が挙げられる。

<史料Ⅱ-1>西洞院時慶卿日記『時慶記』第一巻，天正19年2月25日条¹⁾。

<史料Ⅱ-2>権大納言勸修寺晴豊日記「晴豊記」第七巻，天正19年2月26日条²⁾。

<史料Ⅱ-3>神祇大副吉田兼見日記『兼見卿記』巻十六，天正19年2月26日条³⁾。

<史料Ⅱ-4>奈良興福寺多聞院記録『多聞院日記』巻三十七，天正19年2月28日条⁴⁾。

<史料Ⅱ-5>「伊達家文書之二」第五八七号(天正19年2月29日付鈴木新兵衛書状)⁵⁾。

<史料Ⅱ-6>北野天満宮祠官松梅院奮藏日次記『北野社家日記』第四，天正19年2月29日条⁶⁾。

2) 江戸時代の記録

切腹から年月の経過した江戸時代では，著述者の記述には，自ずとその著述者の属する社会的立場が反映されたものとなるため，以後の分析・検討に資するべく，A～Dに分類区分する。

A. 千利休子孫および弟子筋の記録

<史料Ⅱ-10>千家第四世江岑宗左(表千家祖)口上筆録「千利休由緒書」承応2年(1653)⁷⁾。

<史料Ⅱ-12>山田宗徧著「茶道要録」付録，元禄4年(1691)⁸⁾。

B. 千家系統以外の茶人の記録

<史料Ⅱ-8>松屋源三郎久重編「利休居士伝書」慶安5年(1652)⁹⁾。

<史料Ⅱ-9>松屋源三郎久重編「三斎公伝書」慶安5年¹⁰⁾。

<史料Ⅱ-13>土門松屋元亮著「茶湯秘抄」巻五，元文3年(1738)¹¹⁾。

C. 武家筋の記録

<史料Ⅱ-7>吉田孫四郎雄翟編『武功夜話』巻十七，寛永15年(1638)¹²⁾。

<史料Ⅱ-11>国枝清軒編『武刃咄聞書』，延宝8年(1680)¹³⁾。

<史料Ⅱ-15>小野武次郎原編『綿考輯録』巻十，天明2年(1782)¹⁴⁾。

D. その他の記録

<史料Ⅱ-14>神沢杜口著「翁草」卷之三十の内「千利休成敗の事」の項、
明和9年(1772)¹⁵⁾。

<史料Ⅱ-16>成島司直改撰『改正三河後風土記』卷第二十九の内「千利休
罪科付格言の事」の項、天保4年(1833)¹⁶⁾。

2. 史料記述内容の分類・分解

ここでは切腹状況に関する史料の記述内容について、あらかじめ切腹状況
項目として分類を行ったうえで、各史料についてその項目毎に分解する。

1) 切腹状況項目分類

切腹状況の項目については以下のとおり分類する。

①利休の木像が一條戻橋に磔にされる(以下「木像の磔」と記す)。②大徳寺長老衆
が召し寄せられ訊問される。あるいは磔にとの儀あるも、大政所・大納言後
室の詫言にて助かる(以下「長老衆訊問」と記す)。③利休切腹との記述のみ(以下
「利休切腹」と記す)。④切腹後利休の首が一條戻橋に、本人の木像の足で踏ませた
かたちで獄門に懸けられる(以下「^(木像で踏ませた)切腹後獄門」と記す)。⑤茶室の床に腰掛けて切
腹(以下「茶室床で切腹」と記す)。⑥腹を十文字に切り、あるいは腸を取り出し蛭
鉤に掛けるなど(以下「十文字腹」と記す)。⑦介錯を利休の合図後にするよう約束
(以下「介錯の合図」と記す)。⑧切腹のとき菅丞相に擬えた狂歌を残す(以下「菅丞相
狂歌」と記す)。⑨利休が召喚され京の利休屋敷に戻ると、そこは上杉勢三千の
軍兵で嚴重に警固されていた(以下「利休屋敷嚴重警固」と記す)。⑩茶室に花を生け、
平常の如く茶の準備をして、検使と一会した後の切腹、などの潔い切腹(以下
「潔い切腹」と記す)。

2) 史料毎の切腹状況項目分解

以下史料(Ⅱ・Ⅲ共通)原文にある返り点は省略し、また行間の送り仮名
およびルビも不必要と思われるものは省いた。

<史料Ⅱ-1>○彼木像ヲハッ付ニ被懸候、不思議ノ事也—①

<史料Ⅱ-2>○その木さう、しゆらくの橋の下、はた物二あげられ—①

<史料Ⅱ-3>○宗易木像、大徳寺ニ在之、今度、宗易御勘気也、依之、聚楽之橋ニ被曝置之—①

○彼惣寺長老、被召寄、御尋之条、在之、云々、氣遣迷惑之義也—②

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

<史料Ⅱ-4>○スキ者ノ宗^(易一福井)益^(易一福井) 今晚腹切了ト一③ ○以外関白殿御腹立、則ハタ物ニト被仰出テ、色々トワヒコトニテ、壽像ヲ作テ、紫野ニ置テハタ物ニ取上了、(中略)オカシキ事也、誠悪行故也一①

<史料Ⅱ-5>○然処ニ右之宗易、其身之形を木像ニ作立、紫野大徳寺ニ被納候ヲ、^(秀吉)殿下様より被召上、聚楽之大門毛どり橋と申候所ニ、張付ニかけさせられ候、木像之八付、誠々前代未聞之由、於京中申事に候、見物之貴賤無際限候、右八付之脇ニ、色々ノ科共被遊、御札ヲ被相立候、おもしろき御文言、不可勝計候一①

<史料Ⅱ-6>○くひをきり、木さうともにしゆらく大橋にかけ置候也一④ ○大徳寺之長老衆も^(頭)両三人はた物ニ御あけ候^(後)はんと儀候^(聚楽)つれ共、^(豊臣秀吉母、仲)大政所様・^(羽柴秀長)大納言^(後室)殿ごうしつ、各上様へ御佗言により長老衆御たすけ分也一②

<史料Ⅱ-7>○しかるに急度大徳寺へ人数差し向け、右人形御三門より引き下し、洛中大路に御仕置き一① ○宗易殿は死を賜うなり一③

<史料Ⅱ-8>○床ニ腰を掛けてかゝるなつかへ候へば、此置合にて無之とて、にじりより一⑤ ○腸わたを取り出し、自在(掛)のひるかぎに腸を掛けて、十文字ニ切てかゝりしやく有しとなり一⑥ ○卒爾にかいしやくする、^(十)手上ゲたる時打と約束有しト也一⑦ ○利休めはとかく果報のものぞ(か)し^(に)あら人神と成とおもへば、折節雷なり候へば、此狂歌を易読候ト世ニ云一⑧ ○山門ノ影を京一条もどり橋ニ獄門ニかゝり候也一①

<史料Ⅱ-9>○四尺床ニ腰をかけるニ、脇にて勝手方へ臂つかへ候へば、此置合にてハ無之とて、床真中へよりにて云一⑤ ○かいしやくの人々ニ案内申迄ハ御侍候へ、それもいわ(れ)ずバ手を上げ可申一⑦ ○脇指をつき立れ共得と不行候へば、又引抜前ノ所へ立なをし、引廻て腸袋を自在のひる^(ママ一福井)鍵ニ掛し也。かゝりしやく有之、古今無之事也一⑥

<史料Ⅱ-10>○二月二十六日ニ召ニテ京へ罷上り、葎屋町の宅へ着候所、弟子中の諸大名より利休ヲうはい助んとの沙汰御座候ニ付、秀吉公より上杉景勝へ被仰付、侍大将三人、足軽大将三人、已上六組三千斗ニテ、利休屋敷ヲ取まき、兩日番仕候一⑨ ○同月廿八日ニ尼子三郎左衛門、^(アイ)安威撰津守、^(マイ)蒔田淡路守^(ケンシ)検史ニテ切腹仕候、(中略)其内蒔田淡路守ニ、利休切腹セハ介^(カイシヤク)措可仕と被仰付、上杉景勝より番ニ来候、六頭之内、岩井備中守ハ謙信ノ指図ニテ、先年より利休茶道の弟子たる故ニ、切腹可有旨、内證を、利休ニ告ルニ付、茶の湯ノ支度して、^(ツカ)検史ヲ待、^(コヨリ)腹ヲ可切脇指の柄ヲ、^(マイ)紙捻ニテ巻テ、^(カイシヤク)検史の来ルヲ待、^(シロ)三使ヲ不審庵へ申入、一会して後切腹、蒔田淡路ハ無ニノ弟子なれハ、上意ニテ介措、利休妻女宗恩白小袖^(ガイ)を持出て死骸へかける一⑩ ○利休首は聚楽御城へ、^(クビ)蒔田尼子持參候へ共、^(モドリ)実檢ニ不及、^(カケ)一条戻橋ニ獄門ニ衆、大徳寺の山門の^(ウヘ)上ニ置たる利休カ木像ヲ、^(オキ)柱ヲ立テ結付、^(ユイツケ)利休カ首ヲ鈕がけ^(カンナ)ニのせて木像ニ踏せて、^(フマ)被曝、^(サラサセ)毎日ノ見物群集ヲなす一④

<史料Ⅱ-11>○尼子三郎左衛門奥山佐渡守中村式部少輔檢使にて利休カ宿所に至る利休は少も不驕小座敷に茶の湯を仕かけ花を生茶を点し弟子の宗厳にも常の如く万事を申付扱茶湯終りて一⑩

○利休は床の上に上り—⑤ ○腹十文字に搔切七拾一歳にて終りぬ—⑥ ○宗厳利休の首を直綴に包腰掛へ持出し三人の上使に渡候秀吉公則石田治部少輔三成に被仰付大徳寺山門に上げ置たる木像を引出し利休か首をかんなかけにのせ木像を柱にくゝり付利休か首を木像に踏せ一条戻り橋に獄門に梟て被曝毎日見る者市の如し—④

<史料Ⅱ-12>○上杉景勝ニ 命シテ居士ガ屋宅ヲ令囲、其旨利休科有て所害、彼常ニ諸大名ニ親ミ用ヒラル故ニ御氣遣不少、堅ク四壁ヲ守リ可囲ト也、依之大勢ヲ以テ警固セラル—⑨ ○二十八日蒔田淡路守ヲシテ利休切腹スルノ檢使ト定ラル、乃介錯可有トノ 貴命ニ因テ淡州自居士カ首ヲ撃シム、初ヨリ居士カ門弟ニシテ志シ深シ、諺ニ云居士檢使ノ来ラン事ヲ思テ、兼テ点茶ノ設ヲナシ釜湯ノ^{カウフツ}流佛ニ感ジテ腹ヲ可切脇指ノ柄所ヲ^{コヨリ}紙捻ヲ以テ卷ナガラ檢使ノ到来ヲ待居タル所へ、蒔田氏来レリ、居士悦テ相互茶ヲ喫シ快談シテ暇ヲ請フト也、(中略)最後尤 潔シ、兼テ云含メスルヤ、居士カ妻女宗恩出テ其儘綾ノ白小袖ヲ以テ死骸ヲ覆ヘリ—⑩ ○淡州居士カ首ヲ携出ラレケレバ実檢ニハ不可及、則反橋ニ臯スベキ由也、是又カノ譏口ニヨルト云リ、此節居士カ置シ山門上ノ影像ヲモ倒^{サカシマハリツケ}ニ磔ニス、居士之礼服ヲ著シタル木像也ト云リ—④

<史料Ⅱ-13>○床ニ腰ヲ掛テ脇ニテ勝手ノ方へ臂ツカエ候へハ、此置合ニテハ無之トテ床真中へニシリ寄テ云—⑤ ○カイシヤクノ人々案内ヲ申迄ハ御侍候へ、夫モイワレスハ手ヲ上可申トテ—⑦ ○脇指ヲツキ立レモ、トクリト不行候へハ又引抜、前ノ所へ立ナラシ、引廻テ腹の袋ヲ取出し、自在掛ノヒルカキニ腸ヲカケ、十文字ニ切ル、カイシヤク有之、古今無之事也—⑥ ○利休めハとかくわほうのものそかし あら人神ト成トおもへハ 折筋雷ナリ候へハ此狂哥を易読タマウト世ニ云ヘリ—⑧ ○参門の影ハ京都一條モトリ橋ニ獄門ニカ、リ候也—①

<史料Ⅱ-14>○天正十九年二月二十八日、利休御成敗に究め、為檢使尼子三郎左衛門、奥山佐渡守、中村式部少輔、利休が宅に向ひ、罪の箇条を申渡し賜死の命を伝ふ。利休敬して承之一間の小座敷に於て、弟子宗厳に万づ常の如く申付、自ら花を生け茶を調べ、扱茶終りて—⑩ ○利休は夫より床に上り、腹搔切て畢ぬ—⑤ ○又世に利休辞世とて申伝はし、利休めはとかく果報の者ぞかし、菅丞相に成と思へば。自分には全く譏口の為に死すと云へりと云々—⑧ ○宗厳利休首を直綴に包み、腰懸へ持出で、三人の上使に渡す。秀吉公石田治部少輔被命、大徳寺山門に置たる木像を引出し、利休が首を彼の木像に踏せ、一条戻り橋に臯首せらる、見物市をなす—④

<史料Ⅱ-15>○秀吉公猶も憤り深く、終に切腹可被仰付ニ定り候、依之忠興君より山本三四郎正俱を介錯人に被仰付、神戸喜右衛門次義を葬礼奉行に被遣候、二月廿八日切腹の期ニ臨ミ、懐より羽と様と筒に書付たる茶杓を取出し、茶杓は是にて候と忠興公江申て給り候へとて神戸喜右衛門ニ渡し候、茶の湯の印可相伝の心にやと人々申候と也—⑩ ○我も床の上江あかり—⑤ ○脇差を腹に突込てから云残したる事を申せしか、腹を切て皺のよりたる腹に指を入れて引破りしと也神戸喜右衛門物語なり、三四郎致介錯、首を檢使に渡し候也—⑥ ○利休めハとかく果報なものそかし菅丞相になれると思へハ—⑧

<史料Ⅱ-16>○以の外気色損じ給ひ中村式部少輔を召て(中略)速に汝行むかひ腹切らせよと仰あ^{あふせ}

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

り式部少輔まかりむかひ仰の旨を伝へける此利休流石の者にていかでか仰にそむき申さんとて心
 閑しづかに平常の如く茶をたて、人々にすゝめ—⑩ ○利休めが果報くわほうのほどぞうれしけれ 菅丞相とな
 ると思へば 其後むすめ 娘のおかめといへるにも紀念かたみの一筆を書残し今は思ひ置く事なして忽せつぷくに切腹
 す—⑧ ○利休が首もどりハ一條 橋けうしゆの下に梟首けうしゆし山門の木像をバ橋もくぞうに掛置き其首をふむ形にして暴
 されしかバ都鄙しよにんの諸人見る者市の如くなりしとぞ—④

第2節 千利休切腹の状況に関する史料の記述内容の分析・検討およびその特異性抽出

1. 史料記述内容の分析表

1) 原典史料成立時代および著述者区分毎の史料別切腹状況項目

時代・区分	史料	切腹状況項目
安土桃山時代	Ⅱ-1	①
	Ⅱ-2	①
	Ⅱ-3	①・②
	Ⅱ-4	①・③
	Ⅱ-5	①
	Ⅱ-6	②・④
江戸時代 A	Ⅱ-10	④・⑨・⑩
	Ⅱ-12	④・⑨・⑩
江戸時代 B	Ⅱ-8	①・⑤・⑥・⑦・⑧
	Ⅱ-9	⑤・⑥・⑦
	Ⅱ-13	①・⑤・⑥・⑦・⑧
江戸時代 C	Ⅱ-7	①・③
	Ⅱ-11	④・⑤・⑥・⑩
	Ⅱ-15	⑤・⑥・⑧・⑩
江戸時代 D	Ⅱ-14	④・⑤・⑧・⑩
	Ⅱ-16	④・⑧・⑩

2) 原典史料成立時代および著述者区分毎の切腹状況項目別史料

時代・区分	切腹状況項目	史料
安土桃山時代	① 木像の磔	Ⅱ-1・2・3・4・5
	② 長老衆訊問	Ⅱ-3・6
	③ 利休切腹	Ⅱ-4
	④ 切腹後獄門	Ⅱ-6
江戸時代 A	④ 切腹後獄門	Ⅱ-10・12
	⑨ 利休屋敷嚴重警固	Ⅱ-10・12
	⑩ 潔い切腹	Ⅱ-10・12
江戸時代 B	① 木像の磔	Ⅱ-8・13
	⑤ 茶室床で切腹	Ⅱ-8・9・13
	⑥ 十文字腹	Ⅱ-8・9・13
	⑦ 介錯合図	Ⅱ-8・9・13
	⑧ 菅丞相狂歌	Ⅱ-8・13
江戸時代 C	① 木像の磔	Ⅱ-7
	③ 利休切腹	Ⅱ-7
	④ 切腹後獄門	Ⅱ-11
	⑤ 茶室床で切腹	Ⅱ-11・15
	⑥ 十文字腹	Ⅱ-11・15
	⑧ 菅丞相狂歌	Ⅱ-15
	⑩ 潔い切腹	Ⅱ-11・15
江戸時代 D	④ 切腹後獄門	Ⅱ-14・16
	⑤ 茶室床で切腹	Ⅱ-14
	⑧ 菅丞相狂歌	Ⅱ-14・16
	⑩ 潔い切腹	Ⅱ-14・16

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

3) 切腹状況項目毎の原典史料成立時代および著述者区分別史料

切腹状況項目	時代・区分	史料
① 木像の磔	安土桃山時代	Ⅱ-1・2・3・4・5
	江戸時代 B	Ⅱ-8・13
	江戸時代 C	Ⅱ-7
② 長老衆訊問	安土桃山時代	Ⅱ-3・6
③ 利休切腹	安土桃山時代	Ⅱ-4
	江戸時代 C	Ⅱ-7
④ 切腹後獄門	安土桃山時代	Ⅱ-6
	江戸時代 A	Ⅱ-10・12
	江戸時代 C	Ⅱ-11
	江戸時代 D	Ⅱ-14・16
⑤ 茶室床で切腹	江戸時代 B	Ⅱ-8・9・13
	江戸時代 C	Ⅱ-11・15
	江戸時代 D	Ⅱ-14
⑥ 十文字腹	江戸時代 B	Ⅱ-8・9・13
	江戸時代 C	Ⅱ-11・15
⑦ 介錯合図	江戸時代 B	Ⅱ-8・9・13
⑧ 菅丞相狂歌	江戸時代 B	Ⅱ-8・13
	江戸時代 C	Ⅱ-15
	江戸時代 D	Ⅱ-14・16
⑨ 利休屋敷嚴重警固	江戸時代 A	Ⅱ-10・12
⑩ 潔い切腹	江戸時代 A	Ⅱ-10・12
	江戸時代 C	Ⅱ-11・15
	江戸時代 D	Ⅱ-14・16

2. 史料記述内容の分析・検討

1) 原典史料成立時代および著述者区分別の特徴

まず安土桃山時代の記録は、切腹の直前つまり木像が磔にされた時点の見聞および切腹直後の見聞による日記や書状であるため、記録者が見聞した時点で感じたかあるいは思ったことが、そのまま記されていて興味深いものがある。しかしここで注意を要するのは、記録者が目にしたことは事実であっても、その事実が意味するものが何か、あるいはその事実の裏の真実が何かについては、知り得ない状況において感じたことを記しているという点である。そしてそのことは記録者が噂として耳にしたことにおいては、一層注意を要するであろう。なぜなら何時の時代でも、意図的に噂を流すことで、民衆心理を支配者側に都合よく操作しようとするからである。

こうした前提で、安土桃山時代の記録で最も印象付けられるのは、木像の磔に関して、「不思議ノ事也」〈史料Ⅱ-1〉、「氣遣迷惑之義也」〈史料Ⅱ-3〉、「誠々前代未聞之由、於京中申事に候」〈史料Ⅱ-5〉の記述である。とくに〈史料Ⅱ-5〉の記述は、この事象についての京の町の人々の反応を、端的に表わしている。また切腹直後の記録としては、「オカシキ事也、誠悪行故也」〈史料Ⅱ-4〉とあるのが注意を引かれる。これは木像の磔の傍らに立てられた高札の罪状や、切腹後その木像の足で踏みつけた獄門などの出来事が、噂として奈良まで伝わったためであろうか。

次に江戸時代Aの記録としては、「千利休由緒書」が千家四世の口述筆録であるだけに、利休屋敷嚴重警固・潔い切腹・切腹後獄門のそれぞれについて、非常に具体的にしかも詳細に記述しているのが目立つ。特に利休屋敷嚴重警固については、〈史料Ⅱ-10〉(利休子孫)と〈史料Ⅱ-12〉(利休弟子筋)の記述のみであるため、史実か否か疑う必要もあろうかとも考えられようが、これが創作だと仮定した場合、子孫や弟子筋にとって、そうすることのメリットが全く考えられない点や、警固の六組の頭の大將名まで具体的に記されていて、もしそれがフィクションだったとした場合、後年それが否定されるはずであるにもかかわらず、それがなされていない点からみて、やはり史実と看做す必

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

要があることを、ここで注記しておきたい。むしろ<史料Ⅱ-10>の、

弟子中の諸大名より利休ヲうはい助んとの沙汰御座候ニ付、秀吉公より上杉景勝へ被仰付……
是ハ多年大名数輩ヲ弟子ニ取、諸大名の懇志、誠ニ不淺故ニ、利休へ加勢などあるか、又ハ
ヒソカノカシナツカイ
密ニ立除せる品も可有かと御氣遣也

という記述にみるとおり、こうした噂が意図的に流されたと考えられるのではないか。当時多くの大名が利休の茶の弟子と称されていたところから、ごく自然にその噂が信じられ、あまりにも当然のこととして受け入れられたために、特筆する必要もないこととして、他の史料には記述されなかったという解釈はできないだろうか。

また、切腹後の自身の木像の足で踏みつけた獄門は、他の著述者区分の箇所にも記述されているところから、やはりこの事象は相当奇異なことであったといえるであろう。さらに潔い切腹の記述は、子孫としてあるいは弟子筋として当然の心理であるが、他の著述者区分にも見て取れるところが興味深い。

では、江戸時代Bについてみると、茶室の床で切腹・十文字腹による切腹・介錯合図・菅丞相狂歌といった項目があることに注目する必要がある。そのうちまず茶室の床で切腹というのは、何を意味しているのであろうか。茶室は茶人にとって最も神聖な場所のように思われ、その場所での切腹がどうしても奇異に感じられるし、ましてや床に腰かけての切腹というのは、奇異というよりむしろ記述者のメッセージが、その所作に象徴的に表されていると考えるべきではないかと思うのである。狭い四畳半の茶室<史料Ⅱ-8・9・13>で天井も低く、さらに床は四尺床<史料Ⅱ-9>である。この四尺床に腰かけて十文字に腹を切り、腸を取り出してそれを蛭鉤に掛けた後で、合図をして介錯してもらうなどといった所作が、実際に可能かどうか、本当にそんな狭いところで介錯ができるのか、疑わしいと思えるからである。また介錯を利休の合図後にするというのは、合図するまでの一連の切腹の所作そのものが利休の強いメッセージを意味していると考えべきであろう。そこで、こうした利休自身による切腹の仕方についての一連の記述は、その次に記述されて

いる、菅丞相に擬した狂歌を残したという記述とどのような関連があるのか、考える必要があるように思われる。そしてこの狂歌に関する記述は、安土桃山時代は別として、江戸時代のすべての区分においてみられるのである（但しAでは堺追放時に書き残す）。

そして江戸時代Cで特徴的なことは、切腹状況項目の殆どすべての項目が記述されていることである。そしてまた茶室での切腹・十文字腹・菅丞相に擬えた狂歌でありながら、潔い切腹であったとしていることである。このような一見矛盾した記述には非常に興味深いものがある。とりわけ<史料Ⅱ-11>の『武辺咄聞書』は、上杉家譜代の士であった松本木工之助の孫が、それまで伝え聞かされていた上杉家の事跡について、編纂記録したものであるだけに、一層興味をそそられる。つまりその上杉とは、当時秀吉に最も信頼され、譜代大名並に秀吉の片腕として、秀吉の進める関東・奥羽仕置の重要な一翼を担い、また、利休切腹直前に利休屋敷の嚴重警固までしていた、その上杉景勝だからである。その上杉家譜代の士の子孫が、潔い切腹状況を記す一方で、決して潔いとは思われない十文字腹であったという記録を残しているのである。

ところで、この<史料Ⅱ-11>の記述で最も注目すべきことは、切腹後の利休の首を石田三成に命じて、利休自身の木像に踏ませて、一條戻橋に獄門に梟させた旨が記されていることである。ここで重要なことは、天下人秀吉が、ここまで細かい子供じみた、演出過剰とさえ言えるような、獄門まで指示してやらせたとはとても考えられないことである。つまりそれは石田三成が具体的に直接指示してやらせたと考えられるからである。その根拠は<史料Ⅱ-10・12>に見るごとく、秀吉は利休の首実検をするのはさすが心が咎めたのか、「よきに計らえ」とばかりに、その首の処置を三成に任せているかのごとく記されているからである。さらに、<史料Ⅱ-12>には、次の注目すべき記述がある（下線は筆者）。

淡州居士カ首ヲ携出ラレケレバ実検ニハ不可及、則反橋ニ梟スベキ由也、是又カノ讒口ニヨルト云リ、此節居士カ置シ山門上ノ影像ヲモ倒ニ磔ニス、居士之礼服ヲ著シタル木像也ト云リ

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

この下線部の意味するところは、切腹後の獄門についても、讒言によるものであることを示しているのであり、<史料Ⅱ-11>の記述ともあわせ考えると、それは石田三成ということになりそうである。これらの点については先行研究者の誰一人として注目していないので、石田三成首謀説の最も有力な根拠の一つとして、ここで指摘しておきたい。

そして最後の江戸時代Dでは、<史料Ⅱ-14>で三人の検使が利休に切腹の命を伝えるという、次の記述に注目したい（下線は筆者）。

天正十九年二月二十八日、利休御成敗に究め、為検使尼子三郎左衛門、奥山佐渡守、中村式部少輔、利休が宅に向ひ、罪の箇条を申渡し賜死の命を伝ふ

また<史料Ⅱ-16>にも同様に次の記述がある（下線は筆者）。

速に汝行むかひ腹切らせよと仰あり式部少輔まかりむかひ仰の旨を伝へける此利休流石の者に^{あふせ}
ていかでか仰にそむき申さんとて心 ^{しづか}閑に平常の如く茶をたて、……

これらは一見あたりまえの、至極一般的な切腹に至る状況を示す記述であるが、それがかえってこの事件では注目すべき記述だと指摘しなければならぬからである。それは、事件当時の<史料Ⅱ-5>によると、伊達家臣鈴木新兵衛が国元への書状で、利休の切腹前に彼の木像をわざわざ磔にしたうえで、傍らに高札を立て、利休の罪状を逐一列挙している状況が記されているが、その状況が前記の一般的な状況との対比において、あまりにも不自然だからである。つまり、「木像之八付、誠々前代未聞之由、於京中申事に候、」というの、字面だけを読む限りにおいては、「木像の磔」という事象そのものが正に「前代未聞」ということには違いないが、木像の磔までして罪状を事前に、しかも視覚効果満点の小細工まで弄して公示する行為自体も含めて、「前代未聞」であると京中で噂になっていたのではないかと、とも思われる節があるからである。事件当時、木像の磔を直接目にし噂を耳にして記録した、前記「不思議ノ事也」<史料Ⅱ-1>や「氣遣迷惑之義也」<史料Ⅱ-3>などの記述には、利休の悪行ぶりを見せつけられながらも、何か「不審な」「困惑した」気持ちが読み取れるのである。つまり、江戸時代Dの記録では、年月も経過し事件当時の事情もよくわからない一般の人たちにとっては当然、上記下線部

のような状況であったに違いないとの先入観によって、このような状況記述をしたのではないか、と思われるからである。

2) 切腹状況項目別の特徴

①木像の磔……利休が私財を投じて大徳寺三門を大改築したことについて、その功績を顕彰し後世に伝えるために、三門楼上に利休の木像を安置したことが不遜・僭上の振舞だとして、切腹3日前にその木像を一條戻橋において磔にしたものである。この処置が如何に奇異で特徴的な事象であったかということは、事件当時の記録である6史料のうち、5史料に記録されているところからわかる。

②長老衆訊問……木像安置は利休の功績を顕彰するのが目的であるから、当然大徳寺長老衆の意向ということになり、それを処罰するのであるから、当事者の長老衆が訊問されたというものである。

③利休切腹……この項目は単に利休が切腹したという記述であり、特徴的なものではない。

④切腹後獄門……この項目には、二つの非常に特徴的な事象が含まれている。つまり一つは、切腹でありながら獄門にしたということであり、もう一つはそのやり方が、問題ありとされた利休のその木像の足で踏みつけた形で、獄門にしたという事実である。

⑤茶室床で切腹……江戸時代Aを除いたすべての区分で、茶人にとって神聖な場所であるはずの茶室の床に腰掛けて切腹した、という記述に何か不自然さを感じさせられる。

⑥十文字腹……十文字腹による切腹は、無念腹として近世においては忌み嫌われていたところから、こうした所作には、別の意図があったと考えるべきであろう。江戸時代B・Cにこの記述がみられることは、前記の項目⑤の記述とも相通ずる、注目すべきことである。

⑦介錯合図……⑤および⑥とセットで記されていて、⑤の場所で⑥の所作を終え、合図してから介錯して欲しい、と利休が依頼し、介錯人がそれを約束していたというものである。

⑧菅丞相狂歌……藤原時平の讒言により太宰権帥に左遷され、無念のうちに配所において没した菅原道真に、自らを擬した利休がそれを狂歌で書き残したものである。この記述は、前記のとおり、江戸時代全区分の記述においてみられるという意味でも特徴的である。

⑨利休屋敷嚴重警固……江戸時代Aのみにみられるものであるが、この事象そのものは極めて特徴的である。つまり、逃亡の意思など全くなく、また逃亡幫助などなしえない状況にありながらの、上杉勢三千名の軍兵による嚴重警固だからである。

⑩潔い切腹……千利休子孫・弟子筋がこの項目を記しているのは、茶聖である千家の祖を崇める意味で、よく理解できるところである。しかし、項目⑤や⑥の潔い切腹とはあい矛盾するかに思える記述が同時に、江戸時代Cでみられる点が特徴的である。

3. 千利休切腹の状況における特異性

本節でこれまで、切腹状況に関する関係史料の記述内容について、分析・検討を加えてきた結果、多くの特徴的な記述があることが判明した。そこには、千利休が単に後述する公示罪状で示された理由によって切腹を賜った、という場合に想定される切腹状況とは、明らかに異質な特徴がみられる。つまりその切腹の状況には、特異性といえる事象が多々みられるということである。しかしながら、こうした点について本格的解明に取り組んだ先行研究には、管見による限り接していない。筆者にはこれら特異事象の解明が、千利休切腹の真相究明の核心であると考えられるので、別稿で論証するつもりであるが、紙幅の関係もあり、ここではとりあえずその特異性項目を抽出・列挙するにとどめる。

ただし、下記項目のうちAについては、史料に直接このような記述がみられるわけではないものの、他の特異性項目において、この木像安置が密接に関連しているため取り上げたものであり、Hについては、前記切腹状況項目としては挙げていないが、利休の木像の磔や獄門が何故一條戻橋であったのか究明する必要がある取り上げたものである。

- A. 大徳寺三門楼上利休木像安置と問題発生の時期的ずれ
- B. 切腹直前の利休木像の磔と切腹罪状の事前公示
- C. 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固
- D. 茶室の床に腰を掛け腹を十文字に切って腸を取り出し、それを蛭鉤に掛け終わった後、利休の合図により介錯
- E. 菅丞相に擬えた狂歌を残しての切腹
- F. 切腹でありながらの獄門
- G. 本人の木像の足で踏みつけた獄門
- H. 一條戻橋での木像磔と獄門

Ⅲ 史料の記述にみる千利休切腹の原因とその分析・検討

第1節 千利休切腹の原因に関する史料の記述

前章では、切腹状況に関する関係史料の記述内容について分析・検討したが、本章で切腹原因に関する関係史料の記述内容を分析・検討することで、総合的な考証が可能となる。そこで本節では、切腹当時から江戸時代に至る間の史料についてみることにする。

1. 切腹の原因に関する記述史料およびその成立時代と著述者による区分

切腹原因に関する記述史料には次のものがある。ここでも前章同様に、成立時代および著述者により区分するが、史料番号は編年順とする。

1) 安土桃山時代の記録

A. 切腹直前・直後の記録

切腹状況に関する記録と同様の、切腹直前および直後の、切腹の原因に関する記述としては、次の史料が挙げられる。

前掲<史料Ⅱ-2・3・4・5・6>

B. 切腹後2年経過時の記録

切腹後2年経過時の記録は次の一点のみである。

<史料Ⅲ-1>南宗寺集雲庵首座南坊宗啓著「南方録」第七卷・滅後、文禄2年(1593)¹⁷⁾。

2) 江戸時代の記録

切腹の原因に関する記述についても、前記切腹の状況に関する記述史料の区分と同一基準により、分類区分する。

A. 千利休子孫および弟子筋の記録

〈史料Ⅲ-7A〉前掲〈史料Ⅱ-10〉の千家第四世江岑宗左(表千家祖)口上筆録「千利休由緒書」¹⁸⁾。

〈史料Ⅲ-9〉前掲〈史料Ⅱ-12〉の山田宗徧著「茶道要録」付録¹⁹⁾。

B. 千家系統以外の茶人の記録

〈史料Ⅲ-4〉松屋源三郎久重編か「松屋名物集」慶安5年(1652)以前²⁰⁾。

〈史料Ⅲ-5〉前掲〈史料Ⅱ-8〉の松屋源三郎久重編「利休居士伝書」²¹⁾。

〈史料Ⅲ-6〉前掲〈史料Ⅱ-9〉の松屋源三郎久重編「三斎公伝書」²²⁾。

〈史料Ⅲ-10〉前掲〈史料Ⅱ-13〉の土門松屋元亮著「茶湯秘抄」巻五²³⁾。

C. 武家筋の記録

〈史料Ⅲ-2〉前掲〈史料Ⅱ-7〉の吉田孫四郎雄翟編『武功夜話』巻十七²⁴⁾。

〈史料Ⅲ-3〉吉田孫四郎雄翟口述千代女書留「先祖等武功夜話拾遺」巻七、寛永15年(1638)²⁵⁾。

〈史料Ⅲ-7B〉豊臣秀頼小姓古田九郎八(古田織部嫡子)直談、十市縫殿助物語「千利休由緒書」承応2年(1653)²⁶⁾。

〈史料Ⅲ-8〉前掲〈史料Ⅱ-11〉の国枝清軒編『武辺咄聞書』²⁷⁾。

〈史料Ⅲ-14〉前掲〈史料Ⅱ-15〉の小野武次郎原編『綿考輯録』巻十²⁸⁾。

〈史料Ⅲ-15〉近松茂矩輯『茶窓問話』中巻、享和4年(1804)頃²⁹⁾。

D. その他の記録

〈史料Ⅲ-11〉平直方述「夏山雑談」巻之五、寛保元年(1741)³⁰⁾。

〈史料Ⅲ-12〉山口幸充抄写「嘉良喜随筆」巻之三、寛延3年(1750)³¹⁾。

〈史料Ⅲ-13〉前掲〈史料Ⅱ-14〉の神沢杜口著「翁草」巻之三十の内「千利休成敗の事」の項³²⁾。

〈史料Ⅲ-16〉橘春暉(南谿)著「北窓瑣談」後編巻之三、文政12年(1829)³³⁾。

〈史料Ⅲ-17〉前掲〈史料Ⅱ-16〉の成島司直改撰『改正三河後風土記』巻第二

十九の内「千利休罪科付格言の事」の項³⁴⁾。

<史料Ⅲ-18>吉田丈太夫編「仙台金石志」下巻，巻之二十二，安政4年(1857)完編³⁵⁾。

2. 史料記述内容の分類・分解

1) 切腹原因項目分類

切腹原因の項目については以下のとおり分類する。

①大徳寺三門楼上木像安置(以下「木像安置」と記す)。
 ②茶道具鑑定・売買不正(以下「売買不正」^{まいす}と記す)。
 ③秀吉による利休娘側室要求への拒否(以下「利休娘側室拒否」と記す)。
 ④大徳寺三門改築寄進(以下「大徳寺三門改築」と記す)。
 ⑤鶴松君誕生以来利休は蔑如に扱われ何かと疑われていた(以下「利休蔑如扱」と記す)。
 ⑥秀吉による利休所持名物茶器所望に対する拒否(以下「名物茶器所望拒否」と記す)。
 ⑦秀吉・利休の茶湯理念対立(以下「茶湯理念対立」と記す)。
 ⑧二条院の御墓の石塔の盗用(以下「二条院石塔盗用」と記す)。

ただし，上記切腹原因項目が，讒訴・讒言による項目と記されているものはその項目番号にa印をつけることとする。

2) 史料毎の切腹原因項目分解

<史料Ⅱ-2>○大徳寺三門ニ利休木さうつくり，せきたといふこんこうはかせ，つへつかせつくり置候事曲事也—① ○茶の湯道具新物共，くわんたいにとりかわし，申したるとの事也—②

<史料Ⅱ-3>○宗易木像，大徳寺ニ在之，今度，宗易御勘気也—①

<史料Ⅱ-4>○近年新儀ノ道具共用意シテ，高直ニウル，マイスノ頂上也トテ歟，以外関白殿御腹立—② ○壽像ヲ作テ，紫野ニ置テハタ物ニ取上—①

<史料Ⅱ-5>○右之宗易，其身之形を木像ニ作立，紫野大徳寺ニ被納候ヲ，^(秀吉)殿下様より被召上，聚楽之大門毛どり橋と申候所ニ，張付ニかけさせられ候—①

<史料Ⅱ-6>○色々^(賣僧)まいす仕候故御清はい有之也—② ○大徳寺三門之^(興隆)こうりう仕，末代迄名を^(像)残と存木さうを我す^(姿)かたニ作，^(石駄)せきたを^(杖)はき，^(申カ)つゑを^(豊臣秀吉)つき□有之，いわれ関白様へ申上候へハ，^(罪)猶いよいよさいふかく成申候—①

<史料Ⅲ-1>○^(天正十九年)正月十八日息女自殺セラレ，ソレヨリ愁傷ノ内ニ，世上ヒソメキテ，ツキニ二月廿八日ノ難アリシユヘ—③

<史料Ⅲ-2>○大徳寺三門を御寄進に付き，宗易殿万々ぬかりなく，殿下にもその由を願ひ出で御済了の如くに承り候ところ，家来の注進によるに殿下不快の由—④a ○^(秀長)殿の昵懇の御茶道

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

- 師宗易殿、この頃は何敵と蔑如に扱われ、閔白殿下御疑いの筋もこれある哉と洩れ承り候—⑤
- 閔白殿下一端に御逆鱗の由承り候、子細は御三門に師匠の人形奉納不都合の科ある由—①
- <史料Ⅲ-3>○利休様御所持の御名物を太閤様御所望を聞かれ間敷候為御勘当とかや—⑥ a
- 利休様御茶道の御異見御意に叶わざる揚句の沙汰とかや—⑦ a ○洛北紫野の大徳寺に御奉納の御座像御茶道を後代に伝えんと欲せられ候居士の御意趣を御近衆謔言候—① a ○此の利休の茶道増長に耽りて作法を曲げ天を恐れず上を顧みず^{ほしいまま}恣に相働く等々佞人輩の謔言を聞き入れ給い— a
- <史料Ⅲ-4>○千乗二利休翁智也、此内義ヨリ事起り、利休及生害也—③
- <史料Ⅲ-5>○大徳寺山門ハ連歌の宗長建るなり。是ニ利休ノ像を上テ二階ニ利休額を作居ル。曲泉ニ乗り頭巾ニ杖をつき、せきだをはき、雪を見る躰か。太閤秀吉公御違乱無眼—①
- <史料Ⅲ-6>○秀吉公祐桂ニ、此中ハ何事カ珍敷事有之と被仰候へバ、利休娘之事を申上る。左候へバ利休之^(御内儀)内へ為御使祐桂両度被遣候へバ、易へ不申候てはいかゞ^(共)と内心不申候を、易聞て中々不及覚悟ト申上ル。愈祐桂腹立候也。其折節又^(前田玄以)徳善院 散々ニ取成候て切腹也—③ a ○玄以法印之意趣ハ、胴高を取出シ、肩衝と云て利休ニ見スるを、一円ニ物不言、其意趣にてなり—② a
- <史料Ⅲ-7 A>○利休天下ニ秀、出頭無双ヲ婿^{ソネミ}、時々謔言仕候輩有之候ニ付、秀吉公御機嫌損申候、龍宝山の山門ハ、主上も行幸被遊、院も御幸、撰家清花ノ尊貴皆被通候、其門の上ニ、己か木像ニ、草履ヲはかせ置候段、不礼不義、不可^{アゲテカゾヘ}勝斗との御^{トギメ}咎ニテ—① a ○其後謔言にて利休^{エンシ}冤死之段無罪ニテ死ル事、秀吉公御聞届被成、御後悔不浅— a
- <史料Ⅲ-7 B>○秀吉公ハ徳善院御使候て、父ノ利休かたへ此旨被仰下候、利休存候ハ、娘を御奉公ニ出し候てハ、何事も利休ハ、娘の影候て、仕合よしと、人に被思候テハ、只今までの佳名^{カメイ}皆水に成候、中々存も不寄ト志ヲ極、御うけ不申上、両三度まで被仰遣候へ共、利休曾而御うけ不申候ニ付、甚以テ御にくみふかく罷成候—③ ○然共此儀候て御とがめハ天下の人口を御遠慮ニテ御指置被成、利休かあやまりあれかし、其次^{ツイデ}而ニ御誅伐可有と思召候所ニ、大徳寺の山門の事御耳ニ達し、遂ニ利休を御誅伐被成候よし—①
- <史料Ⅲ-8>○秀吉公富田左近を以父利休に被仰出鴫屋か後家を聚楽へ御宮仕させ候へと頼りに被仰遣けれ共利休は少も不肯娘を商売物にして我身を立ん事恥辱難通と終に御請申上されければ秀吉公義理の筋目は御破難被成けれ共無わり御心入の叶はぬ事を残念に思召事人情なれば御心底には深く挿結て—③ a ○一兩年過て利休運の尽にや大徳寺古溪和尚と相議して山門を再興し棟札を打其上に利休木像を造り山門に安置せり(中略)其事世に無隠秀吉公御耳に達し内々悪しと思召折節なれば謔言も指つとひ—① a ○利休近年茶具の目利にも親疎の人々により私有由をそ申上る父子の間さへ遠さくる謔言也—② a ○いかに況君臣の間をや謔言度重りしかは天正十九年二月廿八日利休御成敗に極り— a
- <史料Ⅲ-9>○公宗易ヲ惡ミ玉フ、其元^{サンネイ} 讒佞ノ訴へ何某^シト云フ者ノ所^{ソイ}為ナリ— a ○大徳寺ノ

聚光院古溪宗陳ト相議シテ山門金毛閣ヲ建テ己カ木像ヲ彫、以テ閣上ニ安シ、參詣ノ諸士ニ戴カシム、是一ツ—①a ○私僻ノ心ヲ含ミ素ヨリ茶具ノ善悪新古ヲ能知テ己ト親者ニハ善ヲ惡ト稱シテ価ヲ卑ク買シメ、己ト疎者ニハ惡ヲ善ト稱シテ価ヲ貴ク買シム、又ハ新ヲ以テ旧トシ、旧ヲ以テ新トシ、否ヲ以テ可トシ、假ヲ以テ真トスルモ亦己ト親疎ニ因テ其售^{アタヒ}高下ニ私ヲナシ、多ク人ヲ騙^{タブラカ}ス、是一ツ—②a ○伝云、是皆諷口ノ吹竽ニ因テ如此、利休聊カ私僻ノ黒キ心ナシ、逐一是ヲ陳謝スルニ不及、世皆知^ニ所明カ也、其邪曲無カ故ニ今ニ至テ其所持ノ茶具筆跡ノ価ヒアル事、又賞玩タルノ義^ミ上御一人ヲ始奉テ下一己ノ庶人等マデ珍器重宝トセズト云事ナシ、是以テ知^ルベシ、公モ頗ル御後悔有シト也、(後略) — a

<史料Ⅲ-10>○大徳寺參門ハ連哥師宗長立る也、是ニ利休閣ヲ上テ二階ニ利休影ヲ作り居ル、曲景ニノリ頭巾ニ杖ヲツキセキタヲハキ雪ヲ見る体カ、太閤秀吉公御違亂無限—① ○太閤様祐桂ニ此中ハ何事カ珍敷事ハ有之ト被仰候へ者、利休之娘の事ヲ申上ル、左候へハ利休ノ内儀へ御使トシテ祐^(ママ-福井)慶^ニ兩度被遣候へ共、易へ不申候テハイカニト同心不申ヲ、易中々不及覚悟ト申上ル、祐^(ママ-福井)慶^ニ弥々腹立候也、其折節又徳善院散々ニ取成候而切腹也—③a ○玄^(以-福井)仁^ニ法印ノ意執ハトウ高ヲ取出シ、肩衝ト云テ利休ニ見するを一円ニ物イワス、其意恨ニテ也—②a

<史料Ⅲ-11>○二条院の御墓舟岡の麓にあり。御墓に五重の石塔ありしが、千与四郎入道利休此御石塔の九輪を取、己塔とし、及手水鉢にせしとかや。かゝる大悪のつりて次第に奢り、後には私曲をせしを、豊臣太閤大に怒り給ひ—⑧

<史料Ⅲ-12>○今ノ船岡山ニ、古ヘ船岡山ノ墓シルシト云テ石塔アリ。夫ヲ利休トリテ、一ノ上ヲ自身ノ石塔ニシテ、今大徳寺ノ内聚光院ニアリ—⑧ ○彼利休ガ僧上言語道断。山門ノ像以下多シ—①

<史料Ⅲ-13>○千利休を秀吉公成敗し玉ふ蓋觴は、渠が娘の事より起ると云ふ—③a ○此の事を秀吉公内々怒玉ふ処に、利休が運の宛にや、大徳寺の古溪和尚を相議し、山門を再興し、棟札を打つ、且つ利休が木像を造て、山門に安置す、(中略)是を秀吉公聞召、兼て悪み玉ふ折柄なれば宣ひけるは、山門はいかなる貴人高位も通行有所なるに、是を己が足下に懸る事、言語道断の無礼なりと仰けるを—①a ○其の上近頃は茶具の目利に親疎有て、私欲甚敷由申に仍り、一道の宗匠たる者、左様の私有は寔に国賊なりと以ての外怒給ひ—②a ○折を得て利休に宿意有輩傍に在て讒しけるは、総じて利休事近來世に被用に誇り奢超過し—a

<史料Ⅲ-14>○先利休老人の女子有、当世の美人と評せしを、堺の町人に嫁せし也、秀吉公此娘か事を聞給ひ、召出さるへき御内意有、東条紀伊守行長是非此女子を取返し、太閤へ上よと申けるに、利休承引せず、(中略)必竟是か御耳に立て切腹被仰付候—③a ○茶器の新旧たと決し候に、稀に私も有之たるにや—②a ○大徳寺山門の閣を利休建立して、我木像を山門の上に作り置候も、罪の一ツ也—①a ○此度罪に行ハれ候、其科数箇条之由候へ共、多くハ例の讒言と聞へ申候—a

<史料Ⅲ-15>○利休もむすめがミさほを立るこころざしを破らせがたく、其上娘を妾に出して、

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

身を立ん事をくちをししく思ひて、遂に御請申上ざりケレバ、公も義理のすぢハ破られずわりなき御ことの思ひより、内々ハふかくいきどほりあらせ給ひしに—③a ○折節大徳寺の山門を再興し、棟札を打、我木像をあげし事など、世にかくれなく、御耳に達し、さんざん不届なるものとおぼしめす—④a ○佞臣ども便りよしと見すまし、近年道具の目利に私曲ありといひ、或ハ賄賂^{マヒナヒ}を受て御とりなしを申せしなどと、種々あられぬ讒言かさなりしが—②a

<史料Ⅲ-16>○利休の娘の万代屋が方に嫁したるを、太閤、其容色を聞及び玉ひ、召入れらるべかりしを、利休不承知にて、一旦嫁し遣せし女、いかに君命なればとて出しがたし—③

<史料Ⅲ-17>○関白利休が賄賂を貪り器物の新旧を偽り真贋をあざむきしばしば衆人を迷はしむる事を聞召凡一道の宗匠と成りて衆人の師範とならん者私欲を専らにして姦^{かん}曲^{きよく}をふるまふ事尤国賊といふべし—② ○其上利休此日頃驕逸^{きようまん}矜^{きん}慢のあまり紫野大徳寺古溪和尚宗^(陣-掛非)陣に計り其身の木像を彫刻させ是を山門の上に安置せしむること不礼とやいはん矜^{きようぼつ}伐とやいはん以の外の曲事也是をもゆるかせに捨置時は天下の政事立べからずと以の外気色損じ給ひ—① ○一説に利休が女は鴟屋といふが妻なり夫におくれ寡^{さい}居^{くわきよ}せしを秀吉東山の花見の時かひまみ給ひ頻りに召れけるを利休参らせざりし故罪せらるゝかといふ誠に哉—③

<史料Ⅲ-18>○易修營大徳寺山門。而營作己之像安於閣上。秀吉惡其不遜而大怒以加殺戮—①

第2節 千利休切腹の原因に関する史料の記述内容の分析・検討

1. 史料記述内容の分析表

1) 原典史料成立時代および著述者区分毎の史料別切腹原因項目

時代・区分	史料	切腹原因項目
安土桃山時代 A	II-2	①・②
	II-3	①
	II-4	①・②
	II-5	①
	II-6	①・②
安土桃山時代 B	III-1	③
江戸時代 A	III-7A	①α
	III-9	①α・②α
江戸時代 B	III-4	③
	III-5	①
	III-6	②α・③α
	III-10	①・②α・③α
江戸時代 C	III-2	①・④α・⑤
	III-3	①α・⑥α・⑦α
	III-7B	①・③
	III-8	①α・②α・③α
	III-14	①α・②α・③α
	III-15	①α・②α・③α
江戸時代 D	III-11	⑧
	III-12	①・⑧
	III-13	①α・②α・③α
	III-16	③
	III-17	①・②・③
	III-18	①

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

2) 原典史料成立時代および著述者区分毎の切腹原因項目別史料

時代・区分	切腹原因項目	史料
安土桃山時代 A	① 木像安置	Ⅱ-2・3・4・5・6
	② 売僧行為	Ⅱ-2・4・6
安土桃山時代 B	③ 利休娘側室拒否	Ⅲ-1
江戸時代 A	① α 木像安置	Ⅲ-7A・9
	② α 売僧行為	Ⅲ-9
江戸時代 B	① 木像安置	Ⅲ-5・10
	② α 売僧行為	Ⅲ-6・10
	③ 利休娘側室拒否	Ⅲ-4
	③ α 利休娘側室拒否	Ⅲ-6・10
江戸時代 C	① 木像安置	Ⅲ-2・7B
	① α 木像安置	Ⅲ-3・8・14・15
	② α 売僧行為	Ⅲ-8・14・15
	③ 利休娘側室拒否	Ⅲ-7B
	③ α 利休娘側室拒否	Ⅲ-8・14・15
	④ α 大徳寺三門改築	Ⅲ-2
	⑤ 利休蔑如扱	Ⅲ-2
	⑥ α 名物茶器所望拒否	Ⅲ-3
⑦ α 茶湯理念対立	Ⅲ-3	
江戸時代 D	① 木像安置	Ⅲ-12・17・18
	① α 木像安置	Ⅲ-13
	② 売僧行為	Ⅲ-17
	② α 売僧行為	Ⅲ-13
	③ 利休娘側室拒否	Ⅲ-16・17
	③ α 利休娘側室拒否	Ⅲ-13
	⑧ 二条院石塔盗用	Ⅲ-11・12

3) 切腹原因項目毎の原典史料成立時代および著述者区分別史料

切腹原因項目	時代・区分	史料
① 木像安置	安土桃山時代 A	Ⅱ-2・3・4・5・6
	江戸時代 B	Ⅲ-5・10
	江戸時代 C	Ⅲ-2・7B
	江戸時代 D	Ⅲ-12・17・18
①α 木像安置	江戸時代 A	Ⅲ-7A・9
	江戸時代 C	Ⅲ-3・8・14・15
	江戸時代 D	Ⅲ-13
② 売僧行為	安土桃山時代 A	Ⅱ-2・4・6
	江戸時代 D	Ⅲ-17
②α 売僧行為	江戸時代 A	Ⅲ-9
	江戸時代 B	Ⅲ-6・10
	江戸時代 C	Ⅲ-8・14・15
	江戸時代 D	Ⅲ-13
③ 利休娘側室拒否	安土桃山時代 B	Ⅲ-1
	江戸時代 B	Ⅲ-4
	江戸時代 C	Ⅲ-7B
	江戸時代 D	Ⅲ-16・17
③α 利休娘側室拒否	江戸時代 B	Ⅲ-6・10
	江戸時代 C	Ⅲ-8・14・15
	江戸時代 D	Ⅲ-13
④α 大徳寺三門修築	江戸時代 C	Ⅲ-2
⑤ 利休蔑如扱	江戸時代 C	Ⅲ-2
⑥α 名物茶器所望拒否	江戸時代 C	Ⅲ-3
⑦α 茶湯理念対立	江戸時代 C	Ⅲ-3
⑧ 二条院石塔盗用	江戸時代 D	Ⅲ-11・12

4) 切腹原因項目別記述史料数

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| ① 木像安置 | 合計12史料 (ただし江戸時代 7 史料) |
| ① <i>a</i> 木像安置 | 合計 7 史料 (ただしすべて江戸時代) |
| ② ^{まいす} 売僧行為 | 合計 4 史料 (ただし江戸時代 1 史料) |
| ② <i>a</i> 売僧行為 | 合計 7 史料 (ただしすべて江戸時代) |
| ③ 利休娘側室拒否 | 合計 5 史料 (ただし江戸時代 4 史料) |
| ③ <i>a</i> 利休娘側室拒否 | 合計 6 史料 (ただしすべて江戸時代) |
| ④ <i>a</i> 大徳寺三門改築 | 1 史料 (ただし江戸時代) |
| ⑤ 利休蔑如扱 | 1 史料 (ただし江戸時代) |
| ⑥ <i>a</i> 名物茶器所望拒否 | 1 史料 (ただし江戸時代) |
| ⑦ <i>a</i> 茶湯理念対立 | 1 史料 (ただし江戸時代) |
| ⑧ 二条院石塔盗用 | 2 史料 (ただし江戸時代) |

2. 史料記述内容の分析・検討

1) 原典史料成立時代および著述者区分別の特徴

ここでは、本節 1 の 1) および 2) で分析した資料を参考にして、原典史料成立時代および著述者区分別の、切腹原因に関する史料の記述における特徴を見る。

まず、安土桃山時代 A の記録は、前章の切腹状況に関する史料の記述と全く同一時点・同一条件の記録である。したがってこれらの記録は、この事件当時の生々しい現状を実際に見た事実や、またそれを聞いた人たちの記述である。そしてその結果、5 史料すべてが①木像安置を、また 5 史料中 3 史料が②売僧行為を、切腹原因として挙げていて、それ以外の罪については、記していないということである。このことは<史料Ⅱ-5>で伊達政宗家臣鈴木新兵衛が「おもしろき御文言、不可勝計候、」と国元への書状で記しているものの、主たる罪状としてはこの二つであり、それ以外は微罪もしくはそれら二つの罪状の、補足的記述であった可能性が強いことを示しているといえるのではないか。同時に二つの罪状の中でも、特に木像安置が首罪であったことを示しているといえそうである。

しかしながらここで忘れてならないのは、これら二つの罪状は、処断当局者による公示罪状であるということであり、そしてその中でも木像安置がすべての史料に記されているように、これが首罪と当時の人たちが思ったのには、それなりの理由があったということである。つまり、切腹前に利休の木像をわざわざ一條戻橋で磔にし、その傍らに高札を立てて罪状を事前公示していること、切腹後にはさらに切腹でありながら、その木像の足で踏ませた形で、利休の首を獄門に懸けるという、視覚効果満点の処置をすることで、そのように必然的に思わされたということではないか。処断当局者によるこれだけの演出が、十分に効を奏して、当時の人々は、利休の悪行ぶりをまざまざと見せ付けられ、強烈に印象付けられた様子が、これらの史料の行間から読み取れるのである。

ところが<史料Ⅲ-1>は、切腹後2年経過時の利休出身地元の堺では、早くも別の切腹原因の噂が立っていたことを示している。記述者はかつて利休が参禅修行した南宗寺塔頭の集雲庵首座であり、茶道の弟子として利休を敬愛してやまなかった南坊宗啓である。ここで問題とすべきは、この点をどのように評価すべきであるかということである。利休が切腹を賜るに至った罪状が前記二件であることは、高札による罪状公示や他の記録から明白であるが、切腹2年後の堺では、すでに公示罪状に対する疑義が生じていたと考えるべきではないだろうか。秀吉の好色による利休娘の側室要求に対する利休の拒否という、公示罪状では掲示し得ない原因が実はあったのではないかと、という見方も堺ではなされていたことを示していると考えられるべきであろう。

次に江戸時代であるが、全体を通じてみると、こうした公示罪状に対する疑念といったものが、別のいろいろな形でみられるようになる。つまり一つには、江戸時代Dを除くと、二つの公示罪状のうち首罪である木像安置については、それを記している10史料のうち4史料しか、ストレートにそれを原因として挙げておらず、残り6史料と他の一件の公示罪状である売僧行為に関しては、そのすべてについて、それが讒言によるものである、と記しているという大きな特徴を示していることである。そしてまた一つには、上記原

因①の木像安置をストレートに挙げている史料には、特別なものを除き、公示罪状以外の原因がいろいろと記されているという点である。また最も特徴的な点は、利休娘の側室要求への拒否という原因の急増である。このことは、木像安置やましてや売僧行為という原因は、どうも公示額面どおりではないのではないか、実は利休娘の一件が隠された原因ではなかったのか、と考えられるようになっていたことを示しているのではないかと。そしてこうした疑念の延長線上に、他のさまざまな原因が挙げられるようになり、それらも讒言によるものである、と記されるに至ったのではないだろうか。このことは江戸時代Dも含めた、江戸時代全体を通じて言えることである。

では以上のような江戸時代の全般的傾向を踏まえて、次に著述者区分毎に、いま一步掘り下げてみることにする。まず、江戸時代Aの記録としては、次のことが言える。

<史料Ⅲ-7A>は原因①aのみであるが、<史料Ⅲ-9>は原因①aおよび②aを挙げていて、両史料ともそれが讒言によるものと記している。それは原因①および②を口実として使った讒言により、切腹させられたと彼らは考えていたように思われる。そのことは、豊臣家になんら遠慮することのない徳川時代になったために真実を記しているのか、あるいは千家の始祖利休の死を正当化しようとする意図によるものか、ここでは速断することはできないが、いずれにしても彼らにすれば、利休が切腹させられるほどの正当な理由はなかったと考えていたらしいことが言えそうである。

また江戸時代Bの記録で、Aの記録と最も異なるところは、原因③の一件が、茶人たちの間で言い伝えられていたことである。そしてさらに、讒言という要素も付加されていることを考えると、やはり前記の江戸時代全般と同様の特徴を示しているといえそうである。

次に江戸時代Cの記録をみることにする。<史料Ⅲ-3>は、<史料Ⅲ-2>の補足として記されたものであるが、いずれもこの記述の中心になっているのは、前野将右衛門長康である。この前野長康は、秀吉創業の功臣であったが、文禄の役より帰国後は関白秀次の後見役を仰せ付けられる。ところが息子出雲

守長重が秀次事件に連座切腹となるに及び自らも責任をとり自刃している。したがって、そのことや、秀吉および利休の近くにおいて、両人物を知悉していた長康の記録をもとにした、江戸時代の子孫の編纂として、〈史料Ⅲ-2〉の原因①・④ α ・⑤には、比較的自由な立場での記述としての興味深さがある。

その一例について挙げると、原因④ α の一件である。利休が勝手に大徳寺三門の大改築をしたのはけしからんと、秀吉が不快心を募らせたことが、原因の一つであるとされているが、利休は事前に願い出て許可を得た、と言っていたと長康は記している。ここで利休が本当に事前届け出をしていたか否かの証明はできない。しかし、傍証として、〈史料Ⅱ-6〉『北野社家日記』の、利休が切腹になる直前月分の、天正19年閏正月11日から同月末日までの記録³⁶⁾を挙げることができる。この記録によると、京都所司代前田玄以は、北野天満宮内と思われる屋敷の件で、再三にわたり検分に行き、また神社側も連絡・報告を密にして、事後のお礼までしている。このように京都所司代として同天満宮に対し、非常に些細と思われる事案についても、事前届けは勿論出させ、その後の検分も抜き取りなくやっていたらしいことが確認できるからである。それに〈史料Ⅲ-2〉の原因①についても、それが讒言によるとは記されていないものの、関連して〈史料Ⅱ-7〉に次の記述がある点について、特に注目する必要があるのではないか。

殿下より下し給う天下一宗匠の御号を永代に伝えるために相謀りし候事、宗易殿より殿下にも内々届けられ御免なされ候事承り候。

この〈史料Ⅱ-7・Ⅲ-2〉のコンテキストから察するに、次のことが考えられるのではないか。つまり、利休の寄進により大徳寺三門の大改築が竣工したことで、それを永く顕彰すべく、大徳寺長老衆や門人一同の意向をうけて、その楼上に木像を安置することになるが、それに際しては、利休は秀吉に内々了解を得ていた。にもかかわらず、その後約1年2ヶ月半経過した時点の、秀吉の尾張鷹野下向中に、その木像の件が、俄に問題として浮上する。そして、秀吉の帰洛後に、事態は利休の堺追放、さらに切腹へと急展開をみせる。こうした事態の推移から考えられるのは、木像安置をしたと考えられる、天

正17年12月初めの時点と、秀吉が尾張から帰洛した天正19年2月初めでは、大きな状況変化があり、そのため秀吉は翻意することになった、ということではないか。問題は、秀吉に翻意を促した動因が何であったのかということであるが、これについては、前記大徳寺三門改築の事前届け出許可済みの件とともに十分考察する必要があり、別稿に譲ることにしたい。

<史料Ⅲ-7B>は、利休の弟子で、利休に次ぐ茶の湯名人といわれた古田織部の嫡子による直談の聞き語りである。これには、原因③により秀吉は利休を心底憎んでいたが、それは公式罪状にはできないため、①という口実を得て誅伐したとなっている。また<史料Ⅲ-8>は<史料Ⅱ-11>と同一史料で、上杉家伝来の事跡の一篇として記されているが、その上杉家ですら次のような原因説を伝えていることに興味をそそられる。つまり、<史料Ⅲ-7B>と同様に、原因③を公式理由にできないため、①という口実を待ち、それに②を加えたというものであり、さらにいずれも讒言によるというのである。そして<史料Ⅲ-14>は、細川忠興の事跡に関する記述の中にみられるものであるが、細川忠興は最も忠実に利休流茶湯を受け継いだ人物と言われる。したがって、利休のことをよく知りえた関係にあった武家の茶人仲間には、<史料Ⅲ-8>と同様の原因説が、それも讒言によるものとして広まっていたことの、証拠を示すものであるといえそうであり、これまた非常に興味をそそられるものである。つまり、原因①と②は口実であったことをこれらは示しており、真の原因としては③だったのではないかと、彼らは考えていたという点である。また<史料Ⅲ-15>は、尾張藩士による茶道故事輯録であるから、利休とは直接関係のなかったと思われる人物であるが、やはり<史料Ⅲ-8・14>と同様な、切腹原因についての受け取り方をしているようである。

そして最後に、江戸時代Dであるが、この区分の記録には、切腹原因の考察に重大な影響を及ぼす記述は無いと考えられるので、紙数の関係もあり割愛する。

2) 切腹原因項目別の特徴

ここでは本節1の3) および4) の分析資料により、史料にみえる切腹原因項目別の特徴について、その概要を記す。

まず、切腹原因項目として最も目立つのは、なんといっても木像安置の19史料におよぶ記述という圧倒的多数であろう。それは処断当局者による演出効果満点のデモンストレーションによるところ大であると言わざるを得ない。しかし江戸時代のこの原因についての記述の、全14史料の半数は讒言によるとされている点に注目しなければならないのは、前述のとおりである。

そして次に原因項目として多いのが、^{まいす}売僧行為と利休娘側室拒否のいずれも11史料による記述である。このうち前者の売僧行為は、公示罪状の一つであったが、もう一つの公示罪状である木像安置と比べると、記述史料数において格段の差がある。このことはこの売僧行為という罪状が、公示時点からすでに首罪である木像安置に比べて、付加罪的位置づけである、と思われていたのではないかという点と、首罪の此見よがしの演出効果に比べて、訴求力という点で劣っていたことを意味するのであろう。そのことは江戸時代における、この原因に関する記述史料が、江戸末期の1史料を除き、すべて讒言によると記していることから窺われるところである。

また利休娘側室拒否という原因については、前述のとおり、公示罪状に対する疑念から、その反動として江戸時代になり急増したと考えるべきであろう。その他の原因については省略する。

IV 千利休切腹の原因に関する諸説とその批判的検討

第1節 千利休切腹の原因に関する諸説

1. 切腹の原因に関する先行研究文献リスト

切腹原因に関する記述のみられる先行研究のうち、本稿で取り上げ検討した文献のリストは、以下のとおりである。

<研究1> 岡倉天心『茶の本』講談社、1994年（但し1906年ニューヨーク他にて英文出版済み）。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

- <研究2>竹内尉『千利休』創元社、1939年。
- <研究3>芳賀幸四郎「利休の切腹とその時代」、『史潮』46、1952年9月。
- <研究4>芳賀幸四郎『千利休』吉川弘文館、1963年。
- <研究5>蘇峰徳富猪一郎『近世日本国民史』第6巻、豊臣氏時代丙篇、近世日本国民史刊行会、1963年。
- <研究6>『岩波講座日本歴史』9. 近世(1)、朝尾直弘「豊臣政権論」、岩波書店、1963年。
- <研究7>杉本捷雄『千利休とその周辺』淡交社、1970年。
- <研究8>桑田忠親『千利休研究』東京堂出版、1976年。
- <研究9>小松茂美「利休切腹の真相を解明する三通の手紙」、『新潮45』4(6)、1985年6月。
- <研究10>会田雄次・尾崎秀樹^{ほつき}対談「秀吉と利休 —超天才同士の葛藤」、『Will』5(1)、1986年1月、<特集>千利休 —マルチ型補佐役。
- <研究11>村井康彦「日常の中に非日常を極める」、『Will』5(1)、1986年1月、<特集>千利休 —マルチ型補佐役。
- <研究12>小松茂美『利休の死』中央公論社、1988年。
- <研究13>会田雄次・山崎正和対談「利休が目指し、挫折したもの」、『プレジデント』27(9)、1989年9月、<特集>千利休。
- <研究14>米原正義『天下一名人 千利休』淡交社、1993年。
- <研究15>熊倉功夫「米原正義著『天下一名人 千利休』」、『国史學』152、1994年3月。
- <研究16>佐賀郁朗(石田三成研究家)「千利休切腹事件 —解明された噂の三成密謀事件—」、『歴史と旅』26(6)、1999年4月。
- <研究17>村井康彦「千利休 —その人と芸術」、『講座：人権ゆかりの地を訪ねて(講演録)』、世界人権問題研究センター編、2003年。
- <研究18>村井康彦『千利休』講談社、2004年。
- <研究19>児島孝『数寄の革命 —利休と織部の死—』思文閣出版、2006年。

2. 先行研究における切腹原因説分類

前記先行研究の切腹原因説について分類し、原因説毎の先行研究およびその掲載頁を列記すると次のとおりとなる。

- A. 利休の秀吉毒殺陰謀加担との讒言説……<研究1 (95～96頁)・2 (160頁)>
- B. 利休の精神的キリシタン説……<研究2 (141～151頁)>
- C. 秀吉の利休娘側室要求への拒否説……<研究2 (156～159頁)・7 (59～68頁)・9 (111～112頁)・12 (281頁)>
- D. 秀吉の自制力の減退説およびそれに伴う異常行動による利休の秀吉への訣別説……<研究10 (29頁)・16 (70～71頁)>
- E. 利休の不遜・僭上による自業自得説……<研究3 (6～8頁)・4 (276頁)・5 (343～345頁)・8 (300～303頁)・10 (31～32頁)>
- F. 大徳寺三門楼上木像安置説
 - a. 表向き理由として……<研究4 (276・286頁)・7 (59～68頁)・9 (111頁)・12 (281～284頁)>
 - b. 直接原因として……<研究8 (300～303頁)・14 (270～272頁)・15 (97～98頁)>
- G. 茶道具鑑定・売買不正行為説
 - a. 表向き理由として……<研究4 (276～287頁)・7 (59～68頁)・9 (111頁)・12 (281～284頁)>
 - b. 直接原因として……<研究8 (300～303頁)>
- H. 秀吉の利休所持名物茶器所望に対する拒否説……<研究9 (112頁)・12 (281頁)>
- I. 封建的身分秩序確立を急ぐ豊臣政権内の石田三成を中心とする官僚派による側近政治家利休への反感・否定説……<研究3 (6～8頁)・4 (276頁)・17 (85～86頁)>
- J. 豊臣政権内部の東国政策をめぐる権力闘争犠牲説
 - a. 東国政策をめぐる硬軟両派の権力闘争犠牲説……<研究6 (196～204頁)・11 (46頁)>
 - b. 利休の家康・伊達への異常接近との石田三成らによる讒言説……<研究9 (112～113頁)・12 (282～284頁)>

- K. その他豊臣政権内部の派閥闘争犠牲説
 - a. 利休所属の北政所系（北政所系・淀君系の二大閥閥のうち）の秀長の死による弱体化説……<研究7（60～61頁）>
 - b. 石田三成派による政治的謀殺説……<研究18（282～284頁）>
- L. 秀吉の朝鮮出兵に関する利休の口禍説・批判メンバー説・反対説
 - a. 利休の口禍説……<研究7（59～68頁）>
 - b. 利休批判メンバー説……<研究17（83～84頁）>
 - c. 利休の堺商人としての反対説……<研究13（59頁）>
- M. 征服欲の権化である権力者秀吉と芸術家利休の自負心の対決説……<研究3（9～12頁）・4（299～308頁）・14（270～272頁）・15（97～98頁）・19（179～183頁）>
- N. 秀吉および世間の芸術近代化潮流に対する利休の中世芸術思想の対立説……<研究3（12～15頁）・4（308～323頁）・18（281～282頁）>
- O. 秀吉と利休の茶湯理念対立説……<研究13（57頁）・16（71～72頁）>

第2節 千利休切腹の原因に関する諸説についての批判的検討

1. 切腹原因に関する基本的な視点

前節では切腹原因に関する先行研究の諸説についてみてきた。そこで本節においては、これら諸説について一旦は個別に批判的検討を加えたものの、紙幅の関係でやむをえず割愛し、本稿では総括的な批判的検討の記述にとどめることとする。そしてそのためにはまずその前提として、筆者の利休切腹の原因に関する基本的な視点について、あらかじめ示しておくことが必要であると考え。つまりその骨子としては、前記原因説I・J・Kのいずれかは別として、利休は石田三成を中心とするメンバーにより、絶大なる庇護者秀長の死を絶好の機会として、抹殺されたと考えるものである。そのやり方は、天正19年閏正月11日から翌月2月3日までの、秀吉の尾張鷹野下向留守中に、密かに練られた陰謀により、大徳寺三門楼上木像安置という不敬と、茶道具鑑定・売買不正の売僧^{まいす}行為という、表向き口実により、切腹させたというものである。ただしこの二つの口実だけでは、木像安置は1年2ヶ月以

上昔の、いわば古証文を突きつけての処分になることや、もう一つの売僧行為は根拠としては薄弱であるところから、秀吉の決断は得られない。そこで彼らが考えた理由とは、当時の秀吉に対して最も説得力のある理由、つまり、朝鮮出兵に関して利休に不審の動きがあるという、捏造された偽情報を伝えることであった。以上、切腹原因の真相に関し一部先走って提示したことになるが、それはこの視点を明示したうえで、先行研究の批判的検討を述べた方が、より明確になると考えるからである。

なおここで、次の点についてあらかじめ明確にしておきたい。それは、筆者の利休切腹の原因に関する立論は、芸術論ではなく政治論としての視点に立脚しているということである。したがって、芸術論的観点からの研究は行っておらず、ここでこれらの説について論ずることはできない。ついでながら筆者が、政治論として本稿に取り組んでいる所以について簡単に触れておくと、秀吉の茶は、表向きの茶としてはまさに、「御茶湯御政道」のための茶湯そのものであり、利休はそのための後見役であることが、秀吉に期待された最大の役割であったからである。利休はその秀吉の期待に十二分に応え、一心同体となってこの政策を推進・展開し、天下一茶湯名人の名を恣にするのであったのであり、秀吉もまた、天下人になる過程のさまざまな重大局面において、あるいは天下人としての文化的ステータスとして、利休の茶湯を最大限活用したからである。別稿にて論証の予定であるが、切腹の状況にみる特異性が、正にその賜死が政治的理由によるものであり、また筆者の利休切腹原因究明の基本的スタンスの妥当性を示す、何よりの証左であろう。

したがって、利休の茶湯を茶道研究の立場から論ずる場合、芸術論的視点は必須であろうが、少なくとも切腹原因に関して秀吉と利休の関係についてみる時、それを中心に論ずることは、上記の理由で本旨を逸脱することになるのではないかと考えるものである。何故なら、秀吉が利休を殺してしまった後で、そのことを後悔したという記述や、利休の茶を懐かしむといった記録が数多く残っているからである。

2. 諸説の総括的な批判的検討

そこでこうした観点で先行研究諸説をみると、次のことが言える。まずAおよびBは論外であるが、M・N・Oについては、前述のとおり視点を異にするのでここで論ずることはできない。次にHは、それが原因となったのではなく、処分の前段として名物茶器が召し上げられたと考えるべきであり、後先が逆である。またCについては、前章でも述べたとおり、公示罪状に対する疑念から、その反動として江戸時代から急増したと考えられるところから、これが直接の原因になったとするには、根拠が薄弱である。そしてDについては、ある程度言えるのではないか。つまり秀吉は、功成り名遂げてからというもの、秀頼の将来ならびに家康のことなどの他は、まさに恐いもの無しの心境だったのではないか。そしてその増長と老いのために、自制力が減退しつつあったと考えられるが、そのことがある程度わかっているが、利休はその専制者に対する卑屈な対応を、潔しとしないところがあったのかもしれない、と思われる節が感じられるところがある。このことは、Eについて言われるところとなって出ているのかも知れない。それが利休を邪魔であると考える者たちにとっては、「利休抹殺すべし」という方針決定の動因になったと考えられるのではないか。

さて、ここからが本項の要点である。まずFおよびGであるが、これは先行研究の何人かが論じているように、筆者もこの二つの原因説については、直接原因ではなく、表向き理由であったと考えるものである。そしてそれが単に他の理由より、すぐれて世間の人びとを納得させやすい「恰好の口実」であったということの他に、木像安置不敬罪を執拗に顕示した裏には、もう一つ別の目的があったと考えられるのである。その根拠については別稿で詳述する予定でありここでは省くが、そこには「恰好の口実」を設けて、利休を抹殺するという当初の目的と、それを秀吉に納得させるための理由が隠されていたということではないか。ではそこまでして利休を処断する理由は何かということになるが、その真相に関すると思われるのが、I・J・Kなどの原因であり、この点については筆者もそれらの先行研究と軌を一にすると

ころがある。しかし、だからと言って無条件に、これらの先行研究に賛同することはできないのである。

それはこれらの先行研究のいずれも、根拠が薄弱であり説得力に欠けるといことである。その理由は何かといえば、公示罪状とされたFを真因とするには問題点つまり瑕疵があり、またGを絶対的原因とするには説得力に欠けるとの故をもって、これらが表向き理由であり、真因はI・J・Kに違いないといったような、論理展開のように思われることである。つまり、豊臣政権時代における、天下一茶湯名人千利休の切腹という、一事件の真相を究明しようとするに際して、最も肝要な事件の状況に関する記録の厳密な調査・分析・検討という、基本的手順を踏んでいないということである。このように言ってしまうと、学術的でないとか、世俗的発想であるとの冷笑を買うかもしれないが、利休切腹という権力者による一つの殺人事件として捉えた場合、その原因・理由を究明するには、まずその状況証拠を丹念に分析・検討することから始めるのが、常道ではないだろうか。いささか世俗的例示で恐縮であるが、同じ殺人事件でも、その現場状況を精査することが、過失致死なのか、故殺なのか、あるいは謀殺なのかを断定するための、大きな判断材料となるはずだからである。

さらに一つの重要な点は、江戸時代の切腹原因に関する記述史料にFやGについては、讒言によるという記述があるところから、それ以外の原因として挙げられたとも思われるからである。つまり、切腹原因に関する多くの関係史料の記述からは、公示罪状に対する疑義が読み取れるにもかかわらず、この点についての究明がなされていないと思われるからである。

こうした観点に立脚して筆者は、まず切腹状況を丹念に分析した結果、この切腹事件には多くの特異事象があることが判明し、それを千利休切腹状況における特異性として捉え、その検討を踏まえ、さらに公示罪状の欺瞞性解明を経たうえで、切腹原因の真相を究明しようとするものである。しかるに、これらの点に注目した先行研究は、残念ながら見当たらないのであり、その重要なステップを抜いての真相究明は、結論的には、ほぼ同じ方向のものが

あったとしても、論理展開にどうしても無理や飛躍が生じているところから、それらに全面的に賛同することはできない、ということをごここで強調しておきたい。

V 結び

茶人千利休は、天下一茶湯名人として、また側近情報参謀的存在として、主君豊臣秀吉の天下取りを側面から支えていた。ところが、秀吉は名実ともに天下人に登りつめるや、その利休を御用済みの無用の長物でもあるかのごとく、切腹を命じ、いとも簡単に斬り捨ててしまうのである。

この利休の秀吉による賜死の理由としては、切腹3日前に、処断当局が高札により公示した、次の二点がその主なものであった。つまりその一つは、利休が私財を投じて大改築した大徳寺三門の楼上に、利休自身の木像を安置したという不敬罪であり、他の一つは、茶湯道具の目利き鑑定・売買をめぐる不正行為（^{まいたす}売僧行為）罪というものであった。しかしながら、この切腹の原因については、これらの両公示罪状そのものに対する疑義や、その他の不審点に関し、古来数多の歴史家・茶湯研究者などによって論じられ、また仮説がたてられてきているものの、未だにその定まるところをみないという現状にある。そこで本稿においては、この利休切腹の真相解明を目指して、次の点について新たな角度から史料を調査・分析し、考察したものである。

まず、利休切腹の状況に関して、切腹当時から江戸時代に至る多数の関係史料の、調査・分析・検討を行った。その結果、この切腹の状況においては、多くの特異事象がみられ、これらを「利休切腹の状況における特異性項目」として、抽出することができた。こうした特異性は、いわゆる一般的な切腹においては、他にその例を見ないものであるところから、これらの究明が、切腹の真相に迫る重要な鍵を握っていると思われるものである。そこで先行研究においては、こうした点に関して、どのように検討されているかを確認したところ、本格的に究明を試みたものはないことが判明した。つまり、豊臣政権時代における、千利休切腹という、権力者による公的殺人とも言える

事件の真相解明に際して、最も肝要な、事件の状況に関する記録の厳密な調査・分析という、基本的手順を踏んでいないということである。

そして次に、切腹の原因に関する記録に関しても、同じ期間における関係史料について、調査・分析を加えた結果、やはり多くの特徴的な記述がみられた。

以上のとおり、千利休の切腹には、その状況における多くの特異性や、その原因の記録にみる特徴的記述を伴っていることが判明した。そこでこれらの検証・究明を通じて、切腹の真相解明に取り組む必要があるが、その点については、別稿に譲ることとしたい。

注

- 1) 時慶記研究会編『時慶記』本願寺出版社、2001年、102頁。
- 2) 竹内理三編『増補続史料大成』第九巻、臨川書店、1967年、331頁。(ただし、原典は毛筆書きである)
- 3) 東京大学史料編纂所データベースの画像より筆者解説。(ただし、原典は毛筆書きである)
- 4) 辻善之助編『多聞院日記』第四巻、角川書店、1967年、287～288頁。
- 5) 東京大学史料編纂所『大日本古文書』家わけ第三ノ二、東京大学出版会、1966年、80～81頁。
- 6) 竹内秀雄校訂『北野社家日記』第四、続群書類従完成会、1973年、283頁。
- 7) 千宗左・千宗室・千宗守監修『利休大事典』淡交社、1989年、654・656頁。
- 8) 同上注7の『利休大事典』、662頁。
- 9) 松山吟松庵校訂『茶道四祖伝書』思文閣、1974年、21～22頁。
- 10) 同上注9の『茶道四祖伝書』、242頁。
- 11) 前掲注7の『利休大事典』、667頁。
- 12) 吉田蒼生雄訳『武功夜話』第三巻、新人物往来社、1987年、184頁。
- 13) 菊池真一編『武辺咄聞書』和泉書院、1990年、59頁。
- 14) 石田晴男他編『綿考輯録』第二巻、忠興公(上)、出水神社、1988年、98頁。
- 15) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第三期19、吉川弘文館、1978年、376～377頁。
- 16) 成島司直改撰『改正三河後風土記』下巻、金松堂、明治19年(1886)、1224・1228

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

頁。

- 17) 千宗室代表編纂『茶道古典全集』第四卷，淡交新社，1956年，309頁。
- 18) 前掲注7の『利休大事典』，654・657頁。
- 19) 同上注7の『利休大事典』，661～662頁。
- 20) 千宗室代表編纂『茶道古典全集』第十二卷補遺二，淡交新社，1962年，41頁。
- 21) 前掲注9の『茶道四祖伝書』，21頁。
- 22) 同上注9の『茶道四祖伝書』，205～206頁。
- 23) 前掲注7の『利休大事典』，666～667頁。
- 24) 前掲注12の『武功夜話』第三卷，176～177・184頁。
- 25) 吉田蒼生雄訳『武功夜話』補卷，新人物往来社，1988年，276頁。
- 26) 前掲注7の『利休大事典』，659頁。
- 27) 前掲注13の『武辺咄聞書』，58～59頁。
- 28) 前掲注14の『綿考輯録』第二卷，忠興公（上），100～101頁。
- 29) 裏千家今日庵文庫蔵書複製『茶窓閑話』同文庫，1981年，中14頁。（ただし，原典は毛筆書きである）
- 30) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期20，吉川弘文館，1974年，324頁。
- 31) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第一期21，吉川弘文館，1976年，275頁。
- 32) 前掲注15の『日本随筆大成』第三期19，375～376頁。
- 33) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期15，吉川弘文館，1974年，323頁。
- 34) 前掲注16の『改正三河後風土記』下卷，1223～1224頁。
- 35) 鈴木省三編『仙台叢書仙台金石志』下，仙台叢書刊行会，1927年，188頁。
- 36) 前掲注6の『北野社家日記』第四，278～280頁。

A Critical Review of the Causes of Sen no Rikyu's Ritual Suicide

Sachio FUKUI

Sen no Rikyu (1522-1591) was one of the well-known founders of the traditional tea ceremony (*Sado*) in medieval Japan. Toyotomi Hideyoshi (1537-1598) ordered Sen no Rikyu to commit ritual suicide (*seppuku*) in February, *Tensho 19* (1591), because he was the general who won the final victory in the military conflicts among the *Samurai* and unified medieval Japan.

Various opinions have been offered concerning the reasons for Sen no Rikyu's death. However, no firm hypothesis has yet been reached. The author has critically reviewed a large number of historical materials and theories regarding this episode to try to elucidate the truth.

The official announcement of the Toyotomi Hideyoshi regime gave as the principal reasons for Sen no Rikyu's punishment, was his *lése majesty* toward both General Toyotomi himself and the emperor, together with his unreasonable valuation and trade in tea-ceremony items. Sen's *lése majesty* charge also included his construction of an overly splendid gate to the Daitokuji Temple in Kyoto, and his order to place a wooden sculpture of himself on the gate.

However, the author has managed to locate many descriptions from sources about the miscellaneous circumstances of his death that differ quite considerably from information found in other cases of ritual suicides.

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察

Using these idiosyncratic materials, the author seeks to further elucidate the truth about the causes of Sen no Rikyu's *seppuku*.

U-21日本代表サッカーチームにおける トレーニング方法と得点経過について

～第5回東アジア競技大会(2009/香港)～

松 本 直 也

キーワード：U-21日本代表，ゲーム分析，トレーニング方法，戦術，
攻守の切り替え

I 緒言

2010年6月に行われたサッカーワールドカップ南アフリカ大会において4大会連続出場となった日本代表は、グループリーグを突破しベスト16に駒を進めた。これは、2002年の日韓大会と同じく日本代表にとって最高の成績である。日本サッカー協会は2005年宣言¹⁾として2015年までに世界ランキングトップ10入りを掲げており、日本代表チームが世界で結果を残すためには、オリンピック代表チームとなる23歳以下の日本代表チームを強化しなければ、継続的に日本代表チームを強化することは困難であるといえる²⁾。しかし、過去のオリンピック代表チーム及びU-20代表チームの成績は表1のようになり、決して世界大会で成績を残している訳ではない。この年代の強化に関して、日本サッカー協会は、実戦経験の不足(23歳以下のJリーグ選手の65.6%が出場機会無し)、トレーニング環境の甘さ等、多くの問題点があることを指摘しており³⁾、2005年宣言に向けて、必要不可欠な強化ポイントであるといえる。

今回行われた第5回東アジア競技大会(2009/香港)には、2012年ロンドンオリンピック大会日本代表候補となるU-21日本代表チームが参加した。著者

はこの代表チームにテクニカルスタッフとして参加し、相手チームのスカウティング、日本チームのスカウティング、そして実際のトレーニングを行う機会を得た。代表チームレベルになると、非公式のトレーニングを除きトレーニング方法は、日本サッカー協会から、またはメディア等からその詳細な内容を報告され^{4) 5)}、あらゆるレベルの指導者の参考資料として広く用いられている。また、実際の試合で何が行われ、どのような結果を得たかという客観的なデータは技術的側面、戦術的側面、そして体力的側面を問わず、ゲーム分析という方法で数多く報告されている^{6) 7) 8)}。しかしながら、瀧井⁹⁾は戦術的側面に言及し、「とりわけ高い水準にある競技スポーツにおいては、自チームの戦術は企業秘密であり、現役のプロコーチが自チームの戦術に関して具体的に解説するようなことはあり得ないであろう。」と述べており、攻撃面、守備面に関わらず代表チームのトレーニングについて、それが何を目的として行われ、実際の試合でどのような結果に至ったのかという分析は、大学チームレベルでは、吉村¹⁰⁾、Woo Young Leeら¹¹⁾の報告があるが、代表チームレベルにおいてトレーニングと試合結果が結びついた研究はあまり存在しない。

今回の日本代表チームは、「攻守の切り替えの早さ」をチームコンセプトとして掲げた。この「この攻守の切り替えの早さ」は、2006年のFIFAワールドカップドイツ大会、2008年のヨーロッパ選手権及びFIFAクラブワールドカップ日本大会といった近年の代表レベル及びクラブレベルの世界大会においても日本サッカー協会の分析からその重要性が報告されている^{8) 12) 13)}。すなわち、相手ボールを奪取した後、相手守備ブロックが形成される前に攻撃を仕掛ける、守備から攻撃への切り替えの早さ。自チームがボールを失った瞬間にボールを奪い返す攻撃から守備への切り替えの早さ。この両面をポジションにとらわれずチーム全体で行うことが、現代サッカーにおける戦術的側面の一つとして重要視されているのである。今回の代表チームにおいてもこの「攻守の切り替えの早さ」をチームコンセプトとし、トレーニングを行い、大会に臨んだ。Gerhard Bauer¹⁴⁾は「コーチは、具体的なトレーニング目標を

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

決め、構想の計画を練る前に、試合では何が選手とチームに要求されているのかを分析（要求水準）し、また現在の選手の成績（現状）はどの程度なのかをチェックしなければならない」と述べている。また、小野¹⁵⁾は理想とするゲームから逆算をしてトレーニングを組み立てる**M-T-M Method**が効果的なトレーニングを作り出すとしている。(図1) 監督、コーチが描くチームコンセプトを実際の試合で行うためには、トレーニングそのものにそのコンセプトを反映させなければならない。この点に関して、松本¹⁶⁾らはプレーヤーに獲得させたい技術、戦術があるならば、適切な場を設定したコーチングを行う必要があるとして、トレーニング課題と場の設定との関係を十分把握しなければ、効果的な指導は期待できないと述べている。代表チームのような限られた期間しかトレーニングを行うことができない場合、チームコンセプトを明確にし、そのコンセプトをどうトレーニングに反映させるかという点において、トレーニングの場の設定方法は極めて重要であるといえる。また、VTR撮影等によりチームコンセプトに沿った客観的なゲーム分析を行うことで適切なフィードバックが可能となり、次の試合に向けたトレーニングプランを組み立て、より具体的なゲームプランを構築することが可能となるのである。

そこで、本研究では、2012年ロンドンオリンピック大会日本代表候補となるU-21日本代表が参加した第5回東アジア競技大会（2009/香港）における、日本代表チームのチームコンセプトである攻守の切り替えの早さに着目し、そのトレーニング方法と実際のゲーム分析から得点経過について分析、検討することによって、この年代の代表チームにおけるチーム戦術とトレーニング方法との関係についての一資料を得ることを目的とする。

	U-23オリンピック代表	U-20 日本代表
1992年	バルセロナ大会* アジア予選敗退	
1993年		オーストラリア大会アジア予選敗退
1995年		カタール大会ベスト8
1996年	アトランタ大会GL敗退	
1997年		マレーシア大会ベスト8
1999年		ナイジェリア大会準優勝
2000年	シドニー大会ベスト8	
2001年		アルゼンチン大会GL敗退
2003年		UAE大会 ベスト8
2004年	アテネ大会GL敗退	
2005年		オランダ大会ベスト16
2007年		カナダ大会ベスト16
2008年	北京大会GL敗退	
2009年		エジプト大会アジア予選敗退

*この大会より出場資格が23歳以下となる

表1 Jリーグ開幕以降のU-23、U-20世界大会の戦績

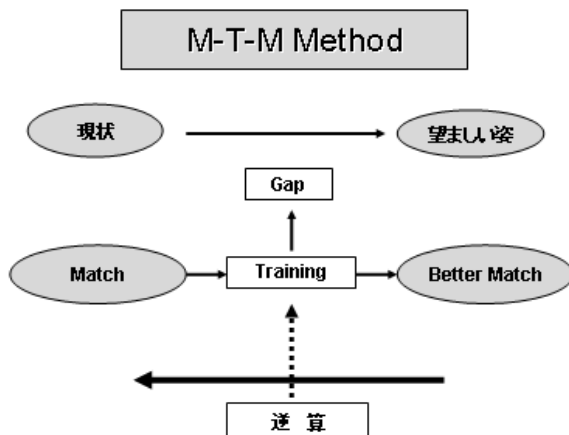


図1 M-T-M Method

(出典；クリエイティブサッカー・コーチング (小野, 1998))

Ⅱ 大会スケジュールとチームの強化

東アジア競技大会は、東アジア地域のスポーツ交流を盛んにし競技力のレベルアップを図ること、また、この地域の結束を強めるとともに、オリンピック・ムーブメントの発展に貢献することを目的に設立された国際総合競技である¹⁷⁾。

著者は2005年に中華人民共和国（以下中国）特別行政区のマカオで開催された第4回大会にも、サッカー日本代表チームコーチとして参加し、銅メダルを獲得している¹⁸⁾。第5回東アジア競技大会は、12月5日から13日までの9日間、中国特別行政区の香港で開催された。本大会には、22競技262種目に9つの国と地域から選手2091名、役員896名、合わせて2987名の参加があった。日本代表選手団は22競技216種目に選手378名、役員166名、過去最大規模の総勢544名で編成され、大会に臨んだ¹⁹⁾。

資料1のようにサッカー競技に関しては、全6チームが参加し、予選グループA（日本、マカオ、朝鮮民主主義人民共和国（以下北朝鮮））、グループB（韓国、中国、香港）に分かれてリーグ戦を行い、上位2チームが準決勝に進出する方式であった。日本代表チームは決勝で香港チームにPK戦の末敗れ、準優勝であった。前回のマカオ大会は全日本大学選抜チームが中心となり大会に臨んだが、今回はU-21年代のプロ選手が中心の代表チームであった。今回の日本代表チームはU-20ワールドカップのアジア予選を勝ち抜けなかった世代ではあるが、次回ロンドンオリンピックの中心世代となるチームであり、ほとんどがJリーグ所属選手である。（選手23名中、Jリーグ所属17名、大学連盟所属6名）この大会が行われる12月初旬は、Jリーグは最終節の時期にあたり、各地域の大学リーグもリーグ戦が終了した直後であり、表2のように大会前のトレーニング期間は極めて短いものとなった。

11月29日(日)	集合/ミーティング
11月30日(月)	日本出国/香港到着 19:00 トレーニング
12月1日(火)	16:00 ミーティング 18:00 トレーニング
12月2日(水)	16:20 ミーティング 19:00 予選グループ vs北朝鮮
12月3日(木)	15:00 トレーニング 19:00 ミーティング
12月4日(金)	9:00/15:00 トレーニング(2部練習)
12月5日(土)	9:00 トレーニング 16:45 ミーティング
12月6日(日)	18:00 トレーニング
12月7日(月)	16:20 ミーティング 19:00 予選グループ vsマカオ
12月8日(火)	10:30 トレーニング 12:30 ミーティング
12月9日(水)	16:00 ミーティング 17:30 公式トレーニング
12月10日(木)	14:40 ミーティング 17:00 準決勝 vs韓国
12月11日(金)	15:00 トレーニング
12月12日(土)	14:40 ミーティング 17:00 決勝 vs香港
12月13日(日)	香港出国/日本帰国 解散

表2 サッカー日本代表チームスケジュール

Ⅲ チームコンセプトとトレーニング方法

日本代表チームとしての目標はメダル獲得であり、優勝が最大の目標であった。トレーニング期間が短い中、勝つために何をしなければならないか、チャレンジする気持ちを大切に、強化を図った²⁰⁾。具体的なチームコンセプトを以下に述べる。

<チームコンセプト>

・攻守の切り替えを早くする

攻撃 **Fast Break** ボールを奪ってからの縦へ早さ
広がりのある攻撃

守備 **Deny Fast Break** 相手に速攻させない
ボールを失ってから前線からの守備

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

ブロックの形成 ゴール前での守備

<基本システム>

- ・ 1-4-2-3-1 システム→1-4-4-2 への変化
- ・ 4バック&ダブルボランチを基本とする

前線の3人（1トップ+両サイドのMF）は、まず中央への縦パスのパスコースを消し、外へと追い出す

<トレーニングコンセプト>

- ・ ボール奪取からの縦への早さのある攻撃を意識させる
- ・ 前方への突破が困難な場合、ピッチを広く使い幅のある攻撃を意識する
- ・ 前線からのボール奪取
- ・ 3ライン（FW, MF, DF）をコンパクトに保ち、連動してボールを奪う

<トレーニング内容>

表3及び図2-a, b, c, dには代表的なトレーニング方法を示した。試合翌日の負荷の低いトレーニングも含めて、全てのトレーニング時間は60分から100分で行われた。図2-aは、攻守の切り替えの早さのベースとなるトレーニングである。限定された人数とスペースにおいて、切り替えの意識の高さと、攻撃面ではボールをコントロールし、パスをつなぐ技術が必要とされ、守備面では数的不利な状況からボールを奪うアプローチスピードと連動性が必要となる。このようなトレーニングは主にウォーミングアップ後に行われることが多く、基本の確認と意識付けの意味合いも含まれる。図2-bは、主に守備から攻撃への切り替えの早さを意識したトレーニングである。ゴールを奪う要素を取り入れ、ボール奪取から縦方向のゴールへ向かうパスを選択し、シュートを打つという流れを作っている。図2-cは、なるべく相手ゴールに近い位置でボールを奪うための連動性、同時性を養うトレーニングであり、攻撃面では、ボール奪取からのダイレクトプレー、コンパクトな状況を回避するためにピッチを幅広く使い、逆サイドへ展開するサイドチェンジの有効性と攻撃のスピードの変化が求められるトレーニングである。図2-dは、縦の長さを短く設定した中での11vs11のトレーニングである。攻撃面、守備面ともに

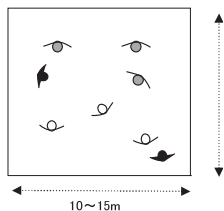
切り替えの早さが要求され、守備面におけるチーム全体での連動性・同時性の確認及び攻撃面におけるボール奪取からの縦への速さとピッチを広く使った幅のある攻撃が求められる。

トレーニング コンセプト	指導上の留意点	代表的な トレーニング
①攻守の切り 替えの早さ	守備から攻撃へ ①ボールを奪ったらダイレクトプレーの意識を持つ ②ボールポジションから幅のある攻撃 攻撃から守備へ ①ボールを失ったらすぐにボールを奪いに行く ②1stDFの決定と連動した守備	図2-a 図2-b 図2-c 図2-d
②コンパクト ディフェン スから攻撃 へ	前線からボールを奪いに行く（ハイプレッシャー） 1stDFの決定と連動した守備 ボール奪取から攻撃へ、攻撃の優先順位 状況判断、ダイレクトプレーと広がりのある攻撃	図2-a 図2-b 図2-c 図2-d
③ブロックの 形成と広が りのある攻 撃	3ラインをコンパクトに保つ 前線からのボール奪取とシュートまで サイドチェンジからの広がりのある攻撃	図2-c 図2-d

表3 トレーニングの方法と目的

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

図 2-a 5 vs 3 (2 freeman)



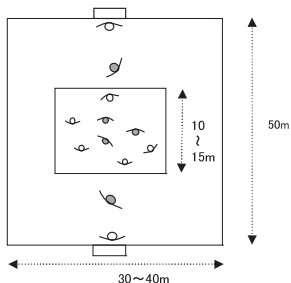
【Organization】

グリッド内でのボールポゼッション
2人のフリーマンは常にボール保持者の味方

【Procedure】

ボールを奪った3人はフリーマンを使いポゼッション
ボールを失った3人はすぐにディフェンスに移る

図 2-b 5 vs 3 + 2 + GK



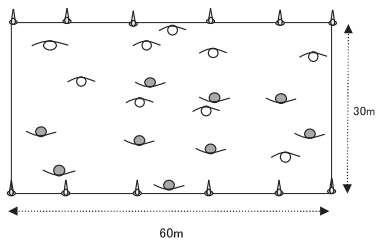
【Organization】

グリッド内でボールポゼッション→5 vs 3

【Procedure】

コーチから5 vs 3のグリッド内へボール配給
ボールを奪ったらグリッド外の味方にフィード
ゴールを奪う

図 2-c 8 vs 8 + GK (3 ゴールゲーム)



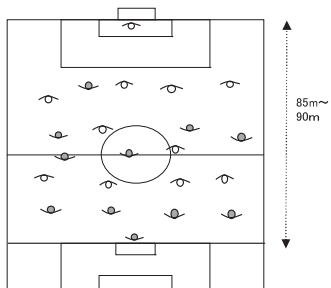
【Organization】

中央のゴールはシュート
サイドゴールはドリブルかパス通過
GKもビルドアップに参加

【Procedure】

1stDFを決定し、運動した守備からボール奪取
近いゴールを目指す、突破できなければ逆サイドへ
展開しゴールを奪う

図 2-d 11vs11 (boxカット)



【Organization】

縦を短くしての11vs11のトレーニング
前線からのボール奪取からシュートへ

【Procedure】

ボールは全てコーチから配給
なるべく相手ゴールに近い位置でボールを奪取する
奪ってからの攻撃の早さ

IV ゲーム分析

第5回東アジア競技大会（2009/香港）における，日本代表チームの全4試合の大会公式DVD（ワイドアングルで撮影）をゲーム分析ソフトであるSports Code GAME BREAKERを使用し，チームコンセプトである攻守の切り替えの早さを検証するために図3のように縦方向に3分割された1/370のサッカーコート図を基に，日本代表チームの①全てのボール奪取位置，②シュートに至ったボール奪取位置，③ボール奪取からシュートまでの過程（パスの本数及び時間）を算出し，分析を行った。

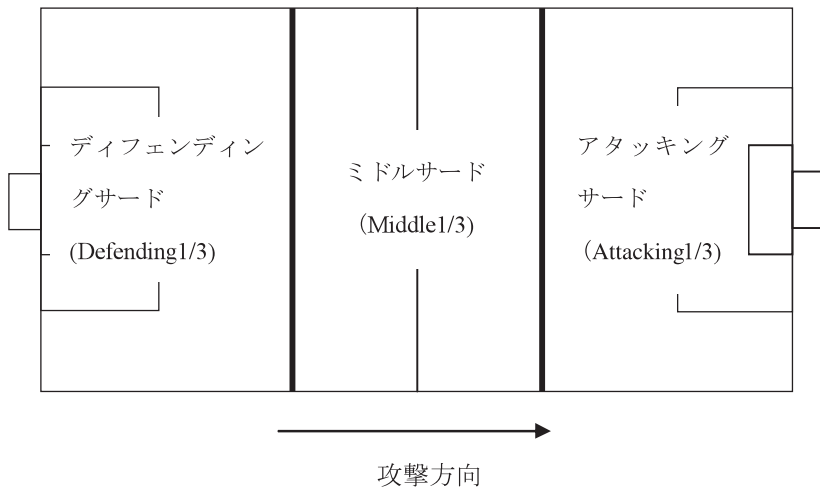


図3 ピッチ3分割 (Thirds of the pitch)
(出典；強化指導指針2000年度版ポスト2002 (財)日本サッカー協会)

V 結果及び考察

1 ボール奪取位置について

アタッキングサードでのボール奪取率は，初戦の北朝鮮戦が4%でマカオ

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

戦が28%、準決勝の韓国戦が9%、決勝の香港戦が6%であった。ミドルサードでのボール奪取率は初戦の北朝鮮戦が35%であったが、マカオ戦が53%、準決勝の韓国戦が36%、決勝の香港戦が43%となり増加している。ピッチ全体の3分の2であるミドルサードおよびアタッキングサードでのボール奪取率は初戦の北朝鮮戦が39%（69回）であったが、マカオ戦では81%（120回）、準決勝の韓国戦では45%（61回）、決勝の香港との試合では49%（70回）に増加している。（図3・図4）マカオ戦に関しては、個人及びチームレベルの差が大きい結果だと考えられるが、これは、個人戦術としてボールを失ってから攻撃から守備への切り替えを早くするトレーニング（図2-a）の成果と、DFライン、MFライン、FWラインという3ラインの距離をある一定に保ち、ブロックを形成し組織的に前線からプレッシャーをかけ、できるだけ高い位置でボールを奪おうとするチーム戦術のトレーニング（図2-c, d）の成果であると推察できる。

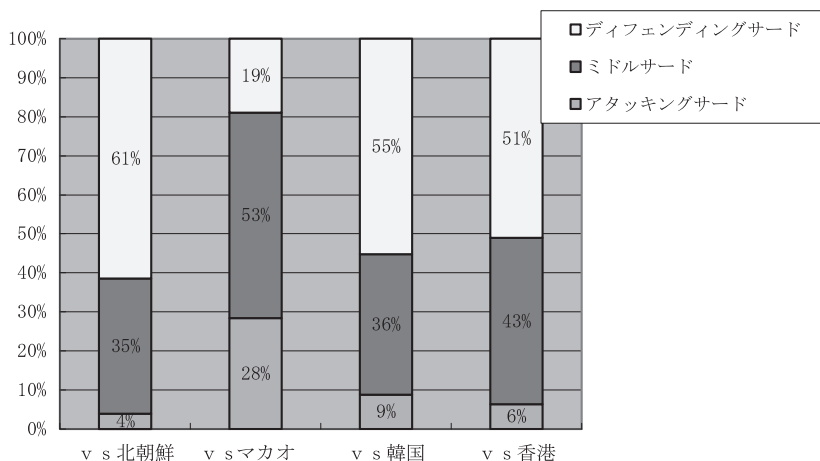


図4 日本代表ボール奪取位置の比較

2 シュートに至ったボール奪取位置について

大会全体を通してアタッキングサードでのボール奪取からシュートに至っ

た割合は23%であった。ミドルサードでのボール奪取からシュートに至った割合は3%であった。(図5) これは、ボールをできるだけ相手ゴールに近い位置で奪い(攻撃から守備へ)、シンプルにシュートに結びつける(守備から攻撃へ)という攻守の切り替えの早さをあらわしたものであり、アタッキングサードでボールを奪うことができれば、得点の機会は必然的に増えることをあらわしている。トレーニングとしては図2-b, c, dの成果として推察できる。また、図6は日本チームが香港戦においてアタッキングサードでの攻撃から守備への切り替えの早さを示したものである。右サイドから中央に楔を入れ攻撃を仕掛けるが、相手にインターセプトされてしまう。しかし、ボールを出したパサーがボールを失った瞬間に相手DFに対してアプローチをかけ、ボール奪取に成功する。後方でサポートに入った選手にパスを送り、アタッキングサードから攻撃を再開している。結果的には右サイドで奪い、中央からのワンツースでシュートまで至った事例である。(パス5本/時間10.2秒) 攻撃から守備への切り替えの意識の高さが伺え、図2-a, c, dのようなトレーニングの成果であると示唆される。

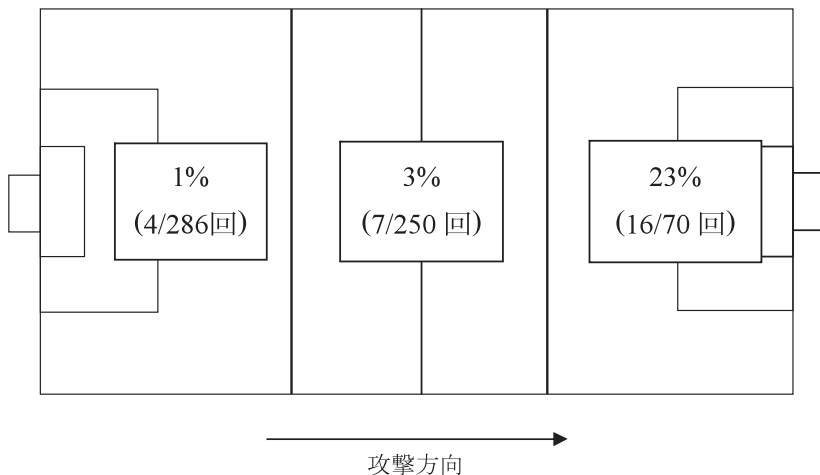


図5 シュートに至ったボール奪取位置

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

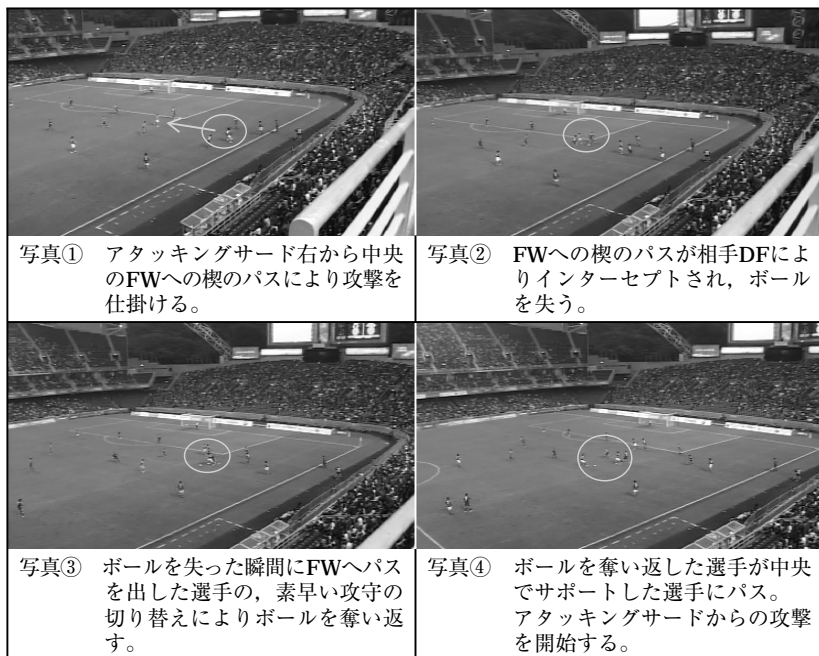


図6 日本vs香港；アタッキングサードでの攻撃から守備への切り替えの早さ
ボール奪取からシュートまでパス5本/時間10.2秒

3 ボール奪取からシュートに至るまで

1) ボール奪取からシュートに至るまでのパスの本数について

ボール奪取からシュートに至るまでのパスの本数は5本以内が86%であり、その内、3本以内にシュートに至った割合は75%であった。(図7) また、図8のように試合毎の分析によると初戦の北朝鮮戦では、ボール奪取からシュートに至るまで平均して10本のパスをつないでいるが、マカオ戦では平均約2本、韓国戦では平均5本、香港戦では平均約4本でシュートに至っており、相手チームによって差はあるものの試合と図2-bのようなトレーニングを重ねることで、守備から攻撃への切り替えの早さと少ないパスでゴールを奪う意識がチーム戦術として浸透してきていることが推察できる。また、図9は日

本チームが、マカオ戦においてディフェンディングサードでボールを奪取し、得点に至った事例である。相手CKからの展開であったため、ペナルティエリア内に10名の選手がポジションを取っていた。ペナルティエリア前でボール奪取に成功した選手が、前方にパスを出した後、非常に長い距離のフリーランニングを行い、クロスを上げ、結果的にはパス3本（時間16.4秒）でシュートに至っている。クロスボールに合わせ得点を決めた選手も長いフリーランニングを行っており、ディフェンディングサードで奪ったとしても、図2-bのようなトレーニングを行うことで、ボールを奪ったらず、縦方向のパスを選択しスピードをあげる意識と、守備から攻撃への切り替わりの際、前方のオープンスペースに対して積極的に飛び出していく意識の高さが伺える。

2) ボール奪取からシュートに至るまでの時間について

ボール奪取からシュートに至るまでの時間は10秒以内が67%であり、その内5秒以内が41%であった。(図10) また、図11のように試合毎の分析によると初戦の北朝鮮戦では、ボール奪取からシュートに至るまで平均して25.4秒かかっているが、マカオ戦では5.4秒、韓国戦では13.3秒、香港戦では、11.5秒でシュートに至っており、相手チームによって差はあるものの試合と図2-b, dのようなトレーニングを重ねることで、少ない時間でゴールを奪うという守備から攻撃への切り替えの早さがチーム戦術として浸透してきていることが推察できる。また、図12は日本チームが、北朝鮮戦においてミドルサードでボールを奪いパス2本、9.2秒でシュートに至った事例である。ミドルサードの低い位置であっても、前向きの姿勢でボールを奪うことができれば、守備から攻撃への切り替えを素早く行うことが可能となる。ボールを奪った1本目のパスを前方に出せるかどうか重要となるが、図2-bのようなトレーニングによって習慣化することが大切であると伺える。

U-21日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について

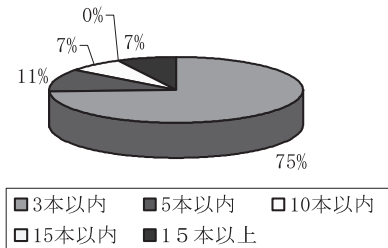


図7 日本代表ボール奪取からシュートまで
～パス本数（4試合合計）～

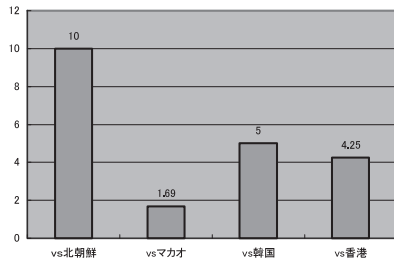


図8 日本代表ボール奪取からシュートまで
～パスの本数（試合毎の平均値）～

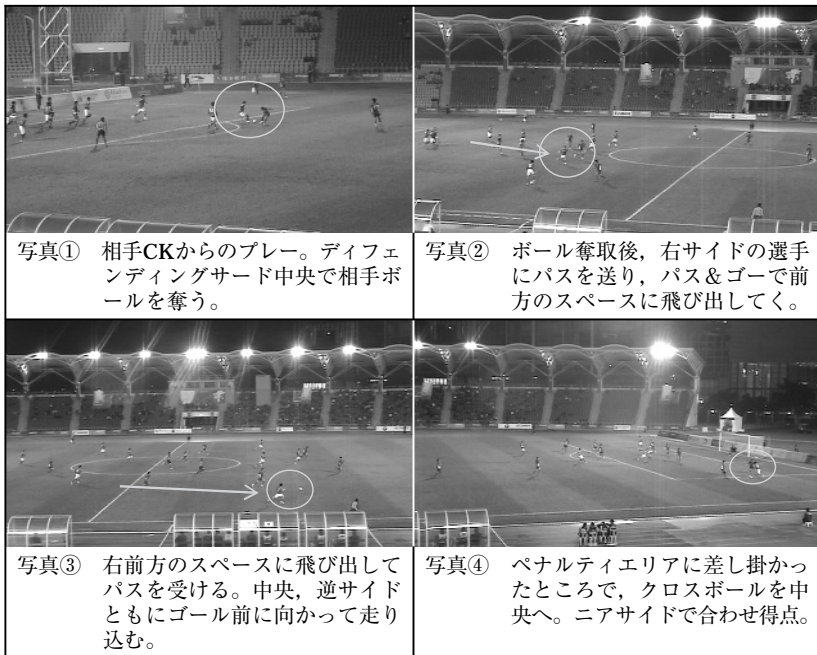


図9 日本vsマカオ；ディフェンディングサードでボール奪取から得点
パス3本/時間16.4秒

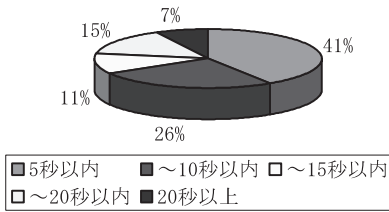


図10 日本代表ボール奪取からシュートまで
～時間（4試合合計）～

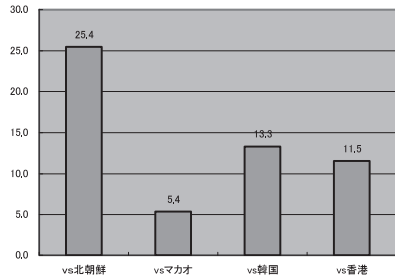


図11 日本代表ボール奪取からシュートまで
～時間（試合毎の平均値）～

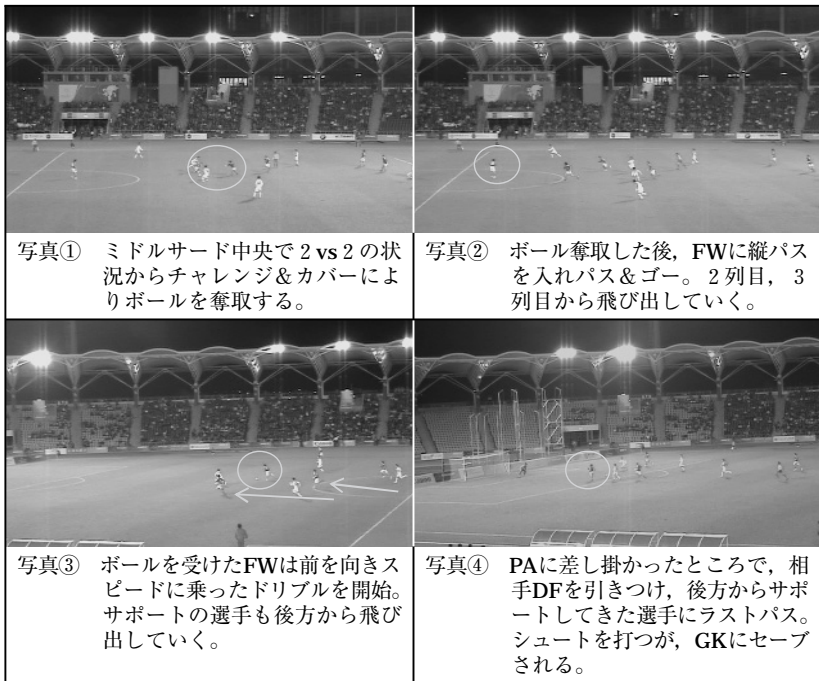


図12 日本vs北朝鮮；ミドルサードでボール奪取からシュートまで
パス2本/時間9.2秒

Ⅵ 結語

本研究では、第5回東アジア競技会に参加したU-21日本代表チームのチームコンセプトとトレーニングコンセプトを基にしたトレーニング方法及びゲーム分析から、現代サッカーにおける最も重要な戦術の一つであり、今チームのチーム戦術の基本となった「攻守の切り替えの早さ」に着目し、主にその得点経過について検証を行った。その結果、以下の傾向が示唆された。

1. 攻撃から守備への切り替えの早さについては、アタッキングサード及びミドルサードでのボール奪取が重要であると考えられるが、ボールを失った瞬間に前線の選手が守備の意識を高く持ちプレッシャーをかけ続けることがチームコンセプトとして浸透しており、たとえボールを失った選手が奪い返すことができなくてもディフェンスラインを下げることなく相手ゴールに近い位置でボールを奪い返していることが推察できる。得点の機会を増加させるという点でも、攻撃的な選手に守備の意識を植え付け、トレーニングすることは今後も必要不可欠な要素であるといえ、代表選手であっても例外ではないといえる。
2. 守備から攻撃への切り替えの早さについては、ピッチ上どの位置であれ、ボールを奪った瞬間にまず前方へのパスを選択することが重要である。前方へのパスを成功させるためには、パスだけでなくパスの受け手の動き出しも重要な要素となるため、トレーニングにおいて常に攻守の連続性を意識できる場を設定し、チーム戦術として狙いを明確にする必要があると考えられる。
3. 守備から攻撃への連続性という点では守備的な選手であっても、ボールスキルの高さ、適切な判断力が必要となってくる。代表選手であれば、ボールスキルはある一定のレベルに達しているであろうが、パスの優先順位に関して判断力を高めるトレーニングが必要であると推察できる。代表チームに関していえば、今回のように短期間のトレーニング期間で一

定の結果を求められる場合と、2年間の準備期間のあるU-20代表チームやユニバーシアード代表チーム。そして、4年間という間に予選や準備期間を経て参加するオリンピック大会やワールドカップに出場する代表チームなどがある。監督やコーチはそれぞれの大会の目標を立てチームコンセプトを確立し、大会から逆算して技術、戦術、体力的側面についてトレーニングコンセプトとして落とし込み、トレーニング方法を組み立てる必要がある。今回のような非常に短い準備期間で結果を求められる場合、「攻守の切り替えの早さ」をチームコンセプトとし、トレーニング方法を確立させ大会に臨む方法はチーム作りの一つの指針を示せたと考えられる。

日本サッカーの目標である世界のトップ10入りを達成するためには、U-20代表や、U-23オリンピック代表チームの強化は最重要課題である。今後も、継続したこの年代のチーム戦術とトレーニング方法の検証及びゲーム分析は必要となるであろう。

【グループステージ】

グループA	日本	DPRK	マカオ	勝点	勝	負	分	得点	失点	得失差	順位
日本		2 ○ 1	5 ○ 0	6	2	0	0	7	1	6	1
朝鮮民主主義人民共和国	1 ● 2		8 ○ 0	3	1	1	0	9	2	7	2
マカオ	0 ● 5	0 ● 8		0	0	2	0	0	13	-13	3

グループB	香港	韓国	中国	勝点	勝	負	分	得点	失点	得失差	順位
香港		4 ○ 1	0 ● 1	3	1	1	0	4	2	2	1
韓国	1 ● 4		3 ○ 0	3	1	1	0	4	4	0	2
中国	1 ○ 0	0 ● 3		3	1	1	0	1	3	-2	3

※順位は得失点差により決定

【ノックアウトステージ】

準決勝(12月10日)

日本(A1位)	1	1	前半	1	韓国(B2位)
	2	0	後半	0	
	0	0	PK	0	
	0	0	PK	0	

香港(B1位)	1	1	前半	0	朝鮮民主主義人民共和国(A2位)
	0	0	後半	0	
	0	0	PK	0	
	4	0	PK	2	

3/4位決定戦銅メダルマッチ(12月12日)

韓国(B2位)	1	1	前半	0	朝鮮民主主義人民共和国(A2位)
	0	0	後半	1	
	0	0	延前	0	
	0	0	延後	0	
	4	PK		2	

決勝金メダルマッチ(12月12日)

日本	1	1	前半	0	香港
	0	0	後半	0	
	0	0	延前	0	
	0	0	延後	0	
	2	PK		4	

資料1 第5回東アジア競技大会(2009/香港)競技成績

参考文献

- 1) 財日本サッカー協会, 「**Technical news Vol.6**」, 16, 2005.
- 2) 財日本サッカー協会, 「**JFAテクニカルレポート第28回オリンピック競技大会 (2004/アテネ)**」, 30-35, 2004.
- 3) 財日本サッカー協会, 「**Technical news Vol.28**」, 8-14, 2008.
- 4) 乾真寛, 「プレッシングフットボールの構築と習熟第2回組織的なゾーンプレスの徹底と指導法」, **Soccer Clinic**, 47-53, 2001.
- 5) 石田英垣, 「ジーコ・ジャパン「世界」との戦い」, **Soccer Clinic**, 25-29, 2006.
- 6) 財日本サッカー協会, 「**FIFAU-20 World Cup Canada 2007 JFA Technical Report**」, 2008.
- 7) 前掲書2), 53.
- 8) 財日本サッカー協会, 「**FIFAワールドカップドイツJFA Technical Report**」, 2006.
- 9) 瀧井敏郎, 「ゲームの運動観察 —サッカーにおける写真によるゲームの運動観察—」, **スポーツ運動学研究**2, 23-34, 1989.
- 10) 吉村雅文, 「サッカーにおける攻撃の戦術について —有効な攻撃のためのトレーニング—」, 『順天堂大学スポーツ健康科学研究』, 順天堂大学, 第7号, 48-61, 2003.
- 11) Woo Young Lee, Tomohiko Tsuzuki, Masato Otake and Osamitsu SaiJo 「**The effectiveness of training for attack in soccer from the perspective of cognitive recognition during feedback of video analysis of matches.**」, **Football Science Vol.7**, 1-8, 2010.
- 12) 財日本サッカー協会, 「**Technical news Vol.28**」, 2-7, 2008.
- 13) 財日本サッカー協会, 「**Technical news Vol.30**」, 7-10, 2009.
- 14) Gerhard Bauer ; 萩島弘一・稲野幸子訳, 『ドイツサッカー』, 日刊スポーツ出版社, 21, 1996.
- 15) 小野剛; 『クリエイティブサッカー・コーチング』, 大修館書店, 167-187, 1998.
- 16) 松本直也, 瀧井敏郎, 「サッカーにおける「**The Duth4×4Training method**」に関する分析的研究」, 『東京学芸大学 第5部門 芸術・健康・スポーツ科学』, 東京学芸大学, 第49集, 145-153, 1997.
- 17) 財日本オリンピック委員会, 『第5回東アジア競技大会 (2009/香港) 日本選手団報告書』, 54-57, 2010.
- 18) 財日本オリンピック委員会, 『第4回東アジア競技大会 (2005/マカオ) 日本選手団報告書』, 198-200, 2006.
- 19) 前掲書17), 154-156.
- 20) 財日本サッカー協会, 「**Technical news Vol.35**」, 9-10, 2010.

Training Methods and the Scoring Process in the U-21 Japan National Football Team

～ The 5th East Asian Games (Hong Kong, 2009) ～

Naoya MATSUMOTO

The U-21 Japan national football team, possible representative team for the 2012 London Olympic Games, participated in the 5th East Asian Games held in Hong Kong in 2009. The purpose of this study is to analyze the game based on the speed of shift from offense to defense, which is the team concept, and to obtain actual data regarding the relationship between the team's tactics and its training methods. The analysis has demonstrated the following tendencies.

1. One of the factors that determines the speed of shift from offense to defense is the movement of the offensive player. It is important for an offensive player to have high consciousness of defense, and to keep up pressure on the opposing player at the instant of shift from offense to defense. Therefore, it is fundamental to train offensive players to maintain defensive consciousness.
2. One of the factors that determines the speed of shift from defense to offense is the movement of players. It is important to pass the ball forward as soon as the player gets the ball. Therefore, it is fundamental for the team to train players to be always conscious

of the continuity between defensive and offensive play. Moreover, as part of the team strategy, the team has to clarify its own aims.

3. The quality of the continuity between defensive and offensive play depends on the skill and sense of the defensive players. Therefore it is fundamental to carry out training that improves players' ability to judge the level of priority of passing the ball.

Flexible Command: A Solution to the Symmetry Problem of Adjunction, Scrambling, and Dislocation*

Koji ARIKAWA

Keywords : adjunction, command, connection, disconnection, dislocation, domination, equilibrium, flexible command, scrambling, symmetry

1. Introduction

Since the inception of the biolinguistic program (generative syntax) about 60 years ago, command, along with basic measurements such as domination, has been the most useful measure for scaling structural relationships. Linguists have always wanted extremely precise command. I propose a command measurement that is flexible (flexible command) and accurate. Flexible command measures equilibrium between two nodes in a given structure (i.e., tree, a graph without loops) showing connection and disconnection. That is, if α commands β , α and β are in equilibrium, which balances the connection and disconnection levels of two nodes in a structure. The equilibrium degree varies case by case. Flexible command can deal well with more complicated structures such as a segment structure. Thus, natural languages with rich scrambling (segment-forming operation) such as Hindi-Urdu, Japanese, and Korean are good phenotypes (properties observable in natural objects) that provide excellent

test cases for increasing the accuracy of command measurement. This study's discussion clarifies the logical necessity of command. It also leads us to reach the genotypic studies of the C_{HL} (the computational procedure of human natural language) concerning laws and mechanisms that arise from and/or interact with human gene. Thus, clarification of the logical necessity of command is a prerequisite to thinking the biological necessity of command, a harder problem.

The organization of this paper is as follows. Section 2 discusses conceptual issues. This section debates the existence of self-dominance in the C_{HL} and concludes that the set-theoretic definition of domination avoids the reflexivity paradox. The section introduces the main proposal of this study: flexible command. Section 3 describes several recalcitrant problems and possible solutions with flexible command. Such problems include scrambling asymmetry, reconstruction asymmetry, heavy NP shift asymmetry, and English-type T vs. French-type T asymmetry. I propose that rightward dislocation is rightward adjunction. Section 4 concludes the discussion.

2. Conceptual Issues

2.1. Self-domination

Is domination reflexive? Does the language system allow self-domination? Does α dominate itself (α)? Let us begin with the simplest possible structure, for example, one in which α and β merge and the operation forms γ .

Flexible Command:

(1)



The essential nature of the structure is set-theoretic. That is, the set γ has two members: set α and set β . We abstract away for the moment from the distinction in Pure Merge (not Move = Copy + Rmerge) between Set-Merge (substitution) forming $\{\gamma, \{\alpha, \beta\}\}$ and Pair-Merge (adjunction) forming $\{\gamma, \langle \alpha, \beta \rangle\}$, where γ is the label, i. e. its basic structural categorical property, and the ordered pair $\langle \alpha, \beta \rangle$ in the latter indicates that adjunction is inherently asymmetrical (α adjoining to β is distinct from β adjoining to α) (Chomsky 2000: 133).

(2) $\{\gamma\} = \{\{\alpha\}, \{\beta\}\}$

It is intuitively clear that γ dominates α and β . However, one must ask whether α dominates α , β dominates β , and γ dominates γ . Let us consider the following definitions of domination, containment, and exclusion, where α and β are syntactic categories (Cf. May 1985, Chomsky 1986).

(3) a. Domination

α dominates β iff every segment of α dominates β .

b. Containment

α contains β iff some segment of α dominates β .

c. Exclusion

α excludes β iff no segment of α dominates β .

Notice that domination is the key in that all three definitions use it as the standard measure. Therefore, the definition of domination is used axiomatically. Let us assume the following definition of command proposed in Reinhart 1979. Nunes and Thompson 1998, sec. A.7.2., provide the grounds and argument for this definition. Epstein, Groat, Kawashima, and Kitahara (EGKK) 1988 present an argument against this definition¹.

(4) Command

Where α and β are accessible to C_{HL} , α commands β iff

- a. α does not dominate β , and
- b. $\alpha \neq \beta$, and
- c. every category dominating α also dominates β .

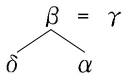
For condition (4a), β not dominating α follows from the irreflexivity of domination and condition (4c). We will discuss the demonstration of the irreflexivity of domination later. The demonstration that β does not dominate α in (4a) is as follows. Suppose that δ and α merge and it forms β , the label of which is γ .

$$(5) \beta = \{\underline{\gamma}, \{\delta, \alpha\}\}$$

$$\delta \leftarrow \uparrow \rightarrow \alpha$$

The label γ inherits the basic structural (categorical) property of either δ or α . The informal tree representation is as follows.

(6)



Flexible Command:

Suppose α commanded β in the preceding structure. β dominates α . Therefore, given (4c), β dominates β . However, if domination was irreflexive, i.e., no self-domination existed, β does not dominate β . Consequently, β dominates β , and β does not dominate β , which is a contradiction. By reduction to absurdity (RTA), if α commands β , β does not dominate α (Q.E.D.).

Without condition (4b), the definition permits self-command. Suppose α and β merge, creating K, the label of which is γ .

$$(7) \text{ K} = \{ \gamma, \{ \alpha, \beta \} \}$$
$$\alpha \leftarrow \uparrow \rightarrow \beta$$

More informally,

(8)



Suppose that the definition of command lacked condition (4b). Does α command α ? Given irreflexivity of domination, α does not dominate α . Thus, condition (4a) is satisfied. Every category dominating α , namely K, also dominates β . Thus, condition (4c) is satisfied. It follows that α commands α . However, there is an argument that self-command does not exist.

The demonstration that command is irreflexive is as follows (Nunes and Thompson state that they owe Lasnik and Uriagereka (1988: 161, n.4) the demonstration that command is not reflexive). Assume that the binding principle (BP) (C) holds, which states that a referring (R) expression must be free everywhere, i.e., nothing binds an R-expression. The definition

of bind is as follows.

(9) Bind

α binds β iff

- (i) α and β bear the same index,
- and (ii) α commands β .

The BP (C) accounts for the following contrast.

- (10) a. * $Bacon_i$ puzzled $Bacon_i$.
b. $Bacon_i$ puzzled $Bacon_j$.

In (10a), the first *Bacon* and the second *Bacon* bear the same index and the first commands the second. Thus, the second *Bacon* is bound (not free), in violation of the BP (C). In (10b), the first *Bacon* and the second *Bacon* do not bear the same index and the first commands the second. Thus, the second *Bacon* is unbound (free), in satisfaction of the BP (C). Now consider the following.

- (11) $Bacon_i$ left.

According to the definition of command without condition (4b), $Bacon_i$ commands $Bacon_i$. By the BP (C), $Bacon_i$ must be free, which amounts to saying that $Bacon_i$ cannot bind $Bacon_i$. It follows that $Bacon_i$ cannot refer to $Bacon_i$, which is a contradiction. By RTA, $Bacon_i$ does not command $Bacon_i$ (Q.E.D.). Thus, condition (4b) is required to remove self-command. The following has been widely used as (4c) (Cf. Reinhart 1976).

- (12) The first category dominating α also dominates β .

Flexible Command:

However, as pointed out by Nunes and Thompson, if the first category dominating α also dominates β , every category dominating α also dominates β . Since the definition with universal quantification as in (4c) is conceptually simpler and more general than the one specifying a particular node as in (12), the former is adopted². Crucially, (12) makes an incorrect prediction regarding an adjunction at the root. That is, (12) states that there is at least one node that dominates α and β (existential quantification). When a term adjoins to the root containing β , there is no node that dominates α and β . By (12), such adjunction at the root is undesirably ruled out.

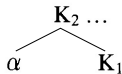
Let us assume the following definition of the linear correspondence axiom (LCA) (Kayne 1994).

(13) Linear Correspondence Axiom (LCA)

- A category α precedes a category β iff
- α asymmetrically commands β , or
 - γ precedes β and γ dominates α .

Kayne adopts the exclusion type of command: α commands β iff α excludes β , and every category dominating α also dominates β . Let us consider the following partial structure in which α adjoins to K_1 , forming a two-segment category [K_2 , K_1].

(14)



By the definition of domination given above, the category [K_2 , K_1] does not dominate α , instead, it just contains α . α commands outside [K_2 ,

K_1]. If α adjoins by internal merge, α commands its trace, thereby satisfying the chain condition (a moved element must command its trace).

Does $[K_2, K_1]$ dominate its lower segment K_1 ? Chomsky (1995: 339) assumes that it does. Let us repeat the relevant definition, where α and β are syntactic categories.

(15) Domination

α dominates β iff every segment of α dominates β .

For computational operations such as Move, the C_{HL} can see the two-segment category $[K_2, K_1]$, the lower segment K_1 , and α . Crucially, the C_{HL} cannot see the upper segment K_2 . For definition of measurement, however, one must be precise and count every segment. By the definition of domination in (15), if $[K_2, K_1]$ dominates its lower segment K_1 , every segment of $[K_2, K_1]$ dominates K_1 . It follows that K_2 dominates K_1 , and K_1 dominates K_1 . In that case, domination can be reflexive, i.e., the system must allow self-domination.

2.2. Argument for irreflexivity of domination

Evidence and reasons exist for domination being irreflexive (see Nunes and Thompson 1998, section A.2.2.).

The first argument for the irreflexivity of domination arises from RTA within the definition of command. Let us reproduce the definition of command in question.

Flexible Command:

(16) Command

Where α and β are accessible to C_{HL} , α commands β iff

- a. α does not dominate β , and
- b. $\alpha \neq \beta$, and
- c. every category dominating α also dominates β .

Suppose that domination was reflexive. Then, the first category dominating α is α . By condition (16c), α dominates β , i.e., α dominating α also dominates β . However, by condition (16a), α does not dominate β . α dominates β , and α does not dominate β , which is a contradiction. By RTA, domination is not reflexive (Q.E.D.).

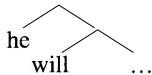
The second argument for the irreflexivity of domination arises from the LCA. Consider the set-theoretic representation of the following example (ibid., section A.2.2.).

(17) He will like it.

(18) $C = \{\underline{\text{will}}, \{\text{he}, \{\text{will}, \{\text{will}, \{\text{like}, \{\text{like}, \text{it}\}\}\}\}\}\}$
 $\text{he} \leftarrow \uparrow \rightarrow B = \{\underline{\text{will}}, \{\text{will}, \{\text{like}, \{\text{like}, \text{it}\}\}\}\}$
 $\text{will} \leftarrow \uparrow \rightarrow A = \{\underline{\text{like}}, \{\text{like}, \text{it}\}\}$
 $\text{like} \leftarrow \uparrow \rightarrow \text{it}$

Let us consider the partial tree representation.

(19)



Let us reproduce the definition of command.

(20) Command

Where α and β are accessible to C_{HL} , α commands β iff

- a. α does not dominate β , and
- b. $\alpha \neq \beta$, and
- c. every category dominating α also dominates β .

Does *he* command *will*? Suppose we had the reflexive notion of domination. Let *he* be α , and *will* β in the definition of command. Condition (20a) is satisfied because *he* does not dominate *will*. The term *he* dominates itself. Condition (20b) is satisfied because *he* \neq *will*. As for condition (20c), the first category dominating *he* is *he*. Since *he* does not dominate *will*, condition (20c) is not satisfied. Therefore, *he* does not command *will*. Now let us adopt the following definition of the LCA.

(21) Linear Correspondence Axiom (LCA)

A category α precedes a category β iff

- a. α asymmetrically commands β , or
- b. γ precedes β and γ dominates α .

α (*he*) does not command \square (*will*). Therefore, *he* does asymmetrically command *will*. By condition (21a), *he* and *will* would not be ordered³. The LCA incorrectly predicts that the example should be ruled out, contrary to the fact. Therefore, the assumption that domination is reflexive is incorrect. Hence, domination is irreflexive (Q.E.D.).

The third argument arises from a set-theoretic fact. The notion of domination is understood set-theoretically particularly within the bare phrase structure theory. Set membership cannot be reflexive. If set membership was reflexive (a set contains itself), the empty set $\{\phi\}$, which by definition contains no member, would paradoxically contain a member, that is, the empty set itself.

Flexible Command:

$$(22) * \{\{\phi\}\} \ni \{\phi\}$$

Therefore, set membership must be irreflexive, i.e., a set must not contain itself.

Now let us consider the standard definition of domination, which section A.2.1. in Nunes and Thompson (1998) adapts from Chomsky (1995: 247).

(23) Domination

Given a syntactic object $K = \{\underline{\gamma}, \{\delta, \mu\}\}$ or $K = \{\langle \underline{\gamma}, \gamma \rangle, \{\delta, \mu\}\}$, K dominates α iff

- a. for some set L , $\alpha \in L$ and $L \in K$, or
- b. for some set M , K dominates M and M dominates α .

A syntactic object $K = \{\underline{\gamma}, \{\delta, \mu\}\}$ arises from a symmetric Set-Merge of δ and μ (internal or external; δ set-merging with μ is in principle the same as μ set-merging with δ (Chomsky 2000: 133); this symmetry must be broken by Agree operation (feature-checking), and the construct bears the label (the major property) γ (the selector feature). A syntactic object $K = \{\langle \underline{\gamma}, \gamma \rangle, \{\delta, \mu\}\}$ arises from an asymmetric Pair-Merge of δ and μ (adjunction; δ pair-merging with μ is different from μ pair-merging with δ), and the label is $\langle \underline{\gamma}, \gamma \rangle$ (non-selector (ibid. 134)). Chomsky (2000: 135) argues that the label is redundant; it is determined independently, i.e., the label in Set-Merge is determined by the selector, and the label in Pair-Merge is determined by the Merge operation itself (ibid. 134); therefore eliminable.

Suppose K reflexively dominates K . Thus, $K = \alpha$ in the definition above. Then, by condition (23a), K is a member of the set L , and the set L is a member of K .

Flexible Command:

(26) Domination (def1)

K dominates a syntactic object α iff

- a. for every set L such that $L \in K$, $\alpha \in L$, or
- b. for some set M, K dominates M and M contains α .

The bottom line is: when K dominates α , all sets in K must have α as a member (Nunes and Thompson 1998). Nunes and Thompson argue that def1 is superior to the standard definition in (23), which they adapt from Chomsky 1995; 247; call it def2.

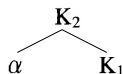
(27) Domination (def2) (= (23))

Given a syntactic object $K = \{\gamma, \{\delta, \mu\}\}$ or $K = \{\langle \gamma, \gamma \rangle, \{\delta, \mu\}\}$, K dominates α iff

- a. for some set L, $\alpha \in L$ and $L \in K$, or
- b. for some set M, K dominates M and M dominates α .

The crucial difference between def1 and def2 is that the quantification in condition (26a), i.e., the universal quantification (for every set L) is used in def1, whereas the existential quantification (for some set L) is used in def2, as in (27a). Def1 and def2 make different predictions with respect to dominance of an adjunct by a two-segment category $K = [K_2, K_1]$. The structure of interest is the following.

(28)

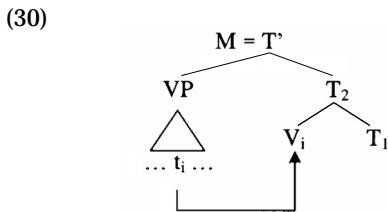


The bare phrase structure (BPS) representation of (28) is the following.

$$(29) \quad K = \{ \langle K_2, K_1 \rangle, \{ K, \alpha \} \}$$

$$\alpha \leftarrow \uparrow \rightarrow K$$

According to condition (26a) of def1, since not every set has α as its member, i.e., the set $\langle K_2, K_1 \rangle$ does not have α as the member, the two-segment category K does not dominate α . On the other hand, according to condition (27a) of def2, since there is some set that has α as the member, i.e., set $\{ K, \alpha \}$, K dominates α . By def2, the two-segment category $K = [K_2, K_1]$ dominates α and K_1 . It follows that α commands only K_1 . Crucially, α does not command outside category K . In contrast, by def1, the two-segment category $K = [K_2, K_1]$ dominates K_1 , but not α . It follows that α commands nothing in K . Crucially, α commands outside category K . Nunes and Thompson argue that def2 makes incorrect predictions in the chain condition (the head of a chain must command the tail of the chain, i.e., a moved term must command the trace). Nunes and Thompson consider two cases. The first is V-to-T raising.



The V adjoins to T_1 . By def2, V does not command out of $T = [T_2, T_1]$. As a result, the chain condition is violated. Given that a language allows V-to-T raising and that a chain must satisfy the chain condition, def2 incorrectly predicts that a language lacks V-to-T movement. In contrast, def1 correctly predicts that the above structure is acceptable: the V com-

Flexible Command:

mands its trace, thereby satisfying the chain condition.

The second argument for def1, but against def2, arises from noncyclic adjunction of a relative clause (Lebeaux 1988). Consider the following example (Nunes and Thompson 1998, sec. A.2.3.).

(31) Which portrait that Rivera_i painted did he_i like?

The partial representation is the following, where Q = null interrogative C.

(32)

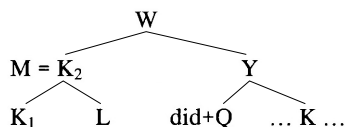
$W = \{Q, \{M, Y\}\}$

$M = \{\langle \text{which}, \text{which} \rangle, \{K, L\}\} \leftarrow \uparrow \rightarrow Y = [\text{did}+Q \text{ he like } K = \{\text{which} \{\text{which}, \text{portrait}\}\}]$

$K = \{\text{which} \{\text{which}, \text{portrait}\}\} \leftarrow \uparrow \rightarrow L = [\text{that Rivera painted}] \text{ which} \leftarrow \uparrow \rightarrow \text{portrait}$
 $\text{which} \leftarrow \uparrow \rightarrow \text{portrait}$

The constituent L noncyclically adjoins (later inserted) to (already-built) K, which avoids the BP (C) violation, i.e., L from the outset appears in a position that is higher than the coindexed pronoun. The structure of the interest is the following.

(33)



By def2, the two-segment category $K = [K_2, K_1]$ dominates the lower segment K_1 and L. Therefore, the moved wh-phrase K_1 does not command outside of K. The antecedent K_1 fails to command its trace (K) in Y, in-

ducing the chain condition violation. Def2 incorrectly predicts that the example should be ruled out. Def1, by which the moved wh-phrase K_1 commands its trace (K), satisfies the chain condition. Thus, def1 correctly predicts that the example is acceptable. The problem dissolves (or does not exist) however under the occurrence-based definition of chain and the hypothesis that head-adjunction takes place in the PF (Chomsky 2000: 117, n. 68).

Def1, not def2, makes correct predictions. Therefore, let us adopt def1, which is proposed in Nunes and Thompson (1998), repeated below.

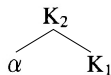
(34) Domination (def1)

K dominates a syntactic object α iff

- a. for every set L such that $L \in K$, $\alpha \in L$, or
- b. for some set M, K dominates M and M contains α .

As pointed out by Nunes and Thompson, (34a) requires as a necessary condition that all sets in K (the dominator) have α (the dominee) as a member, when we want K to dominate α . Let us repeat the structure in question.

(35)



The question is whether the two-segment category $[K_2, K_1]$ dominates the lower segment K_1 . We want $[K_2, K_1]$ to dominate K_1 . Under the set-theoretic definition of domination, in order for $[K_2, K_1]$ to dominate K_1 , all sets in $[K_2, K_1]$ must have K_1 as a member. According to the system based on the set theory and the BPS theory (Chomsky 1995) adopted by Nunes and

Flexible Command:

Thompson, the relevant representation is the following.

$$(36) \quad [K_2, K_1] = \left\{ \left\{ \left\{ K_1 \right\} \right\}, \left\{ \alpha, K_1 \right\} \right\} \\ \alpha \leftarrow \uparrow \rightarrow K_1$$

The object $[K_2, K_1]$ has two sets as members: $\{\{K_1\}\}$ and $\{\alpha, K_1\}$. $\{\{K_1\}\}$ is the label (information of the major property) of $[K_2, K_1]$ ⁴. α and K_1 together are members of $\{\alpha, K_1\}$ but not of the label $\{\{K_1\}\}$.

Do all sets in $[K_2, K_1]$ have K_1 as a member? Yes, they do. K_1 is a member of $\{\{K_1\}\}$ and $\{\alpha, K_1\}$. It follows that $[K_2, K_1]$ dominates K_1 , as desired.

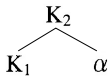
Notice that $[K_2, K_1]$ does not dominate α , for all sets in $[K_2, K_1]$ do not have α as a member; the label $\{\{K_1\}\}$ does not have α .

Therefore, the purely set-theoretic definition of domination avoids the dilemma; we can maintain the irreflexivity of domination, while at the same time allowing a two-segment category to dominate the lower segment. A structure must be considered set-theoretically. We will often use tree representation, however, for expository purposes unless set-theoretic clarity is necessary.

2.4. Flexible command: different levels of disconnection (the main proposal)

Let us reproduce the relevant structure.

(37)



Let us now adopt the view that $[K_2, K_1]$ dominates its lower segment K_1 .

Does K_1 command α ? As stated above, $[K_2, K_1]$ does not dominate α because not all sets in $[K_2, K_1]$ have α as a member; the label $\{\{K_1\}\}$ does not have α . Alternatively, according to a more informal definition of command, in order for K_1 to command α , every category dominating K_1 must also dominate α . Thus, given that $[K_2, K_1]$ dominates K_1 in order for K_1 to dominate α , $[K_2, K_1]$ must dominate α . However, $[K_2, K_1]$ does not dominate α but $[K_2, K_1]$ only contains α . Therefore, K_1 does not command α .

Does α command K_1 ?

Chomsky (1995: 339-340) suggests that the result varies depending upon our definition of the disconnection condition in the following definition of command (adapted from Chomsky 1995).

(38) Command

α commands \square iff

- a. every γ that dominates α dominates \square (the connection condition), and
- b. α and \square are disconnected (the disconnection condition).

The bottom line is: Command measures and determines the equilibrium (balance) of connection and disconnection between two nodes in a language structure (tree graph). Command is fundamentally antisymmetric: When X commands Y it is not always the case that Y commands X. As Moro (2000: 15-29) proposes, the C_{HL} does not tolerate a point of symmetry (too unstable). The structural information (formal feature) is the driving force for breaking the symmetry in the C_{HL} . Once the symmetry is broken and an antisymmetric structure is formed, the structure becomes stable. The C_{HL} creates an antisymmetric structure like H_2O crystal (ice) where the molecules are in the stable phase with the minimum energy (cost). Command measures how two nodes establish a stable (balanced) relationship in a

Flexible Command:

given tree.

For the disconnection condition, Chomsky (1995: 339-340) points out three levels of disconnection.

(39) Levels of disconnection

- a. (Level a) α and β are disconnected iff α excludes β .
- b. (Level b) α and β are disconnected iff no segment of one contains the other.
- c. (Level c) α and β are disconnected iff neither is a segment of a category that contains the other.

Chomsky confesses that he does not see any principled way to choose among the various options. I want to propose that there is a principle way (presence/absence of agreement and computational cost) to choose among the options. Let us reproduce the definitions of domination, containment, and exclusion (Chomsky 1986: 9).

(40) a. Domination

α dominates β if every segment of α dominates β .

b. Containment

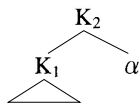
α contains β if some segment of α dominates β .

c. Exclusion

α excludes β if no segment of α dominates β .

Let us concentrate on the following tree structure at the root.

(41)



Does α command K_1 ? With respect to connection condition, there is no γ that dominates α and K_1 , thereby the connection condition (38a) is vacuously satisfied. $(\forall_x)(x > 0 \Rightarrow D(x))$, where x is a node, and D indicates dominating α and β . That is, if a node x exists, then x dominates α and β . If x does not exist, (38a) is irrelevant (vacuously satisfied). Under truth-value calculation, $A(x > 0) \Rightarrow B(D(x))$ is true when A and B are false.

Consider the disconnection conditions. At the level of disconnection (39a) (or disconnection level (a)), α asymmetrically commands $[K_2, K_1]$ and K_1 which is dominated by $[K_2, K_1]$. According to the LCA, α precedes $[K_2, K_1]$ and K_1 .

At the level of disconnection (39b) (or disconnection level (b)), α asymmetrically commands K_1 . According to the LCA, α precedes K_1 . Notice that, at this level of disconnection, a container is excluded, i.e., α fails to asymmetrically command $[K_2, K_1]$. Therefore, the container $[K_2, K_1]$, which contains α and K_1 are excluded from the command calculation.

At the level of disconnection (39c) (or disconnection level (c)), command relations are not determined if the relevant structures involve segments.

The above structure involves segments. Therefore, no command relationship is determined. α and K_1 are not ordered.

The difference between disconnection levels (a) and (b) is important. This issue is related to the totality problem in the sense of Kayne (1994).

Flexible Command:

- (42) Three defining properties of linear ordering of (at least) terminal symbols
- a. It is transitive; that is, $xLy \ \& \ yLz \rightarrow xLz$.
 - b. It is total; that is, it must cover all the members of the set: for all distinct x, y , either xLy or yLx .
 - c. It is antisymmetric, that is, not $(xLy \ \& \ yLx)$. (Kayne 1994)

The issue is whether one should take “all the members of the set” in (42b) to include nonterminal as well as terminal symbols. If the system requires strict totality (the set must include nonterminal and terminal symbols), no ordering between α and K_1 is determined at the disconnection level (b), contrary to Chomsky’s view. It is because at this level, α fails to asymmetrically command $[K_2, K_1]$, which dominates K_1 . α and $[K_2, K_1]$ are disconnected. Since $[K_2, K_1]$ dominates K_1 , α and K_1 are also disconnected. This conclusion is what the First Law (EGKK 1998: 39-40) guarantees; no syntactic relationship exists between the two terms x (equals to or contained in the larger constituent X) and y (equals to or contained in the larger constituent Y) when X and Y are disconnected at any point of the derivation (see section 3.1.2.).

In sum, capitalizing on Chomsky’s (1995: 339-340) insights, I propose the definition of command as in the following.

- (43) Command
 α commands \square iff
- a. α and \square are connected, and
 - b. α and \square are disconnected.

- (44-1) Connection
 α and \square are connected iff every γ that dominates α dominates \square .

(44-2) Disconnection

α and β are disconnected iff

- a. (Level a) α excludes β , or
- b. (Level b) no segment of one contains the other, or
- c. (Level c) neither is a segment of a category that contains the other.

The three distinct levels of disconnection yield three different types of command. Therefore, flexible command is obtained. The choice of the three levels is determined by factors such as presence or absence of agreement and computational cost that will be clarified empirically below.

The LCA is redefined as follows.

(45) LCA

α precedes β iff

- (i) α asymmetrically commands β , or
- (ii) $\gamma (\neq \alpha)$ precedes β and γ dominates α .

3. Empirical Issues

3.1. Problem 1

3.1.1. Scrambling asymmetry

Many SOV languages allow a *wh*-phrase to permute into the sentence-initial position but prohibit the same phrase to permute into the sentence-final position after V. The phenomenon has been descriptively known (for Japanese, see Haraguchi 1973 for example), but has resisted an explanation. Bayer (1996) is one of the studies that have emphasized the significance of the problem. As for Japanese data, see Kuno 1978: 68, Inoue 1978: 98, Miyaji 1984, Takami 1995, Simpson and Bhattacharya 2003: 132, n.3, p.c. with Hajime Hoji. Let us consider Japanese examples.

Flexible Command:

- (46) a. John-wa nani-o tabe-ta-no?
John-TOP what-ACC eat-PAST-Q
'What did John eat?'
- b. nani-o_i John-wa t_i tabe-ta-no?
what-ACC John-TOP eat-PAST-Q
'What did John eat?'
- c. * John-wa t_i tabe-ta-no nani-o_i?
John-TOP eat-PAST-Q what-ACC
'What did John eat?'

No such restriction is observed for a non-wh phrase.

- (47) a. John-wa osushi-o tabe-ta-no?
John-TOP sushi-ACC eat-PAST-Q
'Did John eat sushi?'
- b. osushi-o_i John-wa t_i tabe-ta-no?
sushi-ACC John-TOP eat-PAST-Q
'Did John eat sushi?'
- c. John-wa t_i tabe-ta-no osushi-o_i?
John-TOP eat-PAST-Q sushi-ACC
'Did John eat sushi?'

Why does the system bar a wh-phrase to appear after V in SOV languages? A similar phenomenon is observed in other languages. In these languages, the wh-phrase can scramble to the sentence-initial position, but it cannot scramble to the sentence-final position after V, as in the following⁵.

- (48) a. ??/* KriSno t_i bhalobaS-e ka-ke? [Bengali]
Krishna-NOM love-3 who-ACC
'Who does Krishna love?' (Cf. Bayer 1996: 284-285)

- b. * Sita-ne dhyaan-se t_i dekh-aa thaa kis-ko?
 Sita-ERG care-with look-PAST.PERF was who-ACC
 ‘Who had Sita looked at carefully?’ (Bhatt and Dayal 2007: 290-291)
- c. * ku-nun t_i mogosumi-ka muo-sul_i? [Korean]
 he-TOP ate-Q what-ACC
 ‘What did he eat?’
- d. * avan t_i saappiTaan enna? [Tamil]
 he-ACC ate what-ACC
 ‘What did he eat?’ (Cf. Savio (1991: 56) via Bayer (1996: 307, n. 45))
- e. * Para-yı t_i çal-dı kim?
 money-ACC stole who
 ‘Who stole the money?’ (Erguvanlı 1984 via Takano 2010)
- f. * Ramin bara Kimea t_i xarid chi(-ro)_i? [Persian]
 Ramin for Kimea bought what(-ra) (ra = [+specific, ±definite])
 ‘What did Ramin buy for Kimea?’ (Karimi 2003: 115)

What is interesting is that in Japanese, exclamatory-wh and interrogative-wh phrases constitute a natural class, but pronominal-wh phrases behave differently. That is, the former two cannot scramble to the post-verbal position, whereas the latter can do so.

- (49-1) a. * John-wa t_i kaita-n-daroo [nan-to sugoi e-o]!
 John-TOP drew-fact-may what-that stunning picture-ACC
 ‘What a stunning picture John drew!’
- b. * John-wa t_i tabeta-no nani-o_i? (= (46c))
 John-TOP ate-Q what-ACC
 ‘What did John eat?’
- c. John-wa t_i tabeta-no nani-o_i?
 John-TOP ate-Q what-ACC
 ‘Did John eat that thing (whatchamacallit)?’

Flexible Command:

In the Tokyo dialect (the standard Japanese), an interrogative-wh *nani* ‘what’ is pronounced as high-low pitch pattern [NANI], whereas a pronominal-wh *nani* ‘that thing’ is pronounced as low-high [naNI] (Kindaichi et al 2006: 617). The two-types of wh differ in prosody and behave differently with respect to postverbal scrambling. In the Kagoshima dialect, the interrogative and pronominal wh are distinguished morphologically.

- (49-2) a. * John-wa t_i tabeta-to na-yu_i?
John-TOP ate-Q what-ACC
‘What did John eat?’
- b. John-wa t_i tabeta-to nani-o_i?
John-TOP ate-Q what-ACC
‘Did John eat that thing (whatchamacallit)?’

The interrogative wh *na-yu* ‘what-ACC’ cannot appear postverbally as in (49-2a) whereas the pronominal wh *nani-o* ‘that thing-ACC’ can as in (49-2b). That the two types of wh differ in phonology and morphology indicates that they behave differently before spell-out in the narrow (overt) syntax (NS). What is the common syntactic feature that is shared between interrogative-wh phrases and exclamatory-wh phrases, but not with pronominal-wh phrases? A candidate is focus [FOC] as a syntactic (formal) feature⁶. In fact, there are SOV languages in which a focused phrase is prohibited in the postverbal position.

- (50) a. ??/* KriSno t_i bhalobaS-e ta-ke-o_i. [Bengali]
Krishna-NOM love-3 (s)he-ACC-too
‘Krishna loves him/her too.’ (Bayer 1996: 285)

- b. * Ramin bara Kimea t_i xarid Pirhan-ro_i [Persian]
Ramin for Kimea bought SHIRT-ra
'Ramin bought that specific shirt for Kimea.' (Karimi (1999: 4), Karimi (2003: 115))

Similarly, in Japanese, the thematic topic marker (wa: low pitch and not stressed) can appear postverbally, while the contrastive topic marker (WA: high pitch and stressed) cannot do so.

- (51) a. John-wa t_i tabeta, sarada-wa_i.
John-TOP ate salad-TOP (thematic)
'Speaking of salad, John ate it.'
- b. * John-wa t_i tabeta, sarada-WA_i.
John-TOP ate salad-TOP (contrastive)
'John ate at least salad (I don't know what else he ate).'

Why does a focus phrase resist appearing in the postverbal position in SOV languages? Before we attempt to propose a solution, let us verify the nature of the postverbal position created by postposing.

3.1.2. Postverbal DP has undergone rightward scrambling and is the highest commander in the same sentence

In this section, I demonstrate that a postverbal DP has undergone rightward scrambling and is the highest commander for the rest of the terms in the same sentence. I argue for syntactic rightward movement analysis of Japanese postposing (Ross 1967, Haraguchi 1973, Baltin 1978, 1983, Kayne 1979, Guéron 1980, Choe 1987, Simon 1989, Rochemont and Culicover 1990, Kural 1994, 1997, Cecchetto 1999, Kornfilt 2005)⁷. I argue against base-generation analysis (Sells 1999, Soshi and Hagiwara 2004) and more-than-one sentence analysis (Inoue 1978, Kuno 1978, Abe

Flexible Command:

1999, Endo 1996, Tanaka 2001, Takita (to appear), Whitman 2000)⁸. See Takano (2010: 15) for three possible analyses of postposing. The first law, the most fundamental law of syntax according to EGKK 1998, is relevant which has two versions: representational and derivational (EGKK 1998: 39–40, Epstein 1999).

(52) The First Law (Representationally Construed)

A term (= tree, category, constituent) T_1 can enter into a syntactic relation with a term T_2 only if there is at least one term T_3 of which both T_1 and T_2 are member terms.

(52') The First Law (Derivationally Construed)

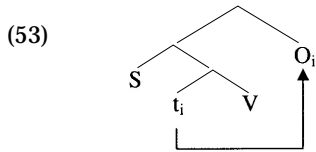
T_1 can enter into C-Command relations with T_2 only if there exists no derivational point at which:

- i. T_1 is a proper subterm of K_1 ,
- and ii. T_2 is a proper subterm of K_2 ,
- and iii. there is no K_3 such that K_1 and K_2 are both terms of K_3 .

EGKK nickname the First Law “relationship blocker (ibid. 43)” in that it defines as to when two nodes are disconnected in a tree. The bottom line of the representational First Law is: If A and B interact syntactically, they are in the minimal simplex tree. Syntactic objects A and B interact syntactically when they interact with respect to syntactic calculations such as scope, binding, weak crossover (WCO), parasitic gap licensing, and the like. The derivational First Law defines more specific relationship: command. It defines how command fails; for example, a member x of TP Spec and a member y of VP are unconnected (no command relationship exists) because there exists a derivational point at which x is a proper subterm of TP Spec, and y is a proper subterm of VP, and there is no TP (yet) such that TP Spec and VP are both terms of TP. Thus, the derivational

First Law derives command; command is unnecessary (ibid. 41).

In particular, I argue the following structure for the sentence in which, for example, the object scrambles rightward to the postverbal position.



More specifically, I agree with analyses in Mahajan 1988 and Kural 1994, and disagree with those in Kayne 1994, Mahajan 1997a and Mahajan 1997b. The evidence for (53) is the following.

First, the postverbal element is responsible for scope ambiguity. It is important to keep the neutral prosody (no extra pause or stress) in testing.

(54-1) Scope ambiguity (\forall vs. \exists)

- | | | | | |
|----|------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|---|
| a. | dareka-ga | daremo-o | sonkeishiteiru | ($\exists > \forall$, * $\forall > \exists$) |
| | someone-NOM | everyone-ACC | respect | |
| | 'Someone respects everyone.' | | | |
| | | | | |
| b. | daremo-o _i | dareka-ga | t _i sonkeishiteiru | ($\exists > \forall$, $\forall > \exists$) |
| | everyone-ACC | someone-NOM | respect | |
| | 'Someone respects everyone.' | | | |
| | | | | |
| c. | dareka-ga | t _i sonkeishiteiru | daremo-o _i | ($\exists > \forall$, $\forall > \exists$) |
| | someone-NOM | respect | everyone-ACC | |
| | 'Someone respects everyone.' | | | |

In (54c), the rightward scrambling of the universally quantified object guarantees its wide-scope reading. The postverbal term commands a term to its left at least in the LF⁹. See Abe (1999) and the example (74) in Takano (2010: 17) for the same conclusion. Let us examine another paradigm; the

Flexible Command:

scope relationship between a universally quantified phrase (UQP or \forall) and a negative head (NEG). Again it is extremely important to keep the neutral prosody (no extra pause or stress) in testing. Arbitrary addition of pauses and stresses alters interpretation. See Miyagawa and Arikawa (2007) who emphasize the importance of careful and minute control over prosodic properties in grammaticality reaction test. The relevant examples are as follows.

(54-2) Scope ambiguity (\forall vs. NEG)

- a. John-wa zen'in-o nagur-ana-katta. (* $\forall > \text{NEG}$, $\text{NEG} > \forall$)
John-TOP all-ACC beat-NEG-PAST
'John did not beat all.'
- b. zen'in-o_i John-wa t_i nagur-ana-katta. ($\forall > \text{NEG}$, $\text{NEG} > \forall$)
all-ACC John-TOP beat-NEG-PAST
'John did not beat all.'
- c. John-wa t_i nagur-ana-katta zen'in-o. ($\forall > \text{NEG}$, $\text{NEG} > \forall$)
John-TOP beat-NEG-PAST all-ACC
'John did not beat all.'

When the object UQP is in situ as in (54-2a), NEG takes wide scope over UQP ("it is not the case that John beat all") because NEG asymmetrically commands UQP. When UQP scrambles leftward as in (54-2b), the scope ambiguity arises ("it is not the case that John beat all" and "For every x, x a human, John beat x") because UQP commands and is commanded by NEG given that the trace of UQP is the copy of the original UQP. Crucially, when the object UQP undergoes right dislocation to the postverbal position, the scope ambiguity arises. That indicates that the object UQP has scrambled rightward and adjoined to the root node CP which is higher than NEG.

Second, the postverbal element can bind an anaphor to its left.

(55) Anaphor binding

a. * otagai_k-no sensee-ga karera_k-o_i hihanshita
 each other's teacher-NOM they-ACC criticized
 '(Lit.) Each other_i's teacher criticized them_i.'

b. ? karera-o_i otagai_k-no sensee-ga t_i hihanshita.
 they-ACC each other's teacher-NOM criticized
 'Each other_i's teacher criticized them_i.'

(Cf. Mahajan 1988, 1990, Saito 1992)

c. ? otagai_k-no sensee-ga t_i hihanshita karera_k-o_i.
 each other's teacher-NOM criticized they-ACC
 'Each other_i's teacher criticized them_i.'

In (55c), the postverbal object DP is scrambled rightward and has become the binder for the anaphor. The postverbal term commands a term to its left, at least in the LF¹⁰.

Third, the postverbal element interacts with the Condition C effect. Let us look at the typical Condition C effect in English (Reinhart 1976, Abe 2003).

(56-1)

a. * He_i put his cigars in Ben_i's box.

b. * [_{PP} In Ben_i's box]_i, he_i put his cigars t_i.

c. [[_{PP} In the ivory box]_i that Ben_i bought from China], he_i put his cigars t_i.

The example in (56-1a) is ruled out by the binding condition (C), which bars an R-expression *Ben* to be bound. The left dislocation does not remedy the condition (C) violation in (56-1b) while it does in (56-1c). The difference between (56-1b) and (56-1c) is that the R-expression is more "deeply

Flexible Command:

embedded” in the dislocated phrase in the latter. Saito (1985) described the phenomenon as follows.

(56-2)

If an R-expression is c-commanded by a pronoun that is coreferential to it in the underlying structure and a phrase that dominates the R-expression escapes the c-command domain of the pronoun by movement, then the resulting structure is free from a Condition C violation only if the R-expression is “deeply embedded” in the moved phrase.

According to the late-merge analysis of adjunct (Lebeaux 1988), the R-expression exists in the lower original copy in (56-1b) but not in (56-1c); the relative clause being an adjunct merges with the PP after dislocation. The Condition (C) violation arises in (56-1b) but not in (56-1c). Let us look at the dislocation examples in Japanese.

(56-3)

- a. * kare_i-ga John_i-no sensee-o kenashita.
He-NOM John-GEN teacher-ACC disparaged
'He disparaged John's teacher.'
- b. ??? John_i-no sensee-o_j kare_i-ga t_j kenashita.
John-GEN teacher-ACC he-NOM disparaged
'He disparaged John's teacher.'
- c. ??? kare_i-ga t_j kenashita John_i-no sensee-o_j.
he-NOM disparaged John-GEN teacher-ACC
'He disparaged John's teacher.'

The example in (56-3a) corresponds to (56-1a) and (56-3b/c) to (56-1b); the condition (C) violation is not ameliorated. The violation is amnestied when the R-expression is deeply embedded (Abe 1993: 211)¹¹.

(56-4)

- a. * *kare_i-ga* [_{DP}[*John_i-ga kiratteiru*] *sensee*]-*o* *kenashita*.
 he-NOM John-NOM dislike teacher-ACC disparaged
 'He disparaged the teacher that John dislikes.'
- b. [_{DP}[*John_i-ga kiratteiru*] *sensee*]-*o_k* *kare_i-ga t_k* *kenashita*.
 John-NOM dislike teacher-ACC he-NOM disparaged
 'He disparaged the teacher that John dislikes.'
- c. ? *kare_i-ga t_k* *kenashita* [_{DP}[*John_i-ga kiratteiru*] *sensee*]-*o_k*.
 he-NOM disparaged John-NOM dislike teacher-ACC
 'He disparaged the teacher that John dislikes.'

The examples in (56-4b/c) show that the binding condition (C) looks at the dislocated phrase at the landing site. Under the late-merge analysis, the relative clause exists in the copy of the dislocated phrase only at the landing site. Given the identical syntactic behavior, left dislocation and right dislocation must be the same operation: scrambling.

Fourth, right dislocation interacts with variable binding. In the test, the pronominal bound variable *kare* 'he' must be sufficiently de-stressed as [kr].

(56-5)

- a. * *Mary-wa* *kare_i-no* *jyooshi-ni* *dono* *dansee_i-o-mo* *uttaeta*.
 Mary-TOP he-GEN boss-DAT which man-ACC-also complained
 'Mary complained of every man_i to his_i boss.'
- b. *dono* *dansee_i-o-mo_j* *Mary-wa* *kare_i-no* *jyooshi-ni* *t_j* *uttaeta*.
 which man-ACC-also Mary-TOP he-GEN boss-DAT complained
 'Mary complained of every man_i to his_i boss.'
- c. *Mary-wa* *kare_i-no* *jyooshi-ni* *t_j* *uttaeta* *dono* *dansee_i-o-mo_j*.
 Mary-TOP he-GEN boss-DAT complained which man-ACC-also
 'Mary complained of every man_i to his_i boss.'

Flexible Command:

Both leftward scrambling and rightward scrambling provide the new operator binding the pronominal variable. Crucially, the right-dislocated QP serves as the binder (hence the commander) for the pronominal variable¹².

Fifth, rightward scrambling to the postverbal position ameliorates the WCO effect.

(57) WCO remedy

a. ?* soko_i-no shain-ga dono kaisha_i-o-mo hihanshita.
it-GEN employee-NOM which company-ACC-also criticized
'(Lit.) Its_i employee criticized every company_i.'

b. dono kaisha_i-o-mo_k soko_i-no shain-ga t_k hihanshita.
which company-ACC-also it-GEN employee-NOM criticized
'Its_i employee criticized every company_i.'

(Cf. Mahajan 1988, 1990, Webelhuth 1989, Saito 1992)

c. soko_i-no shain-ga t_k hihanshita dono kaisha_i-o-mo_k
it-GEN employee-NOM criticized which company-ACC-also
'Its_i employee criticized every company_i.'

In (57c), the postverbal universal object is scrambled rightward, which is an A-movement. The A-moved postverbal term serves as the binder of the pronominal variable without causing the WCO effect. The postverbal term commands a term to its left, at least in the LF¹³.

Sixth, rightward scrambling to the postverbal position licenses a parasitic gap.

(58) Right-scrambled post-V term licenses parasitic gap.

a. ?? John-wa [Mary-ga [PRO e_i yom-azuni] sono honi-o suteta to] omotteiru.
John-TOP Mary-NOM reading-without the book-ACC discard that thinks
'John thinks that Mary threw away the book without reading.'

- b. sono honi-o_k John-wa [Mary-ga [PRO e_i yom-azuni] t_k suteta to] omotteiru
 the book-ACC John-TOP Mary-NOM reading-without discard that thinks
 ‘John thinks that Mary threw away the book without reading.’
- c. John-wa [Mary-ga [PRO e_i yom-azuni] t_k suteta to] omotteiru sono honi-o_k.
 John-TOP Mary-NOM reading-without discard that thinks the book-ACC
 ‘John thinks that Mary threw away the book without reading.’

In (58c), the A-moved lower object licenses the parasitic gap. The postverbal term commands a term to its left, at least in the LF. These examples indicate that the rightward dislocation in Japanese is a syntactic operation that interacts with various syntactic conditions, and it is highly likely that the dislocated postverbal term is the highest asymmetrical commander within the minimal clause.

Kuroda (1980) also assumes that the postverbal term is within the same minimal sentence. Kuroda claims, however, that a sentence with the postverbal term needs special treatment because, unlike leftward dislocation, which can occur both in the matrix and the embedded clauses, rightward dislocation takes place only in the matrix clause.

- (59) a. [_{CP} [_{CP} [John-ga Mary-o nagutta]-no]-wa kinoo-da].
 John-NOM Mary-ACC beat-that-TOP yesterday-is
 ‘Speaking of the fact that John beat Mary, it happened yesterday.’
- b. * [_{CP} [_{CP} [John-ga nagutta Mary-o] -no]-wa kinoo-da].
 John-NOM beat Mary-ACC -that-TOP yesterday-is
 ‘Speaking of the fact that John beat Mary, it happened yesterday.’

According to Kuroda (1980), (59b) indicates that rightward dislocation does take place in the embedded clause, which is the standard assumption that Japanese right dislocation must target the highest root node (Cf. Cecchetto

Flexible Command:

1996). However, I think that (59b) is not sufficiently idealized for the test because the rightward dislocation is always unacceptable with the formal nominalizer *no* even in the matrix clause.

(60-1) a. [_{CP} John-ga Mary-o nagutta-no-da].
John-NOM Mary-ACC beat-that-is
'John beat Mary (that's why).'

b. * [_{CP} John-ga nagutta Mary-o - no-da].
John-NOM beat Mary-ACC -that-is
'John beat Mary (that's why).'

The morpheme *no-da* is a modal auxiliary at the matrix level, which is used to explain the background of the event in question (Teramura 1984). With the nominalizer *no*, rightward dislocation is bad everywhere. In addition, (59b) becomes better if the object appears immediately after the topic marker.

(60-2) ? John-ga nagutta-no-wa Mary-o kinoo-da.
John-NOM beat-that-TOP Mary-ACC yesterday-is
'Speaking of the fact that John beat Mary, it happened yesterday.'

One cannot use these examples to indicate that rightward dislocation takes place only in the matrix clause. The following examples indicate that rightward dislocation does occur in the embedded environment.

(61-1) a. [_{CP} Bill-wa [_{CP} John-ga Mary-o nagutta-nodewanaika-to] utagatteiru].
Bill-TOP John-NOM Mary-ACC beat-wonder-that suspect
'Bill suspects that John beat Mary.'

- b. [_{CP} Bill-wa [_{CP} John-ga t_i nagutta-nodewanaika Mary-o_i -to] utagatteiru].
 Bill-TOP John-NOM beat-wonder Mary-ACC -that suspect
 'Bill suspects that John beat Mary.'

Note that the above examples do not include a verb of statement. Therefore, they do not include direct quotations that are comparable to the matrix clause. As in the example in (61-1b), rightward dislocation is possible in the embedded clause, contrary to Kuroda's observation. Cecchetto (1999: 65) report the following example that seems consistent with Kuroda's observation.

- (61-2) * Ken-wa okusan-ni [[[t_i yameru]-tte] kaisya-o_i] itta.
 Ken-TOP wife-to quit -that company-ACC said
 'Ken said to his wife that he would quit his company.'

However, if the embedded-clause object dislocated rightward between the lower TP and the CP, the example is ameliorated.

- (61-3) ? Ken-wa okusan-ni [[[t_i yameru] kaisya-o_i] -tte] itta.
 Ken-TOP wife-to quit company-ACC-that said
 'Ken said to his wife that he would quit his company.'

Japanese right dislocation can target the node lower than the root. Turkish PVC (post verbal constituent) also can appear in the embedded clause if the embedded clause is not nominal (Erguvanlı (1984:113), Takano (2007: 24-25)). Note that Japanese allows the embedded PVC in nominal clause, as in (60-2).

Furthermore, Japanese allows right dislocation to a non-root position between the verb and the auxiliary as in the following, which poses a serious problem for Cecchetto (1999), who constructs a model with the assump-

Flexible Command:

tion that Japanese right dislocation must target the root node. SP stands for sentence particle.

- (61-4) a. ? John-wa tabeta, osushi-o, rashii-yo.
John-TOP ate sushi-ACC look-SP
'It looks like John ate sushi.'
- b. John-wa tabeta, osushi-o, toiukoto-rashii-yo.
John-TOP ate sushi-ACC fact-look-SP
'The fact is that it looks like John ate sushi.'

With pauses, the examples are relatively acceptable. Cecchetto (1999: 78, n. 37) mentions the difference between Hindi-Urdu and Japanese in that the former allows non-root right dislocation.

- (61-5) a. * Sita-ne dhyaan-se t_i dekh-aa thaa kis-ko? [Hindi-Urdu]
Sita-ERG care-with look-PAST.PERF was who-ACC
'Who had Sita looked at carefully?' (Bhatt and Dayal 2007: 290-291)
- b. Sita-ne dhyaan-se t_i dekh-aa kis-ko, thaa?
Sita-ERG care-with look-PAST.PERF who-ACC was
'Who had Sita looked at carefully?'
(Cf. Mahajan 1997b, Bhatt and Dayal 2007: 290-291)

Like Japanese, Hindi-Urdu disallows right dislocation of a wh-phrase as in (61-5a), but allows the wh-phrase dislocated between the verb and the auxiliary as in (61-5b). Interestingly, the Japanese counterparts show a similar effect.

- (61-6) a. * John-wa tabeta-no nani-o?
John-TOP ate-Q what-ACC
'What did John eat?'

- b. ?? John-wa tabeta, nani-o, toiukoto-rashii-no?
John-TOP ate what-ACC fact-look-Q
'What is it look like John ate?'

In the ameliorated examples, the *wh*-phrase ceased to be the final term and it occupies the CP Spec in the eye of the LCA, a possibility. See note 4 for the relevant discussion.

Cecchetto (1999: 54-58) argues that Japanese right dislocation is a well-behaved syntactic phenomenon for the following reasons.

- (62) Reasons that Japanese right dislocation is syntactic phenomenon
- a. It obeys Subjacency Condition (island constraint).
 - b. It obeys the Proper Binding Condition (PBC).
 - c. It shows Relativized Minimality effect.

The argument supports our main claim. Cecchetto claims that “our understanding of optionality and directionality has been affected negatively by the fact that much attention has been devoted in the previous literature to leftward detachment (scrambling and topicalization), while very limited attention has been devoted to rightward detachment (ibid. 49).” I agree with Cecchetto in that we tend to stipulate that the study of permutation, or more generally, of symmetry, in the C_{HL} should focus on leftward dislocation phenomena. At the earlier stages of research on the symmetry issue, at least for Japanese, we had three research options.

- (63) Possible research options for the study on symmetry in C_{HL}
- a. To start with Haraguchi (1973), concentrating on rightward dislocation, as in Simon (1989).
 - b. To adopt Kuroda (1980), concentrating on leftward dislocation, as in Saito (1985).

Flexible Command:

- c. To pursue a well-balanced study of both leftward and rightward dislocation.

The trend of academic politics has favored the second line, and ignored the other two. The linguists adopting the second position somehow believe without solid evidence that rightward dislocation forms a heterogeneous set (a lot of semantics and pragmatics), and that leftward dislocation constitutes a pure and good object for fruitful research (as pure syntax). I think that the second line has been influenced negatively by the research attitude within generative syntax that the main objects of study are operations such as *wh*-movement, topicalization, and passivization (leftward dislocations) rather than operations such as extraposition and heavy NP shift (rightward dislocation). I think that, unlike SVO languages, SOV languages (the majority (45%) of human natural language; SVO=35%, VSO =18%, etc.) constitute excellent phenotypes for symmetry studies of the system that Mother Nature has created, and that dislocation phenomena in general (whether leftward or rightward) are an excellent natural object that we can observe to identify the relevant natural laws.

Let us now reexamine each test. The Subjacency Condition prohibits a term from being extracted out of an island (complex structure) such as complex DPs and adjunct clauses¹⁴. A term cannot move out of a complex structure at a single swoop because such a move exceeds the limit of the memory capacity of the C_{HL}. Observe typical examples of the Subjacency Condition violation.

- (64) a. * Who_i did Mary criticize [_{DP} the person that John introduced t_i to Bill]?
b. * Who_i did Mary criticize John_j [after he_j introduced t_i to Susan]?

In (64a), the complex DP is too complex a structure for the wh-phrase to be extracted. In (65b), the adjunct clause is too complex a structure for the wh-phrase to be extracted. In a sense, the wh-phrase and the trace (the copy of the wh-phrase) are too distant to be connected. That is, the memory load is too costly for the system to connect the wh-phrase and the copy in these examples. Let us look at examples in Japanese¹⁵.

(65-1) NS extraction out of complex DP in Japanese

- a. Mary-wa [John-ga Bill-ni syookai-shita hito]-o hihan-shita.
 Mary-TOP John-NOM Bill-DAT introduction-did person-ACC criticism-did
 'Mary criticized the person that John introduced to Bill.'
- b. * Bill-ni Mary-wa [John-ga t_i syookai-shita hito]-o hihan-shita.
 Bill-DAT Mary-TOP John-NOM introduction-did person-ACC criticism-did
 '(Lit.) To Bill, Mary criticized the person that John introduced.'
- c. * Mary-wa [John-ga t_i syookai-shita hito]-o hihan-shita Bill-ni.
 Mary-TOP John-NOM introduction-did person-ACC criticism-did Bill-DAT
 'Mary criticized the person that John introduced, to Bill.'

Both in the leftward and rightward dislocation out of the island (complex DP), the outcomes are unacceptable. These examples indicate that Japanese scrambling obeys the Subjacency Condition (island constraint). Therefore, Japanese rightward scrambling is a syntactic phenomenon. The following paradigm shows more clearly that Japanese dislocation is a syntactic phenomenon.

(65-2)

- a. John-wa [shiranai kuni-kara kita hito-ni] deatta.
 John-TOP unknown country-from came person-DAT encountered
 'John encountered a person that came from an unknown country.'

Flexible Command:

- b. * shiranai kuni-karai John-wa [ti kita hito-ni] deatta.
unknown country-from John-TOP came person-DAT encountered
'John encountered a person that came from an unknown country.'
- c. * John-wa [ti kita hito-ni] deatta shiranai kuni-karai.
John-TOP came person-DAT encountered unknown country-from
'John encountered a person that came from an unknown country.'

The conclusion contradicts Takano (2010), which argues that island effects are absent or weak in Japanese dislocation. But I think that Takano (2010) lacks sufficient idealization of data. Necessary idealizations are the following. First, move PP to make sure that it leaves a trace (not a *pro*) in the island (Saito 1987). Second, choose PP that does not associate with the matrix-clause verb. For example, (13b) in Takano (2010) becomes worse when the matrix verb *-o shitteiru* 'knows -' is replaced by *-ni haitta* 'entered -.' Third, avoid arbitrary addition of pauses and stresses. For example, (13a) in Takano (2010) becomes better if a pause is inserted after the dislocated object; such object becomes the major object (a species of topic) that leaves a *pro*. Fourth, avoid arbitrary omission of matrix arguments, which causes the dislocated term to be interpreted at the matrix level. For example, (11) (cited from Simon 1989, and used in Endo 1996, Abe 1999, Tanaka 2001) and (12) in Takano (2010) are worse because the matrix subject omission causes the embedded subject to behave as the matrix subject. Such interference of irrelevant factors must be avoided.

Let us look at the NS extraction out of another island, i.e., an adjunct clause.

(65-3) NS extraction out of adjunct clause in Japanese

- a. Mary-wa [John-ga Susan-ni Bill-o syookai-shita-atode], John-o hihan-shita.
 Mary-TOP John-NOM Susan-DAT Bill-ACC introduction-did-after John-ACC criticism-did
 ‘Mary criticized John after he (John) introduced Bill to Susan.’
- b. ?? Bill-o_i Mary-wa [John-ga Susan-ni *t_i* syookai-shita-atode], John-o hihan-shita.
 Bill-ACC Mary-TOP John-NOM Susan-DAT introduction-did-after John-ACC criticism-did
 ‘(Lit.) Bill_i, Mary criticized John after he (John) introduced *t_i* to Susan.’
- c. * Mary-wa [John-ga Susan-ni *t_i* syookai-shita-atode], John-o hihan-shita Bill-o_i.
 Mary-TOP John-NOM Susan-DAT introduction-did-after John-ACC criticism-did Bill-ACC
 ‘(Lit.) Mary criticized John after he (John) introduced *t_i* to Susan, Bill_i.’

It is observed that the rightward dislocation is worse. Two possibilities follow. First, the right dislocation is a more well-behaved, syntactic phenomenon. Second, the adjunct clause is less complex as an island in that it tolerates leftward dislocation, which is costless. Whichever line we take, one thing is clear: the rightward dislocation (extraction) out of an island obeys the Subjacency Condition (island constraint) and is thus a syntactic phenomenon.

Takano (2007: 18) citing Kural (1997) reports that right dislocation in Turkish, an SOV language, obeys the island constraint.

(66-1) NS extraction out of complex DP in Turkish

- a. * Ayşe-ye_i ben [[Ahmet-in *t_i* verdiği] kitab]₋₁ sevdim.
 Ayşe-Dat I Ahmet-Gen gave book-Acc liked
 ‘I liked the book that Ahmet gave to Ayşe.’
- b. * pro [[Ahmet-in *t_i* verdiği] kitab]₋₁ sevdim Ayşe-ye.
 (I) Ahmet-Gen gave book-Acc liked Ayşe-Dat
 ‘I liked the book that Ahmet gave to Ayşe.’

Flexible Command:

Both leftward scrambling (66-1a) and rightward scrambling (66-1b) exhibit island violation with respect to complex DP. Consider the NS extraction out of adjunct clause.

(66-2) NS extraction out of adjunct clause in Turkish

- a. * pasta- y_i ben [Ahmet t_i yediği için] sana kızdım.
Cake-Acc I Ahmet ate for you.Dat angered
'I got angry with you because Ahmet ate the cake.'
- b. * pro [Ahmet t_i yediği için] sana kızdım pasta- y_i .
(I) Ahmet ate for you.Dat angered Cake-Acc
'I got angry with you because Ahmet ate the cake.'

Both leftward scrambling (66-2a) and rightward scrambling (66-2b) exhibit island violation with respect to adjunct clause. Like Japanese, Turkish right dislocation shows island effect suggesting that it is a syntactic phenomenon¹⁶.

The second argument for the syntactic nature of Japanese right dislocation arises from the fact that it obeys the PBC. Cecchetto adopts the Parameterized Bare Phrase Structure (BPS) Theory (Saito and Fukui 1998), which has the following characteristics.

(67) Parameterized BPS Theory

- a. A merge forms an ordered pair set $\langle \alpha, \beta \rangle$. The parameter value of a language determines which one must be projected.
- b. When the parameter value is head initial, the leftward dislocation must take place only at the root, whereas the rightward dislocation can take place anywhere.
- c. When the parameter value is head final, the rightward dislocation must take place only at the root, whereas the leftward dislocation can take place anywhere.

The demonstration for (67b) is as follows. Suppose a DP adjoined to the left of the TP in an SVO language, and the DP projected. The entire tree is now a DP with the TP in its Spec. At the final step, the C selects the DP, in violation of a selectional restriction, which requires the C to select the TP, not the DP. Therefore, leftward adjunction cannot take place at the site that is not the root. Now suppose a DP adjoined to the left of the CP, and the DP projected. The entire tree is now a DP with the CP in its Spec. This is the final step. Nothing selects this root node. Selectional restrictions are vacuously satisfied. Therefore, leftward adjunction can take place only at the root in SVO languages. No such asymmetry exists for rightward dislocation; it can occur anywhere (Q.E.D.).

The demonstration for (67c) is as follows. Suppose a DP adjoined to the right of the TP in an SOV language, and the DP projected. The entire tree is now a DP with the TP in its Spec. At the final step, the C selects the DP, in violation of a selectional restriction, which requires the C to select the TP, not the DP. Therefore, rightward adjunction cannot take place at the site that is not the root. Now suppose a DP adjoined to the right of the CP, and the DP projected. The entire tree is now a DP with the CP in its Spec. This is the final step. Nothing selects this root node. Selectional restrictions are vacuously satisfied. Therefore, rightward adjunction can take place only at the root in SOV languages. No such asymmetry exists for rightward dislocation: it can occur anywhere (Q.E.D.).¹⁷

Given the Parameterized BPS Theory as above, Cecchetto cites Saito's (1985) examples to indicate that both leftward and rightward dislocation obey the PBC. Consider leftward dislocation. In the following examples, unlike Saito's, the matrix subject bears the topic marker to make sure that the matrix clause is a CP.

Flexible Command:

(68)

- a. [CP [PP kono mura-ni]_j [CP [CP Bill-ga t_j sundeiru-to]_i [CP John-wa t_i omotteiru]]].
 this village-in Bill-NOM live-that John-TOP think
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’
- b. * [CP [CP Bill-ga t_i sundeiru-to]_j [CP [PP kono mura-ni]_i [CP John-wa t_j omotteiru]]].
 Bill-NOM live-that this village-in John-TOP think
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’

In (68a), the embedded clause is scrambled leftward, and then the embedded locative PP therein undergoes leftward scrambling. The PP is used to guarantee that the movement leaves a trace (Saito 1987). In (68b), the embedded locative PP is scrambled leftward, and then the embedded clause undergoes leftward scrambling. The example in (68b) is in violation of the PBC; the trace in the leftmost adjunct clause adjoined to the matrix CP at the final step fails to be commanded by the possible binder¹⁸. Cecchetto argues that the following rightward dislocation examples obey the PBC.

(69)

- a. [CP [CP [CP Bill-ga t_j sundeiru-to]_i [CP John-wa t_i omotteiru]] [PP kono mura-ni]_j].
 Bill-NOM live-that John-TOP think this village-in
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’
- b. * [CP [CP [PP kono mura-ni]_i [CP John-wa t_j omotteiru]] [CP Bill-ga t_i sundeiru to]_j].
 this village-in John-TOP think Bill-NOM live-that
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’

In (69a), the rightward dislocation targets the root. The postverbal PP is the highest asymmetrical commander. The PBC is respected. In (69b), the postverbal CP is the highest asymmetrical commander. The trace inside the CP fails to be bound by the binder (PP) and thus the PBC viola-

tion¹⁹. Cecchetto also refers to multiple scrambling.

- (70) [_{CP} [_{CP} [_{CP} John-wa t_j omotteiru] [_{PP} kono mura-ni]_i] [_{CP} Bill-ga t_i sundeiru-to]_j].
 John-TOP think this village-in Bill-NOM live-that
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’

Suppose that the locative PP first undergoes rightward scrambling and then the embedded clause CP. Then, the PBC incorrectly predicts that the example should be ruled out. Cecchetto argues that the above structure is incorrect and that in the correct structure, the embedded clause CP first undergoes rightward scrambling, and then the locative PP undergoes leftward scrambling within the CP, as in the following.

- (71) [_{CP} [_{CP} John-wa t_i omotteiru] [_{CP} [_{PP} kono mura-ni]_j] [_{CP} Bill-ga t_j sundeiru-to]_i].
 John-TOP think this village-in Bill-NOM live-that
 ‘John thinks that Bill lives in this village.’

The locative PP commands the trace in the embedded clause CP. Hence the example obeys the PBC. To support this analysis, Cecchetto refers to Jun Abe’s observation that the example is unacceptable when a pause separates the two adjuncts. In the correct structure, the pause does not separate the PP and the CP. I agree with Abe that the example is unacceptable when a pause separates the two adjuncts. However, the example becomes acceptable when two pauses are inserted, one between the matrix CP and the locative PP, and the other between the locative PP and the embedded CP. Why can the analysis ignore the first pause? Why must clause-internal leftward scrambling take place? I will argue later that the acceptability is accounted for with the successive rightward scrambling structure, which is simpler and natural, if we attribute the acceptability

Flexible Command:

to the fact that, unlike multiple leftward scrambling, multiple rightward scrambling disobeys the Minimality Condition on Reconstruction (MCR, Kuno 2006) because of the distinct types of commands that the system chooses for leftward and rightward scrambling (caused by the difference in cost in movement operation as proposed in Fukui's (1993) Parameter Value Preservation measure).

Cecchetto argues that Japanese rightward dislocation shows a Relativized Minimality (RM) effect. Cecchetto points out the following parallelism between English and Japanese. The examples are adapted from Cecchetto (1999: 57).

- (72) a. How_i do you think she fixed the car t_i?
b. * How_i don't you think she fixed the car t_i?

In (72b), the RM dictates that the matrix C must attract a phonetically null operator Neg-Op in the Spec of the matrix NegP because the Neg-Op is closer to matrix C. However, the C has attracted the adjunct wh-phrase that is not closest to the C, which is a violation of the RM. Consider these Japanese examples.

(73)

- a. Mary-wa [t_i John-o party-ni yob-ana-i-to] omotteiru daremo.
Mary-TOP John-ACC party-to invite-not-PRES-that think no one
'Mary thinks that no one will invite John to the party.'
- b. ?* Mary-wa [t_i John-o party-ni yob-ana-i-kadooka] shiritagatteiru daremo.
Mary-TOP John-ACC party-to invite-not-PRES-whether wonder no one
'Mary wonders whether no one will invite John to the party.'

In (73b), the RM dictates that the matrix C must attract a phonetically

null operator *Whether*-Op in the Spec of the matrix CP because the *Whether*-Op is closer to the matrix C. However, the C has attracted the negative polarity item (NPI)-phrase that is not closest to the C, which is a violation of the RM. The fact that Japanese rightward dislocation shows the RM effect indicates that the phenomenon is syntactic in nature.

Now, let us ask a more specific question. Is the postverbal term within the minimal simplex clause or within the second independent clause? There is evidence indicating that the postverbal term exists within the minimal simplex clause. First, look at the following examples in which the NPI scrambles rightward to the postverbal position and is reconstructed in the LF (so that the NEG commands the NPI).

- (74) a. John-wa t_i tabe-na-katta nanimo_i. [na.ni.mo] = [LLL]
 John-TOP eat-NEG-PAST anything
 'John didn't eat anything.'
- b. John-wa t_i tabe-na-katta osushi-shika_i. [shi.ka] = [LL]
 John-TOP eat-NEG-PAST sushi-NPI
 'John didn't eat anything but sushi.'

The following examples show that a long-distance reconstruction exists.

- (75) a. [John-wa [Mary-ga t_i tabe-nakat-ta to] itta] nanimo_i
 John-TOP Mary-NOM eat-NEG-PAST said anything
 'John said that Mary didn't eat anything.'
- b. [John-wa [Mary-ga t_i tabenakatta to] itta] osushi-shika_i
 John-TOP Mary-NOM eat-NEG-PAST said sushi-NPI
 'John said that Mary didn't eat anything but sushi.'

Maruyama (1999: 50-52) offers more examples of this phenome-

Flexible Command:

non. Maruyama argues that the NPI disobeys the clausemate condition, which requires the NPI and the NEG to be in the same simple minimal clause as in the following. The example is adapted from Maruyama (1999: 51).

- (76) John-wa [PRO sono hon-shika yonda to] iw-ana-katta.
John-NOM the book-NPI read that say-NEG-PAST
'John said that he had read nothing but the book.'

My observation is that the example is acceptable if the embedded-clause object is interpreted in the matrix-clause. The correct structure is the following.

- (77) John-wa sono hon_i-shika [PRO pro_i yonda to] iw-ana-katta.
John-NOM the book-NPI read that say-NEG-PAST
'John said that he had read nothing but the book.'

The NPI-phrase behaves as the second topic. If that is the case, the NPI does obey the clausemate condition. It follows that the sentence with the postverbal NPI has the following structure.

- (78) John-wa [PRO pro_i yonda to] iw-ana-katta sono hon_i-shika
John-NOM read that say-NEG-PAST the book-NPI
'John said that he had read nothing but the book.'

If so, the postverbal term exists within the minimal simplex clause. Crucially, the postverbal term does not exist in the second clause. Maruyama argues that the example becomes bad when the complement clause is scrambled rightward.

- (79) * John-wa t_i iw-ana-katta [PRO sono hon-shika yonda to]_i
 John-NOM say-NEG-PAST the book-NPI read that
 ‘John said that he had read nothing but the book.’

The example indicates that the postverbal clausal complement becomes an island for the NPI reconstruction. However, if pauses exist before and after the NPI-phrase, the sentence is ameliorated.

- (80) John-wa iw-ana-katta, sono hon-shika, yonda to.
 John-NOM say-NEG-PAST the book-NPI read that
 ‘John said that he had read nothing but the book.’

In this example, the embedded-clause object is scrambled rightward, followed by the scrambling of the embedded verb. The structure is the following.

- (81) [[[John-wa t_i [_{CP} pro_i t_j] iw-ana-katta] [sono hon-shika]_j] [yonda to]_i]
 John-NOM say-NEG-PAST the book-NPI read that
 ‘John said that he had read nothing but the book.’

The NPI-phrase can reconstruct because there is no island. This, in turn, indicates that the postverbal term is contained within the minimal simplex clause.

In summary, the above examples indicate that a postverbal term in SOV languages is calculated as the highest commander scrambled rightward within the minimal simplex clause, at least in the LF (covert syntax after spell-out), and possibly in the PF. If so, the LCA correctly predicts that a wh/focus phrase cannot appear in the postverbal position in SOV languages. That is, the LCA requires the postverbal asymmetrical commander to be pronounced at the beginning of the sentence, which is not

Flexible Command:

phonetically realized, in violation of the LCA. However, a non-wh/focus phrase can appear in the postverbal position in these languages, and the postverbal phrase behaves as a binder (hence, commander) for LF computation. Why does the LCA fail to rule out these examples? This is the Bayer's paradox, or the LCA puzzle that we have to solve.

3.1.3. A solution

As [WH]-agreement (checking, valuation, and deletion of relevant formal features), [FOC]-agreement takes place in the narrow (overt) syntax (NS) as well as in the covert (LF). [FOC] here indicates identification-focus (FOC^{ID}), not information-focus (FOC^{INFO}), in the sense of Kiss (1998). FOC^{ID} includes terms with quantificational forces such as wh-phrases and contrastive topics, and bears heavier stress. FOC^{INFO} lacks quantificational forces and bears lighter stress. See Karimi (1999: 5) for relevant discussion. In the following example, [FOC]-agreement takes place in the LF.

- (82) John-wa nani-o tabe-ta-no?
John-TOP what-ACC eat-PAST-Q
'What did John eat?'

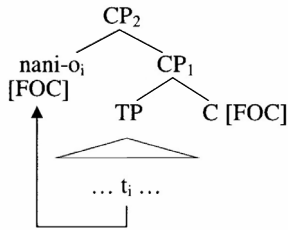
The LF-agreement does not interact with the PF measure (the LCA), and thus, does not affect the linear order permutation (i.e., the basic word order is preserved).

The [FOC]-agreement in the NS on the other hand affects the LCA calculation in the PF. The presence of agreement forces the system to choose the exclusion-type disconnection (level (a), the least disconnected) for command calculation (for the LCA purpose in the PF). A relevant example showing the preceding situation is the following.

- (83) nani-o_i John-wa t_i tabe-ta-no?
 what-ACC John-TOP eat-PAST-Q
 'What did John eat?'

The relevant structure is the following.

- (84) Scrambling of wh-phrase to sentence-initial position



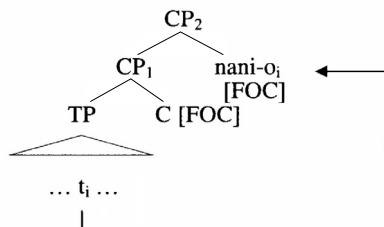
The wh-phrase and the C agree. The presence of agreement forces the system to choose the least disconnected level (a). The wh-phrase excludes the two-segment category [CP₂, CP₁] and everything that [CP₂, CP₁] dominates. Therefore, the wh-phrase asymmetrically commands every term in the CP. The LCA requires that the wh-phrase be pronounced at the beginning of the sentence, which occurs in this example. The LCA is satisfied. Let us look at a crucial example.

- (85) * John-wa t_i tabe-ta-no nani-o_i?
 John-TOP eat-PAST-Q what-ACC
 'What did John eat?'

The relevant example is the following.

Flexible Command:

(86) Scrambling of wh-phrase to sentence-final position



The wh-phrase and the C agree. The presence of agreement forces the system to choose the least disconnected level (a). The wh-phrase excludes the two-segment category $[CP_2, CP_1]$ and everything that $[CP_2, CP_1]$ dominates²⁰. Therefore, the wh-phrase asymmetrically commands every term in the CP. The LCA requires that the wh-phrase be pronounced at the beginning of the sentence, which does not occur in this example. Therefore, the example is excluded as an LCA violation at PF. The postverbal exclamatory-wh-phrase is excluded in the same way.

Takano (2010: 9) proposes that C bearing $[-F]$ (a counterpart of a focus feature) attracts a constituent bearing $[-F]$. Takano's analysis becomes compatible with my analysis if we assume that $[-F]$ is FOC^{INFO} , and that FOC^{INFO} does not establish agreement.

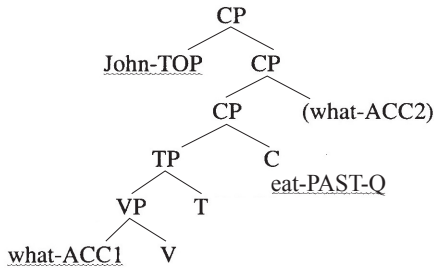
It is predicted that the example would be acceptable if the postverbal wh-phrase fails to agree with the C. The prediction is borne out, as demonstrated by the following acceptable examples²¹.

- (87) a. John-wa t_i tabeta-no nani-o?
 John-TOP ate-Q what-ACC
 'Did John eat that thing (whatchamacallit)?'

- b. John-wa nani-o tabe-ta-no nani-o?
 John-TOP what-ACC eat-PAST-Q what-ACC
 'What did John eat?'
- c. John-wa [nan-to sugoi e-o] kaita-n-daroo [nan-to sugoi e-o]!
 John-TOP stunning picture-ACC drew-fact-may what-that stunning picture-ACC
 'What a stunning picture John drew!'

In these examples, the sentence-final wh-phrase is, in fact, the original copy within the VP. Other terms have undergone multiple leftward scrambling to higher positions. The relevant structure of (87a) is the following.

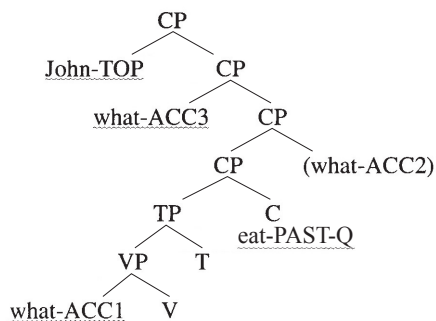
(88)



The pronounced terms are wave underlined, and the parentheses indicate that the term exists but is not pronounced (being invisible to the LCA). There are two copies of the same wh-phrase. *What-ACC1* is externally merged. At this stage, the uF [ACC] is checked and erased, and the term is assigned a θ by V. Crucially, when the C appears, the C [+FOC] does not agree with the pronominal wh-phrase. As a result, *what-ACC2* fails to become a commander and is thereby invisible to the LCA. The LCA can see *what-ACC1*, but not *what-ACC2*. The relevant structure of (87b) is the following.

Flexible Command:

(89)



There are three copies of the same wh-phrase. *What-ACC1* is externally merged. At this stage, uF [ACC] is checked and erased, and the term is assigned θ by V. Crucially, when C appears, C [+FOC] chooses to agree with *what-ACC1*, which C will attract at LF. Therefore, when *what-ACC2* is internally merged (by rightward scrambling), C and *what-ACC2* do not agree. As a result, *what-ACC2* fails to become a commander and is thereby invisible to LCA. *What-ACC3* is the copy of *what-ACC2*, which is internally merged (scrambled leftward) at a later stage. *What-ACC1* undergoes successive cyclic scrambling. LCA can see *what-ACC1* and *what-ACC3*, but not *what-ACC2*. The example (87c) is accounted for in the same way. If *what-ACC1* undergoes further leftward scrambling, the following order is produced.

- (90) nani-o John-wa t tabe-ta-no nani-o?
 what-ACC John-TOP eat-PAST-Q what-ACC
 ‘What did John eat?’

If all LCA-visible wh-phrases are pronounced, the following order is pro-

duced.

- (91) nani-o John-wa nani-o tabe-ta-no nani-o?
 what-ACC John-TOP what-ACC eat-PAST-Q what-ACC
 ‘What did John eat?’

This example is important in that it relates to the tension between the computational efficiency-based hypothesis that what is pronounced is the highest copy, allegedly required by computational efficiency (pronouncing one copy is more economical than pronouncing two or more copies), as shown by ungrammatical examples as ‘* What did John eat what?’, and the communicative efficiency-based hypothesis that pronouncing all copies facilitates communicative usability (cf. Chomsky 2005).

A more difficult problem is that the issue involves the additional-wh saving effect, in which additions of wh ameliorate the acceptability.

- (92-1) a. * Mary-ni CD-o ageta-no dare-ga?
 Mary-DAT CD-ACC gave-Q who-NOM
 ‘Who gave the CD to Mary?’
 b. ? dare-ni nani-o ageta-no dare-ga?
 Who-DAT what-ACC gave-Q who-NOM
 ‘Who gave what to whom?’

The additional wh-phrases remedy the acceptability in (92-1b). Watanabe (1992) reported the additional-wh effect as in the following.

- (92-2) a. ?? John-wa [Mary-ga nani-o katta kadooka] Tom-ni tazuneta-no?
 John-TOP Mary-NOM what-ACC bought whether Tom-DAT asked-Q
 ‘What is the thing x such that John asked Tom whether Mary bought x?’

Flexible Command:

- b. John-wa [Mary-ga nani-o katta kadooka] dare-ni tazuneta-no?
John-TOP Mary-NOM what-ACC bought whether who-DAT asked-Q
'Who is the person y and what is the thing x such that John
asked y whether Mary bought x?'

In (92-2a), a phonetically null *wh*-operator inside the *wh*-phrase located within the *wh*-island undergoes overt *wh*-movement to the matrix CP Spec and the Subjacency Condition is violated. Thus Watanabe argued that Japanese has overt *wh*-movement as in English. In (92-2b), the additional *-wh* in the matrix clause saves the sentence. The matrix *wh* undergoes *wh*-movement in the NS without an island violation. In the LF, the *wh*-phrase inside *wh*-island undergoes *wh*-movement. Given that LF movement is immune to the island effect, no island violation is invoked²².

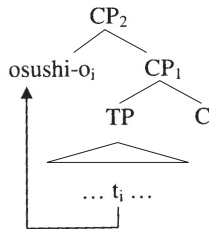
Capitalizing on Watanabe (1992), a possible solution to the (92-1) problem would be the following. In (92-1a), the *wh*-phrase agrees with the [+WH] C and becomes the highest commander by the disconnection-level (a) command. The example violates the LCA requiring the *wh*-commander be pronounced in the first position. In (92-1b), the indirect *wh*-object or (and) the direct *wh*-object is (are) in the agreeing CP Spec in the NS. The *wh*-subject adjoins to the CP in the NS without agreement. Consequently, the *wh*-subject commands nothing by the disconnection-level (c) command. As a last resort, the LCA searches the lower copy of the *wh*-subject located within the TP. The LCA has no problem pronouncing first the indirect and direct object *wh*-phrases in the CP Spec, second the raised predicate in the C, and third the *wh*-subject in the TP Spec (or lower).

Let us consider leftward scrambling of a non-*wh*-phrase.

- (93-1) *osushi-o_i John-wa t_i tabe-ta-no?*
 sushi-ACC John-TOP eat-PAST-Q
 'Did John eat sushi?'

The relevant structure is the following.

- (93-2) Scrambling of non-wh-phrase to sentence-initial position



The wh-phrase and the C do not agree. The lack of agreement forces the system to choose the medially disconnected level (b). Why does the system choose the medially disconnected level (b), not the most disconnected level (c)? The cost of movement as considered by Fukui (1993) is relevant. Fukui (1993: 400) proposed the parameter value preservation (PVP) measure.

- (94) The parameter value preservation (PVP) measure

A grammatical operation (Move α , in particular) that creates a structure that is inconsistent with the value of a given parameter in a language is costly in the language, whereas one that produces a structure consistent with the parameter value is costless.

According to the PVP measure, in a language with the head-parameter set as head final (OV-type), the leftward movement is cheaper than the rightward movement. The rightward movement is more costly because it

Flexible Command:

destroys the basic head-final property. More specifically, the rightward movement, but not the leftward one, is feature driven (more costly) in SOV languages. On the other hand, in a language with the head-parameter set as head-initial (VO-type), the leftward movement is more expensive than the rightward one. The leftward movement is more costly because it destroys the basic head-initial property. More specifically, the leftward movement, but not the rightward one, is feature driven (more costly). In an SOV language, the leftward movement is costless. The low cost of movement forces the system to choose the medially disconnected level (b) but not (c). The non-wh-phrase asymmetrically commands CP1. The LCA requires that the non-wh-phrase be pronounced at the beginning of the sentence, which occurs in this example. The LCA is respected.

An alternative analysis exists in which two distinct formal (structural) features are postulated, i.e., a formal feature that triggers scrambling (FF (SCR)), and a formal feature that triggers focus agreement (FF (FOC)). That is, scrambling is a feature-driven movement that involves agreement. For an argument for FF (SCR), see Miyagawa 1997, Grewendorf and Sabel 1999, Holmberg 2000, Kitahara 2002, Kawamura 2004, Sabel (2001, 2005))²³. If we adopt this line of argument for rightward scrambling, the PF system chooses the disconnection level according to the number of feature checking (agreement) operations. That is, for example, when the postverbal term is a wh-phrase, the dislocation operation involves two instances of agreement: FF (SCR) and FF (FOC) agree with the C. When the postverbal term is a non-wh-phrase, one instance of agreement occurs: FF (SCR) agrees with the C. An alternative is to assume that the PF system is sensitive to the number of agreements (feature-checking). When there is one instance of feature-checking, the PF chooses the most disconnected level (c). When there are two instances of feature-checking, the

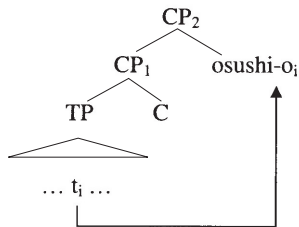
PF chooses the least disconnected level (a). I leave the choice between the two analyses for future research.

Let us next consider rightward scrambling of a non-wh-phrase.

- (95) John-wa t_i tabe-ta-no osushi-o_i?
 John-TOP eat-PAST-Q sushi-ACC
 'Did John eat sushi?'

The relevant structure is the following.

- (96) Scrambling of a non-wh-phrase to the sentence-final position



The non-wh-phrase and the C do not agree. Lack of agreement forces the system to choose the most disconnected level (c). The system chooses disconnection level (c), not (b), because the movement is rightward, which is more expensive. The scrambled phrase commands nothing and is fully disconnected from the rest of the sentence. The PF and the LCA cannot see the scrambled phrase. As a last resort, the PF orders the original copy of the phrase, which exists at the lowest position. Thus, the scrambled non-wh phrase at the sentence-final position is, in fact, the original copy of the phrase. The LCA requires that the non-wh-phrase be pronounced at the end of the sentence, which occurs in this example. Therefore, the

Flexible Command:

example satisfies the LCA at the PF.

Importantly, unlike the PF, the LF sees the scrambled term as the highest commander (PF-LF asymmetry). This is why the scrambled postverbal term serves as the highest commander for the purpose of LF calculations such as scope, binding, WCO, and parasitic gap licensing. The LF is lazier with respect to the types of command; it always chooses the medially disconnected level (b), by which the scrambled term becomes a commander. The PF in contrast is pickier with respect to the types of command in that the PF measure (the LCA) sees the term that establishes the agreement relationship.

3.1.4. Evaluation of previous analyses on word order

The facts have been known that (a) a *wh*/focus-phrase cannot scramble rightward to the postverbal position, (b) a non-*wh*/focus-phrase can scramble rightward to the postverbal position, (c) the postverbal term is the highest asymmetrical commander, (d) the LCA correctly rules out cases in (a), and (e) the LCA incorrectly rules out cases in (b) (Bayer's paradox, or LCA puzzle). This phenomenon resists previous analyses on word order. Let us review several important works on the relationship between structure and order. They cannot solve Bayer's paradox (LCA puzzle) as they stand. First, let us consider the PVP measure (Fukui 1993, Saito & Fukui 1998). The PVP measure states that a parameter-value-destroying movement is costly and needs motivation. The relevant PV (parameter value) for Japanese is head-final, and rightward movement is costly. The analysis correctly predicts that a focused phrase cannot scramble rightward to the postverbal position, provided that such rightward movement lacks motivation in Japanese. However, it incorrectly predicts that a non-focused phrase cannot scramble rightward.

Second, consider dynamic agreement (Rizzi 1991, Bayer 1996: 285–287). The postverbal *wh*-phrase occupies the VP Spec on the wrong (illicit) side (on the right hand side (not left) in SOV languages). By dynamic agreement mechanism, Spec-Head agreement in SOV languages takes place only when Spec is occupied on the licit (left hand) side. Spec-head agreement fails and the VP becomes a barrier for LF movement of the *wh*-phrase. The *wh*-phrase fails to be licensed in the LF. However, the analysis fails to explain the fact that postverbal non-*wh* phrases become the highest commander.

Third, consider demerge (Takano 1996, 2003a, 2003b, Fukui & Takano 1998). The demerge-based linearization instructs as follows: start from the top, demerge XP, and place it earlier. The analysis correctly predicts that a CP-right-adjoined focused phrase cannot appear at the end; because it is the first XP that is demerged, it must be pronounced at the beginning of the sentence. However, it incorrectly predicts that a CP-right-adjoined non-focused phrase cannot appear at the end.

Fourth, consider derivational command (EGKK 1998: 32). Syntactically visible X derivationally commands syntactically visible Y (and the members) only when X and Y are concatenated. Concatenation creates sisters. Adjunction does not create sisters, and an adjunct cannot become a commander (hence syntactically invisible). Derivational command correctly predicts that a *wh*/focus-phrase cannot scramble rightward to the postverbal position (i.e., never enters into linearization), but incorrectly predicts that a term cannot scramble leftward or non-*wh*/focus cannot scramble rightward to the postverbal position.

Fifth, consider the cyclic linearization principle (Fox & Pesetsky 2003). It instructs as follows: avoid an ordering contradiction between vP and CP. That is, linear information at each phase must be preserved. Con-

Flexible Command:

consider a bad example in which a focused DP adjoins to the right of the CP, yielding $\langle \dots, V, DP \rangle$ order at the CP-phase. To get a contradictory order between the CP and vP, we must assume that the DP must move higher than the V at the vP-phase. Consider a good example in which a non-focused DP adjoins to the right of the CP, yielding $\langle \dots, V, DP \rangle$ order at the CP-phase. To get a non-contradictory order between the CP and vP, we must assume that the V must move higher than the DP at the vP-phase. It is unclear why a focused DP raises higher than the V in the vP, whereas a non-focused DP remains lower than the V in the vP. Note that the analysis works if one assumes that a focused phrase raises to the edge of the vP.

Sixth, consider Q-particle movement (Ogawa 1976, Kishimoto 1998, Takahashi 2002, Hagstrom 2004). According to this analysis, a Q-particle in a wh-phrase moves to C to satisfy the relevant feature-checking requirement. Therefore, an additional wh-phrase movement is redundant, which is excluded as an economy principle violation. The analysis correctly predicts that a wh-phrase, unlike a non-wh-phrase, cannot adjoin to the right of the CP. However, the analysis incorrectly predicts that a wh-phrase cannot adjoin to the left of the CP.

Seventh, consider prosodic wh-domain analysis (Richards 2010). According to this analysis, an interrogative sentence is acceptable when the wh-phrase and the relevant C are prosodically close enough. A language allows a wh in situ when the wh and the C are contained in the simplest possible prosodic wh-domain. Otherwise, the wh-phrase must move to the C system as the last resort. In Japanese, the wh-phrase cannot appear in the postverbal position because the wh and the C to its left cannot create the simplest possible prosodic wh-domain. The analysis correctly predicts that prosody is relevant to the types of *nani* and their asym-

metrical distribution. However, the analysis incorrectly predicts that the exclamatory wh-phrase should be allowed to appear in the postverbal position because no wh-feature is involved²⁴.

The following summarizes the evaluation of previous analyses as to how well they account for the Bayer's paradox, or the LCA puzzle. ○ indicates that it is predicted, while × indicates it is unexpected.

(97) Evaluation of previous analyses on structure and word order

	Post-V term as highest commander	Leftward scrambling	Rightward scrambling of non-wh/focus	No rightward scrambling of wh/focus	No post-V exclamatory wh
PVP	○	○	×	○	○
Dynamic agreement	×	○	○	○	○
Demerge	×	○	×	○	○
Derivational command	×	×	×	○	○
Cyclic linearization	Unmotivated movement	Unmotivated movement	Unmotivated movement	Unmotivated movement	Unmotivated movement
Q-particle movement	×	×	○	○	×
Prosodic wh-domain	×	○	○	○	×

The PVP measure analysis and the dynamic agreement analysis compete in that they have four expected facts and one unexpected fact. The PVP measure cannot account for the acceptability of rightward scrambling of non-wh/focus phrases. Under the dynamic agreement analysis, the post-verbal phrase (in SOV languages) is on the right hand (wrong) side Spec of the VP. This analysis encounters a serious problem in that it cannot

Flexible Command:

predict the fact that the postverbal term is the highest asymmetrical commander. That is, the VP Spec is too low to become the highest. Furthermore, it seems ad hoc to assume that the right dislocation is a movement to the right hand side Spec of the VP. Next, the demerge analysis and the prosodic wh-domain analysis compete in that they have three expected facts and two unexpected ones. My solution capitalizes on the PVP measure and can explain all the related facts in a simpler and more natural way.

3.2. Problem 2

3.2.1. Scrambling asymmetry in complex (island) structure

The scrambling transformation affects island extractability both in the NS (Narrow Syntax: the process between lexicon and Spell-Out) and in the LF.

We have seen that Japanese scrambling like Turkish one shows island sensitivity. Consider scrambling out of a complex DP island.

(98)

- a. John-wa [[Mary-ga Bill-ni ageta] hon]-o suteta.
John-TOP Mary-NOM Bill-DAT gave book-ACC discarded
'John discarded the book that Mary gave to Bill.'
- b. * Bill-ni_i John-wa [[Mary-ga t_i ageta] hon]-o suteta.
Bill-DAT John-TOP Mary-NOM gave book-ACC discarded
'John discarded the book that Mary gave to Bill.'
- c. * John-wa [[Mary-ga t_i ageta] hon]-o suteta Bill-ni.
John-TOP Mary-NOM gave book-ACC discarded Bill-DAT
'John discarded the book that Mary gave to Bill.'

Both leftward and rightward scrambling is sensitive to the complex DP island. I argue against Takano (2010: 6), which claims that Japanese postposing lacks island effects.

Maruyama (1999: 47) observes that, unlike leftward scrambling, the right dislocation obeys the Subjacency Condition. Examples are adapted from Maruyama (1999: 47).

- (99) a. Mary-wa [John-o mikaketa-atode] Susan-ni denwa-sita.
 Mary-TOP John-ACC happened to see-after Susan-DAT phone-did
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’
- b. John-o_i [Mary-wa [t_i mikaketa-atode] Susan-ni denwa-sita].
 John-ACC Mary-TOP happened to see-after Susan-DAT phone-did
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’
- c. * [Mary-wa [t_i mikaketa-atode] Susan-ni denwa-sita] John-o_i.
 Mary-TOP happened to see-after Susan-DAT phone-did John-ACC
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’

In (99b), the embedded-clause object can scramble leftward out of the adjunct clause, whereas in (99c), it cannot scramble rightward.

However, I do not think (99b) is sufficiently idealized; it is possible that the embedded-clause object adjoins to the embedded clause that contains the topic phrase inside. If the matrix-clause indirect object appears before the adjunct clause, both leftward and rightward scrambling become sensitive to island.

- (100) a. Mary-wa Susan-ni [John-o mikaketa-atode] denwa-sita.
 Mary-TOP Susan-DAT John-ACC happened to see-after phone-did
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’

Flexible Command:

b. * John-o_i [Mary-wa Susan-ni [t_i mikaketa-atode] denwa-sita].
 John-ACC Mary-TOP Susan-DAT happened to see-after phone-did
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’

c. * [Mary-wa Susan-ni [t_i mikaketa-atode] denwa-sita] John-o_i.
 Mary-TOP Susan-DAT happened to see-after phone-did John-ACC
 ‘Mary was calling Susan after she happened to see John.’

Both leftward and rightward scrambling shows island effect²⁵. An NS operation as scrambling is sensitive to island. Crucially, leftward and rightward scrambling is symmetrical in that they both show island sensitivity. Interestingly, antisymmetry appears when there is an interaction between the NS/LF wh-movement and the leftward/rightward scrambling of a wh-containing complex constituent. Let us first consider non-interrogative clausal complements (a non-island, with the C phonetically realized as *to* ‘that’)²⁶. The pitch pattern of the pronominal *nani* (translated as ‘that thing’) is [LH], and the wh-*nani* (translated as ‘what’) [HL].

- (101) S O V [Japanese]
 Mary-wa [_{CP} John-ga nani-o tabeta to] itta-no?
 Mary-TOP John-NOM what-ACC ate that said-Q
 ‘Did Mary say that John ate that thing?’
 NOT ‘Did Mary say what John ate?’
 ‘What did Mary say John ate?’

The example above indicates that the wh-phrase obligatorily undergoes LF movement after Spell-Out. Let us consider NS movement. The embedded wh-phrase can undergo long-distance leftward scrambling in which the meanings above are preserved. The wh-phrase can undergo NS movement before Spell-Out.

- (102) nani-o_i Mary-wa [_{CP} John-ga t_i tabeta to] itta-no?
what-ACC Mary-TOP John-NOM ate that said-Q
'Did Mary say that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say what John ate?'
'What did Mary say John ate?'

Let us scramble the clausal complement leftward to the sentence-initial position.

- (103) [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]_i Mary-wa t_i itta-no?
John-NOM what-ACC ate that Mary-TOP said-Q
'Did Mary say that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say what John ate?'
'What did Mary say John ate?'

The wh-phrase obligatorily undergoes wh-movement in the LF. The embedded wh-phrase can undergo long-distance scrambling in the NS in which the meaning above is preserved.

- (104) ? nani-o_i denwa-de [_{CP} John-ga t_i tabeta to]_i Mary-wa t_i itta-no?
what-ACC phone-by John-NOM ate that Mary-TOP said-Q
'Did Mary say on the phone that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say on the phone what John ate?'
'What did Mary say on the phone John ate?'

Now, an asymmetry appears when we scramble the clausal complement rightward to the postverbal position. Crucially, the embedded wh-phrase cannot take the matrix scope, indicating that the clausal complement moved to the postverbal position is an island for LF-movement (LF island effect).

Flexible Command:

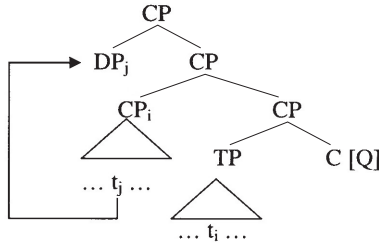
- (105) Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]_i?
Mary-TOP said-Q John-NOM what-ACC ate that
'Did Mary say that John ate that thing?'
'Did Mary say what John ate?'
NOT 'What did Mary say John ate?'

What is interesting is that the example above is acceptable with the narrow-scope reading of the interrogative *wh*-phrase, meaning 'Did Mary say what John ate?', which is absent when the clausal complement is scrambled leftward to the sentence-initial position. Furthermore, the postverbal clausal complement becomes an island not only for LF movement but also for NS movement²⁷.

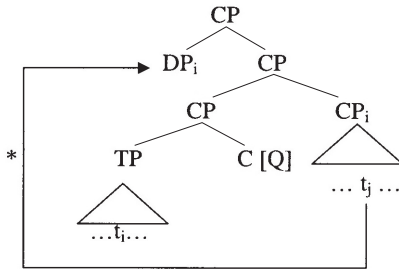
- (106) * nani-o_j [_{CP} Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga t_j tabeta to]_i]_j?
what-ACC Mary-TOP said-Q John-NOM ate that
NOT 'Did Mary say that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say what John ate?'
NOT 'What did Mary say John ate?'

The example above shows that the postverbal clausal complement is an island for NS-movement (NS island effect). As the last translation indicates, the example is unacceptable even with the pronominal *nani* 'that thing,' suggesting that the scrambling in general shows the island effect in postverbal environments²⁸. The following summarizes the island asymmetry.

(107) NS/LF movement out of left-dislocated non-interrogative clausal complement (No island effect is detected.)



(108) NS/LF movement out of right-dislocated non-interrogative clausal complement (Island effect is detected.)



An island effect is observed in the NS and the LF in the postverbal environments. A similar LF island effect is detected in postverbal environments in other SOV languages²⁹.

(109) a. ora t_i Suneche [_{CP} ke aSbe]_i ? [Bengali]
 they heard who come-future
 'Have they heard who will come?'
 NOT 'Who have they heard will come?' (Bayer 1996: 272-273)

Flexible Command:

- b. Raam-ne kahaa [_{CP} ki kOn aa-yaa] hE? [Hindi-Urdu]
Ram-ERG said that who come-past.perf is
'Did Ram say who had come?'
NOT 'Who did Ram say has come?' (Mahajan 1990: 128)

To summarize, the clausal complement in the base position or in the sentence-initial position does not constitute an island for movement in the NS and the LF. In contrast, the clausal complement in the postverbal position constitutes an island for movement in the NS and the LF. The scrambling transformation is antisymmetrical. How can we explain the asymmetry?

3.2.2. A solution

Let us repeat the crucial contrast.

- (110) a. [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]_i Mary-wa t_i itta-no?
John-NOM what-ACC ate that Mary-TOP said-Q
'Did Mary say that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say what John ate?'
'What did Mary say John ate?'
b. Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]_i?
Mary-TOP said-Q John-NOM what-ACC ate that
'Did Mary say that John ate that thing?'
'Did Mary say what John ate?'
NOT 'What did Mary say John ate?'

The *wh*-phrase in (110a) can have the wide scope reading, but not the narrow scope reading. The situation is reversed in (110b): the *wh*-phrase cannot have the wide-scope reading, but it can have the narrow-scope reading. The disappearance of wide-scope reading of *wh* is also observed when

a complex DP is scrambled rightward to the postverbal position.

- (111) a. [nani-o tabeta hito-o]_i Mary-wa t_i hometa-no?
 what-ACC ate person-ACC Mary-TOP praised-Q
 ‘Did Mary praise the person who ate that thing?’ ([naNI])
 ‘What is x, a thing, such that Mary praised the person who ate
 x?’ ([NAni])
- b. Mary-wa t_i hometa-no [nani-o tabeta hito-o]_i?
 Mary-TOP praised-Q what-ACC ate person-ACC
 ‘Did Mary praise the person who ate that thing?’ ([naNI])
 NOT ‘What is x, a thing, such that Mary praised the person who ate
 x?’ ([NAni])

Two questions arise at this point.

- (112) Why does the wide scope reading of *wh* disappear when the complex argument (clausal complement or complex DP) is scrambled rightward to the postverbal position?
- (113) Why does the narrow scope reading of *wh* become possible when the non-interrogative clausal complement is scrambled rightward to the postverbal position?

There are two possible solutions to the first question. The first solution maximizes the parallelism between the complex argument and the simplex argument. If this solution is correct, Nishigauchi (1986) is basically correct in that the entire complex argument containing *wh* behaves as a simplex *wh*-phrase. The lack of wide-scope reading of *wh* for *wh*-containing a complex argument follows from the impossibility of the postverbal interrogative *wh*-phrase, as in the following.

Flexible Command:

- (114) * John-wa t_i tabeta-no nani-o_i?
John-TOP ate-Q what-ACC
'What did John eat?'

The wide-scope reading is impossible because the derivation fails to converge at the PF. More particularly, the LCA is violated (the actual word order contradicts with the order that the LCA demands) if the system forces the wide-scope reading of *wh*.

The second solution capitalizes on the interaction between island and the PVP measure. When the complex argument is scrambled leftward to the sentence-initial position, the PVP measure calculates that the operation is costless. On the other hand, when the complex argument is scrambled rightward to the postverbal position, the PVP measure evaluates it as costly. Island and the PVP measure interact in the following way.

(115) Island-PVP Interaction

A complex argument that has undergone costly movement becomes an island for extraction.

Thus, the lack of wide-scope reading of *wh* in (110b) and (111b) is caused by the island effect in the LF.

Let us consider the second question. Relevant examples are reproduced.

- (116) a. [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]_i Mary-wa t_i itta-no?
John-NOM what-ACC ate that Mary-TOP said-Q
'Did Mary say that John ate that thing?'
NOT 'Did Mary say what John ate?'
'What did Mary say John ate?'

- b. Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga nani-o tabeta to]?
 Mary-TOP said-Q John-NOM what-ACC ate that
 'Did Mary say that John ate that thing?'
 'Did Mary say what John ate?'
 NOT 'What did Mary say John ate?'

As for the interrogative *wh*-reading, the long-distance *wh*-movement is obligatory in (116a), whereas it is prohibited in (116b). Descriptively, when the embedded *C* is [-WH], and the clausal complement does not constitute an island, the matrix *C* [+WH] must attract the *wh*-phrase in the LF enabling the wide-scope reading of *wh*. On the other hand, when the embedded *C* is [-WH] and the clausal complement forms an island, the system attempts as a last resort to identify the embedded *C to* as bearing [+WH] enabling the narrow-scope reading of *wh*. In fact, the *C to* bears [+WH] in the Kagoshima dialect in Japanese.

- (117) a. John-wa na-yu tabeta-to?
 John-TOP what-ACC ate-Q
 'What did John eat?'
 b. Mary-wa [_{CP} John-ga na-yu tabeta-chi/*to] itta-to?
 Mary-TOP John-NOM what-ACC ate-that said-Q
 'What did Mary say John ate?'

As in (117a), the *C to* is *Q*, bearing [+WH]. What is interesting is that the phonetic realization *to* is ruled out as the embedded *C* [-WH]. I propose that the embedded *C to* as *Q* guarantees the narrow-scope reading of the *wh* under consideration.

3.3. Problem 3

3.3.1. Reconstruction asymmetry

There is evidence indicating that scrambling can be semantically significant. More specifically, scrambling exhibits the anti-reconstruction effect (Cf. Takahashi 1993, Abe 1997). Let us consider the following example (Cf. Saito 1989).

(118)

Mary-wa [_{CP} John-ga tosyokan-kara dono hon-o karidashita ka] shiritagatteiru.
Mary-TOP John-NOM library-from which book-ACC checked.out Q want.to.know
'Mary wants to know which book John checked out from the library.'

The Q in the embedded clause licenses the wh-phrase in the embedded clause. What will happen if the embedded-clause wh-phrase undergoes long-distance scrambling to the sentence-initial position? The prediction is as follows. Assume that the relevant Q must command the relevant wh-phrase. If scrambling were semantically significant, the sentence would be ruled out; i.e., the scrambled wh-phrase stays in the matrix clause, and the embedded-clause Q fails to command the wh-phrase. If scrambling were semantically insignificant, the sentence would be ruled in; i.e., the scrambled wh-phrase reconstructs (returns) to the original position in the embedded clause and the embedded-clause Q would command the wh-phrase. As Saito (1989) has noted, leftward long-distance scrambling turns out to be semantically insignificant. A reconstruction effect appears, as in the following example.

(119)

? dono hon-o_i Mary-wa [_{CP} John-ga tosyokan-kara t_i karidashita ka] shiritagatteiru.
 which book-ACC Mary-TOP John-NOM library-from checked.out Q want.to.know
 'Mary wants to know which book John checked out from the library.'
 (Saito 1989)

The wh-phrase that has undergone leftward long-distance scrambling reconstructs to the original trace position. The lower Q commands the wh-phrase. What will happen if the lower wh-phrase undergoes rightward long-distance scrambling to the postverbal position? If scrambling is semantically insignificant, it is predicted that rightward long-distance scrambling is possible; i.e., the scrambled wh-phrase would reconstruct to the original position and the lower Q would command the wh-phrase. That prediction is not born out, as in the following example.

(120)

*Mary-wa [_{CP} John-ga tosyokan-kara t_i karidashita ka] shiritagatteiru dono hon-o_i
 Mary-TOP John-NOM library-from checked.out Q want.to.know which book-ACC
 'Mary wants to know which book John checked out from the library.'

This example is not acceptable. The simplest possible account is that the postverbal wh-phrase remains at the landing site, and therefore, the lower Q fails to command the wh-phrase. It follows that scrambling is semantically significant. The following questions arise. Why is leftward long-distance scrambling semantically insignificant, but rightward long-distance scrambling semantically significant? Why does the system show such asymmetry?

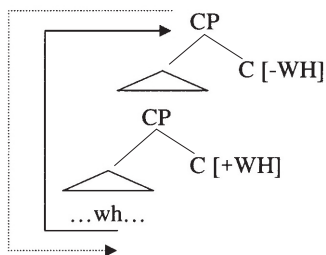
3.3.2. A solution

The PVP measure gives us a simple explanation. According to the PVP

Flexible Command:

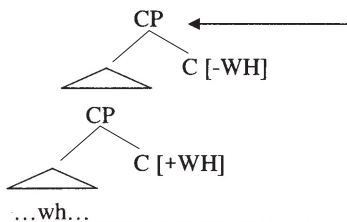
measure, in SOV languages, the leftward movement is costless (non-feature-driven), whereas the rightward movement is costly (feature-driven). A feature-driven movement is semantically significant. The following is the schematic structure of the example in (119).

(121) (= 119) Leftward long-distance scrambling: semantically insignificant



Saito (1989) is correct in that leftward long-distance scrambling is semantically insignificant. The scrambled wh-phrase reconstructs to the original position. The following is the schematic structure of (120).

(122) (= 120) Rightward long-distance scrambling: semantically significant



Saito (1989) is incorrect in that rightward long-distance scrambling is semantically significant. The scrambled wh-phrase does not reconstruct.

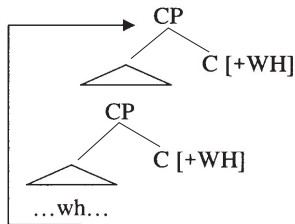
The semantic significance of scrambling has been observed in Takahashi (1993). Takahashi pointed out that when both the matrix and the embedded Qs bear [+WH], the leftward long-distance scrambling to the sentence-initial position is semantically significant, which contradicts Saito's (1989) observation.

(123) a. John-wa [_{CP} Mary-ga nani-o tabeta ka] shiritagatteiru no?
 John-TOP Mary-NOM what-ACC ate Q want.to.know Q
 'Does John want to know what Mary ate?'
 OR 'What does John want to know whether Mary ate?'

b. nani-o_i John-wa [_{CP} Mary-ga t_i tabeta ka] shiritagatteiru no?
 what-ACC John-TOP Mary-NOM ate Q want.to.know Q
 NOT 'Does John want to know what Mary ate?'
 'What does John want to know whether Mary ate?' (Takahashi 1993)

The schematic representation of the example in (123b) is the following.

(124) (= 123b)



Once the wh-phrase scrambles to the matrix CP in (124), the matrix C [+WH] becomes the closest head that checks, values and deletes the relevant formal features. Thus, the anti-reconstruction effect (the semantic significance) receives a simple account under the economy principle.

3.4. Problem 4

3.4.1. Multiple scrambling asymmetry

Another asymmetry is detected in Japanese multiple scrambling. First, consider the scope restriction in leftward multiple scrambling, originally observed in Hoji (1985).

- (125) dareka-ni_j daremo-o_i John-ga t_j t_i syookaishita.
someone-DAT everyone-ACC John-NOM introduced (* $\forall > \exists$, $\exists > \forall$)
'John introduced everyone to someone.'
(Cf. Hoji 1985, Yatsushiro 1996, Kuno 2006)

The universally quantified phrase (UQP) is scrambled to the sentence-initial position, and the scrambling of the existentially quantified phrase (EQP) follows. The EQP must have wide scope over the UQP. It follows that the EQP must command the UQP in the scope calculation. Kuno (2006) proposed that the reconstruction obeys the attract-closest-type economy principle, as in the following.

- (126) Minimality condition on reconstruction (MCR)
Reconstruct the closest. (Cf. Kuno 2006: 98)

The MCR blocks the EQP for reconstruction, that is, the intervening UQP is closer to the reconstruction site and the MCR forces the UQP to reconstruct in the LF. Thus, the EQP commands the UQP in the LF. However, rightward multiple scrambling does not obey the MCR, as in the following.

- (127) John-ga t_j t_i syookaishita daremo-o_i dareka-ni_j.
 John-NOM introduced everyone-ACC someone-DAT
 ‘John introduced everyone to someone.’ ($\forall > \exists$, $\exists > \forall$)

The MCR incorrectly predicts that the example lacks the wide-scope reading of the UQP. Why is it that rightward multiple scrambling disobeys the MCR?

A similar kind of asymmetry appears in multiple scrambling with remnant movement of an embedded clause. The following example obeys the MCR.

- (128) *[[Mary-ga t_i yonda to]_i [sono hon-o_i [John-ga t_j itta]]].
 Mary-NOM read that the book-ACC John-NOM said
 ‘John said that Mary read the book.’ (Saito 1989)

The object DP in the embedded clause is first scrambled leftward and then the remnant embedded clause is scrambled. Saito (1989) argues that the example is ruled out by the proper binding condition (PBC), which states that traces must be bound. However, the PBC solution assumes that the scrambled remnant embedded clause must stay at the landing site. The scrambled CP not reconstructing remains a mystery. The MCR solves the mystery. The MCR requires that the remnant clause must remain at the landing site because of the intervening closer reconstructing term, i.e., the embedded-clause object that is scrambled first. Thus, the PBC accompanied with the MCR accounts for the ungrammaticality. However, the rightward multiple scrambling poses a problem to such an analysis. That is, the rightward multiple scrambling does not show the PBC violation, as in the following²⁰.

Flexible Command:

- (129) [[[John-ga t_j itta] sono hon-o_i] [Mary-ga t_i yonda to] _j].
John-NOM said the book-ACC Mary-NOM read that
'John said that Mary read the book.'

The PBC + MCR analysis incorrectly predicts that the example should be unacceptable; the outer adjunct (the scrambled remnant embedded clause) contains an unbound trace. If we want to maintain the PBC, it follows that the MCR is inoperative in rightward multiple scrambling. Why is it that rightward multiple scrambling disobeys the MCR?

Rightward multiple scrambling's disobedience to the MCR is also found in the bound variable reading of a pronoun, as the following contrast indicates.

- (130) a. * sono_i cyosya-ni_k subete-no hon_i-o_j John-wa t_k t_j watashita.
its author-DAT every-GEN book-ACC John-TOP handed
'John handed every book to its author.' (Cf. Mahajan 1997a: 107-109)
- b. John-wa t_k t_j watashita subete-no hon_i-o_j sono_i cyosya-ni_k
John-TOP handed its every-GEN book-ACC author-DAT
'John handed every book to its author.'

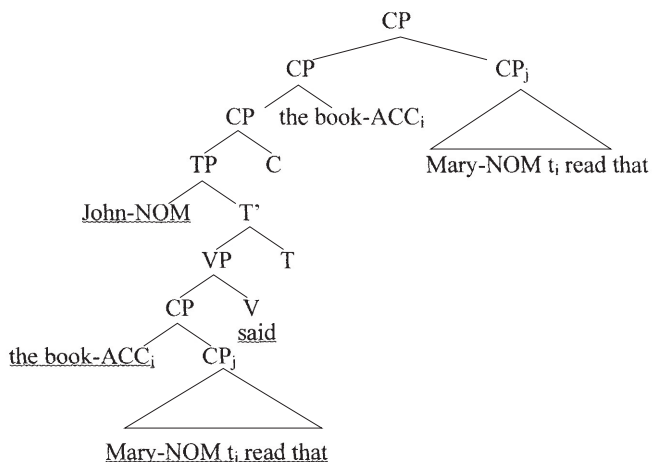
In the example in (130a), the pronominal variable *sono* 'its' cannot have the bound variable interpretation. The MCR prohibits the DP containing the pronominal variable to reconstruct; therefore, the UQP fails to bind the variable. The example in (130b) poses a problem for the MCR. The MCR incorrectly predicts that the example (130b) should also be ungrammatical because the variable in the frozen second adjunct would be unbound. Why is it that rightward multiple scrambling disobeys the MCR?

3.4.2. A solution

Given the PVP measure, in an SOV language, leftward scrambling is costless, whereas rightward scrambling is costly. The difference in the cost causes different levels of disconnection in the definition of command. More specifically, in cheap leftward multiple scrambling, the least disconnected level (the exclusion type) of command is chosen. The exclusion type of command does not have to consider the segment structure of the target. Thus, the computation is simpler, which invokes the simpler exclusion-type command. The outer adjunct commands the inner adjunct. The inner adjunct is closer to the reconstruction site. Therefore, the MCR prohibits the outer adjunct from reconstruction crossing the inner one. In expensive rightward scrambling, the movement is expensive (feature-driven according to the PVP measure), which causes selection of the most disconnected level of command. This level of command must consider every segment of the target. Under this definition of command, an adjunct commands nothing. It follows that the outer and inner adjuncts command nothing. The LCA orders the original copies. In (129), the sentence-final CP is the original copy, the object is the intermediate copy, and the sentence-initial CP is the original matrix CP.

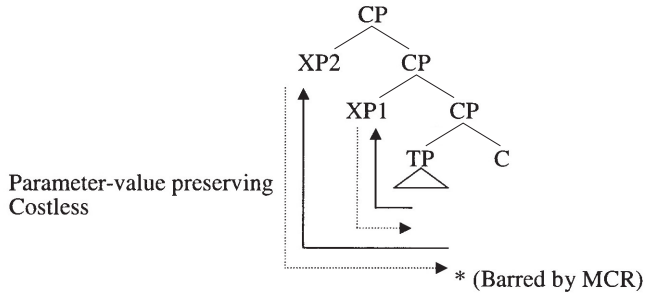
Flexible Command:

(131) (= (129))



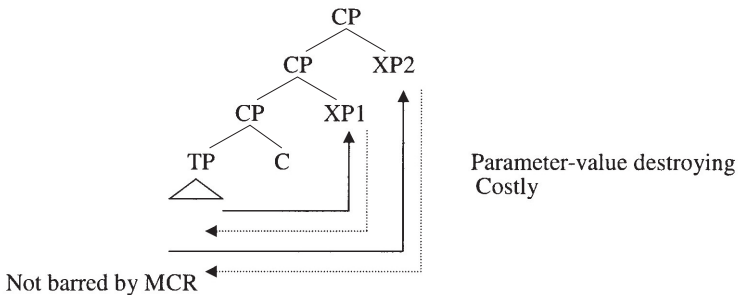
The embedded object first adjoins to the embedded CP, and adjoins to the matrix CP. The remnant embedded CP adjoins to the matrix CP. The embedded object and the embedded CP that are adjoined to the matrix CP are LCA-invisible; therefore equidistant for the MCR purpose. The wave-lines indicate the terms that are pronounced. It also constitutes evidence that the embedded object first adjoins to the embedded CP before it moves to the matrix level, respecting the Shortest Step Principle. Consequently, the distance is undetermined with respect to these two adjuncts. Therefore, these two adjuncts are equidistant from the reconstruction site. Thus, the MCR treats the two adjuncts as equally close to the reconstruction site, and either one can reconstruct. Let us schematize the relevant structure for leftward multiple scrambling.

(132-1) Leftward multiple scrambling



The costless movement triggers the costless definition of command (level a), which is the exclusion type that makes segment structure transparent for command relations. The outer adjunct XP2 excludes every other category. Therefore, XP2 commands XP1. XP1 is closer to the reconstruction site. The MCR requires that XP2 cannot skip XP1 in reconstruction. Leftward multiple scrambling obeys the MCR. Let us next schematize the relevant structure for rightward multiple scrambling³¹.

(132-2) Rightward multiple scrambling



The costly movement triggers the costly definition of command (level c),

Flexible Command:

which makes segment structure opaque for command relations. A command relationship does not exist wherever there is a segment. Therefore, XP1 and XP2 command nothing. The distance between XP2/XP1 and the reconstruction site is undetermined. XP2 and XP1 are invisible to the MCR. Rightward multiple scrambling disobeys the MCR.

Turkish behaves like Japanese. Turkish leftward multiple scrambling yields unambiguous scope; the multiple scrambled $\langle \text{OB}, \text{SUB}, t_{\text{SUB}}, t_{\text{OB}}, \dots \text{V} \dots \rangle$ produces $\text{OB} > \text{SUB}$ scope only (Kural 1997, Takano 2007: 21-22).

Note that traces are invisible to the scope calculation in Turkish. OB reconstruction is blocked by the MCR. On the other hand, the rightward multiple scrambling yields ambiguous scope; the multiple scrambled $\langle t_{\text{SUB}}, t_{\text{OB}}, \dots, \text{V}, \text{OB}, \text{SUB} \rangle$ produces both $\text{SUB} > \text{OB}$ and $\text{OB} > \text{SUB}$ scope relations (ibid.). If the MCR blocked SUB reconstruction, $\text{OB} > \text{SUB}$ would be impossible. Since $\text{OB} > \text{SUB}$ exists, the MCR is inoperative. Thus, the MCR plus Flexible Command explain Turkish multiple scrambling.

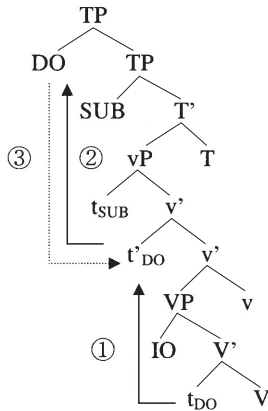
The flexible command analysis coupled with the MCR also accounts for the partial vs. full reconstruction mystery regarding anaphoric binding in Hindi-Urdu and Japanese. Leftward scrambling shows partial reconstruction in Hindi-Urdu as follows.

(133-1) [apnii/*_j kitaab]_k Raam_i-ne t_k' Mohan_j-ko t_k di-ii. [Hindi-Urdu]
self's book.f.Abs Ram-Erg Mohan-Dat gave.Pfv.f
'Ram gave Mohan self's book.' (Adapted from Mahajan 1990: 35-36)

The subject (SUB) binds the anaphor inside the direct object (DO) but the indirect object (IO) does not bind it. Mahajan explained this fact that the scrambled DO reconstructs down to the intermediate Case checking position but not all the way down to the original place of the DO. The sche-

matic tree is as follows.

(133-2) Partial reconstruction (= 133-1)



The movement ① is structural Case (ACC) checking of the DO in the NS (A-movement), ② scrambling in the NS (A'-movement), and ③ the A'-moved DO reconstructs to the Case checking position at LF. As a result, the anaphor in the DO is bound by SUB, but not by IO. Why does the DO reconstruct to the intermediate trace position?

Japanese leftward scrambling shows the same effect as Hindi-Urdu.

(133-3)

[otagai/*j-no hihan-o]_k butsurigakusya-tachi-wa tetsugakusya-tachij-ni t_k hirooshita.
 each other-GEN criticism-ACC physicists-TOP philosophers-DAT announced
 'The physicists announced each other's criticism to the philosophers.'

The SUB binds the anaphor in the DO but the IO does not bind it. This fact is explained if we assume that the derivation of (133-3) is as in (133

Flexible Command:

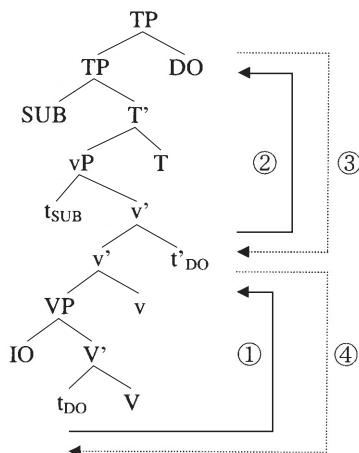
-2). However, the rightward scrambling poses a problem for this analysis. That is, Japanese rightward scrambling exhibits both partial and full reconstruction.

(133-4)

butsurigakusya-tachi_i-wa tetsugakusya-tachi_j-ni t_k hiroosita [otagai_{i/j}-no hihan-o]_k
 physicists-TOP philosophers-DAT announced each other-GEN criticism-ACC
 ‘The physicists announced each other’s criticism to the philosophers.’

Both SUB and IO bind the anaphor in the DO. Under Mahajan’s approach, the example in (133-4) shows the radical (full) reconstruction via the intermediate position.

(133-5) Radical (full) reconstruction (= 133-4)



A question arises as to why there is the step ④ in the rightward scrambling but not in the leftward scrambling. Kuno’s (2006) MCR offers the simplest possible explanation. That is, the DO copy at the intermediate

position is a commander in the leftward scrambling (133-2) whereas it is not in the rightward scrambling (133-5). Given the PVP measure, the rightward movement in an SOV language is relatively costly with respect to the computational load. This high cost is the trigger for selecting the disconnection level (c) (costly counting every segment) of the flexible command by which the intermediate DO copy fails to be a commander in (133-5). Given that only commanders enter into the distance competition, the intermediate copy does not count as the closer term for reconstruction. The MCR guarantees that both the intermediate and the original locations are equally close to the TP-adjoined DO in (133-5).

On the other hand, the leftward movement in an SOV language is relatively costless with respect to the computational load. This low cost is the trigger for selecting the disconnection level (a) (costless discounting segments) of the flexible command by which the intermediate DO copy becomes a commander in (133-2). Given that only commanders enter into the distance competition, the intermediate copy counts as the closer term for reconstruction. The MCR guarantees that the intermediate location is closer to the TP-adjoined DO in (133-2). The DO must reconstruct to the intermediate position.

3.5. Problem 5

3.5.1. Heavy NP shift mystery

English has a heavy NP (HNP) shift (HNPS) phenomenon in which a relatively heavy (complex) structure undergoes rightward dislocation, as in the following.

- (134-1) a. Susan always files t_i without reading e_i properly, [all the memos from the low level administration]_i. (Engdahl 1983)

Flexible Command:

- b. We believe t_i to have good judgment [everyone who took the time to analyze this phenomenon]_i. (Lasnik and Saito 1992: 112)

If rightward dislocation involves rightward adjunction to the matrix CP, the dislocated phrase is the highest commander. Therefore, the dislocated phrase binds (therefore, commands) the trace, satisfying the PBC. However, the LCA incorrectly predicts that the dislocated phrase must be pronounced at the beginning of the sentence, and therefore, these examples should be bad, contrary to the fact. Why is the highest commander pronounced at the end of the sentence in the HNPS phenomenon in apparent violation of the LCA, while the structure satisfies the PBC?

In addition, unlike *wh*-movement, HNPS is more restricted: it cannot apply successive-cyclically. The examples in (134-2a/b) are cited in Kasai (2008: 315).

(134-2)

- a. * I have expected that I would find t_i to Mary since 1939 [the treasure said to have been buried on that island]_i. (Postal 1974: 93)
- b. * It was believed that Mary bought t_i for her mother by everyone [an ornate fourteenth century gold ring]_i. (Rochemont and Culicover 1990: 136)
- c. * John said that Mary will solve t_i yesterday [all the phonology problems]_i. (Lasnik and Saito 1992: 199, en. 14)

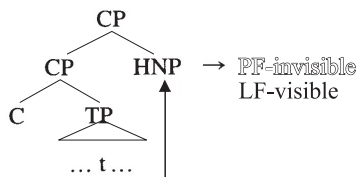
The HNPs move out of the embedded clause, and the examples are ungrammatical. Why is HNPS local? Ross (1967) postulated the Right Roof Constraint (RRC) to account for the locality. See Kasai (2008) for the relevant discussion, adopting the multiple leftward movement analysis (based on

Kayne 1994) and the goal (moved term)-projecting hypothesis (based on Chomsky 2000), which I reject. As Kasai acknowledges (*ibid.* 319, n. 5), his analysis incorrectly predicts that the HNPS example would be ruled out as a PBC violation; HNP fails to properly bind its trace.

3.5.2. A solution

According to the PVP measure, the rightward movement in an SVO language is costless, which is not feature-driven (no agreement). When agreement is absent, the PF system chooses the most disconnected type of command (level c). Therefore, the dislocated phrase commands nothing. The phrase is invisible to the LCA. As a last resort, the PF orders the original copy of the dislocated phrase, which is in a lower position. This is the reason for the dislocated phrase to be pronounced at the end of the sentence. The LF, on the other hand, generally chooses the least disconnected level (exclusion type) of command (level a). Thus, the dislocated phrase commands the rest in the LF, thereby satisfying the PBC.

(135)



In (135), the HNP commands nothing in the PF. Therefore, the LCA cannot see the HNP. As a last resort, the LCA orders the original lower copy, which is phonetically realized as the final term in the sentence. In the

Flexible Command:

LF, in contrast the HNP commands the rest. As a result, the HNP properly binds the trace, satisfying the PBC.

As to the locality (non-successive cyclic property) of HNPS, the Flexible Command solves the problem in a simple way. In a head-initial language, the rightward movement is not feature-driven, i.e., it lacks agreement. The absence of agreement forces the PF system to choose the most disconnected level of command (disconnection level (c)), in which command does not hold for segment structures. Suppose that the HNP has partially moved to the edge of the embedded clause, and that the matrix clause is constructed. The example in (134-2a) has the following structure.

(134-3) [I have expected [_{CP} [_{CP} that I would find *t_i* to Mary] HNP₁] since 1939]

At the PF, the HNP is not a commander. Therefore, the PF system has to go back to the original HNP, and move it to the matrix-clause edge in one fell swoop, skipping the intermediate position. The operation violates the Phase Impenetrability Condition (Chomsky 2000: 108), requiring a moving term to drop by at an edge of every phase (vP or CP).

3.6. Problem 6

3.6.1. English-type T vs. French-type T

Consider the following contrast (Emonds 1978/1985, Pollock 1989, Chomsky 1991, Lasnik 2000: 187–196).

- (136) a. John often kisses Mary. (Cf. * John kisses often Mary.)
b. John embrasse souvent Marie. (Cf. * John souvent embrasse Marie.)
John kiss.sig.m.often Marie.
'John often kisses Mary.'

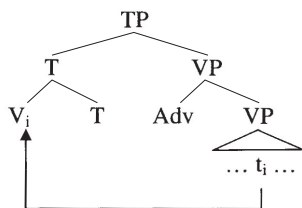
The standard analysis is that V adjoins to T in French, whereas it does not do so in English. The difference is attributed to the feature strength of T. The French T bears a strong (formal) feature that must be erased in the NS (before Spell-Out). T attracts V to check/delete the relevant structural feature, and the erasure of the feature affects the PF. By the LCA, the French V under T is higher, therefore precedes the adverb located at the VP boundary. On the other hand, the English T bears a weak (formal) feature that need not be erased (is therefore not erased by the economy principle, i.e., if you do not have to do it, do not do it) in the NS. The erasure of the feature does not exist in the NS; therefore, it does not affect the PF. Therefore, nothing happens to T and V. The English V remains in situ. By the LCA, the English adverb is higher, therefore precedes the V. Why is T's formal feature strong in French, while weak in English? One possible account is the following. English has poor agreement, given that only one set of ϕ -feature (3rd person and singular, gender being inactive) is phonetically realized. On the other hand, French has rich agreement with various ϕ phonetically realized. Rich agreement indicates a strong formal feature, and poor agreement indicates a weak formal feature. Still, the question remains: why does French have rich agreement and English poor agreement? It seems ad hoc and tautologous to claim that French has strong features because the language shows rich agreement and that English has weak features because the language shows poor agreement. I propose an alternative in the following section.

3.6.2. A solution

Assume that V adjoins to T in the NS universally, satisfying the Stray Affix Filter. The relevant structure is the following.

Flexible Command:

(137)



Provided that the LF system in general chooses the most costless computation (the exclusion type) for command calculation, V commands the trace in the LF. More specifically, according to the exclusion type of command, V commands the trace in the VP. That is, the first node that dominates V is TP, the TP dominates the trace, and V excludes the trace. Therefore, the chain condition (the head of a chain must command the foot of the chain) is satisfied in the LF.

In the PF, on the other hand, we find variation. In French, T and V agree in the NS. The presence of agreement in the NS forces the PF system to choose the least disconnected level (a) of command (the exclusion type). In French, V asymmetrically commands the T and the adverb, and the T asymmetrically commands the adverb. These command relationships yield the relevant <V, T, Adv> order.

In English, T and V do not agree in the NS. The absence of agreement in the NS forces the PF system to choose the most disconnected level (c) of command (any segment structure is excluded). In English, the raised V does not command the T and the adverb. The ordering of the raised V and T/Adv is not determined. As a last resort, the LCA (a PF axiom) sees the original copy of the V in the VP. The LCA produces the relevant order <Adv, V>. Given that the English V is a bare stem, unlike the French

V, which is a feature bundle, the English V and T are combined in the PF, as proposed in Lasnik (2000). Thus, the flexible command accounts for the otherwise mysterious French vs. English ordering contrast. Feature strength is dispensable. That is, the command type is different for the chain condition working in the LF and for the LCA working in the PF. For the chain condition in the LF, the system chooses the least disconnected (least costly) type of command (the exclusion type). For the LCA in the PF, the system chooses the least disconnected type if the NS sends information of the presence of agreement to the PF, whereas the PF system chooses the most disconnected (most costly) type of command if the NS sends information of a lack of agreement to the PF. The PF is pickier with respect to the types of command.

Now, do the following examples pose a problem?

- (138) a. * John reads often books.
b. John reads often to his children. (Chomsky 1995: 330)

In (138a), the V cannot appear higher than the adverb, whereas in (138b), the V can appear higher than the adverb as in French. Is (138b) a counterexample to the analysis above?

A solution follows. For (138a), the example is ruled out because the V fails to check off the structural Case (a formal feature) of the object [ACC] due to the intervening adverb. There is an alternative analysis. The V in (138a) does check [ACC] off, whereas the V in (138b) does not. A term that has checked off a formal feature freezes in the checking position. The V in (138a) is supposed to be frozen in situ in the VP. Moving a frozen element as in (138a) has a cost. The high cost rules (138a) out. More specifically, a costly movement chooses the most costly type of command (disconnec-

Flexible Command:

tion level c). According to the level-(c) command, the adjoined V cannot become an asymmetrical commander for the trace, thereby violating the Chain Condition at the LF. At the PF, on the other hand, the adjoined V cannot asymmetrically command the adverb. Therefore, there is no way for the LCA to produce the ordering $\langle V, Adv \rangle$ at the PF. The derivation crashes both at the LF and the PF.

On the other hand, without the object of V, the V in (138b) does not check off a formal feature. Therefore, the V is not supposed to be frozen in situ in the VP. The low cost makes (138b) acceptable. More specifically, a costless movement chooses the most costless type of command (level a), the exclusion type. According to the level-(a) command, the adjoined V becomes an asymmetrical commander for the trace, thereby respecting the Chain Condition at the LF. At the PF, on the other hand, the adjoined V asymmetrically commands the adverb. Therefore, the LCA produces the ordering $\langle V, Adv \rangle$ at the PF. The derivation converges both at the LF and the PF.

4. A Concluding Remark

I proposed a flexible command—this is a fresh look at command, which is a measurement for scaling two points in a sentence structure. Flexible command measures equilibrium between the connection and disconnection of two nodes in a given tree. The disconnection condition consists of three levels of disconnection that the system chooses according to the computational cost. Flexible command accounts for various phenotypes that are observed in human natural language. Empirical evidence verifies the existence of flexible command. I have shown that adjunction structure provides a good test case. Flexible command has logical necessity. Given that flexible command has logical necessity, we must ask a question concern-

ing its biological necessity. Why has Mother Nature created the computational system that uses a scale such as flexible command? Although the problem is too difficult to solve at this point, one possibility is that flexible command reflects the fluctuation that characterizes complex systems like the human brain. Fluctuation is a characteristic of any chaos system. The human brain is a chaos system that consists of (a) universal principles that are determined by natural laws (i.e., the economy principle) and human genes, and (b) unset parameters (i.e., possibly about 10 switches) that become set by the linguistic environment around a human fetus/baby. A tiny variation in switch setting causes the initial state S_0 of the language system to undergo a radical change to S_n (the final stage) within the first several years of the mother tongue acquisition of the freak creature (us).

References

- Abe, J. (1993) Binding conditions and scrambling without A/A' distinction. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Abe, J. (1997) LF undoing effects of scrambling. In (ed.) Tonoike, S. *Scrambling*, 35-59. Tokyo: Kuroshio publisher.
- Abe, J. (1998) On Japanese right dislocation. A talk given Tokyo Area Circle of Linguistics, Tokyo.
- Abe, J. (1999) On directionality of movement: A case study of Japanese right dislocation. Ms. Nagoya University.
- Abe, J. (2003) On directionality of movement: A case study of Japanese right dislocation. A handout at the 58th Toohoku Eebun Gakkai [northeast English literature conference], Sep. 27, 2003.
- Arikawa, K. (2010) Why cannot wh and focus appear after V in SOV? - Flexible c-command solution: PF is stricter about c-command than LF. A talk given at the DGfS (Linguistic Society of Germany),

Flexible Command:

- AG9 (Workshop 9): Linearization. Feb. 25, 2010.
- Bailyn, J. (1999) Eliminating optional movement in Russian. Ms., Department of Linguistics, SUNY at Stony Brook.
- Bailyn, J. (2001) On scrambling: a reply to Boskovic and Takahashi. *Linguistic Inquiry* **32** (4): 635–657.
- Bailyn, J. (2003) Does Russian scrambling exist? In Karimi, S. (ed.) *Word order and scrambling*, 156–176. Oxford/Berlin: Blackwell Publishers.
- Baltin, M.R. (1978) Toward a theory of movement rules. Doctoral dissertation, MIT.
- Baltin, M.R. (1983) Extraposition: bounding versus government-binding. *Linguistic Inquiry* **14**, 155–162.
- Bhatt, R. (2003a) Complementation, rightward movement, and extraposition. Class handout, Topics in the syntax of the modern Indo-Aryan languages. 24.956. April 25, 2003, University of Massachusetts, Amherst.
- Bhatt, R. (2003b) wh-in-situ and wh-movement. Class handout, Topics in the syntax of the modern Indo-Aryan languages. 24.956. May 2, 2003, University of Massachusetts, Amherst.
- Bhatt, R. and V. Dayal (2007) Rightward scrambling as rightward remnant movement. *Linguistic Inquiry* **38**, 287–301.
- Bayer, J. (1995) On the origin of sentential arguments in German and Bengali. In H. Haider, S. Olsen, and S. Vikner (eds.) *Studies in comparative Germanic syntax*. Kluwer, Dordrecht, 47–75.
- Bayer, J. (1996) *Directionality and logical form*. Kluwer.
- Cecchetto, C. (1999) Optionality and directionality: a view from leftward and rightward scrambling in Japanese. In Inoue, K. (ed.) *Researching and verifying an advanced theory of human language:*

- Explanation of the human faculty for constructing and computing sentences on the basis of lexical conceptual features*, 49-83. Graduate school of language sciences, Kanda University of International Studies.
- Choe, H.S. (1987) Successive cyclic rightward movement in Korean. In Kuno, S. et al. (eds.) *Harvard Studies in Korean Linguistics II*. Seoul: Hanshin.
- Chomsky, N. (1977) On wh-movement. In P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian (eds.) *Formal syntax*, New York: Academic Press, (1977), pp. 71-132.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1991) Some notes on economy of derivation and representation. In R. Freidin (ed.) *Principles and parameters in comparative grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995) *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1998) Minimalist explorations. Ms. MIT.
- Chomsky, N. (2000) Minimalist inquiries: the framework. In R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.) *Step by step: essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2005) Three factors in language design. *Linguistic Inquiry* **36**: 1-22.
- Emonds, J. (1978) The verbal complex V'-V in French. *Linguistic Inquiry* **9**, 49-77.
- Emonds, J. (1985) *A unified theory of syntactic categories*. Dordrecht: Foris.
- Engdahl, E. (1983) Parasitic gaps. *Linguistics and philosophy* **6**, 5-34.

Flexible Command:

- Endo, Y. (1996) Right dislocation. In Koizumi, M., Oishi, M., and Sauerland, U. (eds.) *Formal approaches to Japanese linguistics 2*, 1-20. MIT, Department of Linguistics and Philosophy, MITWPL.
- Epstein, S. D., E. M. Groat, R. Kawashima, and H. Kitahara (1998) *A derivational approach to syntactic relations*. Oxford University Press.
- Epstein, S. D. (1999) Un-principled syntax: the derivation of syntactic relations. In Epstein, S. D. and N. Hornstein (eds.) *Working minimalism*. MIT Press, 323-38.
- Erguvanli, E. E. (1984) *The function of word order in Turkish grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Fox, D. and D. Pesetsky (2005) Cyclic linearization of syntactic structure. In Kiss, K. E. (ed.) *Theoretical linguistics: object shift*, **31** (1-2), 1-46.
- Fukui, N. (1993) Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* **8**: 35-61.
- Fukui, N. and Y. Takano (1998) Symmetry in syntax: merge and demerge. *Journal of East Asian Linguistics* **7**: 27-86.
- Grewendorf, G. and J. Sabel (1999) Scrambling in German and Japanese: adjunct versus multiple specifiers. *Natural Language and Linguistic Theory* **17**: 1-65.
- Guéron, J. (1980) Extraposition and logical form. *Linguistic Inquiry* **11**, 637-678.
- Hagstrom, P. (2004) Particle movement in Sinhala and Japanese. In Dayal, V. and A. Mahajan (eds.) *Clause structure in south asian languages*. Kluwer Academic Publishers.
- Haraguchi, S. (1973) Remarks on dislocation in Japanese. Ms., MIT.
- Holmberg, A. (2000) Deriving OV order in Finnish. In Svenonius, P. (ed.) *The derivation of VO and OV orders*. 123-152. Amsterdam/Phila-

- delphia: John Benjamins.
- Inagaki, D. (1998) Hierarchy and linearity: an examination of postverbal construction in Japanese. A talk given at Meiji Gakuin University, February 1998.
- Inoue, K. (1978) *Nihongo no bunpoo kisoku* [Japanese grammar rules], Tokyo: Taishuukan.
- Karimi, S. (1999) Is scrambling as strange as we think it is? *MIT Working Papers in Linguistics* **33**: 159-190.
- Karimi, S. (2003) On object positions, specificity, and scrambling in Persian. In Karimi, S. (ed.) *Word order and scrambling*. 91-124. Oxford: Blackwell.
- Kasai, H. (2008) Linearizing rightward movement. In *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*, C. B. Chang and H. J. Haynie (eds.) 315-323. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Kawamura, T. (2004) A feature-checking analysis of Japanese scrambling. *Journal of Linguistics* **40**: 45-68.
- Kayne, R. (1979) Rightward NP movement in French and English. *Linguistic Inquiry* **10**, 710-719.
- Kayne, R. (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kindaichi, H. et al (2006) *Nihongo akusento jiten* [Japanese accent dictionary], the 1st edition, Tokyo: Sanseedoo publisher.
- Kishimoto, H. (1998) Wh-in-situ and movement in Sinhala questions. Ms., Hyogo University of Teacher Education. Draft dated 12/7/1998.
- Kiss, K. (1998) Identification focus versus information focus. *Language* **74**: 245-273.

Flexible Command:

- Kitahara, H. (2002) Scrambling, Case, and interpretability. In Epstein, S.D. and T.D. Seely (eds.) *Derivation and explanation in the minimalist program*. 167–183. Oxford: Blackwell.
- Kornfilt, J. (2005) Asymmetries between preverbal and postverbal scrambling in Turkish. In Sabel, J. and M. Saito (eds.) *The free word order phenomenon: its syntactic sources and diversity*, 163–179. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kuno, M. (2006) Symmetry in syntax. In Boeckx, C. (ed.) *Minimalist essays*. John Benjamins.
- Kuno, S. (1978) *Danwa no bunpoo* [Discourse grammar], Tokyo: Taisyuukan shoten
- Kural, M. (1994) Postverbal constituent in Turkish. GLOW 1994.
- Kural, M. (1997) Postverbal constituents in Turkish and the Linear Correspondence Axiom. *Linguistic Inquiry* **28**: 498–519.
- Kuroda, S.-Y. (1980) Bun-koozoo-no hikaku [comparison of sentence structures], *Bunpoo* [grammar], *Nichi-eego hikaku kooza 2* [Japanese-English comparison lectures], 23–61, Tokyo: Taisyuukan Publisher.
- Langacker, R. (1969) On pronominalization and the chain of command. In Reibel, D. and S. Schane (eds.) *Modern studies in English*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall. 160–186.
- Lasnik, H. (2000) *Syntactic structures revisited – contemporary lectures on classic transformational theory*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lasnik, H. and J. Uriagereka (1988) *A course in GB syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lasnik, H. and M. Saito (1992) *Move α : Conditions on its application and output*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lebeaux, D. (1988) Language acquisition and the form of the grammar.

- Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Mahajan, A. (1988) Scrambling, weak crossover and binding. Ms. MIT.
- Mahajan, A. (1990) The A/A-bar distinction and movement theory. Doctoral dissertation, MIT.
- Mahajan, A. (1997a) Against a rightward movement analysis of extraposition and rightward scrambling in Hindi. In (ed.) Tonoike, S. *Scrambling*, 93-124. Tokyo: Kuroshio publisher.
- Mahajan, A. (1997b) Rightward scrambling. In (eds.) Beerman, D., LeBlanc, D., van Riemsdijk, H. (eds.) *Rightward movement*. John Benjamins.
- Manetta, E. (2010) Wh-expletives in Hindi-Urdu: the vP phase. *Linguistic Inquiry* **41**: 1-34.
- Maruyama, K. (1999) An argument for Japanese right dislocation as a feature-driven movement. *Gengo-kagaku-kenkyuu* [Language science study] 5, 45-62, Kanda university of international studies.
- May, R. (1985) *Logical form*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Miyagawa, S. (1994) Scrambling as an obligatory movement. In *the Proceedings of Nanzan university international symposium on Japanese language education and Japanese Language Studies*, 81-92. Nanzan university, Nagoya.
- Miyagawa, S. (1997) Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry* **28**: 1-25.
- Miyagawa, S. (2001) The EPP, scrambling, and wh-in-situ. In Kenstowicz, M. (ed.) *Ken Hale: a life in language*. 293-338. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Miyagawa, S. (2003) A-movement scrambling and options without optionality. In Karimi, S. (ed.) *Word order and scrambling*. 177-200. Oxford: Blackwell.

Flexible Command:

- Miyagawa, S. (2005) On the EPP. McGinnis, M. and N. Richards (eds.) *Perspectives on phase* (MIT working papers in linguistics **49**), 201–236.
- Miyagawa, S. (2010) *Why agree? Why move? Unifying agreement-based and discourse-configurational languages*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Miyagawa, S. and Koji Arikawa (2007) Locality in syntax and floated numeral quantifiers. *Linguistic Inquiry* **38**: 645–670.
- Miyaji, Y. (1984) *Toochi koo* [On inversion], *Nihongogaku* [Japanese linguistics] Vol. **3**, No. **8**: 75–86.
- Moro, A. (2000) *Dynamic antisymmetry*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Nakayama, M. (1989) Empty copulas. In *MITA working papers in psycholinguistics* **1**, Y. Otsu (ed.) Tokyo: Mita linguistic circle.
- Nishigauchi, T. (1986) Quantification in syntax. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Nunes, J. and E. Thompson (1998) Appendix. In J. Uriagereka, *Rhyme and reason: an introduction to minimalist syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 497–521.
- Ogawa, K. (1976) Japanese interrogatives: a synchronic and diachronic analysis. Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- Ogawa, Y. (1996) Dislocation a droite en japonais selon l'hypothèse universelle de Kayne. Ms, University of Geneva.
- Pesetsky, D. & E. Torrego (2001) T-to-C movement: causes and consequences. In Kenstowicz, M. (ed.) *Ken Hale: a life in language*. 355–426. MIT Press.
- Pollock, J. –Y. (1989) Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* **20**: 365–424.

- Reinhart, T. (1976) The syntactic domain of anaphora. Doctoral dissertation. MIT.
- Reinhart, T. (1979) The syntactic domain for semantic rules. In Guenther, F. and S. Schmidt (eds.) *Formal semantics and pragmatics*. Reidel, Dordrecht.
- Richards, N. (1997) What moves where when in which language? Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Richards, N. (2001) *Movement in language: interactions and architectures*. Oxford: Oxford University Press.
- Richards, N. (2010) *Uttering trees*. The MIT Press.
- Rizzi, L. (1991) Residual verb second and the Wh-criterion, *Technical reports in formal and computational linguistics* 2, University of Geneva.
- Rochemont, M. and Culicover, P. (1990) *English focus constructions and the theory of grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosen, E. C. (1996) The postposing construction in Japanese. Master thesis, University of British Columbia
- Ross, J. R. (1967) Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT. Published as *Infinite syntax!* Norwood, N.J.: Ablex (1986)
- Sabel, J. (2001) Deriving multiple head and phrasal movement: The cluster hypothesis. *Linguistic Inquiry* 32, 532-547.
- Sabel, J. (2005) String-vacuous scrambling and the effect on output condition. In Sabel, J. and M. Saito (eds.) *The free word order phenomenon: its syntactic sources and diversity*, 281-334. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Sadakene, K. & M. Koizumi (1995) On the nature of the “dative” particle in Japanese. *Linguistics* 33, 5-33.

Flexible Command:

- Saito, M. (1987) Three notes on syntactic movement in Japanese. In Imai, T. and Saito, M. (eds.) *Issues in Japanese Linguistics*, 301-350, Mouton de Gruyter.
- Saito, M. (1989) Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In Baltin, M. R. and A. S. Kroch (eds.) *Alternative conceptions of phrase structure*. 182-200. Chicago, University of Chicago Press.
- Saito, M. (1992) Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* **1**, 69-118.
- Saito, M. (1994) Improper movement. In Koizumi, M. and H. Ura (eds.) *Formal approaches to Japanese linguistics* **1**, MITWPL 24.
- Saito, M. and Fukui, N. (1998) Order in phrase structure and movement. *Linguistic Inquiry* **29**: 439-474.
- Savio, D. (1991) WH-questions in Tamil. *CIEFL Occasional Papers in Linguistics* **3**, 55-67.
- Sells, P. (1999) Postposing in Japanese. Ms., Stanford University.
- Simon, M. E. (1989) An analysis of the postposing construction in Japanese. Doctoral dissertation, University of Michigan.
- Simpson, A. and T. Bhattacharya (2003) Obligatory overt wh-movement in a wh-in-situ language. *Linguistic Inquiry* **34**: 127-142.
- Soshi, T. and H. Hagiwara (2004) Asymmetry in linguistic dependency: Linguistic and psychophysiological studies for Japanese right dislocation. *English Linguistics* **21**: 409-453.
- Takahashi, D. (1993) Movement of wh-phrases in Japanese. *Natural language and linguistic theory* **11**: 655-678.
- Takahashi, D. (2002) Determiner raising and scope shift. *Linguistic Inquiry* **33**, 575-615. Cambridge, MA: MIT Press.
- Takami, K. (1995) Nichi-eego-no koochibun to jyoohoo koozoo [Postpositional sentence in Japanese and English, and information struc-

- ture], In Takami, K. (ed.) *Nichi-eego-no uhoo-idoo-koobun* [Rightward movement constructions in English and Japanese], 149-165, Tokyo: Hitsuji Syoboo.
- Takano, Y. (1996) Movement and parametric variation in syntax. Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- Takano, Y. (2003a) How antisymmetric is syntax? *Linguistic Inquiry* **34** (3): 516-526.
- Takano, Y. (2003b) Rightward positionings in antisymmetric syntax. In Ukaji, M. Ikeuchi, M. and Y. Nishimura (eds.) *Current issues in English linguistics*. Vol. **2**. Tokyo: Kaitakusya.
- Takano, Y. (2007) Making rightward scrambling possible. *Kinjyoo Gakuin Daigaku Ronsyuu* [Kinjyoo Gakuin University treatise], *Jinbun-kagaku-hen* [cultural science volume], Vol. **3**, No. **2**. 17-58. Kinjyoo Gakuin University.
- Takano, Y. (2010) A comparative approach to Japanese postposing. A paper presented at the 8th workshop of the international research project on comparative syntax and language acquisition. March 15, Nanzan University.
- Takita, K. (to appear) Argument ellipsis in Japanese right dislocation. *Japanese/Korean Linguistics* **18**.
- Tanaka, H. (2001) Right-dislocation as scrambling. *Journal of Linguistics* **37**: 551-579.
- Teramura, H. (1984) *Nihongo-no imi-to shintakusu* II [Japanese semantics and syntax], Tokyo: Kuroshio publisher.
- Uriagereka, J. (1998) *Rhyme and reason: an introduction to minimalist syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Watanabe, A. (1992) Subjacency and s-structure movement of wh-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* **1**: 255-291.

Flexible Command:

- Watanabe, A. (2005) *Minimarisuto puroguramu josetsu* [An introduction to the minimalist program], Tokyo, Taisyuukan publisher.
- Webelhuth, G. (1989) Syntactic saturation phenomena and the modern Germanic languages. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Whitman, J. (2000) Right dislocation in English and Japanese. In Takami, K., Kamio, A., and Whitman, J. (eds.) *Syntactic and functional explorations: a festschrift for Susumu Kuno*. 445–470. Tokyo: Kuroshio Publishers.

Notes

* This article is part of my ongoing project on measurement of language structure. Portions of the content have been orally presented at DGfS (Linguistic Society of Germany), AG9 (Workshop 9): Linearization, “what bars *wh* and focus after *V* in *SOV*? A variable *c*-command solution,” Feb. 23–26, 2010 (Humboldt University, Berlin, Germany). I would like to thank all the members who attended the conference for their valuable comments and suggestions. I am grateful to St. Andrew’s University for providing the grant for the international conference presentation. The usual disclaimers apply.

¹ Following Uriagereka (1998), I use the terminology *command* for *c-command* unless there is a need to clarify the kinds of commands. Reinhart (1979) has proposed this definition, which EGKK (1998) calls a representational *c-command*.

(i) A Representational Definition of C-command

A C-commands B iff:

- i . The first branching node dominating A dominates B,
- and ii. A does not dominate B,
- and iii. A does not equal B. (Reinhart 1979)

EGKK argues against it, and argues for a derivational definition of command.

(ii) A Derivational C-Command

X C-commands all and only the terms of the category Y with which X was paired/concatenated by Merge or by Move in the course of the derivation.

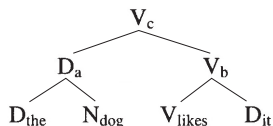
(EGKK 1998: 32)

Concatenate (distinct from the mathematical counterpart) creates sisters. *Concatenate* includes *Merge and Move* (= *Copy and Rmerge*). Category Y must be visible at the exact stage when concatenation takes place in the

Flexible Command:

derivation. Y includes Y and everything that Y dominates. EGKK provides the following demonstration that the representational command is incorrect, and that the derivational command is correct. Consider the following structure.

(iii)



Note that it is crucial that the intermediate projection V_b is invisible to C_{HL} when V_c is formed, given that C_{HL} sees minimal and maximal projections only. According to the representational command, V_{likes} and D_{it} asymmetrically commands D_{the} and N_{dog} . It leads LCA to predict incorrectly that the string *likes it* must precede the string *the dog*. According to the derivational command, at the point when V_{likes} and D_{it} were concatenated, they command each other and nothing else. At the point when D_a and V_b are concatenated (V_c is formed simultaneously), D_a is visible because it is a maximal projection, but V_b is invisible because it is neither maximal nor minimal. Thus, D_a (and the members) command(s) V_{likes} and D_{it} , a desired result.

However, the derivational command does not work well for adjunction. Adjunction does not create sisters. *Concatenate* does not include *Ad-join*. The derivational command cannot deal with the fact that an adjoined term becomes a commander. Suppose we modified the derivational command to allow an adjunct to become a commander. It then fails to deal with the fact that a certain adjunct cannot become a commander.

More traditionally, Langacker (1969: 167) defined *command* (representational) as follows.

- (iv) A node α commands another node β if
- a. neither α nor β dominates the other, and
 - b. the S-node that most immediately dominates α also dominates β .

The condition (iv-a) expresses disconnection, and (iv-b) connection. What is not noted is that α and β are accessible to C_{HL} . Condition (iv-b) makes an incorrect prediction that the following examples must be acceptable.

(v) a. * John_i's daughters criticized himself.

b. * John_i-no musume-tachi-wa jibunjishin_i-o hihan-shita.
 John-GEN daughter-pl-TOP self-ACC criticism-did
 'John's daughters criticized himself.'

By condition (iv-b), *John* binds the anaphor, an unwanted result.

² Although EGKK (1998: 40) wants to deduce command (Reinhart's last will) from the derivational First Law equipped with the derivational command (ibid. 32), Reinhart's first-branching-node type command shares the essence with EGKK's derivational command in that the concatenation point is crucial. The definition of derivational command is as follows (EGKK 1998: 32).

(i) Derivational C-Command

X C-Commands all and only the terms of the category Y with which X was paired/concatenated by Merge or by Move in the course of the derivation.

In a nutshell, X commands Y and everything inside Y if and only if X is concatenated with Y. The node which is created by X + Y concatenation is inevitably the first branching node dominating X and Y. Concatenating α with K creates the sister relation of α and K. Chomsky (2000: 116) defines c-command as follows.

(ii) α c-commands β if α is the sister of K that contains β .

But the definition of sister yields complications for adjunction.

³ The condition (21b) of the definition of the LCA is irrelevant because there is no term γ . However, if we take $\gamma = \alpha$, *he* and *will* are ordered; *he* pre-

Flexible Command:

cedes *will* and *he* dominates *he*. Thus, contrary to what Nunes and Thompson assert, condition (21b) of the LCA, hence, the LCA with the given disjunctive definition, allows the reflexive property of domination. However, we can avoid this undesirable result by adding $\gamma \neq \alpha$ to condition (21b).

⁴ Section A.2.4. in Nunes and Thompson (1998) explains the reasoning. An ordered pair $\langle \alpha, \beta \rangle$ is defined as a set $A = \{\{\alpha\}, \{\alpha, \beta\}\}$ in which $\{\alpha\}$ is the label (information of major property) of A. More informally, α and β merge and the target α projects. Now an ordered pair $\langle \alpha, \alpha \rangle$ is defined as a set $B = \{\{\alpha\}, \{\alpha, \alpha\}\}$ in which $\{\alpha\}$ is the label of B. Given that $\{\alpha, \alpha\}$ is equal to $\{\alpha\}$, $B = \{\{\alpha\}, \{\alpha, \alpha\}\} = \{\{\alpha\}, \{\alpha\}\} = \{\{\alpha\}\}$. A label is not a term.

⁵ In SOV languages, the right dislocation of non-wh phrases is relatively unrestricted whereas that of wh-phrases is restricted. Hindi-Urdu, like Japanese, disallows a wh-phrase in the postverbal position when the wh-phrase is interpreted as the normal interrogative meaning (directly demanding the value for the variable x) but allows it when interpreted as an echo question (re-asking) (Cf. Mahajan (1997b), Bhatt (2003b), Simpson and Bhattacharya (2003: fn.3) via Manetta (2010: 7)).

- (i) Ram-ne kitaab di-i kis-ko?
Ram-Erg book.f give-Pfr.f who-Dat
'Ram gave a book to WHO?' (Bhatt 2003b: 10)

A similar effect is observed in Japanese. Suppose that A dialogues with B.

- (ii) A: Mary-wa cyuuibukaku t_i mita-yo, ...-o. (The ... part is not hearable.)
Mary-TOP carefully saw-SP ...-ACC
'Mary carefully look at ... (I'm sure about it.)'

- B: Mary-ga t_i mita nani-o?
Mary-NOM saw what-ACC
'Mary looked at WHAT?'

I propose that the echo-questioned wh-phrase, like a non-wh phrase, remains in situ and receives the marked interpretation at LF.

The postverbal wh-phrase is permitted also when the example is interpreted as a rhetorical question (the value for the variable x is known). The following examples are adapted from Bhatt (2003b: 10).

- (iii) a. us-ne tumhe kyaa di-yaa? (normal interrogative question)
 he-Erg you.Dat what give-Pfv.MSg
 'What did he give you?'
 b. us-ne tumhe t_i di-yaa kyaa?! (rhetorical question)
 he-Erg you.Dat give-Pfv.MSg what
 'What did he ever give you ... ?!'

A similar effect is observed in Japanese.

- (iv) a. kare-wa kimi-ni nani-o ageta-no? (normal interrogative question)
 he-TOP you-DAT what-ACC gave-Q
 'What did he give you?'
 b. kare-wa kimi-ni t_i ageta-no ittai nani-o?! (rhetorical question)
 he-TOP you-DAT gave-Q the hell what-ACC
 'What the hell did he ever give you ... ?!'

My hunch is that the rhetorical wh-phrase remains in situ and receives the marked interpretation at LF.

What is interesting is that the order change between the auxiliary verb (AUX) and the wh-phrase makes the example acceptable with the normal interrogative reading (Cf. Mahajan 1997, Bhatt and Dayal 2007: 290-291).

- (v) Sita-ne dhyaan-se t_i dekh-aa kis-ko_i thaa?
 Sita-ERG care-with look-PERF.PAST who-ACC was
 'Who had Sita looked at carefully?'
 (Who is x, x a human, such that Sita had looked at x carefully?)

Flexible Command:

The *wh*-phrase appears between the verb and the auxiliary, and the example is acceptable with the normal interrogative reading (directly demanding the value for the variable *x*). If the *wh*-phrase appears after the auxiliary, i.e., at the very end, the sentence becomes unacceptable. The sentence-final *wh*-phrase makes the example unacceptable. The simplest possible analysis is to assume that the *wh*-phrase is in the matrix CP Spec, the auxiliary in the C head, and the rest adjoining to the CP.

⁶ For the hypothesis that focus feature [Foc] as a formal (structural) feature [FF], see Watanabe 2005, Miyagawa (1997, 2001, 2003, 2005, 2010). For the hypothesis that [Foc] drives scrambling, see Miyagawa (1994, 1997), Bailyn (1999, 2001, 2003), Karimi 1999. If [Foc] resides in the T-C system, the issue may be related to the hypothesis that structural Case [FF] is uninterpretable T feature [uT] (Pesetsky and Torrego 2001). In fact, there is a hypothesis that the DP in the cleft focus position receives two distinct structural Cases, i.e., [NOM] from the T, and [Foc] from the C (cf. Nakayama 1989, Sadakane and Koizumi 1995).

- (i) a. [_{CP} e_i osushi-o tabe-ta-no]-wa John_i-(*)ga da.
sushi-ACC eat-past-that-TOP John-(NOM) is
'It is John who ate sushi.'
- b. [_{CP} John-ga e_i tabe-ta-no]-wa osushi-(?*o) da.
John-NOM eat-past-that-TOP sushi-(ACC) is
'It is sushi that John ate.'
- (ii) a. [_{CP} e_i osushi-o tabe-ta-no]-wa dare_i-(*)ga da?
sushi-ACC eat-past-that-TOP who(-NOM) is
'Who is *x* such that it is *x* who ate sushi?'
- b. [_{CP} John-ga e_i tabe-ta-no]-wa nan(i)_i-(?*o) da?
John-NOM eat-past-that-TOP what(-ACC) is
'What is *x* such that it is *x* that John ate?'

A non-structural Case as the postposition P does not compete with [Foc]. In fact, the P must appear.

- (iii) [_{CP} John-ga e_i osushi-o tabe-ta-no]-wa [_{PP} ohashi-*(de)]_i da.
 John-NOM sushi-ACC eat-past-that-TOP chopstick-with is
 'It is with chopstick that John ate sushi.'

I assume that the P enters into the semantic feature calculation and therefore cannot be deleted (forced by the Full Interpretation). However, it is crucial that we understand the nature of the phonologically null category *e*. There is evidence indicating that the term is externally merged (base-generated) in the focus position. That is, *e* and the focused term cannot be connected via movement (internal merge). The NPI cannot be *e*.

- (iv) a. * [_{CP} John-ga e_i tabe-mo-shi-na-katta-no]-wa nani-o_i da.
 John-NOM eat -even-do-NEG-past -that-TOP anything-ACC is
 '(Lit.) It is anything that John did not even eat.'
- b. * [_{CP} John-ga e_i tabe-na-katta-no]-wa nanimo_i da.
 John-NOM eat-NEG-past-that-TOP anything is
 '(Lit.) It is anything that John did not eat.'
- c. * [_{CP} John-ga e_i tabe-na-katta-no]-wa osushi-shika_i da.
 John-NOM eat-NEG-past-that-TOP sushi-only is
 '(Lit.) It is nothing but sushi that John ate.'

The moved NPI and the trace are connected via movement (internal merge = copy + remerge).

- (v) a. nanimo_i John-wa t_i tabe-na-katta.
 anything John-TOP eat-NEG-past
 'John did not eat anything.'
- b. John-wa t_i tabe-na-katta nanimo_i.
 John-TOP eat-NEG-past anything
 'John did not eat anything.'

If the term in the focus position is base-generated in the cleft sentence, it must be the case that the structural Case is not checked and deleted

Flexible Command:

by the copular *da* 'be.' Therefore, the examples in (i) and (ii) cannot be used as the evidence for the two-FF-conflict hypothesis.

⁷ Ross (1967) assumes that a postverbal constituent adjoins to the right of the S (CP) node. In the case of long-distance right dislocation, it takes place successive cyclically, obeying Ross's Right Roof Condition (a constituent cannot move across the S). Kayne (1979) assumes that a postverbal constituent adjoins to the right of the VP. Choe (1987) and Simon (1989) show that the rightward scrambling obeys the Subjacency condition, i.e., it is possible to dislocate rightward out of a clausal complement, but not out of a complex NP. Kornfilt (2005: 177, n.8) assumes that the Turkish rightward scrambling to a postverbal position does not form "a genuine syntactic hierarchical structure," and that it is not feature driven.

⁸ See Takano (2010: 6) for a concise review and evaluation of previous analyses on Japanese postposing. Takita (to appear) classifies four types of Japanese right dislocation (JRD): (a) rightward movement, (b) double preposing, (c) repetition + deletion, and (d) base-generation. In (b), the dislocated term first undergoes leftward scrambling and then the clausal structure undergoes remnant movement. In (c), the dislocated term undergoes leftward scrambling in the second clause, the first clause containing the coindexed pro. For (a) and (b), the gap is a trace, and for (c) and (d), it is a pro. The approach (c) assumes a bi-clausal structure. I adopt (a), which is the simplest and preserves symmetry with leftward scrambling. According to the more-than-one-sentence analysis (c) (clause repetition + leftward movement + deletion) (e.g., Kuno 1978), the example as in (i) will have the structure as in (ii).

(i) John-wa tabe-na-katta nanimo.
John-TOP eat-NEG-PAST anything
'John did not eat anything.'

(ii) [John-wa pro tabe-na-katta] [nanimo, [~~John-wa t_i tabe-na-katta~~]]
John-TOP eat-NEG-PAST anything John-TOP eat-NEG-PAST

Assume that an NPI must be commanded by NEG at LF. In the second

sentence in (ii), the NPI cannot reconstruct because the reconstruction site is deleted. The NPI cannot reconstruct to the object position of the first sentence; the object position is occupied by *pro* and, in any case, it is unclear how the NPI in the second sentence reconstructs to the first sentence. The example in (i) poses a problem for base-generation analysis (d) and more-than-one-sentence analysis (c). In addition, they cannot account for the island effect of rightward dislocation that is observed by Choe (1987) and Simon (1989). The rightward scrambling analysis (a) with the object trace provides the simplest account of (i): the NPI reconstructs to the base position, where it is commanded by the NEG.

⁹ The scope relationship $\forall > \exists$ entails $\exists > \forall$ but not vice versa. If it is established that for every *x* such that *x* loves *y*, then there is at least one *y* such that *y* is loved by *x*. But if it is established that there is at least one *y* such that *y* is loved by *x*, it does not follow from this that it is established that for every *x* such that *x* loves *y*. Therefore, one must start with the string $\langle \exists, \forall \rangle$ (unambiguous scope) and test the string $\langle \forall, \exists \rangle$ as to whether it has ambiguous scope. See Kuno (2006) for pointing out this reasoning.

The examples of long-distance scrambling provide further support for the claim that the postverbal constituent has undergone movement (Sabel 2005: 319).

- (i) a. John-ga [_{CP} daremo-ni_i dareka-ga t_i kiss-shita to] omotteiru.
 John-NOM everyone-DAT someone-NOM kiss-ed that thinks
 ‘John thinks that someone kissed everyone.’ ($\exists > \forall$, $\forall > \exists$)
- b. daremo-ni_i John-ga [_{CP} t_i dareka-ga t_i kiss-shita to] omotteiru.
 everyone-DAT John-NOM someone-NOM kiss-ed that thinks
 ‘John thinks that someone kissed everyone.’ ($\exists > \forall$, $\forall > \exists$)
- c. John-ga [_{CP} t_i dareka-ga t_i kiss-shita to] omotteiru daremo-ni.
 John-NOM someone-NOM kiss-ed that thinks everyone-DAT
 ‘John thinks that someone kissed everyone.’ ($\exists > \forall$, $\forall > \exists$)

In (ib), the wide scope reading of the universally-quantified DP (UQP) is

Flexible Command:

established at the intermediate trace position at the beginning of the embedded clause. Similarly, in (ic), the wide scope reading of the UQP is established at the intermediate trace position at the beginning of the embedded clause, which constitutes evidence for movement analysis of the postverbal element.

Turkish behaves like Japanese except that the trace does not enter into scope calculation in the former (Kural 1997, Takano 2007: 20–21). That is, Turkish postverbal constituent (PVC) always takes scope over a preverbal term, which indicates that the PVC asymmetrically commands the preverbal terms.

Mahajan (1997b: 199) and Bhatt (2003a: 9) report that leftward and rightward scrambling behave differently with respect to scope calculation in Hindi-Urdu. Like Japanese, Hindi-Urdu shows rigidity effect in which the surface order determines the scope relationship.

- (ii) *kisii chhaaṭr-ne har teacher-ko card bhej-aa.*
some student-Erg every teacher-Dat card.m send-Pfv.m
'Some student sent every teacher a card.' (some>every, *every>some)

Leftward scrambling causes scope ambiguity.

- (iii) *har teacher-ko_i kisii chhaaṭr-ne t_i card bhej-aa.*
every teacher-Dat some student-Erg card.m send-Pfv.m
'Some student sent every teacher a card.' (some>every, every>some)

Rightward scrambling however does not produce scope ambiguity.

- (iv) *kisii chhaaṭr-ne t_i card bhej-aa har teacher-ko_i.*
some student-Erg card.m send-Pfv.m every teacher-Dat
'Some student sent every teacher a card.' (some>every, *every>some)

Japanese leftward and rightward scrambling on the other hand behave alike.

(v)

- a. dono gakusee-ka-ga dono sensee-ni-mo card-o okutta.
 which student-Q-NOM which teacher-DAT-also card-ACC sent
 ‘Some student sent every teacher a card.’ (some>every, *every>some)
- b. dono sensee-ni-mo_i dono gakusee-ka-ga t_i card-o okutta.
 which teacher-DAT-also which student-Q-NOM card-ACC sent
 ‘Some student sent every teacher a card.’ (some>every, every>some)
- c. dono gakusee-ka-ga t_i card-o okutta dono sensee-ni-mo_i.
 which student-Q-NOM card-ACC sent which teacher-DAT-also
 ‘Some student sent every teacher a card.’ (some>every, every>some)

Crucially, the rightward scrambling produces scope ambiguity as in (v-c). It is unclear as to why the rightward scrambling in Hindi-Urdu and Japanese/Turkish differ in this way.

¹⁰ Tanaka (2001: 567, (39a)) independently observes the same phenomenon.

- (i) [otagai_i -no sensee -ga] t_j baka-ni shita yo, [[John-to Mary]_i-o]_j.
 each-other GEN teacher-NOM made-fun-of John and Mary-ACC
 ‘Each other’s teachers made fun of them, John and Mary.’

Tanaka (2001) argues that the above example consists of two sentences, an analysis which I reject.

Unlike Japanese, Hindi-Urdu anaphor seems to behave differently. The following examples are adapted from Bhatt and Dayal (2007: 289).

- (ii) a. ??? [ek dusre_i ke baccoN]-ne [anu aur ramaa]_i-ko dekhaa. SOV
 each other’s kids-Erg Anu and Rama-Acc see-Pfv.pst
 ‘(Lit.) Each other’s kids saw Anu and Rama.’
- b. [anu aur ramaa]_i-ko_j [ek dusre_i ke baccoN]-ne t_j dekhaa. OSV
 Anu-and Rama-Acc each other’s kids-Erg see-Pfv.pst
 ‘(Lit.) Each other’s kids saw Anu and Rama.’

Flexible Command:

- c. ??? [ek dusre_i ke baccon_N]-ne t_i dekhaa [anu aur ramaa]_i-ko_j. SVO
each other's kids see-Pfv.pst Anu and Rama-Acc
'(Lit.) Each other's kids saw Anu and Rama.'

Unlike Japanese, the example in (iic) is unacceptable. It is unclear as to what causes the difference between (i) and (iic).

In addition, Tanaka reports that the long-distance environment makes the example worse.

- (iii) ?? [otagai_i -no sensee -ga [Mary-ga t_i aishiteiru-to] itta yo], [[John-to Bill]_i-o]_j.
each other-GEN teacher-NOM Mary-NOM love COMP said John and Bill-ACC
'Each other's teachers said that Mary loved them, John and Bill.'

I argue that the nature of command alters in a complex syntactic environment, causing the postverbal embedded object to become a non-commander.

Cecchetto (1999: 79) relying on Rosen (1996) for grammaticality reaction claims that (55c) is unacceptable. Cecchetto relying on native speakers' judgment assumes that the following is acceptable.

- (iv) t_i otagai_j-no sensee-o hihanshita karera_j-ga.
each other-GEN teacher-ACC criticized they-NOM
'They criticized each other's teachers.'

Based on this acceptable example, Cecchetto argues against the double topicalization analysis (Mahajan 1997) of Japanese right dislocation. That is, the analysis incorrectly predicts that (iv) should also be bad as (55c); the trace is not properly bound in violation of the proper binding condition. I also think that both (55c) and (iv) are acceptable, which naturally argues against the double topicalization analysis.

However, the double topicalization analysis seems to provide a simple solution for the problem 1 ((47c)/(49-1c) vs. (46c=49-1b/49-1a)). A non-wh phrase can be dislocated rightward, whereas a wh-phrase cannot. Under the double topicalization, a non-wh phrase moves to the TP Spec, and then

the remnant VP moves to the CP Spec. A wh-phrase on the other hand moves to the CP Spec under wh-agreement. There is no higher place for the remnant VP to move to. It follows that we have a non-null counterpart of Watanabe's (1992) hypothesis; not only a null wh operator but also a non-null wh operator moves to the matrix CP Spec in the NS before spell-out in Japanese. That is, wh-movement is identical between Japanese and English. In fact, there is evidence that wh-feature checking takes place in the NS before spell-out in Japanese. That is, unlike non-wh phrases, wh-phrases resist Case particle omission.

- (v) a. John-(ga) naNI-(o) tabe-ta.
 John-NOM whachamacallit-ACC eat-past
 'John ate that thing.'
- b. dare-*(ga) NAni-??? (o) tabe-ta-no?
 who-NOM what-ACC eat-past-Q
 'Who ate what?'

The fact that Case particles must be pronounced with wh-phrases in (v-b) suggests that wh-feature checking takes place in the NS before spell-out in Japanese.

¹¹ In the test, the pronominal bound variable *kare* 'he' should be sufficiently de-stressed as [kr], not [kare]. I assume that the de-stressed *kare* is a well-behaved pronominal bound variable, unlike the stressed *KARE* [kare], which behaves as an R-expression. I think that the lack of careful prosodic distinction is responsible for the persistent problem of the native speakers disagreeing with respect to the acceptability judgment (in fact brain reaction) regarding the binding condition (C) related examples. For example, Cecchetto (1996: 80, n. 38) expresses frustration that the native speakers disagree on the grammaticality reaction. Rosen (1996) and Ogawa (1996) report that an example as (56-4c) is acceptable, but Abe (1998) and Inagaki (1998) consider it unacceptable. Kitahara (2002: 169) claims that Abe's (1993) conclusion concerning grammaticality judgment (reaction) is incorrect and that the correct one is as follows.

Flexible Command:

- (i) a. * *kare_i-ga Masao_i-no hahaoya-o aishiteiru*
he-NOM Masao-GEN mother-ACC love
'He loves Masao's mother.'
- b. ?* [*Masao_i-no hahaoya*]-o_k *kare_i-ga t_k aishiteiru*
Masao-GEN mother-ACC he-NOM love
'He loves Masao's mother.'

Unlike Kitahara's reaction, I think that (ib) is much better than that in (ia) if the pronoun *kare* 'he' is de-stressed. If (ib) is better, it poses a problem for Kitahara's "different-timing-of-binding" analysis, which argues that in (ib) the binding condition (C) violation is established when the scrambled object is in vP Spec being bound by the pronominal subject in TP Spec (where the subject is Case-valued). The example in (ib) is crucial for Kitahara, who argues against Saito's (1992) "different-timing-of-Case-marking" analysis in accounting for the following examples.

- (ii) a. ? *karera_i-o_k [otagai_i-no sensee]-ga t_k hihanshita*
they-ACC each other-GEN teacher-NOM criticized
'Each other's teachers criticized them.'
- b. [*otagai_i-no sensee*]-o_k *karera_i-ga t_k hihanshita*
each other-GEN teacher-ACC they-NOM criticized
'Each other's teachers criticized them.'

The example in (iib) has been a problem because one must conclude that a clause-internal scrambling, which is typically an A-movement, can sometimes be an A-bar movement. Saito (1992) assumes that the binding relation is established when the binder is Case-marked. The object in (iia) is Case-marked in TP Spec with V raising to T, whereas the object in (iib) is Case-marked in the original position before V raises to T (the different-timing-of-Case-marking analysis). For Kitahara, in (iia), the binding relation is established when the object is in vP Spec where the object is Case-marked, whereas the binding relation is established when the object is Case-marked in vP Spec, where the object is bound by the subject pro-

noun in TP Spec. Saito's analysis makes a correct prediction regarding (iib). However, Saito's analysis also presents problems. First, why does Case-marking sometimes take place at the launching site and sometimes at the landing site (a Procrastinate violation)? Second, why is the object Case-marked before it moves (a violation of Look-ahead prohibition)? Third, what is the motivation for different timing of Case-marking (ad-hoc)?

Rosen (1996: 30-35) uses the binding condition (C)-related (anti-) reconstruction effect to maintain that Japanese right dislocation is a syntactic phenomenon. The examples are adapted from Rosen (1996). Crucially, the pronoun *kare* 'he' must be de-stressed to allow the bound variable interpretation. That is a necessary idealization in this experiment.

(iii) a. * *kare_i-ga* [*John_i-no tomodachi-o*] *semeta*.
 He-NOM John-GEN friend-ACC blamed
 'He blamed John's friend.'

b. [*John_i-no tomodachi-o*] *kare_i-ga t semeta*.
 John-GEN friend-ACC he-NOM blamed
 'He blamed John's friend.'

c. ? *kare_i-ga t semeta* [*John_i-no tomodachi-o*].
 he-NOM blamed John's friend-ACC
 'He blamed John's friend.'

d. ? *kare_i-ga t semeta* [*John_i-ga hon-o ageta tomodachi-o*].
 he-NOM blamed John-NOM book-ACC gave friend-ACC
 'He blamed the friend to whom John gave the book.'

The example (iiia) exhibits a condition (C) violation in which the R-expression is not free. The example (iiib) shows an anti-reconstruction effect and respects the condition (C); the R-expression in the scrambled object is free. Rosen reports that (iiic) is not acceptable. Under the de-stressed pronunciation of the pronoun, however, the example is relatively acceptable as (iiid). If the postverbal object adjoins to the CP and become the highest

Flexible Command:

commander in the LF, the acceptability is predicted; the object undergoes feature-checking-driven movement and shows anti-reconstruction effect. According to Rosen, (iiid) is better than (iiic), which Rosen attributes to the late-merge hypothesis; the relative clause (adjunct) in (iiid) is absent at the time when the condition (C) applies. My analysis does not need the late-merge hypothesis.

¹² Bhatt (2003a: 7) citing examples from Mahajan (1997b: 192) claims that “rightward scrambling does not take a phrase higher.”

- (i) a. Ram-ne har-ek aadmii-ko t_j lauTaa-ii us-ki kitaab_j.
Ram-Erg every-on man-Dat return-Pfv.f he-Gen.f book.f
'Ram returned every man his book.'
- b. Mona-ne [Hrithik-aur Saif]_i-ko t_j dikhaa-ii [ek-duusre]_i-ki tasviire_j.
Mona-Erg Hrithik-and Saif-Dat show-Pfv.f each-other-Gen.f picture.f
'Mona showed Hrithik and Saif each other's pictures.'

A possible analysis is that the variable inside the right-dislocated phrase is bound at the launching site. It follows that the binding calculation takes place at the launching site or at the landing site. It is unclear what causes the distinction. I leave the issue for future research.

¹³ Abe (1998) and Inagaki (1998) react to examples like (57c) as unacceptable. I think that sufficient idealization is necessary for reliable experiment. It is extremely important that the bound variable *soko* 'it' in these examples should be de-stressed as [sk]. A stress on the pronoun makes it an R-expression, a completely distinct element. An arbitrary addition of stress and pause causes the structure alteration. A lack of careful prosodic consideration causes serious confusion. In fact, regarding BP (C)-related examples, Cecchetto (1999: 80, n. 38) shows frustration by saying that “I will not use them in this paper, due to the big variability among Japanese native speakers when they are asked to give this kind of judgments.”

Mahajan (1997b: 189) reports that the Hindi-Urdu counterpart is unacceptable: the WCO violation is not amnestied by rightward dislocation. (Cf.

Bhatt 2003a: 6).

(i) a. Base sentence, WCO:

* *us_i-ke bhaai-ne har-ek aadmii-ko maar-aa.*
he-Gen.Obl brother-Erg every-one man-Acc hit-Pfv
 '??? His_i brother hit every man_i.'

b. Leftward scrambling, WCO amnesty:

har-ek aadmii-ko_j us_i-ke bhaai-ne t_j maar-aa.
every-one man-Acc he-Gen.Obl brother-Erg hit-Pfv
 'Every man's brother hit him.' (Lit. '??? His_i brother hit every man_i.)

c. Rightward scrambling, WCO is not amnesty:

* *us_i-ke bhaai-ne t_j maar-aa har-ek aadmii-ko_j.*
he-Gen.Obl brother-Erg hit-Pfv every-one man-Acc
 '??? His_i brother hit every man_i.'

Unlike Japanese, (ic) is unacceptable; the WCO violation is not remedied. It is extremely important to ask whether the prosody of the pronoun *us* 'he' affects the acceptability. More specifically, does the example in (ic) become improve with the de-stressed pronoun? I leave the issue for the future research.

¹⁴ Cecchetto (1999) relies on data from Rosen (1996) and Simon (1989). Cecchetto contains rather complicated (insufficiently idealized) and sometimes inaccurate examples. I will test examples that are more natural and simpler (sufficiently idealized).

¹⁵ Idealizations and adjustments are necessary for appropriate experiments. For example, the verbs in both the embedded and matrix clauses are carefully chosen so that they naturally involve persons. If one verb is for things and the other for persons, the argument-predicate connection is fixed by the choice of verbs at the outset. By carefully avoiding such irrelevant factors, we can abstract relatively pure syntactic effect in movement.

¹⁶ Takano (2007: 18-19) takes up three tests to prove that Turkish right dislocation is a syntactic phenomenon.

Flexible Command:

- (i) a. Island sensitivity
- b. Multiple scrambling availability
- c. Negative polarity item (NPI) scrambling availability

Leftward scrambling, assumed to be a syntactic phenomenon, shows all the properties in (i). Takano claims that if rightward scrambling shows all the properties in (i) in a language, it also must be a syntactic phenomenon. For example, English topicalization, distinct from scrambling, does not show the properties in (i-b) and (i-c) (ibid. 19).

- (ii) a. * The book, to Mary, John gave.
- b. * Anyone, I didn't see.

As for the property in (i-a), English topicalization seems to show island sensitivity as scrambling. The example is adapted from Chomsky 1977.

- (iii) * This book_i, I accept [_{DP} the argument [_{CP} that John should read e_i]].

Thus, scrambling and topicalization do not completely differ.

¹⁷ It follows that, for SOV language, a sentence is a CP when the final copy undergoes leftward scrambling, while a sentence is a DP when the final copy undergoes rightward scrambling. The opposite situation holds for SVO languages, which seems counterintuitive. However, provided that DP and CP (a clause) have the same basic architecture that consists of Spec, complement and head, the result is not entirely outlandish.

¹⁸ Three notes are in order. First, the analysis requires a particular type of command. The exclusion type of command incorrectly predicts that the PP would command the outermost CP: there is no node that dominates both the PP and the CP, therefore the connection condition (every node dominating the PP dominates the CP) is vacuously satisfied, and the disconnection condition is also satisfied (the PP excludes the CP). To make this PBC analysis work, one must adopt the most disconnected (most costly) version of command, which has the disconnection condition (α and \square are disconnected iff neither is a segment of a category that contains the

other). The lack of agreement in scrambling causes the choice of the most disconnected version of command.

Second, to make this analysis work for (68b), one must adopt Kuno's (2006) assertion, which attributes the unavailability of reconstruction for the second (outer) adjunct to the minimality condition for reconstruction (MCR). The MCR states: Attract the closest. The first (inner) adjunct is closer to the reconstruction site. The MCR reinforces the PBC account.

Third, the PBC could be irrelevant to the phenomenon. The example in (68b) could be ruled out by the Extension (Cyclic) Condition; the second application of leftward scrambling goes too far back into the embedded clause.

¹⁹ One must be careful about the type of command. The exclusion type of command incorrectly predicts that the sentence-initial adjunct PP commands the postverbal adjunct CP, thereby satisfying the PBC; the example should be acceptable.

²⁰ An alternative analysis might be possible if we adopt pair-merge vs. set-merge distinction as in Cecchetto (1999: 68-69), which capitalizes on Chomsky (1998, 2000) and Saito and Fukui (1998). Cecchetto reverses Chomsky's definition. That is, pair-merge determines the label plus the sister, and extends the structure. Set-merge does not determine the label or the sister, and does not extend the structure.

Let us consider how this alternative works for the problem 1. A *wh*-phrase pair-merges with the matrix CP. The *wh*-phrase becomes the sister of the CP and commands the entire CP structure. The LCA requires the *wh*-phrase be pronounced first, which is not realized in (85). Note that Cecchetto's analysis incorrectly allows (85) because the *wh*-phrase pair-merging with the CP at the root can project without violating the selectional condition. Cecchetto needs something like the LCA and exclusion-type command to rule out (85).

A non-*wh* for example as in (49-1c) (a pronominal *wh* possibly D head) on the other hand set-merges with the matrix C head. The D is not the sister of the C and fails to become a commander. The D is invisible to the LCA. The LCA searches the lower copy for pronunciation.

Flexible Command:

It is worth noting that Takano (2007: 27) independently proposed that the postverbal constituent (PVC) in Turkish, which is strictly head-final, is derived by the same mechanism; in Takano's term 'complement-forming movement,' a set-merge in Chomsky's (1998, 2000) sense. That is, in the case of Turkish rightward scrambling, the PVC tucks into the C system as the sister of C (Richards 1997, 2001). Provided that the V remains in situ and that the C is phonetically null in Turkish, the complement-forming movement derives Turkish PVC. Thus, [PVC + C] forms a constituent. How plausible is the complement-forming-movement hypothesis for explaining PVC in SOV languages? I leave the issue for future research. See Chomsky (2000: 136–137) for restricting such complement-forming movement (the second merge respecting locality) to head-adjunction, the sisterhood (hence c-command) relation of which is contingent on how the notion is defined for head-adjunction (*ibid.*, 150, n. 106). However, Chomsky (2000: 137) notes that the complement-forming movement (Local Merge) respecting the Locality Condition rather than the Extension Condition may be possible for the third Merge, the sisterhood and c-command relations being preserved for the head. Chomsky (2000: 150, n. 107) refers to Richards 1997, arguing for Local Merge (tucking-in as an inner Spec) for multiple Move. Chomsky also notes that a "postcyclic" QR disobeys the Extension Condition.

Note that the set-merge in Cecchetto's (1999) sense is similar to the exclusion type command in that segments are invisible to it. This is the ground for Cecchetto assuming that the D commands into the TP. However, if the D commands the TP, the analysis incorrectly predicts that (49-1c) should be unacceptable because of the LCA violation. If we want to maintain Cecchetto's version of pair-merge vs. set-merge hypothesis, we need some condition guaranteeing the D not to become a commander.

²¹ As for the multiple wh-phrases example, Takita (to appear) independently observes the phenomenon. As Takita acknowledges, the phenomenon poses a problem for his proposal (bi-clausal argument ellipsis analysis), with which I disagree. Takita observes that leftward scrambling is different in that it does not tolerate double pronunciation of the copy. However,

I think the symmetry is preserved, as indicated by the following example.

- (i) nani-o John-wa nani-o tabe-ta-no ?
 what-ACC John-TOP what-ACC eat-PAST-Q
 ‘What did John eat?’

²² Note that Saito’s (1994) free-ride hypothesis makes an incorrect prediction that there should be no amelioration; the *wh*-phrase inside the embedded clause must escape the island to reach the matrix *wh* and the island violation should arise. See Cecchetto (1999: 66) for argument for the free-ride hypothesis working in Japanese right dislocation. Cecchetto argues that the apparent multiple right dislocation is in fact a single right adjunction to the matrix CP; one phrase adjoins to the other phrase *in situ* forming a single label-free constituent and it adjoins to the root (the matrix CP).

²³ Chomsky (2000: 147, n. 78) speculates that some cases of scrambling take place when a scrambling feature induces pied-piping even after Case assignment, the pied-piped element being “attracted” by a higher probe. For Kitahara (2002: 173), FF (SCR) is EPP; scrambling is a Match-driven movement that is forced by the EPP feature (general edge-forming feature that is a driving force of structure building). For Sabel (2001, 2005), FF (SCR) is \square , which exists in the AGR feature-set of v^0 and T^0 .

²⁴ Suggesting the possibility that *wh* and focus are connected, Richards (2010: 195) still distinguishes between the two. However, the fact that both *wh* and focus resist appearing in the postverbal position in SOV languages indicates that the two should be treated in the same way. Despite that, it seems that the prosodic *wh*-domain analysis has more explanatory power in many respects. First, the *wh* *in situ* *nani* (HL) and the relevant C to its right create the simplest possible prosodic *wh*-domain. The *wh* and the C to its left cannot create a good *wh*-domain. Second, the pronominal *nani* (LH) can appear in the postverbal position because *wh*-domain formation is irrelevant. Third, when two copies of *wh* are pronounced, the *wh*-copy *in situ* to the left of the C is prosodically dominant

Flexible Command:

(higher pitch), which indicates that the *wh* in situ and the *C* create an acceptable *wh*-domain.

- (i) John-wa nani-o tabeta-no nani-o?
John-TOP what-ACC ate-Q what-ACC
'(Lit.) What did John eat, what?'

²⁵ Maruyama (1999: 59-60, n. 3) agrees with Abe (1998), who reports that the example remains unacceptable with the resumptive pronoun. Maruyama speculates that the Subjacency violation is caused in such examples by movement of a phonologically null element, as null operator movement in Japanese *wh*-questions (Watanabe 1992). However, I think that the presence of the resumptive pronoun improves the sentence considerably. The resumptive pronoun must be pronounced without stresses and pauses.

- (i) a. * [Mary-wa Susan-ni [t_i mikaketa-atode] denwa-sita] John-o.
Mary-TOP Susan-DAT happened to see-after phone-did John-ACC
'Mary was calling Susan after she happened to see John.'
- b. ? [Mary-wa Susan-ni [kare_i-o mikaketa-atode] denwa-sita] John-o.
Mary-TOP Susan-DAT he-ACC happened to see-after phone-did John-ACC
'Mary was calling Susan after she happened to see John.'

If this is the fact, the contrast constitutes a well-behaved Subjacency vs. non-Subjacency effect. There is no need to postulate movement of a phonologically null element.

²⁶ The interrogative clausal complement (the *C* phonetically realized as *ka* (Q)) is self-sufficient in that the *wh*-phrase is licensed within the embedded clause.

- (i) a. Mary-wa [_{CP} John-ga nani-o tabeta-ka] itta-no?
 Mary-TOP John-NOM what-ACC ate Q said-Q
 'Did Mary say that John ate that thing?'
 'Did Mary say what John ate?'
 NOT 'What did Mary say John ate?'
- b. Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga nani-o tabeta-ka]_i?
 Mary-TOP said-Q John-NOM what-ACC ate Q
 'Did Mary say that John ate that thing?'
 'Did Mary say what John ate?'
 NOT 'What did Mary say John ate?'

These examples preserve symmetry in that the example with the postverbal clausal complement has the same meaning as the one with the complement in the base order. Symmetry is broken in the case of non-interrogative clausal complements.

²⁷ The example is marginally acceptable with the wh-phrase meaning 'why on earth' at the matrix level, i.e., 'Why on earth did Mary say John ate it?!'

²⁸ The ungrammaticality of the following example reinforces the conclusion.

- (i) * osushi-o_j [_{CP} Mary-wa t_i itta-no [_{CP} John-ga t_j tabeta to]_i]_j?
 sushi-ACC Mary-TOP said-Q John-NOM ate that
 'Did Mary say that John ate sushi?'

²⁹ In Hindi-Urdu, unlike non-finite complements, finite complements must appear in postverbal positions. The examples are adapted from Bhatt (2003a).

- (i) a. Mona jaan-tii hai [(ki) Rohit chanT hai]
 Mona.f know-Hab.f be.Prs.Sg that Rohit.m cunning be.Prs.Sg
 'Mona knows that Rohit is cunning.'
- b. * Mona [(ki) Rohit chanT hai] jaan-tii hai
 Mona.f that Rohit.m cunning be.Prs.Sg. know-Hab.f be.Prs.Sg
 'Mona knows that Rohit is cunning.'

Flexible Command:

In contrast, unlike Hindi-Urdu and like Japanese, Bengali finite complements can appear both pre- and post-verbally but with different complementizers in different positions, unlike Japanese. Bhatt cites Bengali examples from Bayer (1995).

- (ii) a. chele-Ta [[or baba aS-be] bOle] Sune-che
boy-CL his father come-Fut Comp1 hear-Pst
'The boy has heard that his father will come.'
- b. chele-Ta Sune-che [je [or baba aS-be]]
boy-CL hear-Pst Comp2 his father come-Fut
'The boy has heard that his father will come.'
- (iii) a. * chele-Ta [je [or baba aS-be]] Sune-che
boy-CL Comp2 his father come-Fut hear-Pst
'The boy has heard that his father will come.'
- b. * chele-Ta Sune-che [[or baba aS-be] bOle]
boy-CL hear-Pst his father come-Fut Comp1
'The boy has heard that his father will come.'

The head-final Comp1 *bOle* cannot appear in the postverbal finite complement as in (iiib), whereas the head-initial Comp2 *je* cannot appear in the preverbal finite complement as in (iiia).

In Hindi-Urdu, there are two strategies to get the wide scope reading of the wh-phrase in the postverbal complement clause: (i) to move the wh-phrase to the matrix clause, or (ii) to insert the wh-expletive *kyaa* 'what' into the matrix clause. In the corresponding Japanese example with the wh-phrase in the postverbal clausal complement, the first strategy (to move the wh-phrase to the matrix clause) does not work; instead, it leads to an island effect (NS-island effect). When the clausal complement is in the base position, the wh-phrase can scramble to the matrix clause with no island effect.

Turkish shows similar effects to Hindi-Urdu (Kornfilt 2005: 164-166). In Turkish, there are two types of postverbal clausal complement: preverbally

-base-generated and postverbally-base-generated. Let us consider how the scope-bearing element *sadace* 'only' interacts with the clausal complement and its subject. There are three cases. First, when the clausal complement is in the base-generated preverbal position, the scope relation is ambiguous: *sadace* takes wide scope over either the clausal complement or its subject. Second, when the clausal complement is moved to the postverbal position, *sadace* cannot interact with the embedded subject (therefore, it cannot appear). Kornfilt assumes that the clausal complement adjoins to the IP or the CP in this case. Third, when the clausal complement is base-generated in the postverbal position (the complementizer is *ki* 'that' in this case), the reading is preferred in which *sadace* takes scope over the clausal complement. We can argue that the Hindi-Urdu clausal complement is base-generated in the postverbal position as in the third type in Turkish. However, it is difficult to explain the reason why the wh-phrase in the postverbally-base-generated clausal complement shows the NS/LF-island effect in Hindi-Urdu.

³⁰ Tanaka (2001: 569, (42)) independently provides a similar example.

- (i) John-ga t_i itta yo, [Mary-ga t_j yonda-tte]_i LGB-o,
 NOM said NOM read COMP ACC
 'John said so, that Mary read it, LGB.'

The PBC is satisfied before the outer adjunct reconstructs. Tanaka (2001) assumes the two-clause analysis, which I reject.

³¹ Cecchetto (1999: 65-67) argues against multiple rightward dislocation and maintains that Japanese right dislocation targets the root node only. That is, when x and y appear after V in this order, x adjoins to the left of (set-merges with) y in the base position and the [x + y] constituent undergoes right dislocation. The constituent y has completed all the business related to projection, so x set-merges with y, not pair-merge in the sense of Cecchetto's definitions of Set-Merge and Pair-Merge. Cecchetto relies on Saito's (1994) saving mechanism for wh-adjunct (the free-ride analysis) that has an independent ground. That is, a wh-adjunct x adjoins to (free-rides on) the left of a wh-argument y in the base position and the

Flexible Command:

[x + y] constituent undergoes wh-movement without an ECP violation. I point out two problems of the free-ride analysis of Japanese right dislocation. First, it cannot account for the scope ambiguity between x and y. That is, x set-merges with y, in which no sister relationship, no command, or no ordering is determined under Cecchetto's definition of Set-Merge. The LCA cannot see terms lacking command relationship. The analysis incorrectly predicts that x and y cannot enter into scope calculation. Second, the free-ride analysis require x and y be clause mate. Cecchetto (1999: 67) claims that the following examples are bad because x and y are not clause mate. Therefore x cannot free-ride on y and the [x + y] amalgamation cannot be formed; [x + y] cannot be right dislocated.

(i) a. * t_{NP} [_{CP} Bill-ga t_{PP} *sundeiru to*] *omotteiru*, [_{PP} *sono mura-ni*] [_{NP} John-ga]
Bill-NOM live that believe the village-in John-NOM
'John believes that Bill lives in the village.'

b. * John-ga t_{PP} [_{CP} Mary-ga t_{PP} *sundeiru to*] *itta*, [_{PP} *sono mura-ni*] [_{PP} Bill-ni]
John-NOM Mary-NOM live that said the village-in Bill-to
'John said to Bill that Mary lives in the village.'

In (ia), the embedded-clause PP cannot free-ride on the matrix-clause subject because they are not clause mate. In (iib), the embedded-clause PP cannot free-ride on the matrix-clause PP because they are not clause mate. The problem is that these examples are in fact acceptable. Therefore, one cannot exclude the possibility that these examples involve multiple rightward scrambling.

Flexible Command: A Solution to the Symmetry Problem of Adjunction, Scrambling, and Dislocation

Koji ARIKAWA

The computational procedure of human natural language (C_{HL} ; only humans have it) produces sound information that instructs the sensory-motor (physical) system (every animal has it) on how to use it, and meaning information that instructs the thought (cognitive) system (every animal has it) on how to use it. One mystery of C_{HL} is that there is a third type of information that C_{HL} computes: this is structural information, which is neither sound nor meaning. We observe structural information in forms such as Case particles and inflections. Structural information is responsible for building a sentence structure (tree graph). The sensory-motor system reads off sound information hanging on the tree, while the thought system reads off meaning information hanging on the tree.

Structural information is like a virus in that it is checked, matched and deleted within the C_{HL} , a virus check system created by Mother Nature. It must be erased within C_{HL} because there is no external system that uses it. If structural information flowed into the sensory-motor system or the thought system, these external systems would freeze because they do not know what to do with the unknown information.

Mother Nature has created a computational system (a language organ) that is cancer-like, in that it multiplies a binary-branching structure. Human language (C_{HL}) has evolved from the mutated brain of *Homo Habilis* about

Flexible Command:

two million years ago, and what the system does is aimlessly multiply a binary-branching structure (two-membered-set building). This is similar to crystallization processes like snowflake development. Human language has not evolved for the purpose of communication as demonstrated by the fact that Homo Sapiens (us) as a species have disclosed the worst quality of communicative competence: the key words for understanding our species are lie (fraud) and war (murder).

This study analyzes measurements for the structural relationship between two nodes in a tree graph that C_{HL} produces. I will focus specifically on two measures: domination and command. From the beginning of the biolinguistics (generative syntax) project, domination and command have been used for measuring node relations. Linguists have always sought precise and useful domination and command rulers. Adjunction structure provides an excellent object of study for obtaining precise measurements. Adjunction structure is observed in the phenotype called scrambling (a word permutation phenomenon). Scrambling is an excellent natural object for us to study the symmetry problem in C_{HL} : what information is lost or preserved when words are permuted.

I propose a new approach to examining command: command measuring the equilibrium of connection and disconnection relationships between two nodes in a given tree. Capitalizing on Chomsky's (1995) insights, I propose flexible command, which is more precise than the previous definitions of command. Flexible command measures different levels of disconnection determined by differences in computational cost. Flexible command accounts for many empirically observed phenomena.

Many related conceptual problems are discussed. Does self-domination exist? Does self-command exist? What is the demonstration that domination is irreflexive? What is the demonstration that command is irreflexive?

Discussions of several related empirical problems follow. What is the structure of a sentence with a postverbal term in SOV languages? Specifically, what is the structure of the permuted order of SVO in SOV languages? Is O included within the same minimal sentence? What is the structural location of O? Does it undergo rightward dislocation? Does it asymmetrically command other terms? Why are *wh* and focus-phrases prohibited from appearing in the postverbal position in SOV languages? Why are non-*wh*/focus-phrases allowed to appear in the same position? Why does the island effect appear in the LF when the island (complex structure) is dislocated rightward after the verb? Why is the highest asymmetrical shifted heavy NP pronounced at the end, in violation of the LCA? Why does V appear before an adverb in French but after it in English? How does flexible command measure the relevant structural relations?

「学制」前文（明治五年）の再検討

竹中暉雄

はじめに

「学制」は、近代日本最初の教育法令である。しかしその準備をした学制取調掛の一二名が、実際にどのような仕事をしたのかについては、審議過程を記録する関係史料が出てこないために未解明のままである。一八七三（明治六）年の皇居炎上の際に太政官文書の「過半」が焼失し、また文部省保管資料の多くも一九二三（大正一二）年の関東大震災で失われてしまったが、関係史料はそのときに焼失したのではないかと考えられている。焼失したのであれば、残念ではあるが致し方のないことである。けれども学制取調掛自身が「学制」起草に関する文書や回想記録をほとんど残さず、また人に語った形跡もあまりないことは、どうにも不思議である。あたかも「学制」のことにはでなければもう触れたくないかのようなようである。

そこで本稿では、現在までのところ学制取調掛の活動に関する具体的状況を窺うことができる唯一の文書からその状況を推測したうえで、「学制」前文の文章上および内容上の諸問題について考察する。「学制」の条文上の齟齬や不統一は従来から指摘されていたことであるが、条文と同様の問題は前文にもあったのである。「学制」の混乱は、起草場面での混乱を仮定して初めて理解できることである。

そして前文の問題点は、英訳文と比較対照すればなおよく見えてくる。当時の文部省自身、前文に含まれる虚偽や誇張に困っていたことが、その英訳の仕方から分かってくる。

最後に、明治新政府がその教育面での出発に当たり、当然主張すべきことでありながらも、「学制」前文で〈私的利益のための教育〉という理念を採用したために主張できなくなってしまった諸理念について考察する。

一 学制取調掛の仕事をめぐる

学制取調掛の伝記類や人物研究においては、いままなお「学制」起草に関する明確なことが分からない。全員に伝記の類があるわけではないが、例えば取調掛の筆頭である仏学者・箕作麟祥の伝記ではどうか。明治四年に文部省出任、文部大教授、文部少博士に任ぜられたことの記述はあっても、学制取調掛については任ぜられたことすら記述されていない^①。内閣修史局が各自に提出させた履歴書に基づいて編集した『百官履歴』に学制取調掛で掲載があるのは箕作と内田正雄だけであるが、箕作の履歴の明治三年～二年は「中略」となっているので学制取調掛に関する記述はない^②。最近の研究では、箕作が「学制」に「唱歌」(小学)と「奏楽」(下等中学)を取り入れたのは、当初から実施の意図もなく「面目上」採用したにすぎないとする説への反論がある^③。しかし起草責任者としての「学制」

への関与は未だ明らかではない。

長谷川泰の伝記にも、何の記述もない⁴⁾。河津祐之についての最近の研究では、彼が箕作や辻新次らと「翻訳起草の側面（マブ）で中心的な役割」を果たし、特に河津が翻訳した「仏国学制」は「学制」起草の参考にされ「大きな影響を与えたと言われている」⁵⁾と評価されている。しかしやはり「学制」起草に貢献したことへの河津自身による記録は見つからないようである。

西潟（にしやいたる）訥は、「学制」前文といくつかの類似点をもつ重要な文書（大隈宛「建白書」）や大木文部卿宛の「学制改革要項（仮題）」を残している⁶⁾ので、彼の出身地・新潟県で編集された近年の人物事典の類において学制取調掛であったとの記述はある。しかし「学制」起草に関しそれ以上に詳しいことは不明である⁶⁾。

内田正雄については、明治四年二月二日「学制取調掛被仰付候事」との記載が『百官履歴』にあるが、続いて明治五年四月二〇日に「免本官」とあり「同日 文部省六等出仕被仰付候事」とある⁷⁾。「学制」発令前のことである。後述するように瓜生寅は、「学制」発令直後の明治五年八月九日に辞任している。これまで学制取調掛が任命された日付については、明治四年二月二日に一名、一九日に一名と史料に基づいて明らかにされてきたが、任が解かれたのがいつかは不明のままである。任務終了後に一斉に解任されたわけではなさそうなので、このことも今後の課題である。

内田正雄に関する最近の一〇七頁に及ぶ詳細な基礎研究においても、残念ながら「学制と内田正雄の関係は不明の域を出ない」という。ただ『輿地誌略』が教科書に指定されていることから、「学制の精神と内田正雄の著作には内的交感（まじりあ）が成立した」と評価されている⁸⁾。しかし指定教科書は内外のものを含め数多いので、いちいち「内的交感」の成立と言えるかどうか疑問である。

では文部省に二〇年余りも長期間勤め、「文部省の辻か、辻の文部省か」とまで言われた辻新次の伝記ではどうだろうか。本文では主な事績の第一に明治五年の「小学教則」「中学教則」編成に「参与」したことが挙げられながら、学制取調掛としての記述は一行もない^⑨。その「中学教則」について最近の研究が、辻の大木文部卿宛書簡を紹介している^⑩。「フェルベッキ尽力にて書体も結構ニ相成申候、御覧之上魯王子へ御遣し被下度候」という内容で、「魯王子」とは明治五年九月に日本訪問したロシア皇子のことである。しかしこの研究においても、辻と「学制」との関わりは「教則」を介してしか判明しない。

辻の伝記の年譜には、明治四年「文部卿大木喬任の下に教育制度の創定に参す」、明治五年「学制」第二編の取調及び立案は、君専ら其衝に当る」とあるけれども^⑪、しかし肝腎の辻自身は、「学制」は「江藤新平の」助言に拠る所が甚だ多いとのことである^⑫という、学制取調掛の一員であったとは思えない非常に頼りない回想しか残していないのである。

長茨と瓜生寅については、「学制」に関与したことを自ら示す資料が見つけられているが（後述）、しかし策定にどのように関係したのかはやはり確認できない。

このような状況であるので、別稿「学制」（明治五年）の教育理念に関する諸問題」（桃山学院大学『人間科学』第三二号、二〇〇六年十一月）で紹介したような、見解の対立が生まれるわけである。つまり学制取調掛は任命からわずか一カ月の急速審議によって「学制大綱（第一次伺）」を起草したという見解（井上久雄）と、それは無理な「推論」であり、学制草案の実際の起草者は、実は大木喬任文部卿とその側近、とりわけ学制取調掛に任命される以前から文部省出仕となっていた長茨と西潟訥とが総括企画者となって逐次起草したのではないかとの見解（倉澤剛）である。

いずれにしても文部省は以前から、イギリス・フランス・オランダ・プロイセン・アメリカなど欧米の教育制度の

調査を開始しており¹³、また「学制大綱」第一次伺（明治五年一月）自体が、「万国学制ノ最善ナルモノヲ採リ内外之便宜ヲ斟酌シ」と述べている。さらに第二次伺（明治五年三月）も「一般人民ノ文明」が国家の「富強安康」であるがゆえにプロイセン国王も人民を督励して就学させていると、外国の例を引き合いに出して述べているところから、「学制」は前文も含め欧米の教育理念・制度の影響を強く受けて起草されたと考えるのが自然である。「学制」のモデルを単一のものとするのはいかなる意味でも不可能¹⁴であるとも考えられている。また明治五年「小学教則」の教科書が示す徹底した「科学重視」の注目すべき現象は、単純に『仏国学制』や『和蘭学制』の影響だけでは片づけることができないほどで、それは「奴隸根情ノ人民」「無学文盲ノ人民」（中村正直）に対する啓蒙家たちの、「民衆啓蒙への熱意」を抜きには考えられなかったという指摘もある¹⁵。

ところが一九二九（昭和四）年には、「学制」は欧米とくにフランスの影響を大きく受けているとの見解に強く反対し、「学制」は長茅が起草した「学制五篇」によるとの主張者が現れていた。しかも「試業法」「給費制度」「経費維持法」「学級制度」などすべて、主として広瀬淡窓の咸宜園制度によるという。この主張者は、淡窓や咸宜園の研究者として有名な中島市三郎である¹⁶。

長茅（三洲）が「学制五篇」というものを著していたということは、彼の墓碑銘や、倉澤剛が長家の史料で確認した長茅自筆の履歴書「五年二月五日 任文部少丞 学制五篇ヲ艸ス」¹⁷で確認できる。しかし彼は学制取調掛として「学制」起草の準備をしていたのであるから、「学制」案を何か作成していたとしても、それ自体は特に不思議なことではない¹⁸。問題は、その「学制五篇」が実際の「学制」とどのような関係にあったか、つまりどれほどの類似性をもつものであったかである。

そういう意味で、中島の以下の文は、「学制五篇」の内容が判明していない以上、あまり論証的ではない。

「学制々定の動機は長茂先生の上書した学制五篇に基因してゐることは既に確かである。長茂先生の上書した学制五篇の内容は全く淡窓先生の宜園制度に準拠したものである。故に明治五年に制定された学制の内容は主として日田の咸宜園制度に拠つたものである」

明治初年は「皇道主義」なのにフランスを真似るなど「あり得ない」とか¹⁹⁾、「此の学制五篇が木戸孝允公によつて採用され」とかも同様で（木戸は当時、岩倉使節団副使として海外にいた）、説得的ではない。

中島市三郎はまた、修身教科書として『和語陰陽録』が指定されていることが、「学制」の内容が咸宜園に拠ることを「雄弁に」語っているとも主張している。この書こそ広瀬淡窓の第一の愛読書であつたからである。確かに淡窓は病氣療養中の一九歳のときに同書を読み、「美事を為して天助を祈ろうと思つた」という²⁰⁾。他方文部省は、明治六年四月二九日に、課業書不足という理由もあつて追加の「小学用書目録」を布達しており（布達五八号）、その中の「修身之部」三冊のうちには『和語陰陽録』が含まれている。「陰陽」（正確には「陰鷲」とは、「天が冥々の中にあつてひそかに下民を安定すること」（諸橋轍次『大漢和辞典』）「天帝がひそかに人間の行為をみて、禍福を下すこと」（『広辞苑』）である。明の時代の袁了凡がその子に教訓を与えた物語書が『陰鷲録』で、それを江戸中期の無名上人が和訳した²¹⁾。この書が小学校の教科書に指定された背景には、あるいは長の推薦という事情があつたかも知れない。けれども同目録および「小学教則」（明治五年九月文部省布達番外）には福沢諭吉のものを含め洋学系教科書が多数掲載されているのであるから、この一冊のことだけで「学制」の全体が長あるいは咸宜園に拠るなどとはとても言えなかつた。

ところで「学制五篇」はどうなったのであろうか。中島市三郎の論考が興味深いのは、長災の長男である長壽吉（九州帝国大学法文学部教授）の「序」がそれに付けられていたからである。「学制五篇」を「珍藏」していたが「震災」（一九二三年）のために失ってしまった。しかし「三洲が学制を草するに当りて之を咸宜園の古制に法りたりし事は疑ふの余地なし」という²²⁾。

「学制」のモデルが咸宜園にあるという中島説はその子の中島三夫に引き継がれ、両者の類似点が例えば次のように示されている²³⁾。

「被仰出書」——「人々すべてその身を治、知を開き、才芸を長ずることが緊要である。学校はその為にあるのだから自分の立身出世の為にみんな残らず入学せねばならない」

「広瀬淡窓の思想」——「書を読むは日用の為なり、吾が学問するは日用に供せんがためなり（夜雨寮筆記卷二）「我が学問するは唯己が身の為にするなり。己が身に切ならざることこれを除き、己に益あることはこれをとる弟子を教ゆるもまたかくの如し」（同卷三）

しかし朱子学派に近い儒学者のいう「己が身の為」の学問、つまり「天命を畏敬し、天意の我に到達せるを自覚し、さらに勉学によってこれを追求する」「敬天」のための学問と²⁴⁾、自己の「立身出世」のための学問とを同列に論じることができるとどうかは、はなはだ疑問である。

ところで「学制」草案の全一二二章、そして実際に発令された「学制」全一〇九章も、実際には「大中小学区之事」「学校之事」「教員ノ事」「生徒及試業ノ事」「海外留学生規則ノ事」「学費ノ事」の六部分に分かれており、「五編」で

はなかつた。しかし倉澤剛は長芑がどのように考えて「五編」に区分したかをいろいろ推測して、何れにしても「学制五篇」とは学制草案を「指すものと解すべきである」と強引に断定し、そして長を「総括起草者」と位置づけた²⁶。

「学制」研究において多くの点で見解が対立している倉澤剛と井上久雄であるが、井上は長芑が執筆したとされる『文部省学制原案』（国立公文書館所蔵）を見たうえで、中島市三郎の説に対して「学制原案を分析すれば明らかであるが、学制は長の名文達筆とはほど遠い」との反論を私信（一九六三年一月二日）で寄せていたという²⁶。

それに反論するために中島三夫が、「長が」学制創立を自ら述べた新資料²⁷として挙げているのが、「小生文部二居候時始て学制ヲ創立致候は小生ト同人ニテ設立候事ニ有之候文才も有之翻訳之業抔ハ大ニ長し居候」との文章を含む品川弥二郎宛書簡（国会図書館所蔵「品川弥二郎文書」分類番号 687-1）である²⁸。

文中「同人」とあるのは、瓜生寅^{うりゅうはしめ}のことである。この書簡は、文部の翻訳をしていた瓜生が組織改革で職を失ったので、今度設置された農商務省で使ってもらえないかという就職斡旋依頼状であり、上記引用箇所は瓜生が「十分御用ニ相立候人物」であることを保証する箇所である。長と瓜生と二人だけで「学制」を「設立」したというのは事実にも反するが、それだけ瓜生に「文才」があることをよく知っているということを強調するために必要な表現だったのかも知れない。それはともかくとして、学制取調掛であった人物が自ら「学制」への関与を述べている数少ない貴重な史料である。

ところで明治五年四月二八日付として『三洲長芑著作選集』に収録されているこの書簡、極めて奇妙である。なぜならそのころは、長も瓜生もまさに現職の学制取調掛として起草作業の真最中だったからである。書簡自体の日付は「四月廿八日」のみで年の記入はない。状袋の宛名には「品川少輔殿」とある。実は文中に出てくる農商務省が新設されたのは明治一四年四月七日であり、品川は翌年六月一三日に同省の少輔から大輔となっているので、従ってこの書

簡は、明治五年ではなく明治一四年の四月二八日のものであった²⁹⁾。

瓜生寅の「自筆履歴」³⁰⁾によれば、ちょうどこの時期は、明治一二年一月一八日に「工部省御用掛准奏任月給百円大阪鉄道局在勤」となるが二七日には依願退職し、一五年六月二二日に日本鉄道会社に月給一五〇円で雇用されるまでの空白期間に当たっているので、「月俸ハ……七八十円より百円迄にても可」と長が就職斡旋依頼する話と合う。しかしその斡旋も奏功しなかったことになる。不可解なのは、文部省で翻訳の仕事をしていたのに組織改革でその職を失ったという長の説明である。瓜生が文部少教授として文部省編輯局で「著述ニ従事」していたのは、明治四年七月二七日からで、九月二四日に改めて文部少教授に任じられ大学南校教場掛を命じられた。そして一二月二日に学制取調掛に任命され、後述するように明治五年八月九日に文部省を辞職して大蔵省五等出仕となっていた。

既に述べたように、学制取調掛であった長芑が「学制五編」を著したであろうことに特に疑念はない。重要なことは、「学制」の草案や現実の条文とどれほど類似していたかであるが、履歴書の「学制五篇ヲ艸ス」以外に起草の際の下書きもメモ類も残されていないので、そのことは現在のところ確認できない。

しかし「学制」策定を過度に長芑一人の功績にしてしまうと、他の学制取調掛の仕事を見捨てることになるし、そのことはまた同時に、矛盾だらけで条文や見出しの表記さえも未整理、しかも大量の「誤謬」を含んだ「学制」の責任を、漢学・書画の大家であった長芑一人に押し付けることにもなる。「学制」の文章については、「長の名文達筆とはほど遠い」という井上久雄の判断のほうが正当であろう。背景の多様な多くの人間が何か異常な混乱状況のなかで制定を迫られたからこそ、多くのミスがそのままになってしまったのである。

学制取調掛だった人間が、そのことに関して自ら記録を残していたことが確認できるもう一人は、実は長芑が就職斡旋をしていた瓜生寅である。長崎でフルベッキから英学を学んだ福井藩士・瓜生の自筆「履歴」から、関連箇所を

抜き書きすると以下のようになる。

明治四年九月二四日 文部少教授・大学南校教場掛、「是ヨリ教育ノ革新に従事ス」

一月一四日 兼南校事務掛

二月九日 文部省七等出仕、南校と本省を兼務。「以来学制教則新設ニ従事ス」

明治五年二月一〇日 文務六等出仕、「同日本省事務専務ヲ命セラルル学制既ニ発布教則已ニ成シ故アリ文部ヲ辞ス」

八月九日 大蔵省五等出仕 「印紙ヲ新設ス」

瓜生は他の七名とともに明治四年一月二日に学制取調掛に任命されたのであるが、そのことの記述はない。しかし二月九日の項に「以来学制教則新設ニ従事」とある。またこの「履歴」の書き方では、明治五年二月一〇日に文部省を辞職したように読めるが、しかし「学制既ニ発布」とあり、また後述する漢詩の末尾の記述から、辞職は八月九日のことであろう。それにしても八月二日に「学制」が発令された直後に「故アリ文部ヲ辞ス」とはどういうことなのであろうか。

瓜生寅が安政五年（一七歳）から明治四四年（七〇歳）までに作った漢詩の中に、実は「学制」に関連するものが含まれている。このことは山下英一『グリフィスと日本』で紹介されている³¹。そのうちの一篇は、明治四年、瓜生三〇歳のときの「奉命立学制 定教則」という説明を持つものであり、長茨の場合の「学制五篇ヲ艸ス」といった素っ気ない記録とは違って、かなりリアルな資料である。以下の引用は、瓜生寅『梅村枯葉集』写本（前出）に拠っているが、明らかに間違いと思われる文字については、正しいと思われる文字を「」内に併記した。

遙々數百載	戰国存余習	幕府興国学	專為民上級
中興日猶淺	依然猶因襲	所以學問事	高尚只是執
虛文無實用	民庶不欲入	教之非其道	適以破素業
國家布教化	宣 <small>（宜）</small> 凶其普及	家無不學子	國無不學區
如斯能事畢	列國可並立	聖明今在上	德化萬民協
爰命立學制	教則亦可踏	盛哉文明運	伏竜破其蟄

數百年も続いた 戰国以来の因習残り
幕府が興した學問は 専ら上級民のためのもの
維新後まだ日淺く 因習なお残る
學問をする理由は 高尚のみに捉われ
虚學で實用性なく ために庶民は學ぼうとせず
これを教えても道には合わず まさに生業から外れる
いま國家が教育を広め 宜しくその普及を図るべし
家に不學の子無く 國に不學の地無し
こうなれば為すべきことすべて終わり 列國と並立可能
いまや天子が上にあり 萬民の德化がかなう

ここに命じられ学制を立て 教則にも従うべし

盛んなるや文明巡り 潜みし竜もいま地上へと出ず

倉澤剛が「学制」の「総括起草者」と推定したのは長茨であったが、もう一人「総括企画者」として長とともに重視したのは、大隈宛「建白書」を残していた西潟訥であり³²⁾、西潟有力説に賛同する研究書もある³³⁾。

しかし、この瓜生寅の漢詩もまた、従来の虚学を廃し実学を重視し、民衆のための学問を普及させなければならぬと主張している点、さらにまた「家無不学子 国無不学区」というフレーズを含んでいる点において、「学制」前文との類似性を無視できない。

ところがこの漢詩は「学制」前文とは違って、天皇の国家が教育を普及させ、その目的は列国との並立であり、潜んでいた竜はいま文明世界へと飛躍するという、国家的な視点から論じられている。この点において、第一次・二次の「学制大綱」が国家の「富強安康」のために「世ノ文明」「人ノ才芸」を「進長」させる必要があると論じていたのと似ており、教育の目的を私的利益においた「学制」前文とは大きく異なっていた。

そして明治五年八月二日、「学制」の発令を迎える。瓜生はどうしたか。既に触れたように、その七日後の八月九日に文部省を去って大蔵省出仕となったのである。自筆「履歴」には、「学制既ニ発布教則已ニ成シ故アリ文部ヲ辞ス」とあった。山下英一が「発布を待たずして文部省を辞職」として履歴に「食い違いがある」と記しているのは³⁴⁾、「学制」発令日を「明治五年九月」と誤認しているためである。瓜生寅は「学制」発令のわずか七日後に、どのような「アリ」で文部省を去ったのであろうか。その時の心境を表現したのが、次の漢詩である。彼には、嘆くべきことがあったのである（なお「」内は正字と思われる文字。「」内は山下英一『グリフィスと日本』での引用による）。

自歎 時余將退文部省

憶昨始興家〔学〕 所守〔学〕簡与質 家〔学〕期適日用 室無曳裾匹

漁童与樵青 操作〔伉〕皆真率 綽々有餘裕 衆務無疎失

喉過熱易忘 時去操乃佚 游戲加交友 虚飾营華室

食客来仰蔭 奴婢森成列 員冗日生事 文繁日遂未

執務無責任 操作無規律 怨嗟時到耳 費多事却室〔室〕

経綸負初心 慘澹思〔忍〕往日 思之夜不眠 簾鈎懸落日

八月九日退文部入大藏

自らを嘆く 時に我將に文部省を退かんとす

思うに先ごろ初めて学を興し 守るところは簡と質なり

学ぶは日用に適うを期し 部屋で裾を引きずる輩なし

漁童と樵青 仕事は総て真面目 綽々として餘裕あり 業務に拔かり失敗なし

喉元過ぎれば熱さ忘れ易く 時がたてば節操すなわち消失

遊戯に加えて交友 虚飾して華室を営む

食客来りて助けを頼み 奴婢森の如く列を成す

員冗りて 日々事を生じ 文（かざり）繁くて 日々未だ進まず

執務は無責任 仕事は無規律 怨嗟の声が時には聞こえ

経費かかり 却って事は捗らず

方針は初心に背き 惨澹として過ぎし日を偲ぶ

これを思つて夜も眠れず 簾鉤を落日に懸ける

理解しにくい箇所もいくつかある。例えば五句目に唐突に出てくる「漁童与樵青」。「漁童」と「樵青」とは、唐の道士・張志和が帝から賜った奴婢を夫婦とし、その夫婦に付けた名前である。旧藩士族・瓜生の教養の広さに驚かざるをえないが、『新唐書』「隱逸列伝一二」にわずか一行「帝嘗賜奴婢各一志和配為夫婦号漁童樵青」としか出てこない故事なので³⁵、「漁童」と「樵青」がどういう人物であつたか何も分からず、当然、瓜生の詩で登場してくる必然性が理解できない。ただ以下に続く句との関係からすれば、真面目な働き者であつたと仮定しての事であろう。

また最終句の「簾鉤懸落日」も理解しがたい。夕日にスタレを懸けて外界と距離をおくという心境を表現したかったのであるが、しかしスタレを巻き上げておく留め金の「簾鉤」を落日に懸けるでは意味をなさない。実はこの句は、杜甫の「落日」の初句「落日在簾鉤」を改作したものである。杜甫の詩は「溪辺春事幽」と続き、夕日がスタレの留め金のところにかかってくるころ、当時彼が住んでいた浣花溪のほとりで人と雀と虫たちによって展開されている春の農村の静かでのどかな風景を描いていく³⁶。〈憂愁〉の詩人には珍しく穏やかな心境を詠んだ詩が、およそ場違いな心理的場面で利用されている³⁷。

しかし本稿で重要なことは、瓜生がどのような心境で文部省を去つたのか、彼が訴えたかったことが明確に読み取れることである。彼は学制取調掛の仕事ぶりに立腹していたのである。当初こそ余裕をもって真面目に仕事に取り組

み、手ばかりや失敗はなかったにもかかわらず、時間が経過するにつれて節操は消え仕事は乱れ、いろいろな客が来て援助を求め、人数ばかり多くて日々揉め事が生まれ、無責任、無規律となつてしまった。「なぜこんなことになつてしまったのか」という怨嗟の声も聞こえ、方針は初心に反するようになり、夜も眠れないようになった。

「経綸負初心」という句は、西潟訥が「天下ノ富強」のためにと大隈重信に建白し、「学制大綱」もそう論じ、そして瓜生もまた共感していた国家的な教育目的、つまり列強諸国と対峙できるような国家を作るための学問という壮大な理念が、最終的には個人の立身・治産・昌業のためという情けなくもスケールの小さい「学制」前文に変えられていったことに對する、失望の念を表現していたのではないか。

こういう〈証言〉が発見されているのは、現在のところ瓜生寅ただ一人である。従つてこのことが事実なのかどうかは確認の仕様がなない。けれども瓜生がまつたくの虚偽を意識的に詩にするという必要性も考えられない。むしろ、もしこれが事実であつたとすれば、なぜあれほどの「誤謬」や齟齬を残したままそれこそ「無責任」にも「学制」が発令され、その直後から訂正が繰り返されざるをえなかつたのか、そしてまたなぜ学制取調掛だつた人物が自分の任務のことにあまり触れたがらなかつたのか、よく納得できるのである。そう言えば田中不二麻呂も、「学制」は「悉く仏蘭西ノ制度ニ倣フタノデアルカラ」（国会図書館憲政資料室蔵『大木喬任文書・書類』「談話筆記・下」と、取調掛の仕事あまり評価していなかつた。議事録などは、もともと存在していなかつたのかも知れない。

二 「学制」前文を含む諸問題

「学制」条文が欠陥だらけであつた理由としては、岩倉使節団の渡欧中に留守政府が大急ぎで発令・施行したから

ではないかと推測できた。しかしその上に、瓜生が漢詩に残したような学制取調掛の状況が真実であったとすれば、「学制」の前文についても、新たな視点からの検討が必要になってくる。

有名な「必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカナシメン事ヲ期ス」というフレーズが含まれている前文は、明治新政府の教育に対する抱負を表現した「堂々たるもの」と称賛され³⁸、「驚くほど民主的な教育目的の記述」がアメリカ人に注目され³⁹、H・パツシンからも「リベラル派の勝利」を示す「偉大な歴史的文書」⁴⁰であると評価されている。しかし実は前文にも、条文と同様の粗雑さが見られるのである。表現および内容の双方において、事前に慎重に検討されるべき法令の文章としてはかなり不適切な問題点が少なからず含まれている。

そういう前文が、もし井上久雄が理解していたような「天皇の勅語」であったとすれば、起草者や文部省の責任はさぞかし重大なものとなったであろう（「学制」前文の法令上の性格については、別稿『「学制」に関する諸問題——公布日、頒布、序文の呼称・正文について』桃山学院大学『人間科学』第三〇号、二〇〇六年一月、参照）。

ところで別稿「外国人から見た『学制』（明治五年）」（桃山学院大学『国際文化論集』第四二号、二〇一〇年一〇月）で紹介したように、外国人や外国紙が「学制」という制度の単なる紹介をする場合においても、当時としては無理もないことではあるが、誤解や混乱があった。従って外国紙が「学制」前文の内容まで紹介し批評するということは、非常に難しいことであったと想像できる。しかし『ニューヨーク・タイムズ』（二八七三年三月一五日）は、それを行なっている数少ない事例である。日本文の良し悪しを検討するには、外国語ではどう表現できるかという視点から考えると有効であるので、まずこの『ニューヨーク・タイムズ』の記事を手がかりに検討を試みてみる。

同紙がなぜ「学制」前文まで論評することができたかと言えば、日本に新しい教育制度を確立するという日本政府の布告（「学制」）を、森有礼駐米公使がアメリカ教育当局のために英訳したからである。そのおかげで同社のワシン

トン通信員は、「極めて特異な (peculiar) 人びとのとても興味深く特異な (peculiar) 著作物」を読むことができた。ところがその第一印象とは、「極めて長つたらしく (quite lengthy)」、要領のよい起草者なら一〇枚もあればまとめることができるのに、草稿三五枚にも及んでいるということであった⁽⁴¹⁾。文の多くは意味が「やや不明瞭」(somewhat obscure)で、この通信員が使った比喩によれば、伝書鳩がほとんど唯一の郵便手段で、しかし電信の代わりとしては悪くない代用品であった時代に、デイズレーリが作品の中でアスタルテ女王にさせるような質問、「手紙を持たずに飛んでいるなんて、お前たち、なんとという鳩なの？」を想起させるというのである⁽⁴²⁾。

「学制」前文は言わんとすることは把握できるので、〈手紙を持たない伝書鳩〉というほど内容空虚ではなかったけれども、「学制」前文がいろいろ形式的・内容的な問題を内包していたことは確かであった。

記事に登場するベンジャミン・デイズレーリ（一八〇四―一八八一）は、ヴィクトリア女王と親密であった保守党の領袖であり、数多くの名言を残した政治家であり小説家でもあった。アスタルテとは、フェニキアの最も重要な豊穡と性愛の女神であり、ギリシア神話のアフロディテ（ローマ神話のヴィーナス）に当たる。この通信員は同時にまた、このような「見事で魅力的な」(admirable and charming) 文書、しかも日本人のような人間が起草した文書を批判するのは「度量が狭く」(ungenerous)、日本人が生み出したものに我々の基準を適用することははっきり言って不当であるとも述べている。開化度の低い「特異な」国民が漸くにして作り上げることでできた「見事な」文書なので、それを西洋の基準で批評することなど「度量が狭い」ということであろう。

そして記事は「学制」前文の、「ひとが身を立て (establish himself)、その職業を助け繁栄させる方法を見つけ、人生を送ることができる手段は、その生活を改善し、その知識を広め、その働く力を増進すること以外にはない」という箇所から、以下「教育はこれまで、衣食を確保する手段として役立つとしか見なされてこなかった。そしてもし政

府によって提供されないならば、身に付けることはできないものだと考えられてきた。この種の馬鹿げた考えは、すぐに捨て去る必要がある。そして、何よりも教育の進歩に目覚めるように、すべてのひとを説得していかななくてはならない」まで、かなり長い紹介をしている。

従来の先行研究では、「学制」前文の教育理念あるいは条文の不整合については論じられてきたが、『ニューヨーク・タイムズ』が指摘している「長つたらしい」「不明確」といった文章上の問題を取り上げたものはほとんど見当たらない。「学制」前文には、果たしてどのような問題点があったのか、各種英訳をも参考にしながら、この点について検討してみよう。

まず形式的な点においては、「雖_レ」と「雖_{トモ}」、「及_ヒ」と「及」、「是_レ」と「是」「之」、「而_テ」と「而_{シテ}」の混用といった、用語の不統一がある（『法令全書』では「身_ヲ脩_メ」「身_ヲ脩_メ」という不統一があるが、外史局編纂『布告全書』（壬申八月刊）では「カ所」とも「身_ヲ脩_メ」である）。また単に長すぎるだけではなく屋上屋を重ねる繰り返しがいくつかあり、冗長であると言える。例えば「人能_ク其オノアル所ニ応シ勉励シテ之ニ従事シ而シテ後初テ生_ヲ治メ産_ヲ興シ業_ヲ昌ニスル_ヲ得_{ヘシ}」は、多くはすでに述べたことの繰り返しであり、無くてもそのまま文脈は繋がる。

発令後一月も経たないうちに文部省布達第二二号で前文中「華士族」の次に「卒」が追加されたが、しかし明治五年一月二九日の太政官布告第二九号は「卒」階級をすでに廃止していた（世襲のものは「士族」に、一代限りは「平民」に組み入れ）。こういうお粗末なミスもあるが、これは必ずしも学制取調掛ないし文部省の責任とは言えない⁴³⁾。内容的には、少なくとも以下の六点を指摘することができる。

問題① 「従来学校ノ設アリテヨリ年ヲ歴ルコト久シト雖^E或ハ其道ヲ得サルヨリシテ人其方向ヲ誤リ」の「其道ヲ得サルヨリシテ」の意味が曖昧である。

問題② 「学問ハ士人以上ノ事トシ農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ之ヲ度外ニヲキ学問ノ何物ヲ弁セス」は、本当に事実に沿っていたのか？

問題③ 「士人以上ノ稀ニ学フ者」とあるが、事実には反する表現ではないか？

問題④ 「国家ノ為ニスト唱へ」て学問すれば、どうして「詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虚談ノ途ニ陥」ることになるのか？

問題⑤ 「士人以上ノ稀ニ学フ者」が「国家ノ為ニスト唱へ」て学問して「空理虚談ノ途ニ陥」ることが「沿襲ノ習弊」で、それが「貧乏破産喪家ノ徒」が多い理由であると述べられているが、そうとすれば「士人以上ノ稀ニ学フ者」に「貧乏破産喪家ノ徒」が多いことになる。不自然ではないか？

問題⑥ 最後の但書中の「一般ノ人民他事ヲ抛チ自ラ奮テ必ス学ニ従事セシムヘキ様心得ヘキ事」の意味がとりにくく誤解を招きやすい。また「他事ヲ抛チ」という表現は適切なのか？

まず問題①の「其道ヲ得サルヨリシテ」である。「道を得る」とは〈正しい指導を得る〉あるいは〈道理を理解する〉といった意味であるが、ではどういう理由から〈得られなかった〉のか、読む側は頭を悩まさずにはいられない。

前記『ニューヨーク・タイムズ』の記事（一八七三年三月一日）では、「学校の不備あるいは間違つた指導から」(from their imperfection or misdirection) と訳されている。工部大学校のお雇い教師であったヘンリー・ダイアー (Henry Dyer) は、「学校行政のやり方における何か思い違いのために」(owing to some misapprehension in the

way of school administration) と、行政当局側の責任を明確にした訳をしている⁴⁴。学校のどういう不備なのか、誰の指導ミスなのか、どのような思い違いなのか分からないが、もともとこの原文に〈不備〉があるのだから仕方ない。

菊池大麓がロンドン大学で行なった講義では、「学校が不適切に管理されていたせいで」(through their being improperly administered) と訳され⁴⁵、また東京帝大の教育学教授・吉田熊次は、「間違った指導のせいで」(through misguidance) と訳していた⁴⁶。

日本人として恐らく両人とも、学校の管理・行政が悪いことと農工商・婦女子が学問を度外視するようになることとの間にどのような因果関係があるのか、あるいは誰が間違った指導をしたことになっているのか、いろいろ疑問に思いながら英訳せざるをえなかったのではないだろうか。

一八七六(明治九)年、フィラデルフィアで万国博覧会が開催された。その出展のために文部省は『日本教育史概要』を出版するが、「学制」(Code of Education) に関するこの部分の訳出にはよほど困ったと思われる。というのは、「学校は政府によって設けられてきたので」(so far as they have been provided by government) と訳しているからである⁴⁷。これは意識といったものではない。寺子屋や私塾の存在のことを考えれば、かなり史実に反している。そのうえ政府が学校を設置すれば、なぜ農工商・婦女子は方向を誤って学問をしなくてもよいと考えるようになるのか、まったく理解できない。

問題②は、かなり深刻である。『ニューヨーク・タイムズ』記事は「農民、職人、商人、そして女性は、無知のまま置き去りにされ、そのために彼らは、教育とはどういふことなのかさえ知らなかった」(Farmers, mechanics, traders, and women were left in ignorance, so that they knew not what education was) と訳し、同じ箇所は同紙の別の号においても「布告が率直に認めているように」として、再度紹介されている⁴⁸。もちろんこれは、「学制」前文自

身がそのように述べていたのであるから、まったく正当な英訳である。

けれども前文のこの記述自体がとんでもない虚偽・誇張であり、歴史的事実には反していた。

前文は始めのほうで、「農商百工技芸」を含めておよそ「人ノ営ムトコロノ事」には必ず学問があると述べ、その学問をしない人間が「道路ニ迷ヒ飢餓ニ陥リ家ヲ破リ身ヲ喪フ徒」になると述べていた。ところが「農工商及ヒ婦女子」が学問について何も分かっていないというのであれば、彼らも「道路ニ迷ヒ飢餓ニ陥リ家ヲ破リ身ヲ喪フ徒」にならざるをえない。当時の人口の大半を占める彼らがそうであるとすれば、社会が成立するはずなかった。

前文は、寺子屋や私塾、郷学での教育のことを無視している。幕末期には庶民の入学を許可する藩校も増えていたし、また幕府の昌平坂学問所さえ庶民の聴講を許可していたのであるが、こうした事実を隠蔽している。農工商・婦女子のために出版されていた各種の往来物の存在もまったく考慮していない。

江戸時代には「往来物は家庭や寺子屋での学習教材として、ひろく採りあげられるようになった」のであるが、生活実態に合わせた教材が必要であるため、その数はおびただしいものにならざるをえなかった。現存しているものだけでも各分野にわたって約七〇〇種にのぼり、そのうち約一〇〇〇種は女性用であった⁴⁹。商家に生まれた女性の自筆旅日記「駿河紀行」の分析などを通して教養形成を追跡し、幕末期甲府の「教育文化が女性に開かれていたこと」を明らかにした最近の研究もある⁵⁰。

しかしこのような事情を十分に認識していたはずの菊池大麓はこの箇所を、*“... people have made a mistake of thinking that learning is a matter for those above samurai rank, and as for farmers, artisans and merchants, as also for women, they have no idea of what learning is and think of it as something beyond their sphere”*⁵¹ ほぼそのまま英訳し、吉田熊次も同様で、“Learning being viewed as the exclusive privilege of the Samurai and his

superiors, farmers, artisans, merchants, and women have neglected it altogether and know not even its meaning”と直訳していた。

現代のアメリカ人研究者B・プラットは、前文が当時存在していた数千の学校のことには触れていないこと、他の文書はそれらの存在を認めてはいたが短所を強調するだけであったことを指摘している。そしてこのようなテクニクは、イギリスのエジプト植民地行政府が採用していたともいう⁵⁾。プラットの指摘のように、前文のこうした虚偽・誇張は、「是即チ沿襲ノ習弊ニシテ」「今般文部省ニ於テ学制ヲ定メ追々教則ヲモ改正シ布告ニ及フ」と、新政府の「学制」の有難さを強調するための政策的方便であった。

ところで「農民、職人、商人、そして女性は、無知のまま置き去りにされ」、そのことは太政官布告も認めていると外国に紹介されては、「遅れた日本」という認識を公式に外国に与えることになり、非常に都合が悪い。その意味で「学制」前文は極めて罪深かったと言わざるをえない。

ヘンリー・ダイアーはこの部分を、「農工商、そしてまた女性にとつては、学問は彼らの領域を超えたものと見なされてきた」(for farmers, artisans, and merchants, and also for women, learning was regarded as beyond their sphere)としか訳していないので、「無知のまま置き去りにされた」(ニューヨーク・タイムズ)とは、かなり印象が違ふ。さらに前文の原文が「農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ・・・学問ノ何物ヲ弁セス」と、無学であることの責任を彼ら自身に負わせているのに対して、ダイヤーのこの訳は「周囲によってそのように見なされていた」と、責任を周囲に求める配慮を加えていた。なお原文に忠実な訳では「農工商及ヒ婦女子」は「学問とは何か、何の考えも持っていないか」(have no idea of what learning is)、「菊池大麓」[学問の意味すら知らなかった (know not even its meaning)](吉田熊次)となっている。

「学制」前文のこの不都合さについても、当時の文部省はよく認識していたと推測できる。というのは前記『日本教育史概要』も、責任を周囲に求めるダイヤーと同様の配慮を加え、さらに抄訳であるにもかかわらずこの部分に補足を加えて「下層階級、そして女性にとつては、学問はかれらの領域を越えたものと見なされ、たとえ学習されることがあったとしても、限られた性質のものであった」(For the lower classes of society, and for women, learning was regarded as beyond their sphere, and, if acquired at all, was of a limited character) と訳していたからである。傍点部分が付け加えられることによって、極端さが緩和されている。

日本のことを良く知っている外国人たちは、「学制」前文のこうした文章に惑わされることなく、江戸時代においても教育は非常に普及していたと記述していた。例えば、文部省設置後における学校増設の動きは、「旧体制下においてさえも」「教育は非常に普及 (general) していたという事実によって助けられている」というように⁵³⁾。

また『ニューヨーク・タイムズ』の別の記事は、旧制度下においても日本人が決して「無教育ではなかった」ことは注意すべきことであり、以前、東京の帝国大学に関係していたグリフィス氏は、学校と大学、学問と学習は將軍体制においても非常に盛んであったと述べていると、グリフィス (Griffis, William Elliot) を引用していた。グリフィスによれば、人々の九割は読み書きができたし、本は安く、巡回図書館はあらゆる町で見つけることができた。それゆえに、より完全な教育制度導入のための土壌は十分に準備されていたのである⁵³⁾。

日本滞在中のグリフィス自身の論評では、私的な学校やその教師は広く存在していたので、正確な統計は無いものの、その頃も人口の四分の三は、仮名の読み書き、算盤での計算、仮名で書かれた簡単な読み物を読むことができたといっている⁵⁴⁾。下層階級の女子も全国にあった私的な学校で学習をし、読み書きのあとは家事のための勉強をしていたと述べられ、そのための教科書として、『女大学』『女小学』『女庭訓』『女今川』『百人一首』などが紹介され

ていた⁵⁵。

ヘンリー・ダイアーも、「知性は極めて広く拡がり、読み書きが出来ないような人は、少なくとも通常の日本人にはほとんどいなかった」と評価していた。ただ、単純な計算でさえすぐに算盤を使って「機械的手段の奴隷」となっているのは「奇妙」(curious)であったそうであるが。

もっとも「人々の九割」「人口の四分の三」は読み書きができたとか、できない人は「ほとんどいなかった」などというのは、かなりの過大評価であった。多くの先行研究を踏まえたR・ルビンジャーは、寺子屋などへの就学率と識字率を同一視することの間違い、階層や地域・性別・職業などによってさまざまに要求される読み書き能力の定義の重要性などを指摘し、識字率の全国平均という数量化に慎重である。こういう問題は、「入札〔投票札〕」「車連判状」「日記」「手紙」など個別の具体例に基づいて論じなくてはならない。そして彼は、例えば一八八一(明治一四)年に長野県常盤村で八八二名の成人男子を対象に実施された調査結果から遡って、江戸時代末期の一八五〇年代、この村の男子の識字率は六五%に達していたが、しかし読み書き能力を「少なくとも普通のものが読め」「書式の決まった簡単な書類」を書き、商売で「成功し得るだけの能力」だと定義すれば、この年代の識字率は七%にまで落ち込むと推定していた⁵⁶。

しかしグリフィスやダイアーの上記のような記述は、「学制」前文が「農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ・・・学問ノ何物ヲ弁セス」と述べていたことなど、まったく度外視するものであった。

問題③は、「士人以上ノ稀ニ学フ者」という語句である。従来、学問は「士人以上ノ事」とされてきたというだけでも不適切なのに、この語句もとてつもない虚偽・誇張であるので、なおのこと問題である。「士人以上」のものであっても学問をするものは「稀」であったというのであるから。

これではいかにも不都合なので、森有礼が英訳する際に意識的に省略したのであるか、『ニューヨーク・タイムズ』の紹介記事では「士人以上ノ稀ニ学フ者」云々に当たる箇所は訳されていない。また文部省の『日本教育史概要』（前出）は「上級階級の間でさえも」としか訳さず、ダイヤーも「上流階級の間でさえも」、菊池大麓も「サムライ階級以上の人々の間でさえも」としか英訳していない。

一方、吉田熊次は「この言葉を正直に『Even those few among the Samurai and his superiors who did pursue learning』と訳していた」⁽⁴⁷⁾。

問題④は、「国家ノ為ニスト唱へ」て学問すればどうして「詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虚談ノ途ニ陥」ることになるのかということである。因果関係を説明できない不合理さがあり、訳そうにも訳せない。それで『ニューヨーク・タイムズ』の紹介記事、ヘンリー・ダイアーの訳では、該当箇所は省かれている。

菊池大麓および吉田熊次はここも比較的忠実に英訳しているので、文脈の不合理さは否めない。文部省の前掲書は、原文の不合理さを覆うためであろう、国家のために知識を身につけるということを「口実 (pretext) にして」と補足して訳している。つまり「国家ノ為」を口実として学費や衣食を官に依存して学問するが、実際には自分の好きな趣味的なことを学んだというわけである。そして「彼ら自身の利益あるいは国家の利益になりそうなることを学ぶ代わりに」「多くの時間が」とも補足されて、「詩作や優雅な金言の作成といった無益な仕事に費やされたのである」と結ばれている。

なお言うまでもないことであるが、士族や江戸時代の学者たちすべてが「詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虚談ノ途ニ陥」っていた訳ではない（もつとも前文には「動モスレハ」という逃げ道が設けてあったが）。朱子学・古学派（荻生徂徠・伊藤仁齋）・陽明学など儒学は現実的な政治の学であったし、和算や測量学・地理学・医学なども発展していた。この

点にも「学制」前文の意図的な虚偽・誇張があった。

問題⑤は、「沿襲ノ習弊」とは何を指しているかをどう読み取るかという問題である。この個所を普通に読むと、「士人以上ノ稀ニ学フ者」が「国家ノ為ニスト唱へ」て学問し「空理虚談ノ途ニ陥」ることが「是即チ沿襲ノ習弊」で、これが「貧乏破産喪家ノ徒多キ所以ナリ」となっているので、そうとすれば「士人以上ノ稀ニ学フ者」に「貧乏破産喪家ノ徒」が多いという不自然な内容の文章になってしまう。けれども「是即チ沿襲ノ習弊」の「是」は複数形にはなっていないけれども（別の箇所では「此等ノ弊」も使用されている）、前の文「農工商及ヒ婦女子ニ至ツテハ・・・学問ノ何物タルヲ弁セス」などを含めて指していると考えれば、不自然さは薄められる。そうすればすぐ後の「是故ニ人タルモノハ学ハスンハ有ヘカラス」にうまく接続していくので、そのように考えるべきであろう。

ところが「学制」前文最後の但書では、「従来沿襲ノ弊」のことが「学問ハ士人以上ノ事トシ国家ノ為ニスト唱フルヲ以テ学費及其衣食ノ用ニ至ル迄多ク官ニ依頼シ之ヲ給スルニ非サレハ学ハサル事ト思ヒ一生ヲ自棄スルモノ少カラス」と述べられているので、「一生ヲ自棄スルモノ」が少なからずいるのは、「士人以上」ということになる。そこに「農工商及ヒ婦女子」が含まれていないことは論理的にも明白である。なぜなら学問など度外視して学問が何であるかなど何も理解していない「農工商及ヒ婦女子」が、〈学問は国家のためにするのであるから学費などを支給されない限り学問はしない〉などと考えることはありえないからである。そうだとすれば、先ほどの「沿襲ノ習弊」もやはり「士人以上ノ稀ニ学フ者」に関してだけを指していたのではないかと考えられる。

学問が何であるかを理解しないと道路に迷い飢餓に陥り家を破り身を喪うようになることだけを強調すればいいはずの「学制」前文が、なぜ「士人以上ノ稀ニ学フ者」「士人以上」を引き合いに出して、その結果、虚偽になるような不自然な文章を二度まで綴る必要があったのだろうか。それは言うまでもなく、学問・教育の費用を政府に依存する

という「士人以上」の世界での「沿襲ノ習弊」を非難せんがためであった。

このように複雑な背景を持つ文章を英訳するのは極めて困難である。ヘンリー・ダイアーの英語訳は、但書の上述の不自然な部分を、「これまで学問に専心してきた人々は、ほとんどいつも政府の援助を当てにしてきた」(Persons who have hitherto applied themselves to study have almost always looked to the Government for their support)と簡潔にしか記述していない。文部省訳は但書の全体を省略してしまっている。その代わりに「学制」前文の抄訳であるにもかかわらず、全国を八大学区に分けるなどといった条文内容の説明を一二行にわたって付加している。

他方、菊池大麓訳は但書も忠実に英訳しているので、「サムライ階級以上」(above samurai rank)に「その一生を台無しにする」(spoil their whole life) 人間が少なからずいるという不自然さはそのままである。吉田熊次訳においても同様である。

ところで『ニューヨーク・タイムズ』記事では、前文但書の該当部分は「教育はこれまで、衣食を確保する手段として役立つとしか見なされてこなかった」ので、「もし政府によって与えられないならば、身に付けることはできないものだと考えられてきた」(Education has been regarded only to serve as the means of obtaining food and clothing, and if it were not offered by the Government, it was thought by the people a thing not to be acquired) (前出) という文章になっている。

しかし、この英訳文には二つの困った点がある。一つは、〈教育は衣食のためにしか役立たない〉という考えが存在したかのようにになっている点であり、第二は、既に検討してきたようにこの部分は「士人以上」の学問する者についての話であるにもかかわらず、そのことが省略されたために、このような考え方が一般的に存在していたようになっていることである。もしそういう考えが一般に存在していたのならば、政府が与えなくても人々は自ら教育を受けた

はずである。実際に一般民衆は既述のように、多数の商人向け教訓書や、育児書、礼法書、そしてまた『商売往来』『農業往来』『女今川』など各種の往来物の存在が示すように、自らの生活のために自力で学習を行ってきた。

「学制」前文自体は、『ニューヨーク・タイムズ』が紹介したような意味のことは述べていない。前文がこれまでの教育（学問）に関して具体的に述べているのは、「士人以上ノ稀ニ学フ者モ動モスレハ国家ノ為ニスト唱ヘ身ヲ立ルノ基タルヲ知ラスシテ或ハ詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虚談ノ途ニ陥リ其論高尚ニ似タリト雖モ之ヲ身ニ行ヒ事ニ施スコト能ハサルモノ少カラス」の一箇所のみである。前文は、教育が「身ヲ立ルノ基」、つまり自分の衣食に役立つものであるはずなのに、実際にはそうは見られてこなかったことを問題にしていたのである。したがって『ニューヨーク・タイムズ』の記事の紹介は意味が逆になっていて、この点は明白に記事（あるいは森有礼の英訳）のほうの間違いであった。

問題⑥について。「必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカシメン事」を訴える「学制」前文が、但書の最後でもう一度、「一般ノ人民」に子弟の就学を命じている。しかし「他事ヲ抛チ」「自ラ奮テ」がどこに係るのか分かりにくい文章となっている。そのために生まれた誤解については第三節で述べるが、いくら強調表現であるとしても「他事ヲ抛チ」は穏当ではないであろう。生業まで放棄させてはならない。菊池大麓訳は「leaving all else aside」と原文に忠実であるが、吉田熊次訳の「子どもの教育を何事にも優先させて」(subordinate all other matter to the education of his children)、『ニューヨーク・タイムズ』記事の「他の何にもまして」(more than anything else)のほうが言葉を選んでいて、より適切である。

以上のように「学制」前文は、意味曖昧な語句、不自然な文脈、また歴史的事実に反する虚偽・誇張を含んでいた。そのため、英訳に際して特別の配慮が要求される非常な〈難物〉だったのである。

三 「学制」前文が語らなかつた諸理念

このような問題を有する「学制」前文は、日本の代表的な先行研究においてどのように評価されてきたであろうか。

土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』では、前文は福沢流の「実学思想」が一貫していることが指摘されている。政府指導層の「国家富強のため」ということは寸毫も動いていなかった」にもかかわらず、その「眼目」は「からくりのごとくに姿を消しているのであった」という。しかしその理由については「不思議といえは不思議」としか言及されていない⁵⁸。

尾形裕康『学制実施経緯の研究』および尾形裕康『学制成立史の研究』には、前文自体に関する記述はない。

倉澤剛『小学校の歴史・Ⅰ』は二頁にわたって内容を解説している。最も重要な点として、学問は一部士人のものではなく人民全体のもの、学費は原則として民費によることの二点が指摘されている⁵⁹。倉澤剛『学制の研究』（一九七三年）では、前文自体に関する記述は極めて少なく、「近代的な実用主義・合理主義の理論を打ち出した」こと、「官費に依頼せず」「自ラ奮テ」学ぶべきこと」の二点が、「学制」の特徴として記されているだけである⁶⁰。

前文について詳しい記述があるのは井上久雄『学制論考』である。第二章の第四節「被仰出の精神と学制の意義」において、「被仰出」（前文）の「知識主義的な理念」は「個人主義的な教育理念」に立脚しているかのごとくであるが、それは「教育費負担を国民に強制することを説得するため」⁶¹であって、実際に「国家的効用を軽視した」とみるのは「早計」であると指摘されている。その理由は、「学制の制定を文部省が企画した」とき「知識主義の教育は国家

の富強安康の必須の条件として提唱されていた」からである⁽⁶²⁾。そして「被仰出」での「教育の個人的効用の説得が就学の強圧的な説論と相関していることの意味」はこの点にあるとも論じられている⁽⁶³⁾。

確かに「学制」前文は財政的な理由から、教育理念としての「国家富強」を避け、その代替措置として「私的利益のための学問・教育」という理念を打ち出したと考えられる。しかし政府がいくら「企画」段階で「国家の富強安康」を考えていたとしても、実際の前文では教育の「国家的効用」が「軽視」され草案の「国家の富強安康」が削除されたことは事実である。問題はなぜそうなったかである。誰の強力な主張によって、どのような経過によって原案は覆されたのか。残念ながらこの点は、未だ解明されていない。

倉澤剛は、国会図書館憲政資料室の「大木文書・書類之部」の中に、「書いては消し、消しては書い」た⁽⁶⁴⁾大木喬任自身による「学制発行ノ儀伺」(第二次「学制大綱」)下書きを見つけている。明治五年三月一四日か一五日に正院に提出されたと考えられるこの「学制」草案にも、まだ「国家ノ富強安康」が残っていた。とすれば、それ以降に文部卿の考えをも覆すほどの強力な圧力がかかったことになるのである。しかし倉澤は、原案と八月二日の実際の「学制」を詳細に比較検討して、全一二二章が一〇九章に縮小され、条文の「生硬な文章」が「平明」に書き直されたこと、それ以外にも条文には「実にさまざまな修正」が加えられていることを指摘しながら⁽⁶⁵⁾、前文における教育理念の転換については何も述べていない。

また尾形利雄が言うように、民衆の自発的就学を促進するには「国家の富強という大義名分」よりも「立身出世という教育の個人的効用」を強調し、国民の「利己的関心」に訴えた方が効果的であるという計算が働いていたことも想像できる⁽⁶⁶⁾。しかしその場合においても、誰がそういう計算をして理念の転換を主張したのが重要であるが、このことは意識されていない。

ところで「学制」発令当時においても、数こそ少ないが「この国の最善の標識 (sign) は知識愛」であり、このことは「理解の道を踏み外すものは、死者の集団に留まり続けるであろう」という旧儒教の格言を評価していることに示されているという『ニューヨーク・タイムズ』の報道もあった⁶⁷。しかし日本近代教育の出発点に当たっての政府の公式教育理念である「学制」前文は、「知識愛」などむしろ否定しているかのようであり、これがその後の日本教育評価において外国人に与えた影響は強かった。

例えば一九三七（昭和一二）年、日中戦争本格化の年に刊行された外国人編集の日本教育史研究書は、「学制」前文から「功利主義」という「本質」を導き出し次のように論じている。

太政官の布告は、日本の教育の「本質的に功利主義的な性質 (the essentially utilitarian nature)」を強調している。日本の教育の原理は、歴史的にも現在の傾向においても、二つの目的を実現するように計画されてきた。一つは、道徳性を促進することであり、第二は「生計の助けとなる知識」を提供することである。今日において「学問それ自体に対する愛着」などあまりないのは、過去においてと同様である。また人格発達における「美的・知的発達の価値」があまり理解・評価されていない。こうした批判は今日においてさえ、一般に日本および外国の批評家の双方から聞かれるのであるが、一八七二年、日本全体が熱心に西洋模倣の努力をしていた時代、そしてまた実用的な基準があらゆる改革の尺度であった時代においては、なおさら明白であった⁶⁸。

すなわち「功利主義」という教育理念は、単に近代教育の出発点における「学制」の時代だけではなく、「学制」以降における日本教育の「本質」になったというのである。従って同書では、「実用」重視の日本には「学問それ自体に

対する愛着」はあまりなく「美的・知的発達の価値」もあまり尊重されないと指摘されている。H・パツシンもまた、「学制」前文 (The Preamble) は「極めて強い功利主義的な論調で布告した」と評価し、後にいろいろ批判されたけれども「日本人の教育思想の重要な基準の一つを示し続けた」と考えている⁽⁶⁾。

確かに「学制」前文の「私的利益のための学問・教育」という主張は、教育理念として何かお粗末で、まさに後年批判された(エコノミック・アニマル)を彷彿させる。当時最先端の西洋学者・漢学者たちがほとんどであった学制取調掛のメンバーたちも恥ぢずかしい思いをして、それを自分たちの業績としてあまり誇りに思わなかったのではないか。そうだとすれば、彼らが多くを語らなかつたのも無理はない。

維新後わずか数年の時代状況において、「学制」前文が「人民一般」に訴えるべきことは、もっと他になかつたのであろうか。少なくとも次の三点はあつたはずである。

その第一は、公共利益のための学問・教育ということである。なぜなら別稿「学制」(明治五年)をめぐる『受益者負担』論議(桃山学院大学『国際文化論集』第三九号、二〇〇九年三月)で検討したように、「学制」条文での財政負担原則は、「民費」「学区」負担、つまり公共的負担であつたからである。近代日本の教育は、「学制」前文における「私的利益のための学問・教育」という個人主義的な理念と、条文における財政負担の原則としての公共的負担主義(一部「受益者負担」主義が混じっているが、これもまた「学制」の「学制」たる所以である)とがチグハグな並存をしたまま出発したのである。従つたとえ「教育費負担を国民に強制する」(井上久雄)にしても、「公共利益のため」という教育理念を打ち出すことも可能だったのである。実際、各地方官の「就学告諭」の研究が明らかにしたように⁽⁷⁾、各地の「就学告諭」の中には「学制」前文の個人主義的教育論をあえて否定し、公共福祉的な視点からの教育論・教育財政論を採用していた事例もあつたのである。

ところで本来、ベンサムやミルが主張した「功利主義」とは、衆知のように「最大多数の最大幸福」をもたらす行為を善とみなす主張であり、少数特権階級のための立法・行政を批判する理論であった。従ってそれは、個人の利益と社会の利益との調整を目指しているものであり、他人の存在を考慮しない利己主義とはまったく異なる。しかしその「功利主義」を「本質」としてしていると批評される「学制」前文の中に、「最大多数の最大幸福」とか社会的幸福という論点が出てくるかと言えば、一切出てこない。そういう意味で前文は、「利己主義」とは言えても本来の「功利主義」とは呼べないのである。

「学制」前文の「功利主義」を「学制」の制度や実施結果にまで当てはめた研究によれば、学制は「西洋化」の概念で解釈するのではなく「人間はつねに利己的に行為する」という「進化の概念」ないし「自然の法則」で解釈したほうが「論理的・一貫性」を伴うことができるという。例えば「学制」は一方で就学拒否を呼び起こしたが、それもそのほうが自分の利益になると判断した人々の「自然の法則」通りの行動だったのである^{〔7〕}。

「学制」前文の思想は、西洋教育史研究者からの最近の指摘もあるように^{〔8〕}、当時の時代精神として有力であったH・スペンサーや福沢諭吉などの「功利主義」思想から大きな影響を受けている。それは間違いないことではあるが、そっくりそのままの再現ではなく、取捨選択・意識的な改造が施してあった。それを区別しないと、「学制」の独自性・特異性が明確にならないのである。別稿「『学制』（明治五年）の教育理念に関する諸問題―立身出世、単線型学校制度、『学問のすゝめ』との関係」（桃山学院大学『人間科学』第三二号、二〇〇六年一月）でも論じたように、「学制」前文は例えば『学問のすゝめ』初編の自然権思想を欠いているし、他方では『学問のすゝめ』初編には書かれていない強制就学の思想があった。

第二に「学制」前文は、全国的な画一的教育制度がなぜ必要なのかを説明すべきであった。なぜなら「学制」が条

文で規定していたことだからである。それは、公平性の実現のために必要だったはずである。ところが私的利益論を採用したために、説明できなくなってしまう。

一八七二年九月、静岡県在住の米国人教師が文部省へ行なった「建白」⁷³は、現在「教育ノ利益」を専ら東京にのみ集めているのは、諸県の学校の「害」となり「気力」を喪失させることになる」と主張している。文明諸国では、例えば英国でもドイツや米国でも、有名大学はいずれも小村にある。そこで建白者は、諸県学校を政府が「惠顧扶助」すること、「学問ヲ好メル極メテ幼少極メテ卑賤ナル人ヲシテ、教養ヲ受ル十分自由ノ機会」が得られようにすることを要望した。

この米国人教師とは、中村正直『自由之理』（一八七二年）に序文を寄せているクラーク (Clark Edward Warren) であることが、吉野作造によって明らかにされている⁷⁴。またクラークは、グリフィスが「勝海舟の求めに応じて」紹介した「無二の親友」であったという⁷⁵。「建白」の日付からすれば、クラークが「学制」の制定（一八七二年九月四日）を知っていたかどうか微妙なところであるが、恐らくは未だ知らなかったであろう。「建白」の文中に、良く出来る生徒は政府が「忽チ御拔用」するので「学校ノ風俗」がそのために破壊されてしまうとあり、これは「貢進生」制度（明治三年七月二十七日、太政官布告四九〇号）のことを指していると考えられる。「学制」自体は、結果的には実現できなかったけれども、決して東京集中の制度ではなく、文部省が教育行政を一手に引き受けはするものの（第一章「全国ノ学政ハ之ヲ文部一省ニ統フ」）、そのことによって全国に大学・中学・小学を偏りなく公平に、つまり画的に散在させることを狙っていた。

その「学制」の中央集権・画一性は、明治五年段階は前近代から近代への移行期である「絶対主義」の時期に当たるとする一時期の明治「絶対主義」論においては、次のような理由で否定的に論じられてきた。例えば小松周吉によ

れば、「学制」の半封建的側面において「中央集権的画一主義の教育」が、その半ブルジョワ的側面で「特異なる主知主義の教育」が要求されたという。彼の見解では、近代日本の教育制度は「教育勅語」の明治二〇年代に確立されるのであって「学制」によってではなかった⁷⁶。

しかし地方割拠こそが封建制度の特徴であるはずなので、「半封建的」であればなぜ「中央集権的画一性」が要求されることになるのか不思議である。また「教育勅語」の明治二〇年代以降になって「半ブルジョワ的側面」が消えて〈全ブルジョワ的〉となれば、「特異なる主知主義の教育」も消えて、「自主性」を認め「知性の開発」を意味する「主知主義」が要求されていったか、疑問が残るところであった。

「学制」前文は、「学制」が規定していた学校制度の中央集権的な画一性の意義について積極的に主張すべきであったにもかかわらず、それについても一言も触れなかった。

一方フランスでは、まさしく「絶対主義」の時代、王令によって国内でのイエズス会の活動が禁止されたため、イエズス会の手を離れたコレージュをパリ高等法院が自ら監督しようとし、そのための調査特別委員四名が任命された。そのうちの一人ロラン・デルスヴィルは、一七六八年五月一三日、「国民教育」の特性を「画一性」という視点から強調する報告を行っていた。「学制」の一〇〇年以上も前、フランス革命の二二年前のことである。

彼によれば、「国民教育」とは何よりもフランス全土に「画一的な教育」を実施することであった。なぜその必要があるかと言えば、「とりわけごく幼い時に受けた教育のみが、風俗、風習、習慣における画一性」を生じさせることができるからである。そしてそのことが重要な理由は、「生まれによる偏見を脱し、徳や正義に対する同じ考え方でもっと自らを形成」していけるからであった⁷⁷。

第三に「学制」前文は、維新によって新しく生まれた国家・社会を法令を理解することによって積極的に支えてい

ける人間をつくる、またそういう人間になっていくという教育理念を提示すべきであった。なぜなら近代法治国家を築くための統治姿勢の転換に、教育面から呼応することが求められていたからである。しかしこのことも、〈私的利益のための教育〉という理念を採用してしまったために、表に出ることができなくなってしまった。

近代公教育制度が構築される理由の一つは、言うまでもなく国民づくりという政治的目的達成のためであった。その目的は、上から強圧的な命令によっても実現可能ではあるが、持続させることは難しい。むしろ政策を理解し進んで服従してくれる国民を作り出すことが重要である。

「学制」がそういう意図を最初からもっていたことは、従来から指摘されている。しかしその場合に、「学制」前文と政府の隠された意図とを合体させて論じられることが多かった。例えば、「学制」は「個人主義的な教育理念」に立脚しているかのようなのであるが「国家的効用を軽視した」とみるのは「早計」であるとか（井上久雄）、「被仰出書」は「富国強兵を学校の目的」としていた（小松周吉）とか、「被仰出書」は政府と一体化していた福沢諭吉の『学問のすゝめ』の「ひき写し」である（安川寿之輔）というように。

しかし、「学制」前文と政府の意図とは明確に区別したほうが良いのではないか。区別しないと、〈国家的利益のための学問〉が〈私的利益のための学問〉に転換されたという重要な事実そのものが見えなくなってしまうからである。また区別しないと、「学制」前文の特徴、つまり政府が本来の意図を国家財政的観点から意識的に隠し個人主義的な教育理念を表現したことが鮮明にならないからである。アメリカ人研究者プラットは、「学制」の背後には「暗黙の前提」があって、それは日本国民を国家目標へと動員できる能力を高める目的のために教育を支配することだったので、前文（the Preamble）が「国家のための学問」を批判しているのは「皮肉（ironic）なこと」であったと表現したが⁷⁸、むしろ〈不誠実〉と言うほうがふさわしかった。

従来の先行研究において、「学制」の隠された意図を政治的側面というよりむしろ法的な側面から論じる論考はそう多くはなかった。その数少ない事例である石戸谷哲夫『日本教員史研究』は、民衆がせめて「触書」くらい間違いく読めるようにしないと、「中央集権制度を築いてゆくこと」が困難であるばかりでなく、「政道を誤解したり流言に迷わされたりして政権の土台を脅かす者が起ってくる危険があった」と指摘していた⁷⁶⁾。

石戸谷はこのことを「治安維持」として把握している。しかしむしろ近代法治国家を建設していくためには不可欠で積極的な意義をもつことであつた。

このことに関連して、「学制」制定の当時には、未だ「公布」という概念が存在していなかったという重大なことを指摘しておく必要がある⁸⁰⁾。現在なら法令は「官報」に掲載されることによつて「公布」されたことになり、そして初めて法令理解のために必要な「伝達」が広く国民に対してなされたことになる。そしてそのことを前提にして、法令の施行が可能となるのである。ところが明治五年の段階では、未だ法令の意義を理解してそれを遵守する国民というものは期待されていなかった。従つて新しく生まれた国家の法令を理解できる人間を早急に育成しなければならなかったにもかかわらず、教育法令である「学制」の前文は何も語らず、〈私的利益のための教育〉というまったく的外れの教育論を提示したのであつた。

中国古代の裁判では、将棋の駒形の「圭」という玉が「最高の支配権」のシンボルであつたが、日本の封建時代にはその形を真似た「高札」が「法令の力の偉大さ」を示し、たとえ文字が読めなくとも「高札自体が畏敬の対象」となつた⁸²⁾。また「高札」は、内容の簡潔さで庶民に「親しみ」を与える一方、「高札場並びに高札の取扱いに見られた厳肅さ」は「神聖侵すべからざる場所」との考えや「法に対する畏怖心」を抱かせ、結果的に「遵法精神の涵養に貢献した」という⁸³⁾。

明治の最初期においては未だこうした「高札」の伝統が残存していたが、やがて「明治六年前後の中央集権的国家機構の建設過程」において「法を理解する人民像」が必要とされるようになり⁽⁸⁴⁾、国家の法令を理解し自主的に遵守することができる知的能力の育成が期待されていくのである。統治姿勢の「抛ラシムベシ、知ラシムベカラズ」から「知ラシムベシ、抛ラシムベシ」への転換である。

初代文部大輔として「学制」への地ならしをし、左院副議長として「学制」制定を支持し、明治五年四月二五日司法卿となった江藤新平は、同年一月二八日には司法省達第四六号によって主体的人民観を打ち出していく。この達しは、太政官布告や諸省布達に反するような行政をする地方官や戸長がいた場合、「各人民」が地方裁判所や司法省裁判所へ訴訟することなどを認めるものである。訴訟ができるためには、布告や布達の内容を人民が承知していなければならなかった。しかし「学制」前文は、こういう統治姿勢の転換に呼応するものではまったくなかった。

もちろん「公布」ということについては、情報伝達システムが未発達で「公布」すること自体が難しかったことも関係している。ようやく明治六年二月二四日になって（太政官布告第六八号）、布告の「発令」ごとに「人民熟知」のため凡そ三〇日間便宜の地において「揭示」し、従来の「高札」は「取除」くことが達せられた。因みにこの措置によってキリスト教禁止の「高札」が撤去され、結果としてキリスト教は黙認されることになったのである。さらに六月一四日には（太政官布告第二一三号）、各府県への布告到達の日限が距離に応じて決められ（東京は翌日、鹿児島一七日、宮崎県二二日）、到達後三〇日間の「揭示ノ後ハ管下一般ニ之ヲ知り得タル事ト看做候」とされた。こうして「公布」の概念が形成されていったのである。

従って「学制」の場合は未だ「公布」ではなく、「凡全国一般ニ布告スル制度條例ニ係ル事件及ヒ 勅旨特例等ノ事 件ハ太政官ヨリ之ヲ発令ス」（明治四年七月二九日、太政官第三八六号「正院事務章程」）によって「発令」されたこ

とになるので、本稿では「発令」あるいは「制定」という用語を使ってきた。「学制」は「公布」ではなく未だ「発令」であったという点に、「学制」が本来持つべきであった教育史的意義、つまり「公布」された法令を読んで理解できる人間をこれから育成していくという意義が存在していたのである。

以上のような訳で、近代国家の出発点において新政府が語るべき公式教育理念としての「学制」前文は非常に不十分なものであり、欠けるところが多かった。その前文において、自立的・独立的な思考のできる人間の育成が語られていたとはとても考えられない。けれども、そのように理解する研究書もある。

例えばハーヴァード大学の日本史研究者A・ゴードンによる「学制」紹介では、政府は、学校とは「実用的学習 (practical learning)」だけではなく「自立的思考 (independent thinking)」を奨励するところであると宣言したのであり、そして人々はこの手段によって「国家に仕えるための自分たち自身の道」(their own way to serve the State)を見つけてようとしたのであると解説されている⁽⁸⁾。

「学制」前文はしきりに「国家のための学問」を否定していたにもかかわらず、前文が説く立身・治産・昌業を「国家に仕える」ことに直結させているのはどういう考え方によるのか興味深いところである。そして同時にまた「自立的な思考」というのが前文のどこから導き出されてきたのかも、気になる。

ゴードンの書にはその理由の記述がないので分からないが、別の研究書では以下のような説明を見つかることができる。

イサオ・ニシハラは、「学制」前文の精神として「功利主義 (utilitarianism)」「自己決定ないし独立独行 (self-determination or self-reliance)」「国民教育楽観主義 (optimism about national education)」の三点を指摘している。そのうちの「自己決定」「独立独行」の精神は、「前文では」学問は個々人をその人生において自立的にさせるものと

見なされている」⁽⁸⁶⁾ということが根拠となっている。前文のどこにそのような意味の文章があるのか。その根拠として挙げられているのは、*“people in general leaving all else aside must make every effort to apply themselves to learning”*である⁽⁸⁷⁾。そう言えば倉澤剛もこの箇所について、「学費を官にたよるようでは自主独立の学風はそだたない。自ら奮って学問につく心がまをここで強調している」と説明していた⁽⁸⁸⁾。

この該当箇所は、第二節で問題⑥として取り上げた前文末尾の但書中「一般ノ人民他事ヲ抛チ自ラ奮テ必ス学ニ従事セシムヘキ様心得ヘキ事」である。実はこの文章も非常に読み取りにくく、次のように誤読してしまう恐れがある。

- ① 一般の人民は、自分の子どもが他事を抛ち自ら奮って必ず就学するようにしなければならない。
- ② 一般の人民は他事を抛ち、自分の子どもが自ら奮って必ず就学するようにしなければならない。
- ③ 一般の人民は他事を抛ち自ら奮って、必ず就学するようにしなければならない。

ニシハラの前記英文は菊池大麓の訳文を使っているが、「人民一般」自身が「他事ヲ抛チ自ラ奮テ」学問に専心すべきであると訳しており、倉澤剛もそのように記していた。しかしそれは誤読の③である。「必ス学ニ従事セシムヘキ様心得ヘキ事」につながる文脈を考えれば、①も②もやはり誤読である。人民一般は「他事ヲ抛チ自ラ奮テ」自分の子どもを就学させるようにすべきだと二重に命じられているのである。命令文が「自己決定」「独立独行」の精神の根拠にはならない。吉田熊次は、「すべての人は、自発的に、その子どもの教育を何事にも優先させるものとする」(every man shall, of his own accord, subordinate all other matter to the education of his children)と適切に訳して、「ここでも原文に忠実である。但書にはこれ以外にも大きな問題があったので、既述のように文部省は但書全体を削除して英訳していた。

「学制」前文から強いて「独立独行」に関する語句を探せば、冒頭の「自ラ其身ヲ立テ」になるかも知れない。し

かしすぐ後に治産・昌業が続いているので、どうしても経済的な意味にしか取れない。「学制」前文は、本来は国民の「自立的思考」を奨励すべきであったけれども、決してそうはしなかったのである。

その代わり「学制」前文は、〈国家の為の教育〉そして〈教育費の国家依存〉を二度にわたって否定するために、〈私的利益のための教育〉を強調したのである。小松周吉は早くに、明治五年九月二八日の第一大学区第一番中学学長の生徒への「揭示文」（文部省布達・番外）を取り上げ、「一種の投資事業であるとする特異なる学校観」であると指摘していた⁸⁹。同揭示文は、品物を買うには代価を払わなくては「私有品」とはならず、「私有品」とならなくてはそれを売却することもできないのと同じように、「教育」もまた同じで生徒が価値を払わずに「其財本ヲ私有シテ可ナランヤ是受業料ノアル所以ナリ」との論を展開していたのである。

「学制」前文が述べる「学問ハ身ヲ立ルノ財本」は、「自分自身を向上させるための資本」(the capital for raising one's self)（菊池大麓）とか、「人生の成功への鍵」(the key to success in life)（吉田熊次）と訳され、確かに字義通りの教育投資論の主張であった。

未だに競争主義・新自由主義の教育政策が幅を利かす現代は、「学制」前文の呪縛からほとんど抜け出せていない。あるいは、日本の国際的批判が高まっていた一九三七（昭和一二）年に指摘されたように、「功利主義」（しかし公共福祉という観点は欠いた）は「現在」においてもなお日本教育の「本質」であるがゆえに、そこから抜け出すことは出来ないであろうか。

まとめ

本稿においては、「学制」を準備した学制取調掛のメンバーが、なぜ自分たちの仕事に関する記録をあまり残さなかったのかという疑問から出発して、主として以下の四点について論じた。

一 学制取調掛のメンバーによる「学制」起草に関する具体的記録として現在までのところ唯一の史料である瓜生寅の漢詩（任命時および辞任時の二篇）によれば、学制取調掛が責任感をもってグループとしてまとまりのある仕事をほとんどしなかったこと、当初の（国家的利益のための教育）という理念が最終的には（私的利益のための教育）という理念に転換されたことに対して、瓜生は大きな不満を抱いていた。もし学制取調掛の状況が漢詩に描かれていた通りであったとすれば、彼らが「学制」について多くを語らなかつた理由がよく分かる。

二 従って「学制」には条文上の齟齬・不統一が数多く含まれていただけではなく、「必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」という有名な句を持つその前文にも、従来の研究で指摘されてこなかつたけれども、実は多くの文言上および内容上の問題が存在していた。

三 「学制」前文の文章上・内容上の諸問題は、英訳された前文を検討することによって、より明らかとなる。当時の文部省自体、前文の英訳には非常に苦労していたと推測できる。

四 明治新政府は〈学費を国家に依存するな〉ということを強調するために、「学制」前文で〈私的利益のための教育〉という考えを打ち出した。そのために本来なら前文で主張すべきであったにもかかわらず、主張できなくなった諸理念があった。第一は、公共利益のための教育である。「学制」条文での教育費負担の原則は、学区負担つまり公共

負担であった。第二は、全国的・画一的教育制度の必要性である。そのような制度を「学制」条文は計画していたのである。第三は、法令を理解して新国家を積極的に支えることができる人間の育成である。そのことこそが、法治国家を構築するうえでの教育面からの任務であった。

注

- (1) 大槻文彦『箕作麟祥君伝』一九〇七年。『明治後期産業発達史資料』第七三二巻、龍溪書舎、二〇〇四年、七頁、五三頁。
- (2) 日本史籍協会編『百官履歴・二』一九二八年、東京大学出版会覆刻、一九七三年、五二六頁。
- (3) 平田祥彦『唱歌』『奏楽』の教科目が「学制章程」成案に盛り込まれた時期の特定『音楽教育史研究』第二二号、二〇〇九年。
- (4) 山口悟郎『長谷川泰先生小伝』一九三五年、大空社伝記叢書、一九九四年。
- (5) 澤大洋「文部官吏河津祐之の人間と政治思想の形成」『東海大学紀要（政治経済学部）』第二五号、一九九三年。
- (6) 『新潟県大百科事典・下』（新潟日報事業社、一九七七年）、『新潟県人物・人材情報リスト2009』（日外アンシェルト、二〇〇八年）。『越佐維新志士事略』（越佐徴古館、一九二二年）、『新潟県人名辞書』（同編纂事務所、一九四一年）、牧田利平編『越佐人物誌』（野島出版、一九七二年）では、「文部省中督学」しか関連記述はない。茶話主人『維新後に於ける名士の逸談』（交友館、一八九九年）などにも、法学者・判事としての紹介はあるが学制取調掛としてはない。なお「訥」の読みには「おそし」「とつ」の説もあるが、西潟の大木喬任宛の書簡（明治

- 三年六月一七日付、明治四年五月七日付)では「いたる」と書かれている(佐々木隆「大木喬任関係文書」所収 司法・檢察関係者書翰翻刻)『参考書誌研究』第六六号、二〇〇七年三月、三九頁、四〇頁)。
- (7) 前掲『百官履歴・二』五二九頁。
- (8) 秋元信英「内田正雄の履歴と史料」『国学院短期大学紀要』第二二号、二〇〇四年三月。
- (9) 安部季雄編『男爵辻新次翁』一九四〇年、大空社伝記叢書、一九八七年、一二二頁。
- (10) 関口直佑「明治初年の文部行政と辻新次」早稲田大学社会科学研究所『社会学研論集』第一四号、二〇〇九年九月。
- (11) 前掲『男爵辻新次翁』三三六頁。なお、海外留学生・神官僧侶学校・学科卒業證書に関する「学制二編」の布達は、明治六年三月一八日。
- (12) 国民教育奨励会『教育五十年史』一九二二年、三四頁〜三五頁。
- (13) 倉澤剛『学制の研究』(講談社、一九七三年)では、文部省・司法省・外務省などの文書、外国学制の翻訳、規則書の取寄せ、調査員の派遣などから、「学制」が大いに外国学制を参考にしたことが論証されている(三四二〜三六八頁)。
- (14) 寺崎昌男「学制・教育令と外国教育法の摂取」日本教育法学会編『講座 教育法7』(世界と日本の教育法) 総合労働研究所、一九八〇年、一四三頁。
- (15) 川本亨二「明治維新期の科学啓蒙と『学制』」日本大学教育学会『教育学雑誌』第二八号、一九九四年。
- (16) 中島市三郎「学制の内容と制定の動機に就て—吉田博士の説を駁す」『教育学術界』第六〇巻第二号、一九二九年一月。

- (17) 倉澤剛、前掲『学制の研究』四〇四頁。
- (18) 他にも「学制五篇ヲ草シテ上ル」（国立公文書館蔵『皇太子御成婚贈位内申事蹟書二十三』大正一三年）や、外国模倣でないことを意識的に強調している次のような顕彰文がある。「明治五年文部少丞二任ジ侍読ヲ兼ヌ未ダ佛國學制ノ翻訳セラレザルニ先立チ広瀬淡窓ノ咸宜園ノ塾制ヲ根抵トシテ新時代ニ最モ適応スル新進ノ『学制五篇』ヲ草シテ之ヲ上ル今日ノ学制主トシテ之ニ拠ツテ成ル」『学制々定ノ功ハ実ニ三洲ニヨリ之ガ実践大半ノ功モマタ三洲ニ依ルト云フベシ』（国立公文書館蔵『昭和大礼贈位書類第七冊』）。
- (19) 中島のこの論考は副題が示すように、「学制の制定に関する動機に就ては、未だ確実なる資料を得ないのであるが、其の内容は主として仏蘭西の制度に拠つたものであることは明白である」とする吉田熊次『本邦教育史概説』（目黒書店、一九二二年）への反論である。しかし同じ『教育学術界』の第五五卷第二号（一九二七年五月）に原田実『「学制」創生に就いての一考察』が掲載され、「皇国主義の精神」が消え「誓文五条の精神」に基づく「開化主義」の「欧米模倣の教育法令」が生まれた経緯が考察されていた。中島はこちらは読まなかったであろうか。
- (20) 古川哲史『広瀬淡窓』思文閣、一九七二年、三〇頁～三二頁。
- (21) 佐村八郎『増訂 国書解題・下』六合館、一九二六年、二〇八二頁。
- (22) 長壽吉は『概観西洋通史』（一九四〇年）『近世欧州史研究』（一九四四年）『英国婦人政權運動史』（一九四七年）などの著書がある西洋史学者で、関東大震災（一九二三年）当時は学習院教授であった。『東西南北人』（第一書房、一九三六年）の中の「学制由来」では、「学制起草に多く関係した私の父が、咸宜園塾出身者であることだけは確かである」とトーンダウンされている（四三頁～四四頁）。
- (23) 中島三夫『長三洲』個人発行、一九七九年、一三五頁。なお同書「あとがき」によれば、『学制八十年史』『学

制百年史』という大著中にも広瀬淡窓や咸宜園の文字がないことに発憤し執筆を期したという。

(24) 井上義巳『広瀬淡窓』吉川弘文館、一九八七年、二四八頁。

(25) 倉澤剛、前掲『学制の研究』四〇六頁。長には、明治四年一〇月ころと推測される大木文部卿宛の「学制改革要項(仮題)」が残されていることも重要な理由となっている(同書、三七九頁)。

なお「学制」の条文を各項目ごとに整理再構成した長冰編輯『学制一覽』について、編者の長冰は長茨の実弟で文部省出仕、編纂時期は明治六年三月一八日から二八日の間であることなどが明らかにされている(内海崎貴子・安藤隆弘「学制一覽」に関する研究』『川村学園女子大学研究紀要』第一四卷一号、二〇〇三年)。同様の先行研究である多田建次「長冰編輯『学制一覽』」(玉川大学文学部紀要『論叢』第二八号、一九八七年)によれば、「学制」起草者が長茨一人であったか否かはともかく、長がその作業に深く関係したであろうことは「なによりもこの小冊子の存在が雄弁にものがたっている」という。しかし長の実弟が職務として編集した小冊子が存在するからといって、なぜそう言えるのか不明である。

(26) 中島三夫編著『三洲長茨著作選集』中央公論事業出版、二〇〇三年、二六頁。

(27) 同前書、二七頁。

(28) 同前書、一四二頁。

(29) なお『三洲長茨著作選集』には、「学制の細則に関する専門的な質疑・検討の跡を示す」明治五年大木喬任文部卿宛書簡(国会図書館所蔵「大木喬任文書」分類番号2384)も収録されていて(一四二頁〜一四三頁)、「その内容と迫力は胸を打つものがある」(二七頁)という。しかし内容は、文部省編輯寮(明治四年九月一八日〜明治五年九月一三日)の事務に関するものである。倉澤剛『学制の研究』では、明治四年九月下旬から一〇月上旬にか

けてのものと考証されている（七〇八頁～七〇九頁）。

- (30) 瓜生寅 『梅村枯葉集』写本（福井大学所蔵）の巻末付属資料。「履歴」の末尾に「以上自筆」とある。
- (31) 山下英一 『グリフィスと日本』近代文藝社、一九九五年、三〇五頁～三〇七頁。
- (32) 前掲『学制の研究』三九一頁。
- (33) 伊藤弥彦編 『日本近代教育史再考』昭和堂、一九八六年、四二頁。
- (34) 山下英一、前掲書、三〇八頁。
- (35) 『縮印百衲本二十四史 新唐書』商務印書館、発行年記載なし、一三九四頁。
- (36) 鈴木寅雄訳注 『杜甫全詩集②』日本図書センター、一九七八年、三六五頁～三六六頁、鎌田正・米山寅太郎『漢詩名句辞典』大修館書店、一九八〇年、一一一頁～一一二頁、参照。
- (37) 瓜生の漢詩二編に関しては、本学法学部の林宏作教授から多くの教示を得た。なお同教授によれば、意味の通じない箇所もあるが、何よりも押韻および平仄といった漢詩の基本原則という点で大きな問題があるという。
- (38) 教育史編纂会 『明治以降教育制度発達史①』龍吟社、一九三八年、二七六頁。
- (39) Ronald S. Anderson, *Education in Japan, A Century of Modern Development*, U.S. Department of Health, Education, and Welfare, 1975, p.21.
- (40) Herbert Passin, *Society and Education in Japan*, Teachers College-Columbia University, 1965, pp.209-210.
- (41) 実際、ヘンリー・ダイアーの英訳は非常に簡潔で分かりやすい。Henry Dyer, *Dai Nippon-the Britain of the East*, Blackie & Son, 1904, pp.82-83.
- (42) Japanese Education-The Official Decree, *The New-York Times*, Mar. 15, 1873, p.9.

- (43) 明治五年二月二八日、司法省達第四六号中の「各人民」の割注にも、「華士族卒平民ヲ併セ称ス」とある。
- (44) Henry Dyer. *ibid.*, 1904, p.82.
- (45) Kikuti Dairoku. Japanese Education-lectures delivered in the University of London, John Murray, 1909, p.68.
- (46) Nitobe and others. Western Influences in Modern Japan, The University of Chicago Press, 1931, p.34.
- (47) Japanese Department of Education, An Outline History of Japanese Education-Prepared for the Philadelphia International Exhibition, D.Appleton, 1876, p.124.
- (48) Progress in Japan, The New-York Times, Apr. 2, 1873, p.4.
- (49) 石川松太郎編『往来物分類目録並に解題・一』東京法令出版、一九八六年、六頁。
- (50) 河田敦子編著・加藤時男翻刻『幕末明治の女性 内藤ますの生涯とその教養形成過程』お茶の水女子大学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」(二〇一〇年三月。「伊藤ます」は、山梨県女子教育の先駆者。
- (51) Brian Platt, *Burning and Building—Schooling and State Formation in Japan, 1750-1890*, Harvard University Asia Center, 2004, p.134, p.290. 後者に関する指摘は、Timothy Mitchell, *Colonizing Egypt* (New York University Press, 1989) に基づく。
- (52) Japan, Blackwood's Edinburgh Magazine, Sep.1872, p.382. 上の論説は The Times, Sep. 5, 1872, p.8 に転載。
- (53) Education in the East, The New-York Times, May 25, 1875.
- (54) The old education, The Japan Weekly Magazine, Jan.10, 1874, p.21.

- (55) Female education. The Japan Weekly Magazine, Feb. 7, 1874, p.100. 無署名のこれらの評論がグリフィスのものであると判断できる理由については、前掲拙稿「外国人から見た『学制』（明治五年）」参照。
- (56) リチャード・ルビンジャー、川村肇訳『日本人のリテラシー』柏書房、二〇〇八年、二二八頁。
- (57) 吉田の訳の忠実さは、この言葉に続く「動モスレハ国家ノ為ニスト唱へ」を、“were apt to claim it to be for the state”と、「動モスレハ」まで訳していることにも現れていた。なお 前掲 Herbert Passin の著書の史料集の「学制」には、吉田訳が使用されている。
- (58) 土屋忠雄『明治前期教育政策史の研究』文教図書、一九六二年、五六頁。
- (59) 倉澤剛『小学校の歴史・I』ジャバンライブラリービューロー、一九六三年、二六七頁。
- (60) 倉澤剛『学制の研究』講談社、一九七三年、四五三頁。
- (61) 井上久雄『学制論考』風間書房、一九六三年、一六五頁〜一六六頁。
- (62) 同前書、一六三頁。
- (63) 同前書、一六四頁。
- (64) 倉澤剛、前掲『学制の研究』四三一頁。
- (65) 同前書、四五八頁。
- (66) 尾形利雄「明治初期国民教育理念に関する考察―「学制」制定の思想的背景」上智大学『ソフィア』第二〇巻第三号、一九七一年一月、一八頁〜一九頁。
- (67) Japan, The New-York Times, Dec. 6, 1873, p.3. なお “the that wandereth out of the way of understanding shall remain in the congregation of the dead” に相当する儒教の格言を見つづけるのは難しいが、似た意味内容の事例に

は以下のようなものがある。「学ばざれば牆^{かき}〔垣・屏〕に面す」「書経」周官「学べば則ち固ならず」「論語」学而「人にして学ばざれば憂い無しと雖も禽たるを如何せん」（揚雄『法言』学行）「学は人と為る所以を学ぶ」（張載『張子語録』中）など。

(68) Hoge L. Kenleyside & A. F. Thomas, *History of Japanese Education and Present Educational System*, The Hokuseido Press, 1937, p.87.

(69) Herbert Passin, *ibid.*, p.69, p.210.

(70) 荒井明夫編『近代日本黎明期における「就学告諭」の研究』東信堂、二〇〇八年。

(71) そういう「進化の概念」から「学制」を評価すれば、その実施結果は一勝（親や子の反就学は功利主義的行動）一敗（画一性は功利主義に反し問題）一引分（西洋偏重教育内容は「実学」を誤解したものの責任で「学制」の責任ではない）ということになる。「学制」は「失敗」したのではなく「見込みの有った政策」であった（角谷昌則「学制再考―近代科学主義の実験場としての学制改革」東京大学教育学研究科教育学研究室『研究室紀要』二九号、二〇〇三年六月）。ただ一勝一敗一引分けという結果であるにもかかわらず、なぜ「論理的一貫性」が保たれるのか疑問が残る。

(72) 森田尚人「伊澤修二の『進化原論』と『教育学』を読む―明治初期教育学と進化論」滋賀大学『彦根論叢』第三八三三号、二〇一〇年三月）参照。「学制」を当時の「世界的な同時代性」において読むことの重要性が強調されている。

(73) 「静岡県在留ノ米国教師ヨリ文部省へ建白セシ概略」『新聞雑誌』第六八号、明治五年十一月、二葉〜四葉。全文が吉野作造によって紹介されているので（注74）、引用はそれによる。

- (74) 吉野作造「静岡学校の教師クラーク先生」『新旧時代』一九二七年二月号。
- (75) 金子忠史「グリフィスと日本 その一」『京都大学教育学部紀要^⑫』一九六六年三月。
- (76) 小松周吉「明治絶対主義の教育精神―学制を中心としてみたその成立過程」『教育学研究』第一九卷第一号、一九五二年五月。小松周吉「明治五年「学制」における進歩性とその限界」『金沢大学教育学部紀要』（第一卷第一号、一九五二年一月）でも、教育内容の革新性と教育行政の極端なる中央集権性という矛盾に「学制」の進歩性の限界があると論じられていて、中央集権制が「封建的」であるという。
- (77) 以上、天野知恵子『子どもと学校の世紀』岩波書店、二〇〇七年、一〇三頁～一〇五頁。
- (78) Brian Platt, *ibid.*, p.133.
- (79) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、一九七二年、一六頁。
- (80) このことに関し、森田智幸氏（東京大学大学院教育学研究科）から、岩谷十郎「明治太政官期法令の世界」（国立国会図書館調査及び立法考査局『調査資料 2006-1』）「日本法令索引〔明治前期編〕データベース利用のために」解説）の存在とともに教示を受けた。
- (81) 中村直勝『日本古文書学・上』角川書店、一九七一年、七一―八頁。
- (82) 瀬田勝哉「神判と検断」『日本の社会史^⑤』岩波書店、一九八七年、六三頁。
- (83) 服藤弘司「高札の意義」『金沢大学法文学部論集・法経篇』第一〇号、一九六二年、三三頁～三四頁。
- (84) 岡田昭夫「明治法令伝達考（4）」『東京医科大学紀要』二八号、二〇〇二年、三五頁。
- (85) Andrew Gordon, *A Modern History of Japan, 2. edition*, Oxford University Press, 2009, p.67.
- (86) Isao Nishihara, *Western Influences on the Modernization of Japanese Education, 1868-1912*, The Ohio State

University, 1972, p.137.

(87) Isao Nishihara, *ibid*, p.127. なお同書には、“teragoya” (寺子屋) “Ishibokura” (石黒子(爵)) “Tsumeo Tora” (瓜生寅) といった誤表記の他、初等学校が六年制で下級小学・上級小学がそれぞれ三年制 (*ibid*, p.154) であるとか、神官僧侶学校が神官僧侶の「養成 (training)」所 (*ibid*, p.159) であるとするなど、「学制」に関する基本的情報の間違いがある (尋常小学は八年制、神官僧侶学校は神官僧侶による学校)。

(88) 倉澤剛『小学校の歴史・Ⅰ』ジャパンライブラリービューロー、一九六三年、二六七頁。『学制の研究』四五三頁。

(89) 小松周吉、前掲「明治絶対主義の教育精神」。

Review of the Preamble to *Gakusei*, Modern Japan's First Educational Ordinance

Teruo TAKENAKA

This paper, motivated by the question of why the members of the drafting committee of *Gakusei* left almost no records of their work, focuses chiefly on the following four points.

1. Two poems by Hajime Uryu, a member of the drafting committee of *Gakusei* (one written at the time of his appointment, the other at the time of his resignation), are almost the only documents surviving that were written by members of the committee concerning their task. The poems reveal Uryu's strong dissatisfaction that the committee carried out its work with almost no sense of responsibility or team spirit, and that the original idea of "education for the national benefit" had been transformed into the idea of "education for individual benefit". If Uryu's complaint was valid, we can understand the reason why the members of the drafting committee did not talk about their work on *Gakusei*.
2. As the result of the situation Uryu described, *Gakusei* had many irregularities, not only in its main provisions but also in its Preamble, which includes the famous phrase "there may not be a village with an ignorant family, nor a family with an ignorant child". The text of the Preamble had many grammatical problems and included many historically untrue or exaggerated expressions. These problems have almost never been referred to in research on the *Gakusei*.
3. The problems in the Preamble to *Gakusei* become even clearer when we examine English versions of the text. Even the then Ministry of Education was evidently perplexed to prepare an English translation

of the Preamble.

4. The new Meiji government emphasised the idea that education should be for the individual benefit in order to emphasise its position that people should not depend on the state for their educational costs. As a result, there were a number of important principles that the Preamble was unable to express. Firstly, the idea of “education for the public benefit” could not be expressed. The school charges referred to in the provisions of *Gakusei* began from the principle of a school district charge. Secondly, “the necessity of a uniform national educational system” could not be expressed. This system was designed in the provisions of *Gakusei*. Thirdly, the principle of educating people to be able to actively support the new state through their understanding of its decrees could not be expressed. The educational mission of the new Meiji state was to construct a nation governed by law.

Note

Reflecting on English Language Teaching in Japan

IWANE-SALOVAARA, Michael

Key words : Kishoutenketsu, 起承転結, Responsibility, Culture, TEFL

This reflection begins with two contradicting statements that I first heard when I arrived in Japan in the early 1990s. First, with all the money, time and resources dedicated to English language learning one would expect a greater spread of English language usage in Japan. Second, no one seems to know what they are doing, it is amazing that any English has been learned at all.

Complexity

These statements reflect the complexity of the EFL world in Japan from administration to textbooks and methodology to the classroom.

Administratively, English language programs are guided by MEXT and variously interpreted and implemented by educational institutions of all levels. The schools where I have taught followed the government guidelines, but each English program was administered differently.

Japanese and Native English teachers are often separated by curriculum with Japanese teachers teaching receptive skills (reading and listen-

ing) and the native teachers teaching productive skills (speaking and writing). Often, there is very little interaction between the two groups of teachers and little coordination of curriculum.

Textbooks often copy each other and tend towards methodologies from the UK, the United States and other English speaking countries. This in itself is not a negative tendency since English is their native language and the reasonable assumption is that they to know how best to teach English.

Methodology

Teacher training, particularly for native English teachers, tends to be scattershot and subject to faddism such as the Input Hypothesis (i+1), Task-based Learning (TBL), or Communicative Language Teaching (CLT). Some are better than others, but each teacher training program is different reflecting the priorities and philosophies of each school. The programs themselves vary from a few hours of orientation at an eikiawa to a full multi-year post-graduate program at a respected university.

While Krashen's Input Hypothesis has its advocates, it also has a rather full chorus of criticism (see Gregg 1984). His hypothesis posits that teachers ought to teach at a level just above the learner's ability. While this hypothesis states the obvious, what is less obvious is how that level is determined. In a classroom of 20 or more students, it is quite difficult to know where that level is. Also, without an understanding of the Japanese language, it is questionable whether a native English teacher can know the ideal input level.

Task-based learning (TBL) emphasizes learner involvement and dis-

Reflecting on English Language Teaching in Japan

covery of language through usage or tasks. However, the TBL system is highly structured and in a class of 10 or more students it is cumbersome to implement. If the teacher has limited knowledge of Japanese language and culture, then implementation becomes that much more difficult.

Communicative Language Teaching CLT has been popular over these last few years. As it has become widely used and more entrenched, its limitations are beginning to become apparent. In the push for communicative fluency an English teacher who shares the same language as the learners may overlook certain speech patterns or pronunciations (van Hattan 2006). Hattan based this from his observations in Brazil where he teaches English. In Japan, Japanese English teachers may overlook pronunciations based on *katakana* (*andoh*, *goodoh*, etc) or accept common Japanese-English usages such as “in an island” rather than “*on* an island” or “she looks smart” rather than “she is *slim*” (Iwane-Salovaara 2006). The students are being communicative, but their errors are reinforced by their Japanese teachers.

In a similar fashion, native English teachers who do not understand Japanese can be lulled into believing that the students have acquired a certain level of English competency when all they have done is transfer a communicative form taken from their L1 to the L2, in this case English. For example as illustrated in this conversation written by two first year students.

A:Hi how are you?

B:Fine. My name is Y**** M****.

A:What did you doing the spring vacation?

B:I... I went to Namba with high school friends.

A:Why did you go to Namba?

B:We went shopping at Namba Parks.

A:Wow! What did you buy?

B:We bought Tshirts, parkrs and shoes.

What about you?

A:I played Wining Eleven with junior high school friends.

B:Is the game interesting?

A:Oh, Yes.

B:I will play with you, someday.

A:Great! See you later.

B:See you.

Putting aside all the typographical, spelling and grammatical errors and looking instead at the communicative structure, it is apparent that this conversation, while communicative, can only be found in the classroom. Absent is a “native” English feel to the conversation. However, the conversation does reflect a Japanese conversational form or pattern with an emphasis on things and relationships outside themselves, as opposed to a more “English” style with an emphasis on personal information and commentary or opinion. This explains the absence of commitment or meaningful involvement that is expected in English—a kind of macro code-switching at the level of conversation rather than the lexical level. This is opposite to how native English speakers communicate. However, many native English teachers would accept the communicative structure of the above conversation and focus on correcting the more obvious errors.

CLT’s focus on fluency can reinforce the errors of both Japanese and

native English teachers that limit accuracy and complexity. This is not to say that CLT is inadequate or wrong but only that its limitations ought to be known. Knowing what the limitations are enables the teacher, Japanese or native English speaking, to make adjustments so that they can take their students from ignorance to competency in English. The point is that all methodologies are limited in what they can accomplish. Julian Edge makes this point and asks “how can we plan to get there if we don’t know where we are starting from?” (Edge 1996:11).

Local Context

The job of the teacher, aside from imparting knowledge, is to cultivate learner motivation. With motivated learners most anything can be taught. Of course, a poorly thought out or implemented methodology can de-motivate learners. This is partly why some have advocated a locally based methodologies. Adrian Holliday wrote of “small cultures” (Holliday 1999) to address “large culture” stereotyping of students, teachers, and institutions. In Julian Edge’s “emergent methodology” (Edge 1996) the teacher develops a methodology that emerges from the local context, as local as the classroom. Both are experienced English language teachers who see the local context as a key resource in developing methodologies that are relevant and motivating.

Going back to the two contradicting statements at the beginning of this article there is one thing that unifies them: the lack of local understanding. The first statement focuses on a stereotype of the Japanese English language learner, the schools, or the methodology or all three. Rarely, in my experience, has this statement made to suggest that perhaps these resources were mostly spent on unqualified native English teachers who

impede the learning of English.

The second statement reflects a detachment from the local culture and a reduction of how things are done in Japan to a single repeatable stereotype. Of course, language teaching is confusing and complex for the many English teachers who do not understand, to echo Edge's point, the local culture. More often than not cultural insights shared between native English teachers are often variations of clichés and caricatures handed down from one generation of language teachers to the next. While clichés and caricatures may contain some truth, many native English teachers, in my opinion, would be hard pressed to recognize what those truths might be.

This lack of local understanding among native English teachers was not new in the early 1990s when I first arrived to teach at a large eikaiwa in Osaka, and I still hear them today in one form or another.

Japanese Context

The meaning of “local context” can be parsed in many different ways. An institution such as a university, junior college or a vocational school (専門学校) may develop their English program to reflect the values and priorities of their institution; a faculty or department may develop an English program that focuses on what their students are studying; or a resource centre for students to access English materials and guidance outside class—also known as a Self Access Centre (SAC)—is developed as a means to encourage students to use their English outside class. For the English language teacher the local context is the classroom and the students who fill it. It is this last local context I want to make my final point

about.

It is basic to education that the “more knowledgeable other” —such as a parent, teacher, coach, etc. —takes the unknowledgeable person from what s/he knows and understands to what has been unknown (Vogotsky 1978). This is uncontroversial. So it comes to a bit of a surprise that many native English teachers do not know or understand the linguistic ground upon which their students stand—their “known ground”. Aside from age, gender and test scores, native English teachers often know very little about their students’ understanding of “communication”.

Kishoutenketsu

Over the past year I have been asking native English teachers if they know the concept of *kishoutenketsu* (起承転結). —Briefly, *kishoutenketsu* has an introduction (*kiku* 起句) of the topic and other key information, followed by the development (*shōku* 承句), which continues from the introduction. Then comes the twist or climax (*tenku* 転句) containing the thesis and finally, the conclusion (*kekku* 結句) tying everything together (Maynard 1997). The key point for the native English teacher is that it is the reader who is responsible for understanding what has been written as a cohesive whole. —Regardless of education, age, or experience most people I asked did not know *kishoutenketsu* and the few that had heard of it were not sure what it meant or its significance. I was not surprised because neither had I until a few years ago when I started teaching essay writing to a class of adult advanced students and discovered that not one student had never been taught how to organise their essays in English. What they told me was they used the Japanese system of *kishoutenketsu*. Once I understood the basics of this “local” style, then I knew how to better teach

the basic 5-paragraph essay (Introduction—Body—Conclusion) and how to correct errors.

The basics of Japanese communication places responsibility for comprehension with the reader who is expected to understand the context and therefore the meaning of what is written. In English communication the placement of the responsibility is with the writer who is expected to reveal the context and make the meaning comprehensible to the reader (Hinds 1987:151). Understanding *kishoutenketsu* is useful beyond writing essays. There are similar responsibilities and expectations exist in spoken communication (Iwane-Salovaara 2011). Often is the case that a native English person sounds unnatural when speaking Japanese because s/he is applying an English conversational form to Japanese and similarly when a Japanese person speaks English.

Conclusion

This straightforward difference between Japanese and English is relatively unknown and unexploited in English language education in Japan. To understand this difference between Japanese and English is to be at the interface of two cultures. The native English language teacher needs to be aware of the linguistic ground upon which Japanese students stand when they begin learning English. Being aware of the “local context” native English teachers may help to more efficiently use the resources spent on English education and improve the level of English.

References

Edge, J. (1996). Crossing borders: The development parameter. *The Language Teacher*. 20/10:10-13.

Reflecting on English Language Teaching in Japan

Gregg, K. (1984). Krashen's Monitor and Occum's Razor. *Applied Linguistics*, 5, 79-100.

Hattum, Ton van (2006), The communicative approach rethought. Retrieved from <http://www.tonvanhattum.com.br/comreth.html> (2011-01-18).

Hinds, John. Reader versus writer responsibility: A new typology. In: *Writing across cultures: Analysis of L2 text* (Connor U, Kaplan R, eds) Reading, Mass. : Addison-Wesley, pp141-52, 1987.

Holliday, A. (1999) Small cultures. *Applied Linguistics*, 20 (2), pp. 237-64.

Iwane-Salovaara, M (2006) *Unpublished M. A. paper*: University of Birmingham.

Iwane-Salovaara, M (2007) *A brief corpus study of smart and intelligent (unpublished)*. University of Birmingham. Retrieved from <http://www.cels.bham.ac.uk/resources/cl.shtml> (2011-01-18).

Iwane-Salovaara, M (2011). Who is responsible? Kishoutenketsu and the 5-paragraph essay. *English Review*, Vol. 25, March. Momoyama Gakuin University.

Krashen, S., Stephen Krashen's theory of second language acquisition. Retrieved from <http://www.sk.com.br/sk-krash.html> (2011-01-18).

Maynard, Senko K. *Japanese communication: Language and thought in context*. Honolulu, HI: University of Hawai'i Press, 1997.

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind and society: The development of higher mental processes*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

インターネットでめぐるフランス革命と ナポレオン戦争関係の史跡

軽 部 恵 子

キーワード：フランス革命，ナポレオン戦争，ウィーン会議，
歴史学習，バーチャル・ツアー

フランス革命とそれに続くナポレオン戦争は、フランスの絶対主義王政を打倒し、市民社会を誕生させた。また、ネーション・ステート（nation state。「国民国家」，「民族国家」と訳される）を生み、国家への帰属意識と独立・防衛を求めるナショナリズムが広がった。他に、民法典など法律の整備，メートル法制定を含む度量衡の統一など，近代国家の形成が進んだ。このように，フランス革命とナポレオン戦争は，法律，法制史，経済史，人権の歴史，科学史，国際関係，国際政治など，幅広い分野に関係している。

一方，フランス革命期に関する大学生の知識は千差万別である。「ルイ16世」「王妃マリー・アントワネット」「ギロチン」といった断片的な知識しか持たない者もいれば，歴史の大まかな流れをきちんと把握している者もいる。この差は，文部科学省の指導要領が一時期大幅に削減されたこと，少子化で受験生が減少し大学の入学試験に世界史を受験せずに済む場合が増えたこと（いわゆる「ゆとり教育」），世界史を他の科目で履修したと見なすカリキュラムが全国の高校で広く行われたこと（いわゆる「世界史未履修問題」）などが原因として挙げられよう。特定の公式や公理を知らないと一歩も前へ進めない理系の科目と異なり，文系の科目は内容がよくわからないままでもとりあえず講義を受けられる。その結果，一部の受講生は歴史の知識が不足したまま

各種の科目を受講し、大学教員は基礎知識にばらつきのある学生を1つの教室で教えなければならない。

だが、今日ではインターネットという便利な「道具」が普及している。高校までの授業で使い方を教わるか、家庭で家族が利用しているため、大学入学までにインターネットを全く利用したことのない新入生はおそらく皆無だろう。そして、国内外の史跡や博物館は独自のホームページを持ち、歴史の簡潔な解説を提供し、貴重なコレクションの写真などを公開している。参考文献リストや有益なリンク集を持つホームページも多い。教員からみれば、すばらしい補助教材がネット上に多数存在し、ほぼ無料で利用できる状態にあるといえよう。

フランス革命の史跡はフランス国内のものが最も多いが、ナポレオン戦争とウィーン会議に関する史跡はイタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギー、スペインなど、ヨーロッパ各地に散らばっている。文物に限っていえば、大西洋を越えて一部がアメリカにも渡っている。インターネットを利用すれば、一瞬のうちに世界各地の史跡を訪問し、文物を鑑賞することができる。

本稿は、インターネットを通じてフランス革命からナポレオン戦争、ウィーン会議に至る史跡等を紹介し、とくに文系の学部にて在籍する大学生の一般的な理解力向上と教員の講義運営を支援するために執筆された。史跡、とくにフランス国内のものは、革命が進展する経緯にほぼ沿った形で並べた。つまり、本稿に沿って史跡等の画像を紹介すれば、フランス革命の流れをかいつまんで説明できるようになっている。

ただし、バステュー襲撃以前のできごと、すなわちルソーらの啓蒙思想、アメリカ独立革命への支援、三部会開催の要求、1789年6月20日の「テニスコート（球技場）の誓い」は思い切って省略した。7月14日のバステュー襲撃があまりに有名なためと、革命に至る背景の説明が長くなるためである。本稿の大きな目的は、教室のスクリーン上に史跡や文物等を提示して、学生に視覚から刺激を与え、歴史に無関心だった者、歴史の学習は嫌いあるいは退屈だったという者の意識を少しでも変えることにある。

また、革命勢力による権力闘争、すなわち王党派とジロンド派の没落、ジャコバン・クラブの独裁から1794年7月のテルミドール反動にいたる経緯は割愛した。つまり、本稿が扱うフランス革命中の主なできごとは、バスティーユ襲撃、ルイ16世一家のテュイルリー宮殿への移送、ヴァレンヌ逃亡、一家のタンブル塔への移送、ルイ16世の裁判と処刑、王妃マリー・アントワネットの裁判と処刑、ジャコバン・クラブの独裁とテルミドール反動に限った。これらのできごとだけでも、大学生とくに1-2年次生がフランス革命の大まかな流れを理解するには十分であろう。革命中のできごとをより詳しく知りたい人には、立川孝一『フランス革命』（中央公論新社、1989年）を薦める。

ジロンド派の没落、ジャコバン・クラブの台頭と破滅を詳しく知りたい人には、フュレ、オズーフ編『フランス革命事典3 人物II』（みすず書房、1990年）にくわえて、ギタール著『フランス革命下の一市民の日記』（中央公論社、1980年）を読んでもらいたい。1791年1月26日に始まるギタールの日記には、処刑された人々の名前や経歴が詳細に記されている。くわえて、ラスコー洞窟内の絵のように単純な線で描かれたイラストが妙に生々しい。とくに、後ろ手に縛られギロチン台の上に並べられた人々を描いた「ジロンド党員の処刑」（p.167）は、革命の騒然とした雰囲気、というより狂気そのものを示しており、必見である。

ナポレオン戦争関連の史跡等についても説明したい。ナポレオン戦争の主要な戦闘は、第1回イタリア遠征（1796-1797）に始まり、エジプト遠征（1798-1799）、第2回イタリア遠征（1800-1801）、トラファルガーの海戦（1805）、アウステルリッツの三帝会戦（1805）、大陸封鎖令（ベルリン勅令）（1806）、マドリード市民の蜂起（1808）、モスクワ遠征（1812）、ライプツィヒの戦い（1813）、ワーテルローの戦い（1815）が挙げられる。その間に、皇帝への即位（1804）、エルバ島への配流（1814）、英領セントヘレナ島への流刑（1815）があった。これら全てを網羅すると膨大な量になるため、思い切って取捨選択した。とくに、マドリード市民の蜂起は「小さい戦争」を意味する *guerrilla* の語を生んだできごとで、本稿に含めたかったが、別稿に譲り

たい。

他方、ナポレオン関連した有名なエピソードとそれに関する文物等は、ナポレオン戦争そのものに関係なくとも積極的に取り上げた。これは、歴史学習を初学者にとって楽しいものにすると同時に、ナポレオン戦争の影響が政治・軍事はもとより、経済・社会・文化と多岐にわたることを学生に実感させるためである。たとえば、ナポレオン戦争に由来する語句は、先述のゲリラ、冬将軍、百日天下、**one's Waterloo**（「大失敗」の意）など、いくつもある。それから、第1次世界大戦の終戦記念日にあたる11月11日（1918年にドイツが休戦協定に署名した日）はイギリスで**Remembrance Day**として戦死者の追悼行事が行われるが、**Poppy Day**とも呼ばれる。毎年10月からイギリスの議員やニュース・キャスターたちが赤いひなげし（**scarlet corn poppy**）の紙の造花を胸に付けるのは、ナポレオン戦争で荒れ果てた土地で戦死者の体の周辺に咲いたのが赤いひなげしだったからという（BBC, “**Remembrance Day-Poppy Day**”, <http://www.bbc.co.uk/dna/h2g2/A653924>を参照）。

本稿執筆にあたって参照した参考文献の大半は、比較的安価で、人物画・風景画・写真・年表・地図・イラスト等を多数紹介している。同時に、重要な事実関係が簡潔にまとめられ、有名な歴史上のエピソードの真偽、背景が丁寧に紹介されている。それゆえ、学生にとっては読みやすく、教員にとっては講義の準備または参考資料の作成の上で大いに役立つであろう。

本文で紹介するサイトは、原則として現地の言語か英語かあるいは双方で名称を記載した。博物館や史跡の管理団体のサイトがない場合、観光局などの政府・地方自治体による案内か、民間の観光案内のサイトを紹介した。ただし、公的機関が日本語で観光案内を書いている場合、内容が非常にわかりにくいものは掲げなかった。また、検索エンジンでキーワード検索をすると個人の旅行記、ブログ、写真の投稿もヒットするが、旅行記やブログは作成者の主観が多々入っているので、本稿では紹介しなかった。各地の史跡を撮影した写真の投稿を見るのは読者の自由であるが、解説の付いている観光案内サイトの方が有益であると判断し、やはり紹介しなかった。サイトのアドレ

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

スそのものを入れても検索画面に結果が出てこない場合は、施設の名前を検索エンジンに入力してほしい。綴りに誤りがなくても、何らかの理由で検索がヒットしないことはある。

本稿で紹介した史跡や博物館等を実際に訪れたい人は、最新の安全情報を外務省、各国大使館、外国メディアのサイトで確認するよう勧めたい。基本的に治安状況がとくに悪い地域はないが、大雨・大雪などの悪天候、デモンストレーションや暴動、ストライキによる公共交通機関の停滞はいつでも起きえるからである。

最後に、日本語では地図、国語辞典、世界史の教科書・参考書、条約集、新聞記事で、外国の国名と地名のカタカナ表記が異なることが少なからずあるが、本稿では全て地図の表記に従った。たとえば、**Yugoslavia**は地図で「ユーゴスラビア」となるが、岩波書店の『広辞苑』、有斐閣の『国際条約集』、山川出版社の世界史の教科書・辞典類では「ユーゴスラヴィア」と表記される。他には、**Bosnia Herzegovina** (ボスニア・ヘルツェゴビナ)、**Kosovo** (コソボ)、**Slovenia** (スロベニア)、**Slovakia** (スロバキア)などが挙げられる。また、**Greece**を地図は「ギリシャ」、『広辞苑』は「ギリシア」と表記する。それから、マスメディアは一般に「ヴ」を使わない。**Versailles**の地図表記は「ヴェルサイユ」だが、新聞は「ベルサイユ」と表記する。**Genève** (フランス語)・**Geneva** (英語)も同様に、地図・国語辞典・山川出版社・条約集が「ジュネーヴ」で、新聞は「ジュネーブ」である。ただし、スペイン語のvの綴りは発音が元々bの音なので、「ヴ」を使う必要はない。

<参考文献>

- 青木やよひ『図説ベートーヴェン：愛と創造の生涯』河出書房新社 1995年
安芸光男『クラシックの名曲101』新書館 2000年
「アマデウス」『週刊20世紀シネマ館』1985年 昭和60年 別巻2 No.52 (2005年)
石井美樹子『図説ヨーロッパの王妃』河出書房新社 2006年

- 江村洋『ハプスブルク家』講談社 1990年
江村洋『ハプスブルク家の女たち』講談社 1993年
小畑恒夫監修『オペラの名作』ナツメ社 2007年
小塩節（おしお・たかし）『モーツァルトへの旅：音楽と人生に出会う』光文社 2006年
加賀美雅弘『ハプスブルク帝国を旅する』講談社 1997年
加藤雅彦『図説ハプスブルク帝国』河出書房新社 1995年
加藤雅彦『図説ヨーロッパの王朝』河出書房新社 2005年
菊池良生『神聖ローマ帝国』講談社 2003年
菊池良生『戦うハプスブルク家』講談社 1995年
セレストン・ギタール著，レイモン・オペール編，河盛好蔵監訳『フランス革命下の一市民の日記』中央公論社 1980年
木之下晃・堀内修『ベートーヴェンへの旅』新潮社 1991年
木之下晃・堀内修『モーツァルトへの旅』新潮社 1991年
パウル・クリストフ編，藤川芳朗訳『マリー・アントワネットとマリア・テレジア：秘密の往復書簡』岩波書店 2002年
国際地学協会『国旗と地図』国際地学協会 2004年
後藤真理子『図説モーツァルト：その生涯とミステリー』河出書房新社 2006年
小島英熙『ルーヴル：美と権力の物語』丸善 1994年
小宮正安『ハプスブルク家の宮殿』講談社 2004年
クレーン・コンスタン著，伊藤俊治監修，遠藤ゆかり訳『ヴェルサイユ宮殿の歴史』創元社 2004年
イヴァン・コンボー著，小林茂訳『パリの歴史』新版 白水社 2002年
『最新版世界遺産』No.8「ウィーンの歴史地区」講談社 2010年
『週刊世界遺産』No.13「ヴェルサイユ宮殿と庭園」講談社 2004年
柴宜弘『図説バルカン歴史』改訂新版 河出書房新社 2006年
芝生瑞和（しばう・みつかず）編『図説フランス革命』河出書房新社 1989

年

新村出編『広辞苑』第6版 岩波書店 2008年

立川孝一『フランス革命』中央公論社 1989年

田之倉稔『モーツァルトの台本作者：ロレンツォ・ダ・ポンテの生涯』平凡社 2010年

遅塚忠躬『ヨーロッパの革命』ビジュアル版 世界の歴史14 講談社 1985年

シュテファン・ツヴァイク著、中野京子訳『マリー・アントワネット』全2巻 角川書店 2007年

辻原康夫『図説 国旗の世界史』河出書房新社 2003年

土田英三郎『ベートーヴェン』音楽之友社 2005年

帝国書院『最新基本地図 一世界・日本一 34訂版』帝国書院 2009年

遠山一行『ショパン：カラー版作曲家の生涯』新潮社 1988年

フランソワ・トレモリエール、カトリーヌ・リシ著、日本語版監修 山絃一『ラルース図説世界史人物百科Ⅲ フランス革命—世界大戦前夜』原書房 2005年

中野京子『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』光文社 2008年

西村理監修『CD付き もう一度学びたいオペラ』西東社 2007年

西村理監修『CD付き もう一度学びたいクラシック』西東社 2005年

アルバート・A・ノフィ著、諸岡良史訳『ワーテルロー戦役』コイノニア社 2004年

長谷川輝夫『聖なる王権ブルボン家』講談社 2002年

ミシェル・パルティエ著、海老沢敏監修、高野優訳『モーツァルト』創元社 1991年

藤本ひとみ『マリー・アントワネットの生涯』中央公論社 1998年

平野昭『ベートーヴェン：カラー版作曲家の生涯』新潮社 1985年

ジャン＝クリスチャン・ブティフィス著、玉田敦子他訳『ルイ十六世』全2巻 中央公論新社 2008年

フランソワ・フェレ, モナ・オズーフ編『フランス革命事典3 人物II』み
すず書房, 1999年

T.C.W.ブラング著, 天野知恵子訳『ヨーロッパ史入門 フランス革命』岩波
書店 2005年

オリヴィエ・ブラン著, 小宮正弘訳『一五〇通の最後の手紙: フランス革命
の断頭台から』朝日新聞社 1989年

マルク・ブウロワゾ著, 遅塚忠躬訳『ロベスピエール』白水社 1958年
「ベルサイユのばら」を歩く会編, 池田理代子プロダクション協力『「ベルサ
イユのばら」の街歩き』JTBパブリッシング 2002年

堀田善衛『運命・黒い絵』朝日新聞社 1994年

まがいまさこ・堀洋子『もう一度学びたい世界の歴史』西東社 2005年

水村光男監修『図説 この「戦い」が世界史を変えた』青春出版社 2003年

三宅理一『パリのグランド・デザイン』中央公論新社 2010年

宮下規久朗『不朽の名画を読み解く』ナツメ社 2010年

両角良彦『1812年の雪』筑摩書房 1980年

山口昌子『エリゼ宮物語』産経新聞出版 2007年

吉田進『ラ・マルセイエーズ物語』中央公論新社 1994年

エヴリーヌ・ルヴェ著, 塚本哲也監修, 遠藤ゆかり訳『王妃マリー・アント
ワネット』創元社 2001年

ディエリー・レンツ著, 福井憲彦監修, 遠藤ゆかり訳『ナポレオンの生涯』
創元社 1999年

「フィガロの結婚」『Mozart』No.6 講談社 2010年

エリカ・ラングミュア著, 高橋裕子訳『ナショナル・ギャラリー・コンパニ
オン・ガイド』(ロンドン) ナショナル・ギャラリー 2004年

ベアトリクス・ソール, ダニエル・メイエール著『ヴェルサイユ見学ガイド』
Versailles: Art Lys, 2007

Doyle, William. *The Oxford History of the French Revolution*. 2nd ed. Lon-
don: Oxford University Press, 2002.

Darlow, Mark. "Beaumarchais and Politics." *The Royal Opera House Presents The Royal Opera: Le Nozze di Figaro*. London: The Royal Opera House, 2008.

Fraser, Antonia. *Marie Antoinette: The Journey*. London: Phoenix, 2001.

Lever, Evelyne. *Marie Antoinette*. Paris: Reunion des Musées Nationaux, 2006.

Parkinson, Richard. *The Rosetta Stone*. London: The British Museum Press, 2005.

Salmon, Xavier. *Marie-Antoinette: Album de l'exposition*. Paris: RMN, 2008.

Rédaction: René Tasquin. *Le Champ de Bataille de Waterloo Pas a Pas: Le Guide de Votre Visite*. Bruxelles: Edition Interprint, 1991.

René Tasquin, ed. *The Battlefield of Waterloo Step by Step: The Guide of Your Visit*. Brussels: Editior Interprint, 1991.

Koester, Thomas. *50 Artists You Should Know*. London: Prestel, 2006.

Eisler, Benita. *Chopin's Funeral*. London: ABACUS, 2003.

Zamoyski, Adam. *Chopin: Prince of the Romantics*. London: Harper Press, 2010.

<参考サイト> ※各都市の観光案内は項目ごとにつけた。

* 外務省海外安全ホームページ

<http://www.anzen.mofa.go.jp/>

* 帝国書院

<http://www.teikokushoin.co.jp/>

* フランス観光開発機構公式サイト

<http://jp.franceguide.com/>

* ベルギー・フランダース政府観光局

<http://www.visitflanders.jp/>

*ベルギー観光局ワロン・ブリュッセル

<http://www.belgium-travel.jp/>

*オーストリア政府観光局

<http://www.austria.info/jp>

*ドイツ観光局

<http://www.visit-germany.jp/>

*UK in Japan 駐日英国大使館

<http://ukinjapan.fco.gov.uk/ja>

*「ようこそ、イギリスへ！」 Visit Britain—British Tourist Authority

<http://www.visitbritain.com/ja/JP/>

1. フランス国内の史跡等

(1) ヴェルサイユ宮殿 (Château de Versailles/The Pallace of Versailles)

<http://www.chateauversailles.fr/> (フランス語版)

<http://en.chateauversailles.fr/homepage> (英語版)

パリ郊外のイル・ド・フランス (Île de France) にある。フランス絶対王政を象徴する宮殿で、壮麗かつ広大という形容詞がまさに当てはまる。莫大な費用と1662年から50年間という時間をかけて造られた。ヴェルサイユ宮殿公式ホームページにかつて日本語版があったが削除され、新たに中国語版が加えられた。現在は、フランス語、スペイン語、英語、中国語版の4カ国語で運営されている。

宮殿内には他に、王室礼拝堂 (Chapelle)、王立オペラ劇場 (Opéra Royal de Versailles)、大居室 (Grand Appartement)、王妃の居室 (Appartement de la Reine)、幾何学的なデザインが有名な庭園 (Les Jardins) がある。天井画、壁際におかれた彫刻、タペストリーなど、宮殿内のあらゆる場所に芸術品が置かれており、ルイ14世の威光がしのばれる。

1770年5月、オーストリアから14歳の美しくも幼い花嫁がヴェルサイユに到着した。長年ヨーロッパの覇権を争ってきたハプスブルク家とブルボン家

がその対立に終止符を打ったことは、「ヨーロッパの外交革命」とよばれた。両国の新たな結びつきの証として、王太子ルイ・オーギュスト (**Louis August**。後のルイ16世) とハプスブルク家の皇女マリア・アントーニア (フランス語読みマリー・アントワネット **Marie-Antoinette**) の婚礼が宮殿内の王室礼拝堂で、婚礼の宴が王立オペラ劇場で催された。

有名な「鏡の間 (回廊)」 (**Galerie des Glaces**) は、フランス宮廷がルーヴル宮から移転してきた4年後の1686年に完成した。全長73mの回廊は、壁の大鏡と54のクリスタル製シャンデリアで輝く鏡の間を、ルイ14世は公式祭典や外国の大使謁見に好んで使った (『週刊世界遺産』 **No.13**, pp.7-8)。現在あるシャンデリアと大燭台は、1770年に王太子成婚の祝宴のために準備された装飾を復元したものである (同上, p.9)。

フランス革命後も、鏡の間はたびたび歴史の舞台となった。1919年6月28日、第1次世界大戦の講和条約であるヴェルサイユ条約がここで署名されたことはよく知られている。1870-1871年にプロイセン-フランス戦争が行われた際、プロイセン軍がこの大広間を野戦病院にしたこともあった (同上, p.34)。

王立オペラ劇場では音楽会がたびたび開かれた。当時、フランスの宮廷音楽家たちはイタリア出身のピッチニニ派とドイツ出身のグルック派に分かれ、互いに争っていたが、オーストリア出身のマリー・アントワネットは同じドイツ語圏のグルックを応援した (ルヴェ, p.27)。王妃の態度は、フランス貴族の反発を招く一因となったかもしれない。

<関連サイト>

* CBS News (USA) “Versailles Opera House Reopens”

<http://www.cbc.ca/arts/artdesign/story/2009/09/22/versailles-opera.html>

(以下はヴェルサイユ宮殿公式ホームページ内)

* Interactive Map

<http://en.chateauversailles.fr/templates/versailles/map/MapMain.php>

* Gardens and Parks of the Chateau

<http://en.chateauversailles.fr/gardens-and-park-of-the-chateau->

*Versailles during the centuries

<http://en.chateauversailles.fr/history->

(2) トリアノン宮殿 (Trianon)

*The Grand Trianon (大トリアノン)

<http://en.chateauversailles.fr/grand-trianon->

*The Marie-Antoinette's Estate (マリー・アントワネットの大農園)

<http://en.chateauversailles.fr/marie-antoinettes-estate>

ヴェルサイユ宮殿の離宮に大トリアノン (Grand Trianon) と小トリアノン (Petit Trianon) がある。小村だったトリアノンを別荘に変えたのはルイ14世だった。

大トリアノンは1687-1688年に建設されたが、ルイ14世が家族と過ごした離宮として機能した。フランス革命中に荒れ果てたが修復され、ナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) は大トリアノンを愛用したという。

小トリアノンは1762-1768年に建設された。ルイ15世が愛妾ポンパドゥール侯爵夫人 (Madame de Pompadour, 1721-1764) のために建てさせた。だが、政務に自ら積極的に関わっていた夫人は完成を見ることなく、42歳で亡くなった。ブルジョワ階級出身で教養と政治的野心に溢れた夫人は、肖像画の背景に革装の『法の精神』等の書籍が描かれるほどその知性を賞賛されていた (『週刊世界遺産』No.13, p.28の図を参照)。ポンパドゥール夫人は啓蒙思想家のヴォルテール (Voltaire, 本名François Marie Arouet, 1694-1778) と親しかったこともよく知られている。芸術的センスにもすぐれ、セーヴル磁器を奨励し、芸術家たちのパトロンになった。もっとも、建築好きの夫人が各地の城館造りにかけた莫大な費用が革命の遠因の1つになったともいわれる。箱物はどこの国でもいつの時代も財政赤字の原因ということか。

祖父のルイ15世から小トリアノンを受け継いだルイ16世は、それを妻に与えた。王妃マリー・アントワネットは1783年に人工の農村を造らせ、召使い

たちを農民に扮装させ、実際に家畜を飼わせた（同、p.20）。現在、田舎家のアモー（**Le Hameau**）は大規模な修復が済み、一般に公開されている。敷地内には、王妃がこよなく愛したイギリス式庭園や、恋人のスウェーデン伯爵フェルセン（**Axel de Fersen**, 1755-1810）と密会したといわれるあずまやもある。

宮殿の儀礼と式典にしばられた生活を嫌っていた王妃は、「ここでは私が私自身でいられる」（**Ici, je suis moi.**）と小トリアノンに引きこもり、謁見など王妃としての政務を怠った。ヴェルサイユ宮殿から小トリアノンへはたった2 km程だが、宮殿内を走る有料のプティ・トラム（**Petit Tram**）に乗って移動すると、特急電車に乗って都会から田舎へバカンスに出かけるような錯覚に陥る。それぐらい、小トリアノンは別世界だった。

当時のヴェルサイユ宮殿と庭園は一般に公開され、礼儀に適った服装さえしていれば身分を問わず誰でも入ることができ、国民は国王の生活を見学した（コンスタン、pp.79-80）。ルイ14世が見物客に自分の旺盛な食欲を見せつけたことはよく知られている。やがて、ルイ15世の頃から国王は公式の晩餐以外は少人数での小規模な晩餐をとるようになった（同上、p.84）。フランスの一般民衆が国王の顔を直接見られなくなったことも、革命の背景にあるかもしれない。

実際、ルイ16世妃が小トリアノンに引きこもったことは、宮廷の貴族に評判が悪かった。王妃が伴った人物は、長女のマリー・テレーズ・シャルロット（**Marie-Thérèse Charlotte**, 1778-1851）、次男のルイ・シャルル（**Louis-Charles**, 1785-1795）、取巻きのポリニャック夫人（**Madame de Polin-gac**, 1749-1793）、義妹エリザベート（**Madame Elisabeth**, 1764-1794。ルイ16世の末の妹）など、ごく少人数に限られた。夫のルイ16世でさえ、国王用の寝室に泊まったことがないという噂が流れた（ルヴェ、p.54）。なお、長男の王太子ルイ・ジョゼフ（**Louis Joseph Xavier François**, 1781-1789）は病氣療養中であった。小トリアノンに滞在したマリー・アントワネットは、多額の借金を作ってきた賭け事に手を出さなくなり、夜遊びもやめたが、離

宮の建設費と維持費，王妃としての義務の放棄は，フランス国民の怒りと貴族の反発を買った。

小トリアノンの庭園には王妃専用の小劇場が造られ，1780年6月1日に披露された。王妃は，享樂的な義弟アルトワ伯（ルイ16世の次弟。後のシャルル10世。後述）や親しい友人たちと貴族一座を結成して懸命に練習し，国王とごく少数の貴族たちを招いて公演した。演目には貴族をちゃかした内容のものもあったが，政治的な意味はなかったようである（同上，pp.56-57参照）。王妃は自分の好きなことだけに熱中し，自分の言動がどのように受け取られるかを考えていなかった。

オーストリアの女帝マリア・テレジアの娘として何不自由なく育ち，ダンスや歌が上手で，優雅な身のこなしを誰からも賞賛されたマリー・アントワネットは，子どもの頃から勉強が大嫌いだった。努力せずしてフランス王妃となった女性に，宮殿の外に迫る嵐など全く感じられなかったに違いない。それだけヴェルサイユ宮殿が広大で，現実を隔絶していたともいえよう。1777年4月，兄のヨーゼフ2世が，全く子の生まれぬ娘夫婦を心配した母の命令でフランスを訪問し，その機会に地方を視察して，20枚にのぼる妹への手紙で革命の可能性を忠告した。だが，それも無邪気な妹の心には届かなかった（クリストフ編，pp.261-262，編者注，p.263注1，p.281注2を参照）。<関連サイト>

（以下はいずれもヴェルサイユ宮殿公式サイトの一部）

*Louis XVI（ルイ16世）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/louis-xvi>

*Marie-Antoinette（マリー・アントワネット）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/marie-antoinette>

*Madame de Polignac（ポリニャック夫人）

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/ma->

dame-de-polignac

*Axel de Fersen (フェルセン伯爵)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/axel-de-fersen->

*Louis XV (ルイ15世)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xv-time/louis-xv>

*Madame de Pompadour (ポンパドゥール夫人)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xv-time/madame-de-pompadour>

*Madame du Barry (デュ・バリー夫人)

http://en.chateauversailles.fr/index.php?option=com_cdvfiche&idf=CA1C6E06-E9B0-050C-D2E2-8173D473CC0F

ルイ15世の最後の愛人 (1743-1793)。王太子妃時代のマリー・アントワネットと対立した。デュ・バリー夫人は、宮廷で最も地位の高い女性だった王太子妃に無視され続けているとルイ15世に訴えたが、若いアントワネットは国王の3人の娘(アントワネットから見て義理の叔母)に唆され、デュ・バリー夫人を無視し続けた。この問題は、危うくフランスとオーストリアの外交問題に発展するところであった(クリストフ編, pp.12, 30-31, 35-36, 47, 140を参照)。

1774年5月にルイ15世が天然痘で崩御すると、デュ・バリー夫人は宮廷から引退させられた。フランス革命が始まると夫人に国民の憎しみが集まり、1793年10月に断頭台で処刑された。

ここに使われたデュ・バリー夫人の肖像画は、朝早く部屋着 (négligé) のままコーヒーを飲む場面を描いたものである (ルヴェ, p.27)。しどけない姿と目覚めきってない顔の表情が艶めかしい。女性関係の派手だったルイ15世を虜にしたのが容易に理解できる。

(3) ルーヴル美術館 (Musée du Louvre)

<http://www.louvre.or.jp/>

12世紀後半に城塞として建てられ、16世紀にフランソワ1世 (François I) がルネッサンス様式の宮殿に改築した。レオナルド・ダヴィンチのパトロンだったフランソワ1世は、「モナリザ」や「聖母子と聖アンナ」などを所蔵していた。革命さなかの1793年、王室のコレクションを展示する小さい美術館として作り替えられた。その後、ナポレオンが戦利品を展示するようになり、ルーヴル宮は改築された。

1989年、革命200周年を記念して、当時のミッテラン大統領 (故人) がルーヴル改造計画を発表した。中庭にはガラスのピラミッドが完成し、半地下の入り口である「ナポレオン・ホール」にまで続く。当初、ガラスのピラミッドのデザインは賛否両論を呼んだが、今ではすっかりなじんでいる。半地下では、ルーヴル改造工事中に発見された中世ルーヴルの遺跡 (Le Vieux Louvre de Philippe Auguste et de Charles V) も見られる。

ルーヴル美術館が所蔵するフランス革命およびナポレオン戦争に関する絵画は、巨大なものが多い。その代表格は「ナポレオン1世の戴冠」(Le Sacré de Napoléon 1^{er}) だろう。これは、新古典主義の画家ダヴィッド (Jacques-Louis David, 1748-1825) が1804年にノートル・ダム大聖堂で挙行されたナポレオン1世の戴冠式を描いた作品である。ナポレオンが皇后ジョゼフィーヌに対し、今まさに冠を授けようとする瞬間をとらえた。

ロマン主義の画家ドラクロア (Eugène Delacroix, 1798-1863) が描いた「民衆を導く自由の女神」(La Liberté guidant le peuple) は、1789年の革命ではなく、1830年の七月革命を描いた。自由の女神は左手に銃を持ち、右手に持った三色旗を高く掲げている。七月革命でシャルル10世 (Charles X. ルイ16世の末弟。ルイ18世の次に即位。在位1824-1830) は退位した。これでブルボン朝は断絶した。

新しく即位した王は、ブルボン家の分家にあたるオルレアン家の6代目、ルイ・フィリップ・ジョゼフ (Louis Philippe Joseph, Duc d'Orleans, 1773

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

-1850, 国王としての在位1830-1848) だった。彼の父は、「フィリップ・エガリテ」(Philippe Égalité) こと、オルレアン家5代目のルイ・フィリップ(Louis Philippe, Duc d'Orleans, 1747-1793) だった。が、新王は反動化し、1848年に再び革命が起きて、フランス最後の国王となった。

かつて、フィリップ・エガリテ(「平等のフィリップ」の意)は進歩的な思想で知られ、1792年秋に開かれたルイ16世の裁判で死刑に賛成した。だが、自身も元国王の処刑から10ヶ月後の1793年11月に断頭台の露と消えた。

<関連サイト>

*The National Gallery (UK) “Jacques-Louis David”

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/jacques-louis-david>

*Web Museum, Paris “David, Jacques-Louis”

<http://www.ibiblio.org/wm/paint/auth/david/>

*Art Cyclopedia “Jacques-Louis David”

http://www.artcyclopedia.com/artists/david_jacques-louis.html

*The National Gallery (UK) “Eugène Delacroix”

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/eugene-delacroix>

*Eugene Delacroix The Complete Works

<http://www.eugenedelacroix.org/>

*Web Museum, Paris “Delacroix, Eugène W”

<http://www.ibiblio.org/wm/paint/auth/delacroix/>

*Art Cyclopedia “Eugène Delacroix”

http://www.artcyclopedia.com/artists/delacroix_eugene.html

*Musée national Eugène Delacroix (France) (ドラクロア美術館)

<http://www.musee-delacroix.fr/>

(4) サン・ジェルマン・ロークセロワ教会 (Église St. Germain l'Auxerrois)

<http://www.saintgermainauxerrois.cef.fr/>

ルーヴル宮の東隣にある教会で、7世紀に建設された。1572年8月24日、

この教会の鐘を合図に「サン・バルテルミの虐殺」(La Saint-Barthélemy)が始まった。少し長くなるが、ここでフランスにおける新旧キリスト教の対立に触れたい。

ユグノー派 (huguenot。新教徒であるカルヴァン派の1つ) のアンリ・ド・ナヴァル (Henri de Navarre, 1553-1610。後のアンリ 4 世。ブルボン朝の開祖) とマルグリット王女 (Marguerite de Navarre, 1492-1549) の結婚式に参列するため、集まっていたユグノー派の貴族たちは惨殺され、その動きはたちまちフランス全土に広がった。背後には、1560年に10歳で即位した国王シャルル 9 世 (Charles IX, 1550-1574。在位1560-1574) の母で、摂政を務めていたカトリーヌ・ド・メディシス (Catherine de Médicis, 1519-1589) と、カトリックでフランスの名門貴族ギーズ公アンリ (Henri I de Guise, 1550-1588) がいたとされる。カトリーヌはフィレンツェで金融業を営んでいたメディチ (Medici) 家の出身で、アンリ 2 世の妻となった。

1574年、シャルル 9 世が20歳代半ばで死去すると、その弟がアンリ 3 世 (Henri III, 1551-1589。在位1574-1589) として即位した。だが、アンリ 3 世の弟が1584年に死去し、ブルボン家のアンリ・ド・ナヴァルが王位継承の候補者として浮上した。これを機にアンリ 3 世、ギーズ公アンリ、アンリ・ド・ナヴァルによる 3 アンリの争いが始まった。

アンリ 3 世はカトリック側と手を切り、1588年にギーズ公アンリを暗殺させたが、自身も1589年にカトリックの修道士に殺害された (バロア朝の断絶)。そこでブルボン家のアンリが王位継承を宣言したが、ローマ教皇とカトリック大国のスペイン (当時はハプスブルク家の系統) が異を唱えたため、アンリ 4 世は1593年にカルヴァン派からカトリックに改宗した。1598年、有名なナントの勅令 (Édit de Nantes) を発し、フランス国内におけるユグノー派の信仰を認めた。これにより、1562年にギーズ公がユグノーを襲撃して以来続いていたユグノー戦争ようやく終止符が打たれた。

アンリ 4 世 (Henri IV。在位1589-1610) はブルボン朝の開祖となり、国内の農業・工業を復興させ、フランス絶対王政の基礎を築いた。だが、スベ

インと神聖ローマ帝国に対し戦争を計画したため、再びカトリックの反感を買い、1610年にカトリックの修道士に暗殺された。こうして、3人のアンリは全員が暗殺という形で生涯を閉じた。検視した医者によれば、57歳のアンリ4世はまだ30年も生きられる健康な身体だったという（小島、p.65）。

アンリ4世の後継者は、2度目の妻マリー・ド・メディシス（**Marie de Médicis**, 1573-1642）との間に生まれたルイ13世（**Louis XIII**, 1601-1643。在位1610-1643）であった。1617年、ルイ13世は摂政を務める母からから政治的実権を取り戻すと、1624年にリシュリュー（**Armand Jean du Plessis, Duc de Richelieu**, 1585-1642）を宰相に起用し、新旧両教徒の対立を押さえこみ、国王の絶対権力を強化した。そして、スペイン国王フェリペ3世の娘アンヌ・ド・ドリシュを娶り、後のルイ14世と初代オルレアン公フィリップをもうけた。

ちなみに、マリー・ド・メディシスはルイ13世に干渉しすぎ、母と息子の関係は悪化した。それだけ摂政の権力は大きかった。フランドル出身でバロック画家の巨匠だったルーベンス（**Petrus Paulus Rubens**, 1577-1640）に依頼した巨大な連作「マリー・ド・メディシスの生涯」がルーヴル美術館に所蔵されている。

時代は下がって、ルイ14世（**Louis XIV**, 1638-1715。在位1643-1715）の治世に再びユグノーの迫害が始まると、都市の商工業者に多かったユグノーたちはフランスから逃れていった。これがフランスの財政難を招き、革命の遠因の1つとなったといわれている。

<関連サイト>

*BBC (UK) “Test show head of France’s King Henri IV ‘genuine’ ”

<http://www.bbc.co.uk/news/science-environment-11996981>

*Château des Ducs Bretagne（ブルターニュ大公城）

<http://www.chateau-nantes.fr/>

ブルターニュ公フランソワ2世とその娘アンヌ・ド・ブルターニュが建設した城塞で、ナントの勅令が発布された場所。中にナント歴史

博物館 (Musée de l'histoire de Nantes) がある。

*Paroiss Saint-Pierre/Cathédrale St. Pierre de Genève (ジュネーヴのサン・ピエール寺院)

<http://www.saintpierre-geneve.ch/>

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-cathedral>

ジュネーヴ旧市街の中心部に立つ。もともとカトリックの教会だったが、宗教改革を強力に推し進めるカルヴァン (Jean Calvin, 1509-1564) がここで説教をしてから、プロテスタントの教会になった。内部にはカルヴァンが説教の際に座った椅子 (Chaise de Calvin) も展示されている。

*Auditoire de Calvin (カルヴァン講堂)

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-auditoire-calvin>

<http://sites.google.com/site/orguedeauditoirecalvin/>

教会の右隣に立つ建物で、ジョン・ノックス (John Knox, 1514-1572) が説教した場所。ノックスは、イングランド女王メアリー1世 (Mary I, 1516-1558, 在位1553-1558) によるプロテスタントの弾圧の最中にジュネーヴに滞在し、カルヴァンと交流して、後にスコットランドの長老派 (Presbyterian) を設立した。

*Musée de la Réformation (宗教改革博物館)

<http://www.musee-reforme.ch/index-e.html> (フランス語版)

<https://www.musee-reforme.ch/english-version/> (英語版)

比較的小規模の博物館だが、宗教改革の時代の貴重な文物が多数展示されており、そのすばらしさに圧倒される。

*Quality Christian Tours to Europe—Geneva

<http://www.reformationtours.com/site/490868/page/661543>

*Monument de la Réformation/The Reformation Wall (宗教改革記念碑)

<http://www.sacred-destinations.com/switzerland/geneva-reformation->

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

wall

ジュネーヴの旧市街にあるバステイヨン公園 (**Promenade des Bastions**) に、カルヴァン派の宗教改革に貢献した4人、すなわちファレル、カルヴァン、ベーズ、ノックスの石像が立っている。1517年に宗教改革を始めたルターの像は、長方形のエリアのはるか左端に置かれている。

***Lutherstadt Wittenberg** (ドイツ・ヴィッテンベルク)

<http://www.wittenberg.de/>

1517年にルターが宗教改革を始めたヴィッテンベルクの正式名称は「ルターの町ヴィッテンベルク」(**Lutherstadt Wittenberg**) である。ヴィッテンベルク大学で神学の教授だったルター (**Martin Luther**, 1483-1546) が「九十五カ条の論題」を貼りつけたのは、城教会 (**Schloßkirche**) の扉だった。

***Lutherhalle/The Luther House and Museum, Wittenberg** (ルターの家と博物館)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-luther-house>

ヴィッテンベルクの市街地の入り口にあるルターの家は博物館となっており、内部を見学できる。

***Schlosskirche Lutherstadt Wittenberg/Castle Church** (城教会)

<http://www.schlosskirche-wittenberg.de/> (ドイツ語版)

http://www.schlosskirche-wittenberg.de/index_eng.html (英語版)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-castle-church>

Schloß (**Schloss**とも表記) は「城」の意で、**Kirche**は教会である。ルターが「九十五カ条の論題」を貼りつけた木造の扉は、プロイセンとオーストリアが戦った七年戦争 (1756-1763) さなかの1760年に焼失し、1858年にブロンズ製の扉が付けられ、現在に至る。内部には、ルターとルターの同僚で宗教改革に少なからぬ影響を及ぼしたメラニヒトン (**Philipp Melanchton**, 1497-1560) の墓が並ぶ。

* **Stadtkirche/City Church of St.Mary, Wittenberg** (ヴェッテンベルク市教会)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wittenberg-city-church>

市教会 (Stadtkirche) はルターが説教をし、1525年に結婚した場所で、彼の6人の子もここで洗礼を受けた。建物はルターの時代のままではない。

* **Lutherhaus/The Luther House** (ルター・ハウス)

<http://www.lutherhaus-eisenach.de/> (ドイツ語版)

<http://www.lutherhaus-eisenach.de/english/index.htm> (英語版)

ドイツのアイゼナハ (Eisenach) にあるルターの家。学童だった1498年から1501年まで住んだ。

* **Wartburg Castle, Eisenach, Germany** (ヴァルトブルク城)

<http://www.sacred-destinations.com/germany/wartburg-castle>

ドイツのアイゼナハにある山城。ここでルターは新約聖書をドイツ語に訳し、ドイツ語の統一に貢献した。ホテルが併設されている。ルターが使っていた部屋の中には暖炉と机と椅子以外、当時の物は何もない。それは、昔から多くの人がここを訪れ、小物を「記念に」持ち帰ったからとか。壁には数百年前の落書きも残されている。

(5) **バスティーユ広場 (Place de la Bastille)**

バスティーユは普通名詞 (**bastille**) としては「牢獄」を意味するが、大文字で定冠詞を伴うと、政治犯を収容したバスティーユ監獄 (**La Bastille**) となる。ルイ14世によって建設され、圧政の象徴だったが、革命勃発の時点で囚人はわずか7名しかいなかったという (芝生, p.51)。

1789年7月14日の1年以上前から各地で貴族の館や工場を襲撃する事件が起きていた。バスティーユ襲撃 (**pris de Bastille**) の前日である13日には、テュイルリー宮殿が襲撃された。14日の朝9時頃、パリの西にあるアンヴァリッド (廃兵院。 **Invalides**。後述) を襲って武器を入手した民衆は、パリの

東にあるバスティーユに向かい、午前10時半にはパリ選挙人（コミューン）の代表がバスティーユ前に到着した。代表たちは、要塞内で守備隊の司令官ド・ローネと交渉した（同上）。交渉は進まず、バスティーユ前にますます人が集まっていった（同上）。やがて何人かが城内に入り込み、門を内側から開けて、掘の橋を渡し、戦闘が始まった（同上）。

同日の午後遅く、アンヴァリッドやパリ市庁舎（後述）から大砲が到着し、城門に向けて発射された。守備隊は100数十名のスイス兵と廃兵のみで、死者1名、負傷者3名だった（同上）。殺されたド・ローネ司令官の首を槍の穂先に突き刺さして、パリ市民は行進した。曖昧な立場を取ったパリ市長のフレッセルは射殺され、その首もまた槍の穂先に突き刺された（同上）。

この後、選挙人の自治体（コミューン）がパリ市の実権を掌握し、新しいパリ市長が就任した。また、アメリカ独立革命に参加したラファイエット侯爵（1757-1834）が新設された国民衛兵の司令官となった。彼は市民軍の赤、青、ブルボン朝の象徴の白色を加えた三色の帽章（コカルド）を国民衛兵のシンボルにしたという。カトリックのブルボン家の紋章は白百合の花だった（フランス国旗の由来の詳細は、辻原、pp.51-52を参照）。

1789年8月26日、三部会改め立法議会は「人および市民の権利宣言」（*Déclaration des droits de l'homme et du citoyen*）、すなわちフランス人権宣言を採択した。第1条は「人は、自由かつ権利において平等なものとして出生し、かつ生存する。社会的差別は、共同の利益の上にもみ設けることができる」と規定する（訳文の出典は高木八尺ら編『人権宣言集』岩波書店、2007年、p.131）。これは、1776年7月4日に採択されたアメリカ独立宣言に倣ったもので、立法議会在が8月17日から議論していた。ただし、どちらの宣言も全ての人間を「人」に含めていなかったのは周知のとおりである。

今日バスティーユ広場の中央に立つ記念柱は、1830年の七月革命の犠牲者を偲んで建てられた。地下の納骨所には革命の犠牲者が眠る。広場の一角に、フランス革命200周年を記念してオペラ・バスティーユ（*Opéra Bastille*）が建てられたが、ガラス張りの近代的なデザインがまばゆい。現在、大半のオ

ペラはこちらで上演される。一方、ミュージカル「オペラ座の怪人」の舞台としても知られるオペラ・ガルニエ（Opéra Garnier）は、ナポレオン3世の治世下で完成したが、ここではバロック・オペラやモーツァルト作品が上演される。内部の見学ツアー（有料）もある。

<関連サイト>

*** Discover France “Place de la Bastille”**

<http://www.discoverfrance.net/France/Paris/Monuments-Paris/Bastille.shtml>

*** A View on Cities “Place de la Bastille”**

<http://www.aviewoncities.com/paris/placedelabastille.htm>

*** Opéra national de Paris（パリ国立オペラ）**

<http://www.operadeparis.fr/>

（6）コンコルド広場（Place de la Concorde）

ルイ15世の時代に起工され、1755年から20年の歳月かけて建設された。当初はルイ15世の騎馬像を置くために造られ、「ルイ15世広場」と呼ばれたが、1790年に「大革命広場」と改称された。1792年、ルイ15世像は撤去され、断頭台が置かれて、革命広場に改称された。

1793年から1795年まで、この広場に置かれた断頭台で計1343人が処刑された。国王廃位後ルイ・カペーとよばれたルイ16世は、1793年1月21日にここで処刑された。夫の処刑後、カペー未亡人とよばれたマリー・アントワネットは、同年10月16日にこの広場で処刑された。

断頭台は王族や貴族以外の人々の血も次々と吸った。ジャコバン・クラブ（Club des Jacobins）の一員だったダントン（Georges Jacques Danton, 1759-1794）は独裁者となったロベスピエール（Maximilien de Robespierre, 1758-1794）と対立し、1794年4月5日に処刑された。処刑直前、「ロベスピエールよ、おまえもすぐ後に続く」とつぶやいたといわれる（芝生, p.127）。3ヶ月半後に起きたテルミドール（熱月）反動で、ロベスピエールとその一味は

逮捕・処刑された。

広場の名称は何度か変わり、1830年に「コンコルド広場」となった（コンコルドは「調和」の意）。広場中央にあるオベリスク（l'**Obélisque de la place de la Concorde**）はエジプトのルクソール（**Luxor**）神殿から持ち帰ったもので、1836年に建てられた。

<関連サイト>

* Discover France “Place de Concorde: Obélisque de Luxor”

<http://www.discoverfrance.net/France/Paris/Monuments-Paris/Obelisque.shtml>

* A View on Cities “Place de la Concorde”

<http://www.aviewoncities.com/paris/placedelaconcorde.htm>

* The Paris Pages “Place de Concorde; Obélisque de Luxor”

<http://www.paris.org/Monuments/Concorde/>

(7) テュイルリー庭園（Le Jardin des Tuileries）

フィレンツェのメディチ家からアンリ 2 世に嫁いだカトリーヌ・ド・メディシスが、テュイルリー宮殿（**Palais des Tuileries**）とイタリア式庭園を建設させた。1556年に起工されたが、ユグノー戦争などで工事が何度も中断された。ブルボン朝の開祖アンリ 4 世が宮殿建設を引き継ぎ、孫のルイ 14 世が建設を再開した。1682年、ルイ 14 世は宮廷をルーヴル宮からパリ郊外のヴェルサイユ宮殿へ移転した。

1789年10月 5 日、ヴェルサイユ行進によってパリ市民が国王一家をヴェルサイユからパリに連れ戻した。財政難のため、以前からテュイルリー宮殿の皇太子の居間はアパートマンとして市民に賃貸されていたが、当時の宮殿は荒れ果てていたという。

1871年のパリ・コミュンでテュイルリー宮殿は焼失し、現在は庭園となっている。庭園の西の端は、かつて断頭台が置かれたコンコルド広場につながっている。

<関連サイト>

***Mairie 1e “Le Jardin des Tuileries”**

http://www.mairie1.paris.fr/mairie01/jsp/site/Portal.jsp?page_id=255

パリ第1区役所がテュイルリー庭園を紹介したページ。

***A View on Cities “Le Jardin des Tuileries”**

<http://www.aviewoncities.com/paris/tuileries.htm>

(8) タンプル公園 (Square du Temple)

国王ルイ16世一家は、王妃と恋愛関係にあったとされるスウェーデン伯爵フェルセンの手引きで、国外逃亡を図った。だが、パリ市外に出るまで馬車の手綱を取ったフェルセンが不慣れで道に迷う、パリ郊外のボンディの森で人目を引く豪華な馬車に乗り換える、休憩を取りながらのんびり進むなど、不手際が重なった。遅れた国王一家は軍との待ち合わせに失敗し、ヴァレンヌ村 (Varenne) で捕らえられ、テュイルリー宮殿に連れ戻された。

1792年にフランスとオーストリアが戦争を始めると、状況はさらに悪化した。7月11日、立法議会が「祖国の危機」を宣言し、国民衛兵の武装と義勇兵の募集が始まった。7月25日、オーストリアのブラウンシュヴァイク公が、フランス王室に危害を加えればパリ市を破壊すると宣言したが、かえってフランス国民の怒りを爆発させた (ルヴェ, p.96)。王権停止を求める請求書が立法議会に出されたが、回答期限の8月9日を過ぎても回答はなかった。

ついに、8月10日、怒った民衆や兵士がテュイルリー宮殿を襲撃し、宮殿を守っていたスイス衛兵との間に激しい戦闘が行われた。ルイ16世は家族を連れてやむなく立法議会に保護を求めた。民衆が議場になだれ込み、一家は書記用の小部屋に避難した。翌11日、立法議会は王の職務停止を宣言し、13日に国王一家はタンブル塔に収容された。

タンブル塔 (Tour du Temple) は、もともとテンブル騎士団 (chevalerie du Temple/ordre du Temple) の本拠地で、5階建ての城砦に円錐形の屋根の付いた2つの塔があった。国王一家を収容するにあたり、周囲にあった樹木

や家屋が撤去され、逃亡防止のため窓に鉄格子や目隠しの日よけが取り付けられたという（ルヴェ、p.99）。ここでルイ16世は息子に勉強を教え、アントワネットとエリザベートはマリー・テレーズ・シャルロットに絵を描き、音楽を教え、時折庭を散策した（同上、p.101）。しかし、1792年8月13日に国王一家が初めてタンプル塔で食事をした時の様子を描いた絵を見ると、見張りたちが一家をにらみつける目は異様に鋭い（同上）。決して、家族だけでくつろげる時間はなかつたろう。

やがて、テュイルリー宮殿のルイ16世の住居から、王が作った秘密の引出し「鉄の戸棚」が発見された。戸棚に残されていた文書から、王が亡命者と連絡を取り、外国と交渉していたことが明らかになった（同上、p.103）。

1792年12月11日、パリ市長がタンプル塔を突然訪れ、ルイ16世は裁判所へ連れて行かれた。被告となった元国王は、クリスマスや新年にも家族に会えなかった。ようやく再会できたのは、死刑が確定し処刑前日となった1793年1月20日の夜だった。夫の口から死刑判決を聞かされたマリー・アントワネットは夫にすがりつき、家族全員がすすり泣いた（同上、p.106）。翌朝、ルイ16世は妻に最後の別れを告げるつもりだったが、付添いの司祭の勧めにより、妻には会わずに刑場へ向かい、自身の髪の毛と結婚指輪を司祭に託した（同上、p.103）。

1793年1月21日午前10時22分、太鼓の連打と大砲の音で夫の処刑を知ったマリー・アントワネットは、息子ルイ・シャルルの前に跪き、新王ルイ17世の誕生を称えた（同上、p.106）。ルイ17世は実際に即位していないが、1814年にブルボン朝が復活したとき、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世（Louis XVIII, 1755-1824。在位1814-1824）として即位した。

タンプル塔は、皇帝ナポレオンの命により1811年までに取り壊された。現在、タンプル公園（3区）となっている。公園は、一般的な旅行ガイドブックの地図に載っているが、索引には載っていないので、ここで正確な行き方を記載したい。レピュブリック広場（Place de la République）から200mほど南西に行った場所で、東側に第3区役所（Marie du 3^e）があり、南側に

Rue de Bretagneがある。地下鉄（métro）の最寄り駅は、13号線のTempleになる。

<関連サイト>

*Mairie du3e（パリ第3区役所）

<http://www.mairie3.paris.fr/mairie03/jsp/site/Portal.jsp>

*Mairie du3e “Square du Temple”

http://www.mairie3.paris.fr/mairie03/jsp/site/Portal.jsp?document_id=11634&portlet_id=969

*Paris-Walking-Tours. com “Square du Temple”

<http://www.paris-walking-tours.com/squaredutemple.html>

*Le Square du Temple—accueil Paris

http://paris1900.lartnouveau.com/paris03/squares/le_square_du%20_temple.htm

（9）裁判所（Palais de Justice）

パリのシテ島（Île de la Cité）の西側にある。古くはノルマン人の侵攻を防ぐ要塞で、中世にはカペー王朝の住居となった。14世紀初め、コンシェルジェリー（後述）が造営され、高等法院が設置された。1789年5月、ここで三部会の開催が要求され、後に革命裁判所が置かれた。

有名な首飾り事件はパリの高等法院で裁かれた。ルイ15世の愛人デュ・バリー夫人のために、高価なダイヤモンドの首飾りが作られた。これは、平たいリボンのような形をしていた（ルヴェ、pp.68-69にデザイン画が載録されている）。ルイ15世の急逝で首飾りを売却できなくなった宝石商のベメールは、王妃マリー・アントワネットに売却を試みたが、150万リーブルという価格を聞き、王妃もさすがに購入しなかった。

そこに、王妃の友人をかたるラ・モット夫人が現れ、王妃の不興を買っていたロアン枢機卿に王妃への取りなしを申し出た。枢機卿は女好きで、王妃に嫌われていた。王妃が首飾りの代金の分割払いを枢機卿に保証してほしい

と言っている、とラ・モット夫人はロアン枢機卿を騙した。宝石商は王妃に第1回の支払いを求める手紙を送ったが、思慮の足りない王妃は、何のことかわからないと手紙を焼き捨ててしまった。詐取された首飾りはロンドンで分解され、ダイヤモンドは売却された。

事件が発覚すると、ロアン枢機卿は弁償を申し出たが、怒った王妃は枢機卿の逮捕を求めた。多くのフランス国民は、「赤字夫人」(Madame Déficit。王妃のこと)が枢機卿を利用したと考えた。

1786年5月31日、パリ高等法院で判決が出されたが、ラ・モット夫人の一味は有罪になったが、ロアン枢機卿は無罪となった。王妃は衝撃を受け、フランス国民は喜んだという。だが、国王はロアンを引退させた。高等法院の判決を無視したことで、貴族の反発を買った。その後、主犯のラ・モット夫人は裁判所の庭で民衆が見守る中、鞭打ちと「V」の字(voleurの略。「泥棒」の意)の焼きごてを当てられる刑を受けた。終身刑としてバステューユに収監されたが脱獄し、ロンドンへ逃亡した。

<関連サイト>

* Paris France.ca “Palais de Justice” (裁判所)

<http://parisfrance.ca/attractions/palaisdejustice.html>

* 首都官邸「フランス共和国の司法制度」

<http://www.kantei.go.jp/jp/sihouseido/pdfs/dai5gijiroku-2.pdf>

* Musée de la Prefecture de Police (警視庁博物館)

<http://www.prefecturedepolice.interieur.gouv.fr/La-prefecture-de-police/Service-de-la-memoire-et-des-affaires-culturelles/Le-musee-de-la-prefecture-de-police>

パリ警視庁はシテ島にあるが、警視庁博物館は川を南下してサン・ニコラ・ド・シャルドネ教会(Église St. Nicolas du Chardonnet)の比較的そばにある。

(10) コンシェルジェリー (Conciergerie)

<http://www.conciergerie.monuments-nationaux.fr/>

コンシェルジェリーは、裁判所やノートル・ダム大聖堂（後述）と同じくパリのシテ島にある。フランス語で小文字の*conciergerie*は管理人室や門衛所を示すが、大文字で定冠詞が付いた場合（*La Conciergerie*）、フランス革命時のパリ裁判所付属牢獄を指す。

コンシェルジェリーはゴシック様式の建物で、元は王室の管理府だったが、14世紀頃から裁判所付属の牢獄となった。革命中、ここに収容された者の7割が断頭台の露と消えたという。コンシェルジェリーは重大犯罪を行った者が収容される場所だった。

タンプル塔に閉じこめられたルイ16世一家は、外国との取引材料として手厚く保護されていたが、国王一家を逃亡させようとする計画が何度も発覚した。また、ルイ16世の処刑後、次男のルイ・シャルルをルイ17世として即位させようという計画があるとの噂が流れていた。

元国王の処刑から半年後の1793年7月3日午後10時、アントワネットの部屋に役人たちが突如入ってきた（ルヴェ、p.107）。彼らは命令書を読み上げ、次男ルイ・シャルルを家族から引き離した。幼い元王太子は山岳派のパン屋に預けられた。それから約1ヶ月後の8月2日午前2時、マリー・アントワネットはコンシェルジェリーへ連行された（同上）。タンプル塔には、長女マリー・テレーズ・シャルロットと義妹エリザベートが残された。

コンシェルジェリー内部には、王妃が処刑までの76日間を過ごした独房や「衛兵の間」が再現されている。見張りの衛兵が常に部屋の中にいた。くわえて、守衛に金を払えば誰でも囚人を見物できたので、王妃の見知らぬ面会客が大勢訪れたという（ルヴェ、pp.107-108）。

1793年10月5日、マリー・アントワネットは起訴された。10月12日、「敵との共謀」「国家の安全に対する陰謀」などの罪状を持つ「諸悪の根源であるオーストリア女」は出廷した。夫の処刑後、マリー・アントワネットはすっかり老け込んでいた。王族の常で、恋愛を経て結ばれたわけではなかったが、革命勃発後は夫と支え合ってきた。かつての王妃の姿を知っている人々は、慄

悴しきった被告を見て驚いたという（同上，p.108）。だが，元王妃は息子との近親姦の罪を挙げられた時，毅然と反論した。裁判所内で傍聴していた庶民の女たちでさえ，被告に同情したという（同上，p.109）。

10月15日，元王妃への裁判は結審した。陪審員たちは1時間討議したふりをして，元王妃に死刑が言い渡された（同上，p.114）。むろん，最初から死刑以外ありえなかったのである。

(11) パリ市庁舎 (**Hôtel de Ville**)

* **Ville de Paris** (パリ市役所)

<http://www.paris.fr/>

1357年にシャトレ広場から現在の場所に移転した。1871年のパリ・コミューンで焼失したが，1882年に元通りに再建された。宮殿のように壮観な建築である。パリに限らず，ヨーロッパの市庁舎は歴史的建造物が多い。市庁舎の大時計の下には，フランス共和国の標語として有名な「自由・平等・博愛」(**Liberté, Égalité, Fraternité**)の文字が刻まれている。

<関連サイト>

* **Ville de Paris “Hôtel de Ville Virtual Tour”**

http://www.paris.fr/portail/english/Portal.lut?page_id=8207&document_type_id=5&document_id=34169&portlet_id=18967

* **A View on Cities “Hotel de Ville”**

<http://www.aviewoncities.com/paris/hoteldeville.htm>

(12) フランス歴史博物館 (**Musée de l' Histoire de France, Hôtel de Soubise**)

<http://www.culture.gouv.fr/mcc/Actualites/A-la-une/La-Maison-de-l-histoire-de-France-s-installera-aux-Archives-Nationales>

もとは18世紀に建てられた貴族の館で，ナポレオンの遺言書，フランス人権宣言，ジャンヌ・ダルクの書簡などが所蔵されている。博物館の隣にはロアン館 (**Hôtel de Rohan**) があるが，ここを歴代のロアン大司教がパリの館

として使っていた。

(13) カルナヴァレ博物館 (Musée Carnavalet)

http://www.paris.fr/portail/loisirs/Portal.lut?page_id=6468 (フランス語版)

http://www.paris.fr/portail/english/Portal.lut?page_id=8118 (英語版)
フランス革命関係の資料が充実している。マリー・アントワネットの遺品も所蔵する。

(14) 国立古文書館 (Le Archive nationale)

<http://www.archivesnationales.culture.gouv.fr/>

フランス歴史博物館の比較的近隣にあり、フランス革命に関する史料を多数所蔵する。マリー・アントワネットは処刑の朝、義妹エリザベートに宛てて最後の手紙を書いた。手紙は、後にジャコバン・クラブの独裁者となるロベスピエールの手に渡り、1816年までその存在を知られていなかった。オリジナルは国立古文書館で保存されているが、レプリカが展示されている(手紙の和訳はブラン, pp.215-220に載録)。

(15) ダヴィッドによる処刑直前のマリー・アントワネットのスケッチ

* Smithsonian.com “Marie Antoinette”

<http://www.smithsonianmag.com/multimedia/photos/?c=y&articleID=10022971&page=6>

1793年10月15日、死刑判決を受けたマリー・アントワネットは、独房へ戻ると義妹エリザベートに最後の手紙を書いた。便箋の冒頭には「10月16日午前4時30分」という日時が記されている。残される2人の子どもたちを託した手紙の便箋は、びっしりと細かい字で埋め尽くされ、母の必死の思いが伝わってくる。

処刑の朝、元王妃は喪服を着ることを許されず、白い部屋着姿で荷馬車に

乗せられた。パリ市内をゆっくり進むマリー・アントワネットの様子を、後にナポレオンの画家となるダヴィッドがラフなスケッチに残した。荷台の元王妃は後ろ手に縛られ、白髪を襟元でばっさりと短く切られ、口元はへの字に結ばれている。王妃の肖像画家で、親しい友人でもあったヴィジェ・ル・ブラン夫人 (**Marie Elisabeth Louise Vigée Le Brun**, 1755-1842) が描いた絵と比べると、何という変わりようであろうか。

しかし、死刑囚の背筋はびんと伸びていた。詰めかけた群衆が怒号を浴びせかける中でも、フランス王妃として、マリア・テレジアの娘として、最後の威厳を示そうとしたのだろう。

元王妃の奪還計画を阻止するため、パリ市内は嚴重に警備された。午後12時15分、元王妃は革命広場の断頭台で処刑された。

<関連サイト>

*** PBS (USA) “Marie Antoinette and the French Revolution”**

<http://www.pbs.org/marieantoinette/timeline/index.html>

アメリカの放送局PBS (Public Broadcasting Service)のサイトだが、フランス革命のできごとが年表形式にまとまっている。また、関連する絵画などが充実している。PBSは中立かつ客観的な報道で知られ、PBSの系列局の1つ、WGBH/Boston (<http://www.wgbh.org/>)は数々の良質なドキュメンタリー番組を制作してきた。

*** Smithsonian.com (USA) “Biography Marie Antoinette”**

<http://www.smithsonianmag.com/history-archaeology/biography/marieantoinette.html>

マリー・アントワネットの生涯をまとめた。5ページにわたる詳細な説明が書かれている。前述のスケッチは、このページに付けられた写真の最後にある。Marie Antoinette, Photo Gallery, Smithsonian.comでも検索できる。

*** The National Gallery (UK) “Elisabeth Louise Vigée Le Brun”**

<http://www.nationalgallery.org.uk/artists/elizabeth-louise-vigee-le-brun>

ロンドンのナショナル・ギャラリーによるル・ブラン夫人の解説。

***The National Gallery (UK) “Self Portrait in a Straw Hat” Elisabeth Louise Vigée Le Brun**

<http://www.nationalgallery.org.uk/paintings/elizabeth-louise-vigee-le-brun-self-portrait-in-a-straw-hat>

ル・ブラン夫人の麦藁帽子をかぶった自画像。1782年以降に制作された。

***Marie Louise Élisabeth Vigée Lebrun**

http://www.artcyclopedia.com/artists/vigee-lebrun_marie_louise_elisabeth.html

(16) サン・ドニ大聖堂 (Basilique cathédrale de Saint-Denis)

<http://saint-denis.monuments-nationaux.fr/>

サン・ドニ大聖堂の地下には、ブルボン家および歴代国王の墓所がある（有料）。革命勃発直前の1789年6月、国王夫妻の長男ルイ・ジョゼフは病没した。幼い王太子の墓標の隣に、次男ルイ・シャルル（後のルイ17世。実際には即位していない）の墓標がある。

4歳のルイ・シャルルは兄の死により王太子となったが、これは過酷な運命の始まりだった。1793年1月に父ルイ16世が処刑され、同年7月に母から引き離されると、ルイ・シャルルは山岳派の靴屋シモンに預けられ、徹底的に思想教育をされたという。元王妃の裁判では、母と性的関係を持たされたという調書に署名させられた（ルヴェ、pp.108-109, 145-146を参照）。姉や叔母に会うこともなく、劣悪な環境にたった1人で置かれた王太子は10歳で亡くなったが、その心臓は1975年に取り出され、ガラスの小瓶に保存された（以下のルイ17世のサイトを参照）。国王の心臓を保存する習慣に基づいてだが、ひからびた小さい心臓は見るのも痛々しい。

ルイ16世一家で唯一生き延びたのは、国王夫妻の長女マリー・テレーズ・シャルロット（1778-1851）だった。「マリー・テレーズ」は、母方の祖母で

オーストリアの女帝マリア・テレジア (Maria Theresia, 1717-1780) の名をフランス語読みにしたものである。結婚から7年経ってようやく「不完全な結婚」を脱し、結婚8年目に初めて母となったフランス王妃の喜びが伝わってくるようである。

タンブル塔における王女 (Madame Royale) の生活は悲惨だった。1794年5月、長年行動を共にしてきた叔母のエリザベートが処刑され、翌年6月、1人で牢獄に入れられていた弟が10歳で死んだ。1795年、17歳になっていた王女は人質交換のため母の実家ウィーンへ送られた。1799年、父の次弟アルトワ伯の息子でアングレーム公爵のルイ (Louis Antoine de Bourbon, 1775-1844) と結婚し、アングレーム公爵夫人 (duchess d'Angoulême) となった。1824年に義父がシャルル10世として即位すると、夫が王太子 (dauphin) となり、王女は王太子妃 (dauphine) となった。長命なマリー・テレーズ・シャルロットは、義父が王位を追われた1830年の七月革命も、フランス王制が完全に終焉した1848年の二月革命も、自分の目で見た。そして、1851年にその長く数奇な人生を終えた。

<関連サイト>

(以下はヴェルサイユ宮殿の公式ホームページ)

*Louis XVII (ルイ17世)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/the-dauphin-louis-xvii->

*Madame Royale (マリー・テレーズ・シャルロット)

<http://en.chateauversailles.fr/history/court-people/louis-xvi-time/madame-royale>

(17) マドレーヌ教会 (Église Ste-Marie Madeleine)

<http://www.eglise-lamadeleine.com/>

マドレーヌ教会はコリント様式の柱が支える建物で、ギリシャ神殿のような概観だが、教会である。1849年にピアニストで作曲家のショパンの葬儀が

執り行われた場所としても知られる。パリ市民に親しまれており、La Madeleineで通じる。

1793年1月の処刑後、ルイ16世の遺体はマドレーヌ教会から北に300mほど行ったマドレーヌ墓地（Cimetière de Madeleine）に埋葬された。

同年10月に処刑された元王妃マリー・アントワネットの遺体もマドレーヌ墓地に運び込まれた。だが、役人たちは遺体を草むらに放置して昼休みをとり、遺体の両足の間に頭部が置かれたまま1日以上経過したという（ルヴェ、p.115）。

1814年にナポレオンが皇帝を退位してエルバ（Elba）島へ配流され、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世として即位した。新国王が兄夫婦の遺体をブルボン家の墓所であるサン・ドニ大聖堂へ改葬したのは、革命勃発から四半世紀以上経った1815年1月21日だった。墓地の跡地には、ルイ16世の末弟アルトワ伯（後のシャルル10世）が贖罪礼拝堂（Chapelle Expiatoire）を建てた。

<関連サイト>

*Les Amis de la Madeleine（マドレーヌ友の会）

<http://www.lesamisdelamadeleine.com/>

(18) ノートル・ダム大聖堂（Cathédrale Notre-Dame de Paris）

<http://www.cathedrale-paris.net/>

セーヌ河畔のシテ島に立つ。「ノートル・ダム」（我々の貴婦人。英語でOur Lady）は聖母マリアを意味するが、この名称の教会はフランス各地にある。最も有名なノートル・ダム、というより、日本人にとってのノートル・ダムは、パリのシテ島にあるものだろう。

大聖堂は1163年に起工され1245年頃に完成した、ゴシック建築の代表作である。1804年、ナポレオンの戴冠式がここで行われた。それ以前には、ジャンヌ・ダルクの名誉回復裁判や、1572年にアンリ・ド・ナヴァル（後のアンリ4世。ブルボン家の開祖）と国王シャルル9世の妹マルグリット王女の結

婚式が行われた。

(19) ランスのノートル・ダム大聖堂 (Cathédrale Notre-Dame de Reims)

<http://www.cathedrale-reims.com/notre-dame-saint-jacques-reims/>

ランス (Reims) はシャンパンで有名なシャンパーニュ (Champagne) 地方の中心都市で、パリ東駅 (Gare de l'Est) から電車で1時間半ほどの距離にある。大聖堂は401年に建設されたが、現在の建物は13世紀から14世紀にかけて再建されたものである。ゴシック様式の傑作とされ、歴代フランス王はここで戴冠してきた。第1次世界大戦で建物の大半が破壊されたが、20年間をかけて再建された。

1774年5月にルイ15世が天然痘で急逝すると、18歳の王太子ルイ・オーギュストがルイ16世として即位した。翌1775年6月11日、聖成式 (即位の後、国王がランスで宗教的祝聖を受ける式典) が執り行われた。

式典から戻った新国王は、パリ市内のルイ・ル・グラン学院 (現在のLycée Louis le Grand) に寄った。皮肉なことに、教授の執筆した韻文を読み上げた学生は、給費生として学んでいたロベスピエールその人であった (ブウロワゾ、p.13)。1780年7月31日に法学士の学位を得たロベスピエールは翌年に弁護士となり、故郷のアラス (Arras) に戻って、小さな事件の弁護士をしながら貧しい人々のために活動した (トレモリエール、リシ、p.15)。

現在、学院はソルボンヌ大学 (パリ第3・4大学) の東隣にある。学院の名の由来は、太陽王 (Roi Soleil) ことルイ14世 (Louis le Grand。英語で Louis the Great) である。

<関連サイト>

*Lycée Louis le Grand (ルイ・ル・グラン学院)

<http://www.louis-le-grand.org/albedo/index.php>

(20) アンヴァリッド (廃兵院) (Hôtel des Invalides)

<http://www.invalides.org/>

ルイ14世の命により、17世紀後半に傷病兵の療養所としてパリ市内に建設された。セヌ河畔に立ち、ドーム教会（*Église du Dôme*）と呼ばれる巨大な丸天井の教会がパリ観光の便利な目印となっている。1789年7月14日の朝、パリ市民はここの武器庫から2万8千丁の小銃を略奪すると、その足でバステューを襲撃した。

一方、アンヴァリッドはナポレオンの墓所でもある。1821年5月5日、51歳のナポレオンは流刑地の英領セントヘレナ（*St. Helena*）島で生涯を閉じた。死因は胃癌だったという（レンツ、p.129）。フランス国王ルイ・フィリップの要請により、1840年12月15日、セントヘレナ島から運ばれたナポレオンの柩が3ヶ月間、アンヴァリッドのドーム下に安置された。1861年4月3日、ナポレオン3世（ナポレオンの弟ルイと、皇后ジョゼフィーヌの連れ子オルスタンスの間に生まれた子）は、伯父である初代皇帝ナポレオン1世の遺骸を移転する式典を挙行了した。柩は教会の地下納骨堂に収められた。

ここには、ナポレオンが2番目の妻マリー・ルイーゼとの間にもうけたローマ王（後のライヒシュタット公）の墓も並ぶ。第2次世界大戦中、シェーンブルン宮殿内のハプスブルク家墓所からアンヴァリッドに移された。オーストリアは1938年にドイツに併合され、フランスにはドイツの傀儡ヴィシー政府があった。

敷地内にある軍事博物館（*Musée de l'Armée*）には、歴代フランス王が用いた武具・甲冑等の膨大なコレクション、ナポレオンの遺品、要塞の模型・図面等が展示されている。

<関連サイト>

*[Tuscany.org](http://www.tuscany.org) “Elba”（エルバ島観光案内のサイト紹介）

<http://www.tuscany.org/Geographical-Areas/Elba-Island/>

*[St. Helena Tourism Official Website](http://www.sthelenatourism.com/)（セントヘレナ島観光案内）

<http://www.sthelenatourism.com/>

(21) 陸軍士官学校（*École Militaire*）

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

ルイ15世の命により建設され、1772年に完成した王立学校で、士官養成を目的とする。コルシカ島出身のナポレオン・ボナパルトは15歳で入学し、1784-1785年にここで学んだ。砲兵少尉として卒業したが、成績は決してよくなかった。小柄で平凡な評価の男が、20年後にフランス初の皇帝になると誰が予想したであろうか。

<関連サイト>

* Collège interarmées de défense (フランス国防省軍事大学校)

<http://www.college.interarmees.defense.gouv.fr/>

* Napoleon.Org “École Militaire-Champs de Mars Military School”

http://www.napoleon.org/en/magazine/museums/files/Ecole_Militaire-Champs-de-Mars_Military_School.asp

* A View on Cities “Champs de Mars” (練兵場)

<http://www.aviewoncities.com/paris/champdemars.htm>

(22) エトワール凱旋門 (Arc de Triomphe)

<http://en.parisinfo.com/museum-monuments/3/arc-de-triomphe-centre-des-monuments-nationaux>

ナポレオン1世の命により建設された。「凱旋門」ときけば、このエトワール凱旋門を思い浮かべる人が多いであろう。凱旋門はフランス軍の栄光を称えるための建物で、ここを中心にシャンゼリゼ通りを含む主要幹線道路が放射線状に出ている。ただし、ナポレオンが生きている間に完成しなかった。

1920年、第1次世界大戦で戦死した1人の無名戦士の墓が凱旋門の下に設けられた。1922年以来、毎夕6時半に慰霊の火が燃やされ、式典が行われる。第2次世界大戦の間も、この式典が途絶えることはなかった。

(23) カルーゼル凱旋門 (Arc de Triomphe du Carrousel)

1805年、フランスの数々の戦勝を記念して起工され、ルーヴル宮の西側にある内庭に、約3年間かけて建てられた凱旋門である。白と赤の大理石を使

っているので、全体がバラ色に見える。8本の大理石の柱に支えられるが、高さは15メートル弱とあまり高くないため、威圧感はエトワール凱旋門ほどない。レリーフのモチーフには、1805年のアウステルリッツの戦いやウルムの戦いにおける勝利が選ばれた。

ただし、ナポレオンはカルーゼル凱旋門が小さいと気に入らず、新たな凱旋門を建設させた。これが前述のエトワール凱旋門である。

<関連サイト>

***Paris Pages “Arc de Triomphe du Carrousel”**

<http://www.paris.org/Monuments/Carrousel/>

***Napoleon.Org “Arc de Triomphe du Carrousel—Paris”**

http://www.napoleon.org/fr/magazine/musee/files/Arc_Triomphe_Carrousel.asp

(24) エリゼ宮 (Palais de l'Élysée)

<http://www.elysee.fr/president/accueil.1.html>

エリゼ宮は1718年に伯爵の宮殿として建てられた。ルイ15世の寵姫ポンパドゥール夫人や、ナポレオンの最初の妻ジョゼフィーヌ皇后もここに住んだ。1815年に、ワーテルローの戦いに敗れたナポレオンは、ここで2度目の退位書に署名した。1873年から大統領官邸として使われているが、アメリカのホワイトハウスと異なり、内部は見学できない。

エリゼ (Élysée) はギリシャ神話のエリュシオン、すなわち死後の楽園、理想郷を意味する。シャンゼリゼ大通り (Les Champs Élysées) のÉlyséesも同じ語句である。英語ではElysiumとなる。

<関連サイト>

***Palais de l'Élysée et son histoire**

<http://www.elysee.fr/president/la-presidence/l-elysee/histoire-du-palais/le-palais-de-l-elysee-et-son-histoire.6172.html>

フランス大統領府ホームページにあるエリゼ宮の歴史。

*The White House Virtual Tour

<http://www.visitingdc.com/white-house/virtual-tour-white-house.htm>

アメリカのホワイトハウスのヴァーチャル・ツアー。

2. ベルギー

(1) ワーテルロー古戦場

1815年3月1日、ナポレオンはエルバ島を脱出し、フランス東南部に上陸した。民衆は歓呼の声で迎え、無抵抗で3月20日にテュイルリー宮殿に入城した。ウィーン会議の参加国は、ナポレオンを倒すべく大同盟を結成した。

3ヶ月後の6月16日、ナポレオンはベルギー中部の町レニーでプロイセン軍に勝利した。だが2日後の18日、ブリュッセルの南にある小村ワーテルロー (**Waterloo**) で連合軍と対決した際は敗北した。6月22日、ナポレオンは2度目の退位書に署名し、彼の「百日天下」 (**Les Cent Jours**) は終わった。7月14日、ナポレオンはイギリスに亡命を求めたが、イギリスは長年に渡るヨーロッパの混乱の責任をとらせようと、大西洋の孤島、英領セントヘレナへの流刑に処した (レンツ, pp.125, 128)。

当時のブリュッセルはオランダの一部で、ベルギー独立はワーテルローの戦いから15年後の1830年であった。現在、ベルギーの主要言語はオランダ語 (住民の母語はオランダ語に近いフラマン語)、フランス語、ドイツ語の3つである。北のフランドル地方ではオランダ語が、南のワロン地方ではフランス語が使われる。一方、首都ブリュッセルは完全な2カ国語圏で、通りの名前、駅の案内など、全てがオランダ語とフランス語で表示されている。

現在、ワーテルローの古戦場は大半が野菜畑になっている。古戦場をカートで巡るツアー (有料) は、ライオンの丘の麓にあるビジター・センター (**Centre du Visiteur**) で購入できる。センターでは、他の施設への共通入場券も販売している。

<関連サイト>

*Maison du Tourism de Waterloo (ワーテルロー観光案内所)

<http://www.waterloo-tourisme.be/>

(2) ライオンの丘 (Champ de Bataille de Waterloo—Hameau du Lion)

<http://www.waterloo1815.be/fr/waterloo/> (フランス語版)

<http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/> (英語版)

<http://www.waterloo1815.be/fl/waterloo/> (フラマン語版)

フランス軍の大砲を溶かして造ったライオン像が、1826年にオランダの築いた「ライオンの丘」(La Butte du Lion/Lion Mound)の上にそびえ立つ。頂上から、ヨーロッパの命運を決した古戦場を一望することができる。毎年7-8月の週末には、大砲の発射、軍隊の行進、戦闘の再現など、歴史を体感できるイベントが行われる。

丘のすぐ側には、ワーテルローの戦いを大音響と360度のパノラマで再現したワーテルローの戦いパノラマ館 (Panorama de la Bataille de Waterloo), ワーテルローの戦いに参加した主要人物などの蠟人形がある蠟人形館 (Le Musée de cire) などがある。

<関連サイト>

*Lion Mount Hamlet “Photo Gallery”

http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/615-photo_gallery/

*Lion Mount Hamlet “Events”

[http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/563-/](http://www.waterloo1815.be/en/waterloo/563/)

(3) ウェリントン博物館 (Musée Wellington/Wellington Museum)

<http://www.museowellington.com> (フランス語版)

<http://www.museowellington.be/index.php?lang=en> (英語版)

ビジター・センターと道路をはさんで向かい側にある。「1815」の大きな文字が門扉に付いているので、何の建物かは一目瞭然だ。内部には、ワーテルローの戦いでイギリス・オランダ・プロイセンの連合軍を指揮したウェリントン公爵 (Arthur Wellesley, The First Duke of Wellington, 1769-1852) の

蝨人形と執務机、フランス軍の使っていた国旗などが展示されている。ウェリントンはこの建物に司令部(**Le Quartier / The Headquarters**)を置き、1815年6月18日、ワーテルローの戦いの勝利を報告書にまとめ、ブリュッセルへ送付した。

ナポレオン戦争中、ウェルズリーはオランダでフランス革命軍と対戦し、1809年にはスペイン駐留のイギリス軍総司令官に任命された。1814年に南フランスへ進軍し、戦功によって爵位を得た。1815年、ウェリントン公爵はイギリス代表としてウィーン会議に参加した。1828-1830年にはイギリス首相を務めたが、軍人が首相になったイギリス史上唯一の例である。

ナポレオンの野望を打ち砕いたウェリントンは地名にもなった。イギリスの植民地ニュージーランドで1840年にウェリントンの町が建設され、1865年に北島のオークランド (**Auckland**) から同じ北島のウェリントンに首都が移された。

<関連サイト>

***Wellington Museum "Gallery: Reconstruction of the first battle of Waterloo (1705)"**

http://www.museowellington.be/index.php?option=com_content&task=view&id=13&Itemid=14

最初のワーテルローの戦いは1705年に行われた。2005年8月20-21日に再現された戦いの写真が掲載されている。

***Royal Museum of the Armed Forces and of Military History Brussels—Belgium**

<http://www.klm-mra.be/>

(4) 聖ヨセフ教会 (**Paroisse Saint-Joseph/l'église Saint-Joseph à Waterloo**)

<http://www.sjoseph.be/>

<http://www.sjoseph.be/content/view/17/32/>

ウェリントン博物館の向かいにある。緑色の丸屋根にはライオン像が乗ったロイヤル・チャペル (**Chapelle Royale**) があり、ユニークな姿を見せる。教会内には、ワーテルローの戦いで戦死した兵士の追悼プレートその他、2つの世界大戦の戦死者を追悼するプレートも多数ある。

(5) ナポレオン最後の司令部 (**Le Dernier Quartier-Général de Napoléon**)

ワーテルローの戦いで、ナポレオン最後の司令部が置かれていた場所。元々は、カイユー農場 (**La Ferme du Caillou / Caillou Farm**) であった。ライオンの丘から南に約5 km離れているため、車での移動が必要である。

<関連サイト>

*** Province du Brabant wallon “Le Dernier Q.G. de Napoléon”**

<http://www.brabantwallon.be/fr/Tourisme-et-loisirs/domaines-provinciaux/le-d.q.g.-de-napoleon.html>

*** Attraction Touristiques et Musées de Belgique “Dernier Q.G. de Napoléon”**

<http://www.attractiontouristique.be/attractions/att/culture-histoire-militaire-vieux-genappe-175-dernier-quartier-general-de-napoleon.html>

3. ドイツ

(1) ドイツ国旗

ドイツの国旗は上から黒、赤、黄色の横縞である。1813年にナポレオンの軍隊と戦ったプロセイン義勇兵の服（黒マント、赤い肩章、金ボタン）を、後にドイツ統一を掲げて蜂起した学生組織がシンボルカラーにしたことに由来する（辻原, p.36）。

<関連サイト>

*** ドイツ大使館 東京 「ドイツ連邦共和国の概要」**

http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/09__D_20Info/Informa-

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

tion/Uebersicht.html

*RegierunGonline (ドイツ連邦政府公式ホームページ)

<http://www.bundesregierung.de/Webs/Breg/EN/Federal-Government/federal-government.html>

*株式会社さらご「世界の国旗図鑑 ドイツ」

<http://www.sarago.co.jp/nfhtm/de.html>

*German Flag History

<http://www.german-flag-history.com/german-flag-history.html>

(2) ライプツィヒの戦い記念碑 (Fördenverain Völkerschlachtdenkmal Leipzig e.V)

<http://www.voelkerschlachtdenkmal.de/joomla/index.php>

1813年10月、ドイツのライプツィヒ (Leipzig) で、プロイセン・オーストリア・ロシアの連合軍がフランス軍を破った。これがライプツィヒの戦い (諸国民戦争) である。翌年、連合軍はパリを占領し、皇帝から退位したナポレオンは、出身地コルシカ島の東にあるエルバ島へ配流された。フランスで王政が復活し、ルイ16世の次弟プロヴァンス伯がルイ18世として即位した。

1898年から15年かけて、ライプツィヒ郊外に高さ91メートルの石の聖堂が建てられた (住所はPragerstr. 210)。古戦場はライプツィヒの中心部から東へ15分ほど市電で行ったところにある。近くにはロシア記念教会がある。

(3) 4711

<http://www.4711.com/ekw+M52087573ab0.html>

<http://www.4711.jp/> (日本総代理店)

オーデコロン (Eau de Cologne) はフランス語で「ケルンの水」を意味する。フランス語でケルンは「コロニーユ」と発音するが、ローマの植民都市がそのまま都市の名になった。

1742年、イタリア人フェミニスがオーデコロンの名で販売したのが4711の

始まりである。フランス軍がケルンを占領した際、住居に番地を付けたが、店の番地4711がそのまま店名になった。オーデコロン4711は柑橘系の香りが特徴である。

(4) ベートーヴェンの生家 (Beethovenhaus)

<http://www.bethoven-haus-bonn.de>

ボンにあるベートーヴェン (Ludwig van Beethoven, 1770–1827) の生家を博物館にした。デスマスクなど、各種の資料がある。Virtual Tourに入るとカメラが360度動くので、実際に博物館の中を鑑賞し、博物館周辺の通りに立っているかのような臨場感が味わえる。

ベートーヴェンはナポレオンがヨーロッパに身分制度のない社会を作ると期待していた。そして、彼に捧げるつもりで交響曲「ボナパルト」を作曲していた。だが、ナポレオンの皇帝即位の報を聞いた作曲家は怒り、完成したばかりの楽譜の題名をかき消したという。交響曲は「英雄 (エロイカ) —ある英雄の思い出のために」と命名された (安芸, p.91)。これが、1804年に発表された交響曲第3番「英雄」変ホ長調 (作品55) の由来とされる。

なお、1809年に初演されたピアノ協奏曲第5番「皇帝」変ホ長調 (作品73) は、ピアノ付交響曲のような壮大な曲だったので、ピアノ交響曲の中の皇帝という意味で名付けられたようである (同上, p.100)。ナポレオンに捧げられたわけではない。1809年にフランス軍がウィーンを占領した時、ベートーヴェンはどう思ったであろうか。

1815年夏、ナポレオンが2度目の退位をし、ヨーロッパにフランス革命以前の秩序が回復した。ウィーン体制下で思想統制は厳しくなり、人々は反動から享樂的になった。ベートーヴェンはドイツの作家シラー (Friedrich von Schiller, 1759–1805) が人類愛を称えた詩を元に「歓喜の歌」(An die Freude) を作曲し、交響曲第9番「合唱付」ニ短調 (作品125) を完成させた。当局に検閲されれば上演が危ぶまれるところだったが、数々の困難を乗り越え、1824年にウィーンで初演された。

<関連サイト>

*NHK教育「ETV特集 俘虜たちのシンフォニー」（1994年7月26日放送）

<http://www.nhk.or.jp/archives/nhk-archives/past/2006/h070311.html>

徳島県鳴門市にあった板東俘虜収容所には、第1次世界大戦時、中国・青島で捕虜になったドイツ兵が約1000名収容された。2年10ヶ月の間、俘虜たちは地元住民との温かい交流を続け、技術や文化を残していった。第9番交響曲初演は1918年6月1日だった。鳴門市とドイツは今も交流を深めている。

*ベートーヴェン・ハウス ボン「音楽の力。1917-1919年板東（日本）におけるドイツ捕虜収容所の文化的生活 ベートーヴェン・ハウス ボン 特別展示会」

<http://www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php/43872>

*鳴門市ドイツ館

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/>

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/ruhe.html>

（館報ルーエ）

ドイツ軍俘虜たちの日記、手紙、日用品など貴重な文物が保存されている。実物大の人形が第九を演奏するコーナーもある。

*NHK「その時歴史が動いた 第118回 ベートーヴェン第九誕生！～民衆に自由を呼びかけた交響曲～」(2002年12月18日放送)

http://www.nhk.or.jp/sonotoki/2002_12.html#03

*NHK教育「地球ドラマチック 第九交響曲物語 ベートーヴェン自由への祈り」(2007年12月26日放送)

<http://www.nhk.or.jp/dramatic/backnumber/78.html>

カナダの13Production、NFBが2005年に制作した。ベートーヴェンはシラーの詩「歓喜に寄せて」を元に、第4楽章「歓喜の歌」に全ての人間が兄弟として自由になる夢を込めた。一方、この歌は戦場で流され、ナチス・ドイツ、共産主義、民主主義の国がそれぞれの思想を

広めるために使われた。

***The European Union “European Symbols”**

http://ec.europa.eu/delegations/tajikistan/what_eu/european_symbols/index_en.htm

歓喜の歌（Ode to Joy）は、欧州連合（EU）の歌ともなっている。

4. オーストリア

(1) シェーンブルン宮殿 (Schloß Schönbrunn)

<http://www.schoenbrunn.at/>

継子に男児を渴望したナポレオンは、子どもを生まない年上の妻ジョゼフィーヌを離婚し、オーストリア皇帝フランツ 1 世の長女マリー・ルイーゼと再婚した。ナポレオンが関係を持った他の女性たちが妊娠したので、不妊の原因がジョゼフィーヌにあるとわかったからだという（レンツ, p.108）。だが、ジョゼフィーヌは離婚後も皇后の称号を持ち続けることを許された。

ナポレオンは1805年と1809年に2度ウィーンを侵攻し、シェーンブルン宮殿を居城として使った。彼が使用した部屋は「ナポレオンの間」と呼ばれる。一方、宮殿の大ギャラリーは、ナポレオン戦争の後始末を話し合うためヨーロッパ諸国が集まったウィーン会議（1814-1815）の会場となった。

ナポレオンの息子は1811年3月20日に誕生し、ローマ王（Roi de Rome）の称号を与えられた。パリでは101発の祝砲が鳴り響いた。父がエルバ島に流されると、母は息子を連れ実家に帰った。希代の英雄の息子はライヒシュタット公（Herzog Von Reichstadt, 1811-1832）とよばれ、父が滞在した部屋を自分の居室の1つとして使っていた。ハプスブルク家の中で微妙な立場に置かれていたライヒシュタット公は、病弱にもかかわらず軍隊に入って無理をし、1832年に21歳の若さで亡くなった。現在、ナポレオンの間にはライヒシュタット公のデスマスクが展示されている。

(2) モーツァルト記念館 (フィガロハウス) (Mozart House Vienna)

*Mozarthaus Vienna

<http://www.mozarthausvienna.at/en/>

ウィーン市内で1784年から1787年までモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791）が住み、歌劇「フィガロの結婚」を書いた建物を博物館にした。モーツァルトはウィーン市内で11回引っ越したが、現存するのはこの記念館だけである（後藤, p.76）。

フランスの劇作家ピーエル・オーギュスタン・ボーマルシェ（Pierre Augustin Caron de Beaumarchais, 1732-1799）は、フランス語で戯曲「フィガロの結婚」（*Le Mariage de Figaro*）を書いた。「フィガロの結婚」は「セビリアの理髪師」の続編で、全部で3部作となる。

戯曲「フィガロの結婚」は1784年4月に初演されたが、貴族に批判的な内容ですぐに上演禁止となった。この戯曲は、フランス革命の遠因になったとさえいわれる。もっとも、時計商の子として生まれたボーマルシェは、貴族の未亡人と結婚して貴族の地位を得、アメリカ独立革命にフランス国王の密使として植民地側に武器を提供した。つまり、彼は旧体制、すなわちアンシャン・レژیーム（Ancien Régime）側の人物だった。

作品をめぐる貴族と対立したモーツァルトは、ボーマルシェの戯曲をイタリア語の歌劇「フィガロの結婚」（*Le Nozze di Figaro*）として作曲し、1786年にウィーンのブルク劇場で初演した。ウィーンでは上演禁止となったが、プラハで上演され、大評判となった。

ちなみに、当時のプラハはボヘミアの一部で、ハプスブルク家の支配下にあった。1618年、ハプスブルク家のカトリック化政策に反発し、国王の使者をプラハ城の窓から投げ出した。これが、ヨーロッパで最大かつ最後の宗教戦争となった三十年戦争（1618-1648）の発端である。1968年には、知識人が中心となり自由化と民主化を求める運動「プラハの春」が起きた。ソ連を中心に東欧5カ国のワルシャワ条約機構軍が侵攻し、運動は弾圧された。約20年後、1989年11月のベルリンの壁崩壊にチェコスロバキアの人々は少なからぬ貢献をした。1993年1月1日、チェコスロバキアはチェコとスロバキア

に分離し、プラハはチェコの首都となった。

<関連サイト>

*ウィーン市観光局

<http://www.wien.info/ja>

*Saltzburg.info (ザルツブルク観光案内 英語版)

<http://www.salzburg.info/en/>

*Mozart Geburtshaus (モーツァルトの生家)

<http://www.mozarteum.at/museen/mozarts-geburtshaus.html>

ザルツブルク市内にある。1756年1月27日、ここでモーツァルトが誕生した。シェーンブルン宮殿のような黄色い壁が印象的である。

*Mozart Wohnhaus (モーツァルトの家)

<http://www.mozarteum.at/museen/mozart-wohnhaus.html>

1773年から1781年の間、ウィーンに出るまでモーツァルトが住んでいた、ザルツブルク市内の家。

*国際モーツァルテウム財団 (Internationale Stiftung Mozarteum: ISM)
(日本語)

<http://www.mozart.jp/item/2685>

ザルツブルク市内に本拠地を置く団体。1841年に設立された音楽協会をもとに、1880年にザルツブルク市民が設立した。演奏会、博物館、研究の3つの事業を行っている。日本の支部は、日本モーツァルト協会である。

*日本モーツァルト協会

<http://www.mozart.or.jp/>

*The Prague Castle “Old Royal Palace”

<http://www.hrad.cz/en/prague-castle/guidepost-for-visitors/old-royal-palace.shtml>

プラハ城公式ホームページ (Welcome to the Prague Castle) の中にある。三十年戦争の発端となる事件が起きた場所の写真と解説が掲

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

載されている。

5. イギリス

(1) トラファルガー広場 (Trafalgar Square)

1805年のトラファルガーの海戦で、ネルソン提督 (Horatio Nelson, 1758 - 1805) 率いるイギリス海軍が、フランスとスペインの連合艦隊を破った。ネルソンは戦死したが、フランス軍はイギリス上陸を断念せざるをえなかった。

スペインとモロッコに挟まれたジブラルタル海峡の領土は複雑である。スペインの最南端にジブラルタル (Gibraltar) の町 (英領) があり、アフリカ大陸の上にはセウタ (Ceuta) の町 (スペイン領) がある。

ロンドンのトラファルガー広場には、トラファルガーの海戦で戦死したネルソン提督の像が立つ。50mの高さがある円柱の上に、巨大な4頭のライオン像に囲まれて立つ。広場はロンドンの中心部にあり、北側にはヨーロッパ有数の絵画コレクションを誇るナショナル・ギャラリー (The National Gallery) がある。

ちなみに、トラファルガー広場には1947年以来毎年、ノルウェー政府が送るクリスマス・ツリーが立てられる。これは、第2次世界大戦中にドイツに侵攻されたノルウェーをイギリスが支援したことに対する感謝を示す。

<関連サイト>

* The National Gallery (UK)

<http://www.nationalgallery.org.uk/>

* Christmas in Trafalgar Square—Christmas tree lighting ceremony

<http://www.london.gov.uk/trafalgarsquare/events/xmas.jsp>

* Trafalgar Square—a brief history

<http://www.london.gov.uk/trafalgarsquare/history/index.jsp>

(2) セント・ポール大聖堂 (St. Paul's Cathedral)

<http://www.stpauls.co.uk/>

この地にサクソン人が最初の教会を建てたのは604年だった。その後、何度も火災に遭い、現在の建物は18世紀初めに建てられた。一方、第2次世界大戦の空襲は奇跡的に生き延びた。

バチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂に着想を得たデザインとされ、ロンドン市民から愛されている。1981年7月、チャールズ皇太子とダイアナ・スペンサー嬢（当時）の結婚式もここで挙行された。

地下聖堂にはイギリス史に名を残した人々の墓がある。1805年のトラファルガーの海戦でフランス・スペイン連合艦隊を破ったネルソン提督は、1806年にセント・ポールで国葬となった。1815年のワーテルローの戦いでナポレオンの軍を破ったウェリントン侯は、1852年に国葬となった。

第2次世界大戦中イギリス国民を鼓舞し、ロンドン市民に「セント・ポールを救え」と呼びかけたチャーチル元イギリス首相（Winston Churchill, 1874-1965）はここで国葬となり、その模様はBBCラジオとテレビで全英に伝えられた。

<関連サイト>

*** St. Paul's Cathedral "Timeline: 1400 Years of History"**

<http://www.stpauls.co.uk/Cathedral-History/Timeline-1400-Years-of-History>

*** The Holy See**（バチカン市国公式ホームページ）

<http://www.vatican.va/>

バチカン市国（The State of the City of Vatican）のホームページには、公用語のラテン語、イタリア語、フランス語の他、英語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語がある。宗教上の理由から国連には加盟していないが、オブザーバー（投票権はないが審議に参加する）の地位を有する。

(3) 大英博物館 (The British Museum)

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

<http://www.britishmuseum.com>

ナポレオンはイギリスのインド・ルートを断つため、フランス軍をエジプトへ派遣した。エジプト遠征中の1799年、ロゼッタ（現地名ラシード）で巨大な石が発見された。ロゼッタ・ストーン（**Rosetta Stone**）は紀元前196年に作られたプトレマイオス5世の頌徳碑の一部で、古代エジプトのヒエログリフ（聖刻文字）、デモティック（民衆文字）、およびギリシャ文字の3種類で刻まれていた。

1801年、イギリス軍がカイロに迫ると、フランス遠征軍に伴われてきた考古学者たちはロゼッタ・ストーン他の資料、標本等を持って、アレキサンドリアに避難した。だが、1801年8月に締結されたアレキサンドリアの占領協定で、遺物をイギリス軍に渡すこととなった。1802年、ロゼッタ・ストーンはイギリスのポーツマス港に到着し、ロンドンの考古学協会から大英博物館に移された（キャロル・アンドリュース『ロゼッタ・ストーン』日本語版、大英博物館出版部、1989年、pp.9-12）。

<関連サイト>

***Rosetta Stone**（ロゼッタ・ストーン）

http://www.britishmuseum.org/explore/highlights/highlight_objects/aes/t/the_rosetta_stone.aspx

(4) ウォータールー橋（**Waterloo Bridge**）

Tour UK (uk) “**Waterloo Bridge, Embarkment Embarkment and Waterloo, London WC2 and SE1**”

http://www.touruk.co.uk/london_bridges/waterloo_bridge1.htm

ワーテルローの戦いの勝利にちなんで名付けられた。この橋は、ヴィヴィアン・リー主演の映画「哀愁」（原題**Waterloo Bridge**。1940年、イギリス制作）の舞台になった場所でもある。

ちなみに、戦後日本で公開された「哀愁」は劇作家・演出家の菊田一夫に影響を与え、ラジオドラマ「君の名は」を生んだ。日本での舞台は、東京・

有楽町（住所は銀座5丁目）の数寄屋橋に置き換えられた。

(5) ウォーターloo 駅 (Waterloo Station)

4つあるロンドンの主要駅の1つ。他の主要駅は、キングズ・クロス (King's Cross), ヴィクトリア (Victoria), パディントン (Paddington) である。

かつて、ウォーターloo 駅はロンドンとパリ、ロンドンとブリュッセルを結ぶユーロスター (Eurostar) の発着駅であった。現在、ユーロスターは大英図書館側のセント・パンクラス (St. Pancrass) 駅から出発する。同駅は、ハリー・ポッターシリーズで有名になったキングズ・クロス駅に隣接する。

<関連サイト>

* Visit London—Official City Guide & London Hotels (ロンドン観光案内)

<http://www.visitlondon.com/>

* Transport for London (ロンドン交通HP)

<http://www.tfl.gov.uk/>

(6) ウィンザー城「ウォーターloo の間」

<http://www.royal.gov.uk/TheRoyalResidences/WindsorCastle/Virtual-Rooms/Overview.aspx>

ウィンザー城 (Windsor Castle) の歴史は、11世紀にウィリアム征服王が木造の砦を築いたことに始まる。現在はイギリス王室ウィンザー家の居城で、エリザベス2世はここでよく週末を過ごす。女王の滞在中はイギリス国旗が掲げられる。

城の内部には「ウォーターloo の間」がある。城の正門前では、ロンドンのバッキンガム宮殿と同じく衛兵交代式が行われ、見物客が多い。

ウィンザーの町は、ロンドンの主要駅の1つパディントン駅から電車に乗り、1度乗り換えて、約40分の距離にある。ウィンザー城の近くには、1440年にヘンリー6世が創設した名門パブリック・スクール、イートン校 (Eton

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

College)がある。寄宿制で、男子学生のみ受け入れる。

<関連サイト>

*The Official Website of the British Monarchy (イギリス王室公式ホームページ)

<http://www.royal.gov.uk/>

*The Royal Borough of Windsor & Maidenhead

<http://www.windsor.gov.uk/>

6. アメリカ

(1) 国立自然史博物館 (Smithsonian Institution National Museum of Natural History)

<http://www.mnh.si.edu/>

アメリカの首都ワシントンにあるスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) の国立自然史博物館には、サファイアのような深い青色をした「ホープ・ダイヤモンド」の首飾りがある。この他、マリー・アントワネットのダイヤモンドの耳飾り (ペアで計25カラット)、ナポレオンが再婚したジョゼフィーヌに与えたダイヤモンドの首飾りなどが所蔵される。

(2) 「ホープ・ダイヤモンド」 (Department of Mineral Sciences, Hope Diamond)

<http://mineralsciences.si.edu/hope.htm>

国立自然史博物館 (在ワシントン) のページ。持ち主は不幸になるというホープ・ダイヤモンドの歴史、紫外線による分析結果などが載っている。ルイ14世が所蔵していた時は「フランスの青いダイヤモンド」と呼ばれ、69カラットあった。その後カットされ、現在は45.52カラットある。

(3) 「マリー・アントワネットのダイヤモンドのイヤリング」 (The National Museum of Natural History (USA) "The Dynamic Earth, Marie Antoinette

Diamond Earrings

http://www.mnh.si.edu/earth/text/dynamicearth/6_0_0_GeoGallery/geogallery_specimen2.cfm?SpecimenID=4028&categoryID=1&query=marie%20antoinette%20diamond

国立自然史博物館（在ワシントン）のページ。マリー・アントワネットが所蔵していたダイヤモンドの耳飾りは、14.25カラットと20.34カラットの重さがある。18世紀に産出されたダイヤモンドの標本としても、貴重な価値がある。

(4) 「ナポレオンのダイヤモンドのネックレス」(Department of Mineral Sciences, Recent Research on the Napoléon's Diamond Necklace)

<http://mineralsciences.si.edu/collections/napoleonnecklace.htm>

国立自然史博物館（在ワシントン）のページ。ナポレオンがマリー・ルイーゼに送ったダイヤモンドの首飾り、ダイヤモンドの首飾りを身に付けたマリー・ルイーゼの肖像画などが掲載されている。ダイヤモンドを紫外線で分析した写真でダイヤモンドは、青、緑、紫と様々な色に輝く。

ナポレオンは子どもを生まない皇后ジョゼフィーヌを離婚し、ハプスブルク家の皇女マリー・ルイーゼ（ドイツ語読みで MARIA・ルイゼ）との結婚を決意した。18歳の皇女は人身御供さながらに、外見は決して冴えない40歳の男に嫁ぐことになった。しかし、人心掌握に長けた花婿は国境まで花嫁を迎えに行き、様々な贈り物でその心を捉えた。

このページには、マリー・ルイーゼがネックレスを身に付けた肖像画とネックレスの入っていた箱の写真も掲示されている。

(5) 「呪い！」(Curses!)

http://www.pbs.org/treasuresoftheworld/a_nav/hope_nav/hnav_level_2/level2_pitch_curse_hopfrm.html

アメリカPBSのページ。ホープ・ダイヤモンドの持ち主を全て列挙したサ

インターネットでめぐるフランス革命とナポレオン戦争関係の史跡

イトである。現在の所有者が「アメリカ国民」なのは、国立アメリカ自然史博物館（スミソニアン協会）が所蔵するからである。

(6) 「呪いにあらず」(Curses debunked)

http://www.pbs.org/treasuresoftheworld/hope/hlevel_1/h5_debunking.html

アメリカPBSのページ。ホープ・ダイヤモンドの呪い伝説が誤りであることを証明した。

HUMAN SCIENCES REVIEW

St. Andrew's University

No. 40 March 2011

CONTENTS

Articles

A Critical Review of the Causes of Sen no Rikyu's Ritual Suicide
..... Sachio FUKUI (1)

Training Methods and the Scoring Process
in the U-21 Japan National Football Team
~The 5th East Asian Games (Hong Kong, 2009)~
..... Naoya MATSUMOTO (43)

Flexible Command:
A Solution to the Symmetry Problem of Adjunction, Scrambling,
and Dislocation
..... Koji ARIKAWA (65)

Review of the Preamble to *Gakusei*,
Modern Japan's First Educational Ordinance
..... Teruo TAKENAKA (322)

Note

Reflecting on English Language Teaching in Japan
..... IWANE-SALOVAARA, Michael (201)

Material

Virtual Tour of the Historic Scenes Related
to the French Revolution and the Napoleonic Wars
..... Keiko KARUBE (211)



Published Semiannually by
The Research Institute,
St. Andrew's University

1-1 Manabino, Izumi, Osaka 594-1198, Japan

